大正三年二月十日印刷
大正三年二月十三日發行

有朋堂文庫
江戸名所圖會二（非賣品）

（岡山製本）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

按ずるに、寺傳に當寺の山號威光と云ふを以て、東鑑に載する所の威光寺とするは大なる誤なるべし。同じ第三巻小山田の條下、谷口天神の下に詳なり。

弦巻川　當寺仁王門の前を東流する細き溝川をなづく。古へは布引川とも唱へけるといひ傳ふれども、共に其由縁をしらず。水源は池谷「イケヤド」の邊に發し、下流は淸土の邊へ出て、音羽町の西の方を歴て、江戸川に會せり。

大行院　鬼子母神の別當なり。往古は東陽坊と云ふ。天正年間、加州侯の始祖前田利家朝臣建立せられけるといへり。堂内に日蓮上人の徒弟六老僧の影像を安置す。日像、日照、日朗、日興、日向、日頂、以上六老僧なり。或人云く、此像は始め谷中感應寺にありしが、彼寺改宗の頃、一躰紛失しければ、殘を當寺へ収むとぞ。小畑勘兵衞尉景憲、檀那寺なる故に、彫刻して納むるとなり。又自らの肖像もあり。牌堂に安ず。當院に宗祖歴代の眞筆、ならびに上古の調度等を収藏す。其餘深草不可思議の筆せる經題等あり。

蓮成寺　同東に隣る。當寺は本山十三世日延上人の開創なりといへり。十八老僧の像を安ず。日源、日家、日保、日辨、日法、日傳、日位、日秀、天目、日得、日合、日賢、日高、日實、日禮、日祐、日忍、日門、以上十八人なり。

——（天權之部未完）——

祖師堂 同釋迦堂の右に竝ぶ。中に宗祖日蓮大士の影像を安ず。立正安國論演說の睇想なりとぞ。當寺日源上人の手刻にして、第三祖大藏卿日藏上人修飾を施す。楠正行の息女は妙典入道某の室にて、其頃夫婦ともに大願ありて當寺の壇越となり、應永十二年乙酉のとし、再び此影像の彩色を加へたりと云傳ふ。緣起に、此堂宇は弘仁九年戊戌、飛彈匠作る所にして、太古當寺眞言宗たりし時、源家累代祈禱の護摩堂なりしとぞ。今も昔のまゝに存せり。

釋迦如來石像 往古、或武夫横死の難を遁れし報恩の爲、むかし雜司ケ谷より板橋へ行く方の道端にありしを、此地にうつして、その傍に旨趣を記せし石碑を建てたり。

鯨鐘 同所にあり。寛永二十二年甲申鑄せし所の洪鐘なり。銘文はこゝに略す。其鐘の緣に、曲尺枡天秤および算盤等の形を鑄付けたり。諸人見て奇異なりとす。按ずるに、度量衡の意を表したるものにて、時々刻々も亦數に預るをもて、此形を鑄附けたりしならん歟。京師鴨川の東岸、今出川橋の南、日蓮宗法性寺にある所の鯨鐘、その模樣是に同じ。

仁王門 左右に金剛密迹の像を置く。運慶の作なりといへり。

正月元日 同三日まで坊において古法の式例あり。　同十三日 釋迦堂において千卷陀羅尼修行あり。　二月十五日 涅槃會にて、音樂練供養あり。　四月八日 誕生會上に同じ。同日より夏の間說法あり。　五月十三日 釋迦堂において千卷陀羅尼修行。　七月七日蟲拂　九月十三日 千卷陀羅尼讀誦修行。　十月六日 同七日八日迄の間、門前に花市立つ。　同日 經摘〔キヤウゾロヘ〕と唱へ誦經す。此日より會式中練供養修行あり。　同十三日御影供 俗誤つておめいこうといふ。八日より廿三日まで參詣群をなせり。塔中寺院各飾物をまうく。

相傳ふ、當寺は弘仁元年庚寅草創にして、往古は眞言宗の道場なりしに、或は云ふ慈覺大師の開創なりと。正嘉元年丁巳、嚴譽律師、駿州岩本の實相寺にして、日蓮上人の法を聞き、直に宗風を轉じ、上人の弘法にあらたむ、乃ち法號を嚴譽院日源と稱す。當寺開山是也。中老僧の一員にして、駿州賀島の實相寺に住す、學行群に秀づといへり。

は花の名所なり。近年境内に櫻數多植ゑて、往昔に復せしめんとす。北條家分限帳、江戸雜司ヶ谷太田新六郎所領とあり。

麥藁細工角兵衞獅子は、昔高田四ッ家町に住みし粂といへる女子製し初めたりといふ。此粂女に母一人ありしが、家貧しく、孝養心のまゝならざりし事をなげき、當に雜司ヶ谷の鬼子母神へ詣し、深く此事を祈願し奉りしに、其至孝の冥慮にかなふにや有りけん、寛延二年の夏、麥わらを以て角兵衞獅子の形を造りそめたりしが、其頃雜司ヶ谷の鬼子母神、ことに參詣多かりし頃なれば、此獅子を買ふ人夥しく、竟に麥藁細工のために其身さかえければ、夫より後は心やすく母を養ふといふ。

百度參　祈願あるもの、其社前を往返して、百度參拜す。是を俗に百度詣と號す。或人云く、此事は當社鬼子母神を以て權輿とす。其ゆゑは、十羅刹女を始とし、十人の御子にねぎたてまつる意にして、十と千との間を取り、百度詣するといへり。千團子千疋猿のたぐひ、皆此故なりとぞ。

威光山法明寺　同北の方にあり。支院八字あり。最も古刹にして、閑寂たる寺院なり。庫裡は鉈作りにて、昔のまゝなりといへり。

釋迦堂　本尊釋迦多寶兩如來の像を安ず。其餘堂中に千躰佛を安ず。　銀杏樹　同じ堂前にあり。往古楠女の植ゑたりし樹なりといふ。此所にあるは雌木にして、舊樹は枯れて若木なり。鬼子母神の前にあるは雄木なりといへり。

て東陽坊第五世日性師に贈る。東陽坊は今の大行院の事なり。乃ち佛殿に安じするて、十有餘年を歴たり。然るに安房國の沙門某、其名知るべからず。日性師に仕へけるが、いかに思ひけん、密に此靈像を盗み、故郷に歸るに、其年天正五年なり。忽ち病を發し、一日自ら口ばしりていへらく、我は元武州雜司ヶ谷にあり、彼地の衆生機縁既に熟す、正に濟度すべき時を得て、泥中より出現せしを、こゝに移す事、我意にあらず、直に元の地に歸すべしとなり。時に村人大に怖れ畏み、再び東陽坊に遷し奉る。仍て諸人靈威なる事を知つて、ひとつの草堂を營まんとて、往古より稻荷の社跡と云傳へたる叢林を闢き、竟に天正六年戊寅四月十日に、始て斧を下し、同五月朔日、經營落成し、こゝに安置す。其後寛文六年に至り、自證院殿新に寶殿を造立せらる。今の本殿是なり、自證院殿は加州黄門の息女にして、安藝大守の令室なり。

此地は遙に都下を離るゝといへども、鬼子母神の靈驗著明しく、諸願あやまたず協へ給ふが故に、常に詣人絶えず。依て門前の左右には、貨食店軒端を連ねたり。十月の會式には、殊更群集絡繹として織るが如し。風車、藁細工の獅子、川口屋の飴を此地の名產とす。又當山

イモテン」と稱す。 相殿 圓満具足天、鬼子母神の夫なり。十羅刹女、同じ御子なり。 鷺大明神祠 堂前左の方にあり。祭る神詳ならず。或は云ふ、出雲國神戸郡鷺村の鷺浦に鎮座し給ふ、素盞嗚尊の妾女皐諦女［カウテイニヨ］なりといふ。此神は疱瘡の守護神にして、正徳の頃、松平羽州侯、神告に依て是を勸請す。疱瘡祈願の輩、廣前の小石を拾ひ得て守護とす。例年八月朔日祭あり。また毎月朔日を以て縁日とす。 稻荷明神祠 堂前右の方にあり。天照大神宮と八幡大神宮とを相殿に合祭す。地主の神なり。 銀杏樹 社前にあり。世に子授銀杏といふ。 石像仁王尊 和田戸山盛南山と云ふ寺より、自證院殿こゝにうつされしとなり。 華表 紫銅［カラカネ］を以て製す。額に鬼子母神と書せしは、本阿彌光悦の門人、日光上人の筆なりといふ。

正月十五日 前夜より一山の僧徒本殿に集り、法華經を讀誦す。 同十六日 辰刻一山の僧徒、本殿に集會し、法華經讀誦し終りて、祝詞酒五獻に及ぶ。 同日奉射 土俗ひしやと唱ふ。ヒフ音通ず。其式は射手六人、各小屋より幕の中に出でて、介添の者より、弓矢と敷皮とを請取る。此間式あり。其後射手一人にて矢六筋を放つ。すべて三拾六筋なり、日記付、采配振、矢取り、介添等、各式あり。射手六人射終て後、一番より次第し、小屋に入る、此間一山の僧侶、又氏子の輩集會し、酒五獻にて終る。此式天正文祿の頃までは記録も不束なりしかば、寛永十一年、長島内匠助戸梁唯兵衛といへる人、其式を記して後世に傳ふとなり。此長島氏は、此所の地主にして、今大門左右に繁茂する所の槻の列樹も、此人鬼子母神へ寄進として栽ゑたりといふ。 同日 鬼子母神御衣替。 同十八日 萬巻陀羅尼修行。 四月八日 御衣替。 五月十八日 萬巻陀羅尼讀誦。 六月十五日 此地の農夫集りて社頭の草を刈拂ふ、草薙といふ。 七月十五日 御衣替にて、同十八日まで草角力を興行せり。 九月十八日 萬巻陀羅尼讀誦。 十月八日 御衣替あり。今日より十八日まで參詣群集す。是を會式詣と云ふ。近世は廿三日まで參詣あり。 追儺 當社の追儺には、男女社壇に群集し、誦經唱題す。其聲最も囂し。院主以下一山の僧徒内陣に候し、陀羅尼品を誦ふる事十三卷、終つて尊前の供豆を打出す。群集の男女爭ひて是をひろふ。

縁起に云く、此本尊は永祿四年辛酉五月十六日、此地山本氏、田口氏なる者、其子孫今猶連綿たり。池水に星の現ずるを見て後、其地を穿ち、鍬下に是を得奉りしとなり。今護國寺の西に、其出現の舊跡あり、星の清水と稱す。 依

雑司谷の會式ハ毎歳
十月八日より十三日迄修

雑司ヶ谷鬼子母神堂

則ち雜司ヶ谷鬼子母神出現の地にして、同じ神を鎭れり。社前にある所の井泉を、星の淸水と號く。往古鬼子母神出現の頃、此井に星の影を顯現せし事ありし故に名づくるといへり。其井桁の形三稜なる故に、土俗三角井ともあだなせり。

不動山寶生寺 淸立院の西の小坂を隔てゝあり。豆州玉澤の法華寺に屬す。當寺安置の日蓮大士の影像は、大覺大僧正の作なりといふ。諸人結緣の爲、正、五、九月の十三日内拜あり。又毎年十月八日より十八日まで、法華經讀誦千部修行あり。

妙永山本納寺 鬼子母神の堂前、東の方の小路左の側にあり。法明寺に屬せり。當寺に九老僧の像を安ず。九老僧は日朗上人の徒弟たり。所謂、日印、日像、日輪、日典、日澄、日善、日行、日範、朗慶等なり。當寺は慶安三年庚寅、實藏院日相上人開基して、天神地祇人鬼勸請護法堂と號す。三寶の諸尊、ならびに日月星の三光天を安ず。毎月十七日の夕より、廿三日の曉に至り、三光同時に昇天の旦を待つ、終夜誦經唱題怠慢なし。是を十夜待といへり。

鬼子母神堂 雜司ヶ谷にあり。法明寺の支院大行院の持なり。本殿鬼子母神銅像なり。鬼子母神、一名を訶梨帝母天〔カリテ

七面大明神 神躰を身延雛形の尊像といふ。往古本山貫首日悦上人、紫衣勅許の事につき、當寺檀那大野氏、藤江何某、勳功少からず。故に是を謝せんが爲め、寶藏に收むる所の七面尊を大野氏に授與す。今卜部朝臣吉田兼連書する所の額あり。

九月十八日祭祀にて、前夜より參詣あり。

大黒天 日蓮上人安房の清澄［キヨスミ］にいましせし頃、虚空藏の尊前に智惠を祈り、讀經數日に及び、青梁香を焚きて奉り、其灰を集めて、弘安三年に大黒天の像を造らるゝとなり。則ち背面に其事を記す、日蓮上人の眞筆なりとあり。

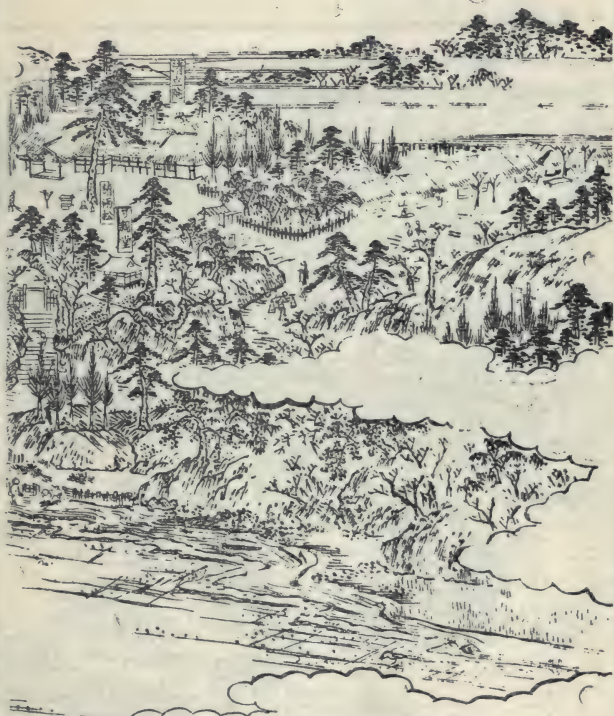
此經尊日蓮日讀以青龍煉之五百歳後流布。是生印

此靈像を日親上人感得ありて、證書を添へらる。後横井氏某、當寺に收め參らすといふ。是生とは、日蓮大士清澄寺の道善を師とし、落飾染衣の後、道善命ずる所の名なり。

御嶽山清立院 護國寺の裏門より、雜司ヶ谷鬼子母神へ行く道の右側、小坂に傍ひてあり。雜司ヶ谷本龍寺の持とす。御嶽をまつる故に此號あり。常唱堂に安ずる所の宗祖上人の靈像は、日法上人の眞作なりといふ。相傳ふ、正嘉年間、關東疫疾流行しける頃、行脚の沙門、此草堂に投宿の間、此地の人の病患を救ひ、又別に臨むの時、此靈像を止め置きたりといへり。此影像威靈ある故に、後世新に別像を造り、日法上人作の像をば、この新像の胎中に收むるとなり。**日親上人影堂** 同じく常唱堂の前にあり、元和年間、當寺の住僧日意師といへる沙門感得せし影像なりといふ。**請雨松** 堂前にあり。旱魃の年は、農民この所に集り雨請す。當寺の日蓮上人の影像は、雨乞ひに靈驗ありとて、鄕人大に信敬せり。此樹下に存する所の石像は、日意師の肖像なり。

雜司ヶ谷鬼子母神出現所 本淨寺より南にあり。此地を淸土といふ。蒼林の中に小社あり、

清立院
日親堂
譜雨松
寶城寺

清土
星の清水
雑司谷鬼子母神の出現ありし地なり七本榎といふ

を轉じ、其頃御建立ありし江戸密乘最大の梵宇にして、結構備れり。春時は櫻花爛漫として、頗る地勢洛の御室に髣髴たり。武江神寺錄に、元祿十丁丑、相馬彈正少弼に命ぜられ、再び修造なし給ふとあり。此地元御樂園なりしを、後白山にうつれり、其跡へ當寺を御建立ありしといへり。求涼亭云く、當寺は京の清水寺を模さるゝ故に、前の町を音羽となづけ、又青柳町、櫻木町などなづけられ、又音羽町九丁あるも、京に一條より九條までの名あるにもとづくとぞ。昔の本堂は、今の舞臺を設けし堂宇なりといへり。

當寺に桂昌一位尼公御遺物を收めらる。今猶傳へて、開帳の頃、諸人に拜せしむ。金銀をちりばめ、其結構言葉にのべ盡しがたし。

星谷の井舊地　護國寺の西の谷にあり。其地を星谷と號す。往古此地に星祭を修する行者ありて、本淨寺の裏に塚のごときものありて、星產と號け、其傍に一ッの井ありしとぞ。此井旱魃にも水絕えず涌出せしが、其後埋れて、今わづかに其跡を存す。符水、藥水に求むる人多し。此下流にかゝる橋を、星谷橋と號く。

大野山本淨寺　護國寺の西、小篠坂にあり。日蓮宗にして、甲斐の延嶺に屬せり。眞珠院日要上人日要上人は身延山顯是院の住主たり。を以て開基とす。始め谷中にありしを、寶永三年、此地に移しけるとぞ。當寺に宗祖上人の像あり。

本堂本尊如意輪観世音 瑪瑙石にして、天然のものなり。元祿半ばの頃、前川三左衛門入道道壽といへる人、異邦に渡り、持し來りしを、黄檗隱元老師の弟子、黒瀧の潮音、前川氏と師弟の緣あるが故に、潮音に授與す。其後故あつて桂昌一位尼公崇敬し給ひし由、事跡合考に見えたり。本堂の柱を猿柱と云ひて、木理猿の面に等し。

藥師堂 本堂左にあり。本尊藥師佛は、昔當寺草創の時、此地蟹ヶ池より出現ありし靈像なりといへり。今の本尊藥師佛の胎中に收む。左右に十二神將の像を置けり。

西國三十三番順禮札所寫 本堂より西の方の山間にあり。天明年間、深林を伐り開き、各其地勢に因て佛を模す。四時草木の花絶えずして、諸人の眼をよろこばしむ。

歡喜天 境内壽命院に安ず。桂昌一位尼公尊信の本尊なりとぞ。永代不退轉に、天下安全の浴油の法を修せしめられ、寺產を賜ふ。

仁王門 仁王の裏に置く所の廣目增長の二天の像は、古への火災に殘りしといふ。

今宮五社 當所鎭守と云ふ、天照大神宮、八幡大神、春日大明神、今宮大明神、三部大權現、五社を祭る。音羽町、青柳町、櫻木町等の鎭守なりと云ひ傳ふ。

涅槃像大幅 當寺寶物とす。狩野安信の筆なり。足代〔アシロ〕をくみてしやちを掛け引き上げて、軸本まで開かれずといふ。

當寺は延寶九年二月七日、上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢に、高田御藥園の地を賜ひて寺とす。依て大聖護國寺と號す。亮賢、初め御在胎の時より、御祈禱を奉りし故なり。天和元年に、憲廟將軍の宣下蒙り給ひて、同年五月廿八日、都下新建の大聖護國寺を仁和寺に錄して院家とす。依て寺領三百石を附し給ふ。貞享二年十二月廿八日に、大聖護國寺住持法印賢廣黃衣を許さる。其後元祿年中、桂昌院殿一位尼公の御志願によつて、御藥園の地

寄せられ、祖師堂に安置せしむ。觀音堂の本尊は、有廟御信敬の御守護佛なり。大僧正隆光の願により、寶永四年丁亥二月廿五日、退隱して駿河臺に遷り、成滿院と號す。依て護國寺住持快意僧正を後住とし、御成ありて、繁昌先の如し。寶永六年己丑八月六日、隆光願により、大和國に至る。故に成滿院の跡快意に賜ふ。仍て爰に隱居す。後住は知積院小池房、住職たるべき命ありて入院す。然るに享保二年丁酉正月廿二日、火災ありて、堂塔一宇も不殘燒失しければ、その頃住持退隱の願により、夫より後寺號及び食祿とも護國寺に賜ひ、大塚護國寺の内に遷し、江城護持の御祈願所となさしめられ、筑波山兼帶す。坊舍日輪院月輪院と云ふあり。

山開　毎年三月廿一日、弘法大師の御影供修行あり。此日諸人に庭中の林泉を見する。

神齡山護國寺　悉地院と號す。音羽町の北にあり。新義の眞言宗にして、和州長谷小池坊に屬す。開山を亮賢僧正と號す。公より寺領千二百石を附せられ、盛大の地なり。古鹿子〔コカノコ〕に云ふ寺領三百石、大猷公守御本尊瑠璃石觀音像開基とあり。

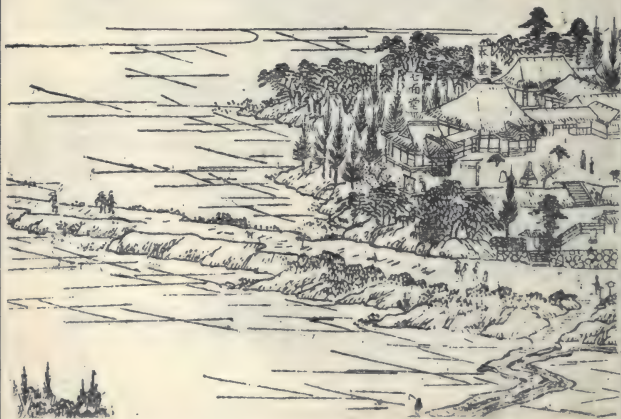
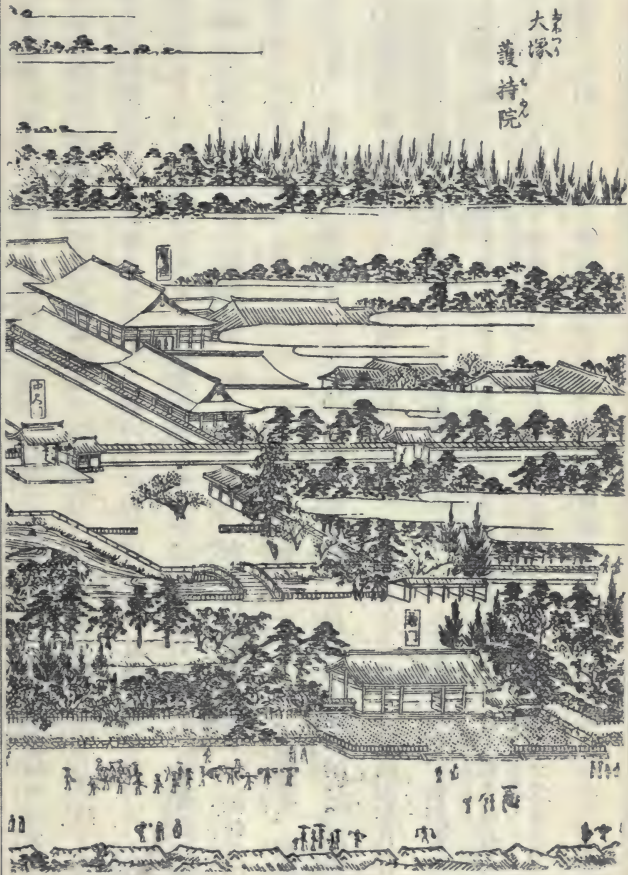
其六

其五

一四番
五番
其四
護國寺境内
西國札所寫三十三所觀音の圖

其三
本淨寺

其
二

方丈
玄関

大塚護持院

し、眞言新義四箇寺の支配たり。慶長の始め、大神君の嚴命を蒙り、江城の護持所と定めさせられ、同庚戌の年江戸銀町に寺院を賜ふ。（其地未レ考、九軒町の事歟。）依て光譽知足院を遷し營建す。同癸亥年、大坂御陣の頃も、光譽命を受けて、御陣中に於て祈禱す。其後寛永三年丙寅、大猷公、諸伽藍御建立あり。延寶二甲寅年、有廟御再修ありしが、天和五午壬戌十二月、火災に罹る。よつて貞享元年甲子、湯島切通に移し賜ふ。（今の根生院の地なり。）憲廟御歸依淺からず、元祿任元の年、神田橋の外、武士屋敷の地に移され、松平若狹守、仙石越前守に命ぜられ、護摩堂、祖師堂、觀音堂、經堂、灌頂堂、鐘樓堂、二天門、坊舍に至る迄、金銀をちりばめ給ひ、隆光を開山とし、權僧正に任ぜらる。又護持堂御建立あつて、釋迦佛を安ぜらる。同四年八月、寺領千五百石を附し賜ひ、院家に列し、關東新義惣錄とせられ、色衣免許の事、當院より沙汰すべしと命じ給ふ。同五年壬申十二月十二日、覺鑁上人、贈官の時に及び、隆光改任し、大僧正に昇進す。同九年、元祿山護持院の號を賜はり。護摩堂の額、護持院の三大字を、大樹自ら灑筆なし給ふ。弘法大師自作の眞像は、濃州大野郡實相院と云ふ眞言寺にありしを、取

復贈答の什、積つて巻裝を成す。應對流るゝが如し。大東振古いまだあらざる所、以て大東文明の美を耀し、邦國治平の盛なるを聲して、其風海表に播し、是を無窮に宣るに足れり。

有徳公統を繼ぎて後、特に先生を選んで營中侍講を授く。此職の設、蓋この先生に始る。嘗て鈞旨を奉じ、五倫五常の名義を疏記するに國字を以し、書成つて是を獻す。又六諭衍義大意を述べ、官命じて是を鏤め天下に布す。是より先、論孟中庸及び易經廣義を著す。考訂に及ばざる先、災に罹りて亡ぶ。先生偶未疾を感じて、重ねて稿を屬する事あたはず。侵淫日に甚しく、終に以て愈えず、疾を陳じて老を乞ふ者再三、優命す、猶職名を帶びて家居し、頤養を以て事とせり。病間駿臺雜話を著す、旨あり是を徴す。因て以て獻す。又大極圖述を著し、編を成す。濂閩千載の祕を弘闡し、後學を來世に俟つ。これ乃ち先生の絶筆なり。享保十九年甲寅八月十二日、駿臺の賜第に卒す、年七十八。州の豐島郡大塚里に葬る。

以上鳩巣文集前編伊東貞黨休の叙に出たり。其要を摘みて記す。

筑波山護持院　音羽町の北にあり。眞言宗にして、和州長谷の一派なり。寺領千有五百石を附せらる。

本堂本尊不動明王　作不詳。往古は本尊に釋迦佛を安ぜしと云ふ。

歡喜天　同右に並ぶ。

蟹ヶ池　庭前の池をいへり。當寺建立なきまへは、此地の名を、せり〳〵とも、又せれ〳〵とも唱へしと。昔此所より、藥師如來の像出現ありしとなり。

權現山　後園小高き岳を云ふ。

東照大神君御正眞の御尊像を安置し奉る。自から御髭を植ゑさせ給ふといふ。

當寺開祖權僧正光譽は、和州初瀬寺の西藏院に住職ありしに、御歸依淺からず、江府に召れ、常州筑波山の宿寺を下し給ふ。則ち知足院と號す。其始め、知足院宥俊は、下野國筑波山中善寺を兼帶

いかなる故にや、此本尊酒を好み給ふ故に、造酒の二字も嚴命によりて稱せしめ給ひ、又造酒の二字を御額になさしめられ、當寺に御奉納ありしとなり。今も祈願あるものは、必ず酒〔ミキ〕を捧げ奉る。

緣起に云く、葵正觀世音菩薩は昔時行教律師、天竺より携へ來りし靈像なり。欽明天皇已來、轉々して、右大將賴朝卿、及び足利家に傳はり、夫より後代々の將軍家、崇信厚かりしとなり。中古日向國志布施の龍興山大慈寺にあり。其後又花洛東福寺の支院、三好山長慶寺の本尊たりしを、東照大神君御崇敬ましく〵、竟に江戸の大城へ遷座なし給ひ、每月十八日、天下泰平の御祈禱として、觀音懺法等を修せしめられ、殊更葵の一字をも附し給ひ、天壽院殿も御信心淺からざりしにより、慶安二年、當寺を創し給ひ、刑部卿の局を開基となされ、此本尊を當寺に移し給ふとなり。當寺日向國志布施の龍興山大慈寺を引きて創基なし給ふ所なり。山號を下され、又天壽院殿御菩提の爲め御祠堂料を附せられしとなり。

鳩巢室先生之墓　同所坂下町の北の裏、少し斗の岡の上にあり。傍に息男忠三郎洪讃の墓もあり。

先生姓は室〔ムロ〕氏、諱は直淸、字は師禮、鳩巢と號す。通稱は新助、齋を命じて靜儉といふ。其先熊谷直實の裔にして、備中國英賀〔アカ〕郡に出づ。考諱は玄樸、草庵と號す。妣は平野氏、萬治元年戊戌江戸谷中邑に產す。異質あり、睿敏人に絕す。加藩に入て官し、業を木下順菴先生の門に受け、京師に客たり。討論の暇、大學新疏を著し、以て章句の蘊を發す。正德元年、東臺の徵に應じ、來つて江府に就いて、往

祖の跡をしたひ參らせけれども、其行方をしらず。其後猶東國に赴きしが、本尊の靈示あるを以て、此大塚の邊に移し參らす。農民其塚上松樹の下に、一字の草堂を營建して、是を安置し奉るとなり。

普門山大慈寺　同所上町にあり。京師五山派の禪刹にして、花洛東福寺に屬す。開山は勅諡佛知大通國師、（觀應二年辛卯五月廿五日寂す。）中興は萬古昔大禪師と號す。（承應二年癸巳四月十日化寂す。）開基は刑部卿の局なり。（天壽院殿の侍女にして、法號を大慈寺殿仙林榮壽禪尼といへり。慶長四年、八十餘歳にて逝す。則ち當寺に墓碑あり。碑銘は、嚴命によりて、品川東海寺の澤庵和尚撰まるゝとなり。）

本尊葵正觀世音菩薩　（坐像にして御長壹尺三寸あり。）南天竺毘首竭磨、又は唐の稽文會稽首勳の作なりといふ。

鎭守日吉豐國兩社　（江戸一社の神なり。社人内藤氏奉祀す。）

造酒地藏尊　寺境見耕庵の本尊にして、天竺佛たり。（寺記に云く、此靈像は、往古小田原北條家の頃、品川の海底より出現あり、後御當家にて御信敬厚く、當寺大清哲禪師住寺の頃、葵正觀世音、火防守護の爲め見耕庵を御建立ありて、こゝに移し給へり。其先小笠原彦太夫の家へ此本尊を賜はせられけるが、種々威靈の事ありとなり。其頃或夜佛告げて曰く、）

正法千歳在佛在世　像法千歳遊龍宮海
末法中救此界衆生　今世後世令離苦惱

波切不動堂

せしに、同十三日の夜、土中忽然として妙經讀誦の靈音あり。翌くるを待ち、其地を穿つ事數尺、果して此靈像を得たりしかば、此不動尊を、世に波切不動尊と稱せり。次の條下に出せり。一字の香堂を營みて、是を安置すと云々。此靈像何人の作なる事しらざる故に、其頃日行上人一百日の間法華懺法を修したりしに、靈像師の夢に告げてのたまはく、汝宿縁空しからずして吾像に値遇す、我昔鎌倉より下總へ赴きし頃、此地不動の堂前に一人の信士あり、明王の告ありとて我を其菴に請じ、敎化を受けて師檀の約をなせり、別れに臨むの時、堂前の松樹をもつて我像を彫造して、彼の信士に授與せり、汝が感得する所の像は則ちこれなり、と示し給ひしより、竟に大士の手刻なる事を知りけりとなん。

波切不動尊　同所大塚町の通、道より右にあり。別當は日蓮宗通玄院と號す。

緣起に云く、此本尊は始め勢州一志郡小幡村大乘寺に安置あり。然るに建長五年の春、日蓮上人伊勢路を過ぎ給ふに、霖雨にて宮川の水まさりしかば、渡り給ふ事あたはず。時に一老翁來りて云く、師川を渡らんとならば、我水を切るの術ありとて、卽ち師を誘引して、たやすく水上を渡しまゐらす。此故に波切の稱ありといふ。大士是を奇とし、翁の住所を尋ね給ふに、たゞ小幡の山寺に住するとのみいらへて、失去れり。大士それより彼寺に至り、翁を尋られしに、知る人更になし。依て寺僧に其故を告げて、彼所を立出で給ふ。後寺僧此事を不審におもひしが、其寺に安置の不動尊を拜するに、佛躰水に濡れ給ふ。依て大に驚き、直に明王を負ひ奉り、宗

重光山善性寺と號く。元和年間、瑞應禪師、今の宗風に轉じ、自らの名を法仙院日行と改め、寺號をも本傳寺とす。

經讀日蓮大士　緣起に云く、往古當寺中興開山日行上人、始瑞應禪師と稱せし頃、蓮師の宗義を鑑み、覺悟の要路は法華に限る事を發明し、宗風を轉ぜんとすれども、さすがに心決しがたし。依て元和三年丁巳四月、三七日の間、不動明王の寶前において、法華三昧の行を修しけるに、同二十五日結願の夜の夢に、明王姿を現じ、師に告ていはく、汝前生は法華の行者たりしがとも、臨終の期に至り、唯空永滅の念を起したりし謗執に因て、空無の見に墮つといへども、今宿世の妙種あらはれて、本心に歸れり、速に權宗を捨てゝ、實教に入るべし、我も久しく妙法の醍醐味をあまんぜん事を願ひしが、正に今一乘の法蓮を開かんとするの時至れり、社壇の艮に當て、基を開くべし、其地必ず妙經讀誦の靈音ありて、不測の像を感得すべしと云々。師終に此靈夢に依て心を決し、同二十八日日遠上人に謁して受戒し、號を日行と改む。日遠上人は、駿州貞松山心性院の寺主なり。又靈示に任せ、同年六月一字を開かんとして、其地をト

おほつか
大塚
ほんでん
本傳寺

關口八幡宮　堰口目白坂の半腹、左側にあり。神躰は佛工春日の作なりといふ。當社を上の宮と稱す。（下の宮は先にしるせり。）關口水道町鎭守にして、祭禮は隔年八月十五日に修行す。當社も下の宮に同じく、洞雲寺奉祀たり。

大塚　小石川原町の邊より、護國寺の邊迄の惣名なり。（或人云く、古は大塚の地東西に分つて其だ廣莫の地なりしとなり。雜司ケ窪の邊は東大塚にて、此邊西大塚と稱せしとなり。）或人云ふ、今の水戸大學侯の藩邸、古の奥州街道にて、榎木の大樹あるは、其頃の一里塚にて、則ち大塚と云ふは是なりと。（本傳寺日蓮大士縁起に云く、大塚の地昔は富士見塚と呼びたりと云ふ。）又南向亭云く、安藤對島侯の東の方、森川氏の構の中に、一堆の塚あるをいふとも、紫の一本に、塚の上に不動堂ありとあれば、今の波切不動尊の地、大塚と稱する舊跡にや。相傳ふ、太田道灌、相圖の狼煙を揚ぐる料に築たる塚なり、故に昔は太田塚と唱へけると。或は又、鎌倉將軍守邦親王、亂をさけて、武州比企郡大塚村に逝去す、其廟を王塚と稱す、こゝに大塚と號くるも、此類ならんといへども詳ならず。（江戸の内に大塚の名多し。猶可レ考。）

大法山本傳寺　大塚町横小路にあり。日蓮宗にして、駿州蓮永寺に屬す。昔は禪宗にして、

目白坂
関口八幡宮

上火をあたふべしと宣ひ、持し給ふ所の利劍をもつて、左の御臂を切り給へば、靈火盛に燃出でて、佛身に充てり。依て大師面前に出現の像二軀を模刻し、一躰は同國荒澤に安置し、一躰は大師自ら護持なし給ふ。其後野州足利に住せる沙門某、是を感得して奉持せしが、一年靈感あるを以て、此地の住人松村氏某にはかり、竟に一宇を闢きて、此本尊を移し、安置なし奉るとなり。往古松村氏靈夢を感じ、本尊不動明王を野州より此地にうつし奉りし頃、沙門某、其途中嵐の爲にうしなへる所の袈裟　當山の榎の枝にかゝりてありしかば、本尊有緣の地たらん事を推知し、地主渡邊石見守某へ此地を乞ひ、石見守その乞に任せて藩邸の地を寄附ありしとなり。今の境內是なり。袈裟掛榎と稱するも、則ち此故によりて名とせり。

當寺は、元和四年、和州長谷の小池坊秀算僧正、中興ありし頃、大將軍台德公の嚴命により、堂塔坊舍御建立あり。また和州長谷寺の本尊と、同木同作の十一面觀世音の像をうつし、新長谷寺と改む。大將軍大猷公目白の號を賜ひ、元祿の始には、桂昌一位尼公、御歸依淺からず。諸堂修理を加へ給ひ、丈餘の地藏尊等を安置なさしめられたり。此地、麓には堰口の流を帶び、水流淙々として日夜に絕えず。早稻田の村落、高田の森林を望み、風光の地なり。境內貨食亭多く、何れも涯に臨めり。

幸神祠　同所東の方、道を隔てゝ右側にあり。一に道山の幸神、或は駒塚社とも號く。祭神猿田彦大神なり。庚申の日を以て緣日とす。社司は宮城島氏なり。相傳ふ、往昔此所に豪民あり、今も此邊を長者の郭と云ふ。金の駒を塚に築籠め、榎樹を栽ゑて、かしこに幸神を勸請す。當社の神體は、昔此邊入江なりし頃、其水中より出現ありし故とて、今も猶全躰に蛎殼の類著きてありと云ふ。古へ此邊鎌倉海道なりし故に、道山の號ありとぞ。中古大に荒廢して、神木の榎の下に、纔の叢祠のみ存せしを、其頃の神主政泰なる者、今の如く祠を營み建つるといふ。里諺に云ふ、延寶の頃、金の駒の精あらはれ出でて、此邊の田畑をあらす、里民是をみる事數度なり、追ふ時は山谷に隱る、其名を駒ケ谷と唱ふ。又橋の上にて其駒の行方を見失ふ故に、其橋を駒留橋といふとなり。

目白不動堂　同所東の方にありて、堰口の涯に臨む。眞言宗にして、東豐山新長谷寺と號す。長谷小池坊の宿寺とす。本尊不動明王の靈像は、長八寸。弘法大師の作、總門の額、東豐山の三大字は、南岳悅山の筆なり。緣起に云く、弘法大師唐より歸朝の後、羽州湯殿山に參籠ありし時、大日如來、忽然と不動明王の姿に變現し、瀧の下に現はれ給ひ、大師に告げて云く、此地は諸佛內證祕密の淨土なれば、有爲の穢火をきらへり、故に凡夫登山する事かたし、今汝に無漏の

早秋遊豊山
長谷寺偶然
成詠
偶乗秋景入山林
盡日曽無俗叓侵
巖下清流堪濯熱
况傾河朔酒杯深
春臺
料理や
表門
目白坂

目白不動堂
境内眺望勝れたり
雪景もよし
高田
本堂

道山幸神社

駒留橋　龍隱庵の前、上水の流に架す。此水流は神田の上水なれど、玉川の分水の落合にして、山吹の里に傍ひて流るゝ故に、

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川

といへる古詠の意をもて號けけるとぞ。又里諺に、右大將賴朝卿、此地に陣せられし頃、雪の朝、此川傳ひを、駒に打乘りて眺望ありしが、興盡きて、此橋の邊より歸り給ひしより、駒留橋と號くるといへども、詳ならず。同所幸神の社記に駒留橋の事あり、此橋を云ふならん。猶其條下を見るべし。

拾穗軒北村季吟翁別莊舊地　同所目白の臺、松平大炊侯の庭中にありといふ。山の井と稱するもの、今は埋れて、名のみを存せり。俳書に、增山の井といへるあり。此翁此地に閑居ありて、著述ありし故に此名ありとぞ。此邊時鳥の名所にして、外よりも早しといへり。按ずるに、別莊の名を疏儀莊といふ。

關口てふ所に別莊を求めはべりて

住みつかぬ我宿とはぬ時鳥もとのあるじをしたひてやなく　季吟

芭蕉庵
五月雨塚
駒留橋
八幡宮
水神宮

目白下大洗堰

大師の彫造といふ。庵の前には上水の流横たはり、南に早稲田の耕田を望み、西に芙蓉の白峯を顧みる。東は堰口にして、水音冷々として禪心を澄しめ、うしろには目白の臺聳えたり。月の夕、雪の朝の風光もまた備れり。昔上水開發の頃、芭蕉翁（芭蕉翁、通稱松尾甚七郎といひ、藤堂家の士たり。此上水堀割の時、藤堂家へ普請の事を命ぜられしに甚七郎此事を司りし故、其頃此地に日々遊ばれしといへり。）この地に遊ばれしにより、後世その舊跡を失はんことを歎き、白兎園宗瑞、及び馬光などいへる俳師、この地の光景江州瀬田の義仲寺に髣髴たるをもて、

五月雨に隱くれぬものよ瀬田の橋

といへる翁の短冊を塚に築き、五月雨塚と號す。

水神社　同所に竝ぶ。龍隱庵別當たり。上水の守護神を祀らん爲に、北辰妙見大菩薩を安置す。祭神は罔象女なり。祭禮は五月十五日なり。

八幡宮　同社地にあり。往古よりの鎭座といふ。下の宮と稱し、椿山八幡とも稱せり。（昔は椿多かりし故に、椿山と號くと云ふ。祭禮は毎歳八月十五日、上の宮と隔年に執行す。洞雲寺奉祀す。）

間、織田信長、總門を襲はるゝ頃、堂宇悉く兵火に罹りて灰燼となる。されど此本尊は火焰を遁れ出で、近江國兵主明神の社頭深林の中に移り給ひ、其後夜な〳〵瑞光を放ち給ふ。よつて藤原氏某、感得して其家に移しまゐらせ、旦暮供養する事怠りなし。然るに此人嗣子なきを憂とし、此尊に祈求して、竟に一女子を設く。長ずるに及んで、紀伊亞相賴宣卿に仕へ奉り、後落飾して法善尼と號す、此尼靈夢を感ずるの後、當寺を闢き、こゝに安置し奉りしといへり。

大洗堰　目白の涯下にあり。承應年間、嚴命により、當國多摩郡牟禮邑井頭の池水をして、江戸大城の下に通ぜしむ。其頃此地に堰を築せられ、其上水の餘水を分らるゝ。天明六年丙午の洪水に堰崩れたり。こゝに於て再び堅固に築せられ、古より壹尺ばかり其高を減ず。故に水嵩む時は、其上を越えて流れ落つる故に、損ずる患なしといへり。

龍隱庵　同所上水堀の端にあり。昔は眞言宗にして、安樂寺と號く。故ありて元祿十年丁丑、黃檗宗に改め、洞雲寺の持となり、（洞雲寺は音羽町八丁目の西の裏にあり。）平石和尙住持す。本尊は正観世音、慈覺

大日坂
大日堂

芳林院今金剛寺と號すとあり。按ずるに北條家の分限帳に、島津孫四郎、北品川、小石川、及び金曾木［カナソギ］内、法林院、金剛寺分寄の地を領する由を記して法林院に作る。又小田原舊記に、大永四年正月十三日、北條氏綱、上杉修理太夫朝興とたゝかひ勝ちて、江戸の城にうつる條下に、其頃當所芳林院の孤舟和尚來りて萬里居士の江亭記を捧ぐると。また孤舟和尚其後は金剛院に住すと記せり。これに因て考ふれば、金剛寺と法林院は別なる事しるべし。

當寺往古は境内廣く、寺院巍々として、首座、主閣、侍者、沙彌、喝食、維那、納所、行者、火番などありて、祈禱、上堂、參禪の式、勤め怠らずして、堂塔も壯麗たりしとなり。

道祖神祠　同く上水堀の端、金剛寺より二町ばかり西にあり。明德年間の勸請なりといへり。別當龍門寺に、當社勸請の碑と稱するものあり。

氷川明神祠　同西の方、二町餘りを隔てゝ、是も上水堀の端、慈照山日輪寺といへる禪林にあり。祭神は當國一宮に同じ。勸請の始久しうして知るべからずといへり。中古太田道灌の再興にして、小日向の鎭守なり。祭禮は正、五、九月の十七日なり。當社に元龜の年號ある庚申待供養の古碑あり。

大日堂　同西の方、大日坂にあり。天台宗にして、覺王山妙足院と號す。相傳ふ、本尊大日如來は、慈覺大師、唐より携へ來る所の靈像なり。往古は叡山の中に安置ありしを、元龜年

小日向上水端
道祖神祠

惠日山金剛禪寺者。始波多野中務忠經。爲二鎌倉右府將軍實朝公菩提一。建長二庚戌年。建二立相州波多野莊田原村一。後江戶下野入道道心。移二寺於武州江戶莊小日向鄉金杉村一。亦其後文明年中太田左衞門入道靜勝軒春苑道灌。重興焉。昔日者臨濟宗也。其時之開山普應國師。二代巨舟和尙。中興叔悅禪師。永正六己巳年改二曹洞宗一者也。維時永正十癸酉年七月十日。金剛現住比丘實山叟記レ之。

金剛寺殿鎌倉右府將軍實朝公大禪定門

承久元己卯年正月二十七日

地藏堂 同じ山の頂にあり。本尊は天竺佛にして、賴朝卿鎌倉圓覺寺の後に安置ありしを、實朝公の時、波多野に一宇を建立ありて、彼地に移し奉りしを、後金剛寺と共に此地に轉じたりといへり。

當寺は波多野中務忠經 東鑑に、中務丞忠綱と云ふ名あり。諸家系圖に依て考ふるに、波多野中務丞從五位下忠綱後に忠經に改むるとあり。 鎌倉將軍實朝公の菩提を弔はんが爲、建長二年庚戌、相州波多野莊田原邑に造立せし所の精舍にして、其後江戶下野入道心佛、今の地に遷せしといふ。又文明年間、太田道灌當寺を重修し、叔悅禪師をして住持たらしむ。 梅花無盡藏傳長老の註に、叔悅禪師は道灌の伯父なりと云々。 故に、實朝公、及び道灌の靈牌、ならびに肖像等を置く。

總門の額に、慧日山と書せしは、黃檗卽非の筆なり。 白石先生云く、梅花無盡藏文明十七年乙巳東遊の詩の註に、芳林院において李太白の墨蹟を看る、同じく其下に

氷川明神社

金剛寺

夢に菅神牛に乘じ、賴朝卿に二の幸あらん事を示し給ひ、武運滿足の後は、必ず小社を營み報ずべしと託し給ふ。賴朝卿夢覺めて後、傍を顧み給へば、一の盤石ありて、夢中菅神乘じ給ひたりし牛に髣髴たり。依て是を奇異とせられしが、果して同年の秋、賴家卿誕生あり。又翌年癸巳の夏は、動かずして平家悉く敗れしかば、其報賽として、元暦元年甲辰、此御神を此地に勸請ありて、神領等寄附ありしと云々。又江戸名勝志といへる草紙に、北條氏康兵を起されし頃、夢中に菅神牛に乘じて降臨あると見て後、此地に天滿宮を勸請なし奉りしを、其後家臣遠山丹波守當社を修營せりと。上の社記に異なり。

諏訪明神社　同所上水堀より南の方、諏訪町にあり。祭神は健御名方命なり。相傳ふ、明德元年庚午、牛天神の別當梅本坊乘觀法印靈告あるにより、勸請なし奉ると云々。土人云く、此地舊名を忍ぶの森と云ふといへり。梅本坊は今の龍門寺是なり。祭禮は毎歲正月と七月の廿七日なり。

慧日山金剛寺　同所上水堀の端にあり。曹洞派の禪刹にして、駒込吉祥寺に屬せり。昔は臨濟宗なりしが、永正六年己巳曹洞宗に改むるといふ。本尊は釋迦如來、開山は天目忠峯普應國師、中興は用山和尚といふ。

鎌倉右府將軍實朝公碑　後の山の半腹にあり。永正の頃造立せし碑なり。其碑面に誌して云く、

萬世。峕寶永八年卯年七月初三日

當山第二代傳法弟子了然元總百拜識

蘭臺井先生之墓　同じ卵塔の中にあり。井上氏、名通熙、字子叔、嘉善と稱す。岡山侯の儒臣たり。

牛天神社　小石川上水堀の端にあり。一に金杉天神とも稱す。此地を金杉と唱ふるによりて、しか號く。金杉古は金曾木に作る。小田原北條家の所領役帳に、此地名を注せり。金剛寺の條下に詳なり合せ見るべし。別當は天台宗にして、泉松山龍門寺と號す。神體は菅神自ら彫造し給ふといひ傳へて、御長六寸あり。當社の舊地は、社地より東の方、今水府君の邸中に入りたり。神木船繫松〔フナツナギマツ〕も同所にありと云ふ。

降魔狗　社壇に收む。鎌倉佛師運慶の作なりといふ。往古、大猷公、禁闕にありしを、江戸の大城へ移させ給ひ、其後、水戸黄門光圀卿に賜はせられしを、讃州の大守賴常君、當社崇敬厚く、元祿五年壬申、社壇重修の頃寄附せられたりといへり。

華表　鳥居の額は、賴常君寄附あり。　額　天滿宮　近衞内大臣家熙公の筆。牛石　裏門坂の下り口隅の方にある巨石をさして名づく。次の社記の條下に詳なり。南向亭云く、賴朝公の腰掛石なりしと。いぶかし。

社記に云く、往古壽永元年壬辰の春、右大將賴朝卿、東國追討の時、此所の入江の松に船を繫ぎて、和波を待ち給ふ。此邊上古は入江にて、今の飯田町の東入堀のあたりへ續きてありしといへり。牛天神のそとの坂を網干坂と呼び、又同所に蠣殼坂などいひてあるも、入江に依りたる舊稱なりといへり。其間

牛天神社
牛石
諏訪明神社
別當
上水

四序流行更無跡（イニ又如此トアリ）　不知誰是箇（固イ）中移

いける世にすてゝやく身やうからまし終の薪とおもはざりせば　了然

かくて後大悟し、晩年に至り當寺を草創す。白翁和尚化寂の後、遺骨を當寺に収め、石塔を營み建てゝ、自ら銘文を製し、和尚をして當寺の始祖と稱す。（白翁和尚の肖像は本尊の左にあり、右に了然の像を置けり。）自ら二代と稱せり。（其頃は尼寺なりといふ。江戸鹿子〔エドカノコ〕に、比丘尼橋は尼寺の前にありと云ふは、當寺の事を云ふ歟。）竟に正德元年辛卯九月十八日歸寂す。

當寺に石塔を築く。新著聞集に、江戸近き落合といふ所に、自ら精舎を建立し、一乘院と號すと。又江戸砂子に、了然尼市ヶ谷の末に尼寺を開創し、彼寺に夫晩翠の墓をも建る、寺の額も此尼の筆跡なりとありて、共に違へり。猶考ふべきのみ。

開山白翁道泰和尚墓

開山師翁者。本寺第二代賜紫木庵老和尚嫡子也。宗説共通。機用殺活。孤危嶮峻。不レ可二湊泊一。一朝因レ事辭二三州竹箟山一。嘉二遁武陵大休庵一。未レ幾罹レ病。書レ偈坐化。實天和二壬戌年七月初三日也。總等不レ堪二悲歎一。如レ法茶毘。但恨レ無二開山所一。因伸。昇二誠於　官家一。終蒙二許可一。再二興廢院一。改二黄龍山泰雲禪寺一。以爲二開山鼻祖一。奉二酬法類之恩一之。令〔今の誤か〕也建二骨塔一。遺二

を興復し、千山和尚の師、鐵禪和尚を中興の開祖とす。總門に掲ぐる所の額に、泰雲寺とあるは、黄檗木庵老人の書なり。當寺第二世了然禪尼は、泰雲院元總和尚と號す。姓は葛山氏、駿州富士の大宮司葛山十郎義久の子、同長次郎といへるが女なり。長次郎は、京師泉涌寺の前に閑居し、茶事を好み、古畫を鑒定す。其頃世に畫見〔ヱミ〕の長次と稱せられしとなり。松屋叢話に尾張國人とあり。又了然は植山十藏といへる備臣の母なりとあり。可レ考。始め大内に仕へ、名を寄生と呼ぶ。後仕を辭して家に歸る。江戸砂子に、了然尼は、東福門院に宮仕へせし女房なりしが、門院薨御の後尼となるよし記せり。人あつて婚儀を整へ、松田何某といへる醫生の許に嫁せしむ。江戸砂子に松田晩翠とあり。男女子三人を生めり。新著聞集に、三十余歳の時男女三人の子を産すとあり。長男後に葛山長十郎と名づく。林家の門人にして、博覽の聞えあるにより、紀州亞相に召さる。後夫に告げて薙染し、臨濟黄檗等の諸禪林に入りて、參道怠りなく務む。竟に天和元年辛酉の冬、大江戸に下り、白翁和尚に見え、法を求めんとすれども、新著聞集に、白翁和尚井上大和侯の許にありしとみゆ。紫の一本〔ムラサキノヒトモト〕には、白翁和尚は木庵の徒弟にして、その駒込に住まれたりとあり和尚其美貌なるを以て許さず、依て了然尼火攙を燒きて、自ら面皮を焦す。こゝに於て和尚も尼の懇志を感じて、大法殘りなく附與せらる。其時頌を賦し、和歌を詠ず。

昔遊宮裡燒蘭麝　今入禪林燎面皮

永正十三年正月
後奈良院
御撰何曽

秋の田乃露おもけなるけしきかな
蛍

上水川

落合螢
氷川
田嶋橋

落合惣圖
富士
氷川
田島橋

一枚岩
落合の近傍和田
上水の白堀通ふ
巖水面に彰れ
藍水巖頭に
秋夜

藤森
稲荷社
東山

泰雲寺古事

田家の邸園に、今も松の列樹あるは、其舊跡なりといへり。

宿坂關之舊跡 同北の方、金乘院といへる密宗の寺前を、四谷町の方へ上る坂口をいふ。同じ寺の裏門の邊に、纔の平地あり。土人たつてうばと呼べり。たつてうばは立丁場なるべし。此地は昔の奥州街道にして、其頃關門のありし跡なりといへり。或人云ふ、此地に關守の八兵衞といふ者ありて、家に突棒刺股及び道中日記等を持ち傳へたるといふ。

木花開耶姫社 同所小坂の中腹にあり。土俗八兵衞稻荷或は開耶姫稻荷とも稱す。又當社を櫻姫の宮と唱へ、此坂を清玄坂と呼ぶ。按ずるに、富士淺間の宮の祭神は木花開耶姫なれば、淺間坂といひしより、かく謬傳せし事わらふに堪へたり。當社の額、木花開耶姫命の六字は、水戸黃門光圀卿の親筆なり。今別當金乘院に傳ふ。

藤杜稻荷社 同所岡の根に傍ひてあり。又東山稻荷とも稱せり。靈驗あらたなりとて、頗る參詣の徒多し。落合村の藥王院奉祀す。

黃龍山泰雲寺 同所上落合にあり、黃檗派の禪林にして、花洛萬福寺に屬す。本尊如意輪觀世音の像は、天然の石佛にして、當寺の土中より出現ありしといふ。開山は白翁道泰和尚と號す。木庵和尚の法嗣にして、了然尼の師なり。二世は了然尼なり。其後法雲院元光尼、眞田氏の女にして、東福門院の侍女なり。鐵禪和尚の法弟となる。當寺

宿坂関旧址
金乗院
観音堂

観音

金乗院

宿坂

石橋　南藏院の前に架す石橋を號く。往くにも還るにも右の方に見るより、名とす。舊名を藁塚橋と呼べり。

氷川明神社　同申酉の方、田島橋より北、杉林の中にあり。祭神奇稲田姫命一座なり。是を女體の宮と稱せり。同所藥王院の持なり。高田の氷川明神の祭神素盞嗚尊なり。よつて當社を合せて夫婦の宮とす。土俗あやまつて在原業平および二條后の靈を祀るといふ。甚非なり。

七曲坂　同所より鼠山の方へ上る坂をいふ。曲折ある故に名とす。此邊は下落合村に屬せり。

落合土橋　同所坤の方、上落合より下落合へ行く道に架す。土人云ふ、田島橋より一町ばかり上に、玉川の流と、井頭の池の下流と、會流する所あり。此故に落合の名ありといへり。

按ずるに、北條家の所領役帳に、奥津加賀守および太田新六郎所領の中に、江戸落合の名を加へ、長野彌六郎分又鈴木分の地を領すとあり。神田の上水および此水道へ玉川の上水を助水とせられしは、最も後世にして、漸く承應以來の事なり。然る時は、落合の名の發る所、此ふたつの上水落合ふの義にとるは附會也としるべし。

此地は螢に名あり。形大にして、光も他に勝れたり。山城の宇治、近江の瀬田にも越えて、玉の如く、又星の如くに亂れ飛んで、光景最も奇とす。夏月夕涼多し。

奥州橋　同じ寺の乾の隅に架す土橋をいへり。往古の奥州街道にして、水神の社の上通、黒

砂利場村
右手

高田
南藏院
鶯宿梅
氷川社
右揃

所に門を建てありしにより、かくは異名とせしとなり。

開山は圓乘比丘と號す。本尊藥師佛は、聖徳太子の作にして、立像三尺四寸あり。此靈像は、秀衡の念持佛なりとて、養和年間の頃迄は、奥州平泉にありしを、圓乘比丘、諸國遊化の時、靈夢を感じ、彼地の農家にして是を得て、此地に安置すといへり。本堂外陣に掲けたる藥師堂三大字の額は、蓮華光院大僧正道恕の筆なり。總門の額に、大鏡山と書せしも、同じ筆なり。當寺藥師堂の後に、大橋立慶の別荘の舊跡あり。寛永の頃は、大將軍家度々此に入らせ給ひしとて、假の御殿なども構へ置れしとなり。昔は此地に鶯宿梅とて、大樹御手づから栽ゑ給ひし梅樹ありしが、後枯たりとて、今はなし。此地は昔鎌倉街道の通路なりとて、鎌倉街道の楓樹と號くるもの、今その境内に存せり。

氷川明神社　同寺前、道より左にあり。下高田村の産土神にして、南藏院の奉祀なり。祭神は素盞嗚命にして、是を土俗男體の宮と稱す。落合の氷川明神は稻田姫を祭れり。よつて女體の宮と稱し、當社を合せて夫婦宮とす。毎歳正月十日祭禮にて、奉射の式あり、甚質朴にして古雅なり。此間手洗の川より、夷子大黒砂と唱ふるものを産す。此砂は水中に住める蟲の化する由、近江古繁先生の雲根志にいへり。

世尊堂　堂内に釋迦如來の像を安ず。

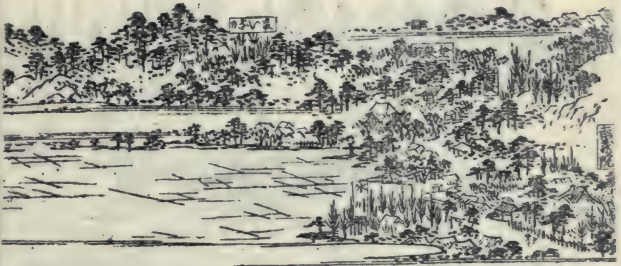
朝日堂　日朝上人の像を安ず。此堂内に於て修行する所の常題目は、法善院日養師の開基にして、紀陽君御寄附なりといへり。當寺第三世圓乘院日了上人、常に眼病を患ひて日朝上人に寄願し、平愈する事を得たり。後靈夢を感ずる事ありて、宗祖日蓮大士の像を、日朝上人に作りあらたむるとなり。今當寺より出す所の眼病救護の靈符を得て、現益を蒙る者、少なからずといへり。

朝日櫻　同じく常唱堂の向う右の方にあり、日朝上人の愛樹なりといへり。

俤の橋　同じ北の方、上水川に架す。長十二間餘あり。昔は板橋なりしが、近頃は土橋となれり。此橋を姿見の橋と思ふは誤りなり。次にしるす。

姿見の橋　同じく北の方に架せる小橋を號く。昔は此橋の左右に池ありて、其水淀んで流れず。故に行人覗みれば、鏡の面に相對するが如く、水面湛然たる故に名とするとも、或は寛永の頃、大樹此地へ御放鷹の時、御鷹翦れけるが、此橋の邊にて見出給ひしかば、台命によりて此名を呼せられし由、里諺に云傳ふ。又土人の說に、在五中將業平朝臣、うた枕みんとあづまにさすらはれし頃、此水に姿をうつされたりし故に名づくといへども、信とするにたらず。

大鏡山南藏院　砂利場村にあり。眞言宗にして、大塚の護國寺に屬す。當寺を大鏡山となづくるは、昔此寺前に大なる池ありて、鏡が池と唱へしによりて、此名ありしといへり。此地に姿見、俤〔オモカゲ〕など稱する橋あるも、是によりて起る號なりといふ。又當寺を、古俗八ッ門寺と異名せしは、昔大樹御放鷹の頃、當寺の垣根を、此所彼所より分けいらせ給ひしを、悉く門となせし故に、其頃は八

姿見ヶ橋
姿見橋

高田七面堂朝日櫻

山吹の井

三島山　同所民家の後園にあり。古松四五株繁茂せる樹陰に、三島明神の禿倉あり。相傳ふ、右大將賴朝卿、此高田の地に、軍兵勢揃ありし頃、此御神を勸請なし給ふと、云々。此山岸に少しばかりの甘泉あり、是を山吹の井と呼べり。土人或は三島明神の御手洗、又は賴朝卿の馬の冷し場なりともいひ傳へたり。

高田七面堂　同所道より左、如意山亮朝院といへる日蓮宗の寺に安ず。甲州身延山に屬せり。本尊七面大明神の像は、身延山の七面尊と、同木同作なりと云ふ。當寺開山日暉師感得ありし靈像なりといふ。緣起に云く、延山第二十六世日境上人、靈告再三に及ぶの後、亮朝院日暉師に是を授與す。依て日暉師此地五明村に草庵を結びて、此本尊を安ず。然るに慶安元年の春、荒藺山に於て、社地を賜ひ、七面堂を造營せしめ、御武運長久、國家安全の御祈禱所に命ぜらる。寛文十一年、荒藺山の地は尾陽公の御山莊となりし故、今の地に遷さるゝといふ。同二年、日光御社參ありしときも、御護りにとて、一部一卷の法華經を獻じ奉る。其時、御守刀に題目の七字をさへ彫しめ給ふ。御歸城の後、忝くも御經の表紙の裡に、七面大明神と御染筆ありて、御諱をさへ書添へられて、當寺に賜ふとなり。今猶傳へて、當寺三種の靈寶と仰ぎ尊むといふ。

山吹の里ハ高田の馬場
より北の方民家の
辺をいふ昔太田持資
江城にありし頃一日
此戸塚の金川の辺に
放鷹し急雨に遇ひて
傍の農家に入り
蓑をからんと
乞ふ時に内より
小女出て詞ハなく
花一枝をさゝぐ
持資に捧ぐるハ
後拾遺集に七重
八重花ハさけども
山吹のみのひとつ
だになきぞ
かなしきと

山吹の里　高田の馬場より北の方の民家の邊を、しか唱ふ。此地を今向砂利場「ムカウジャリバ」と號す。　相傳ふ、太田持資、江戸在城の頃、一日戸塚の金川邊に放鷹す、其時携ふる所の鷹、翦れて飛去りければ、跡を追ひてこゝに來る。時に急雨頻なれば、傍の農家に入つて簑を乞ふ。内より小女出て、盛なる山吹の花を手折りて、是を持資に捧ぐ、されども詞を出さず。持資其意を悟る事を得ずして、却て憤を含み、家に歸り、近臣に事のありさまを物語す。中に一人進み出て云く、是は簑のなきといへる事ならん、古歌に、

七重八重花はさけども山吹のみのひとつ（後拾遺集ひとへ）だになきぞわびしき（同かなしき）

かく詠ぜし和歌の心をもて答へ奉りしならんと申しければ、持資深く恥ぢて、後和歌の道を慕ふと云々。

此七重八重の和歌は、後拾遺集に、中務卿兼明親王の詠とす。其詞がきに云く、小倉の家に住みはべりける頃、雨のふりける日、簑かる人のはべりければ、山吹の枝を折りてとらせてはべりけり、心もえてまかりすぎてまたの日、山吹のこゝろもえざりしよしいひおこせてはべりける返事に、いひつかはしけるとあり。

按ずるに、此山吹の里の事は、和漢三才圖會および俗説辨、艷道通鑑等の中に出づるといへども、戸塚の金川といへるに思ひよせて鎌倉なりとし、または東海道の方驛神奈川などいへど、皆其實を得たるにあらざるべし。穴八幡の前を寶泉寺の方へ流るゝ小溝を、今蟹川といふ。昔は加牟川と唱へけるとなり。是先にいふ所のかな川ならん歟。其是非は詳にせずといへども、しばらくこゝに云ひ傳ふるに任せて、是を擧ぐるのみ。

はしかりしとなり。

大將軍家御代の始には、國家安全の御祈禱の爲、御嘉例として、此地に於て流鏑馬の式あり。形裝善盡し、美を盡せり。其式の圖說は、穴八幡の別當放生會寺に收藏せり。文章は神田白龍子撰する所なり。

按ずるに、此地を高田と唱へ來る事は、近からざるべし。小田原北條家の所領役帳に、太田新六郎所領の中に、高田内、赤澤分、同添田分等の地を注し加ふ。又赤澤、千壽、領する所の江戸高田は千壽成人の間、赤澤後家に附すとあり。又此地を中村平次郎といふ人も領するよし、同書に見えたり。

和田戸山

尾陽君御館の地なり。是を戸山御邸と云ふ。戸山或は外山に作る。土人相傳ふ、此地は、往昔和田戸何某とかやいひし武士の住みし所にして、右大將賴朝卿、隅田川より此地に至り、和田戸が第に入り給ひ、軍勢の勞を休められしことありしといへり。今其地に和田戸明神といへる宮社ありと云ふ。高田馬場の南、尾州御山屋敷へ行く方の畑の中に一條の道あり。里老傳へて、上古の鎌倉海道なりといへり。

荒藺山

同所戸山と、大窪諏訪の森との間をいふ。此あたりは雲雀の名所なり。

高田馬場

地是なり。望海毎談といへる册子に、寛永七年の事實を記せし次に、御祐筆大橋立慶に、高田大友の屋敷を賜ふとありて、其地に天神の宮ある事を記せり。證とすべし。又菅神の眞筆の佛經を收むる由云へり。社前にある所の龍神、及び鬼子母神等の石像は、昔此地に經藏ありし頃、守護の爲に造立せしといふ。

按ずるに、當社の傳には、大橋立慶、大樹よりたまふ所の菅神の像を一社に奉ずとありて、舊地を天神町とす。土人、濟松寺の地昔は大橋氏の宅地なりといふ。南向亭茶話に云ふ、大友宗五郎義延、自ら宅地に太宰府の天満宮を遷しまゐらす、其地を天神町となづく、後高田に移す、大橋長左衛門奉納の三十六歌仙の繪ども、今猶存すとあり。再び按ずるに、元祿二年開板の江戸鹿子〔エドカノコ〕に、二百餘年に及ぶとあるに依て考ふるに、大友義延は文祿の頃の人なれば、其頃宅地に勸請せしを、後大橋氏其跡に居住して、大樹よりたまふ所の神像をその社に安置したるならん歟。寛永は寛政の今に至りて、未だ二百年に過ぎず。

高田馬場　おなじ北の方にあり、追廻と稱して二筋あり。竪は東西へ六町に、横の幅は南北へ三十餘間あり。相傳ふ、昔右大將頼朝卿、隅田川より此地に至り、軍の勢揃ありし舊跡なりといへり。土人の說に、慶長年間、越後少將忠輝卿。の御母堂高田の君、遊望の設として開かせらるゝ所の芝生なりしが、寛永十三年に至り、今の如く馬場を築かせ給ひ、弓馬調練の所となさしめらるゝとなり。或人云ふ、林丹波守勝正、加藤左内、河村吉左衛門等、是を司どりて、築かれたりとなり又云ふ、北の馬場は、武田信玄入道、小田原の北條家を攻むる時、馬を試みられたりし舊跡なりといふ。北の方の松の列樹は、享保の頃、台命によりて、風除〔カザヨケ〕のために是を植ゑらるゝといへり。延寶天和の頃は、雑司ケ谷群參の輩、此地にいたり、賭的〔カケマト〕大的、小的、騎射、其外、能、囃子〔ハヤシ〕土佐外記、放下〔ハウカ〕の類出でて、賑

高田天滿宮

塚の地を領するよし注せり。江戸鹿子〔エドカノコ〕に、昔洪水の時、此地ばかりは戸を以てさゝゆるが如く、水災にかゝらざりし故に名とするよし記せども、信ずるにたらず。里老の説に、寶泉寺の地に富塚と云ふありて、所の名も富塚村となづく、今は富を戸に改むると云々。或人云ふ、いにしへ岡本氏の邸の地に古き塚ありて、白狐のすみかとす、戸塚は狐塚を誤りて唱ふるにやと。又此邊昔古塚多くありし故に、十塚と呼びしなるべしともいへり。按ずるに狐塚といふは、水稻荷の社の傍にある塚の事をいふならんか。高田雲雀といへる草紙に、戸塚の祠は寶泉寺にあり。此所に狐の形の石の扉ある故に、昔より戸塚といふとあり。

百八塚 今其所在さだかならず。里老傳へ云ふ、往古昌蓮といへる富民、佛に供養の爲、此高田の邊より大久保迄の間、すべて百八員の塚を築くと。今は悉く其所在をしらず。按ずるに、中野村熊野十二所權現の別當に、成願寺といへる禪林あり。其寺記に、鈴木莊司重邦の後裔、鈴木九郎といへる者あり、紀州藤代にありしが、應永の頃武州に來り、中野の地に住す、其家大に富をなせり、されど宿因にや、其娘夭死す、九郎大に歎き、居宅を壞ちて精舍とし、女の法號正觀を以て寺號とし、自らも又名を正蓮と改むるとあり。昌正同音なれば、此百八員の塚といふは、若くは此人の造立する所ならん歟。或は云く、今馬場下町を供養塚町と唱ふるも、其舊稱の殘れるにやと云々。再び按ずるに、此地を昔富塚となづけしも、富民の創する所なれば、彼供養塚を富塚と唱へしを、中古より美の一字を略して、登津加とは呼びあやまりたるならん。

高田天滿宮 同所八幡宮より、馬場の方へ行く道の左側にあり。別當は眞言宗にして、眞定院と號す。神躰は菅神手造の靈像にて、一寸八分ありと云ふ。相傳ふ、寛永の頃、大樹此神像を大橋立慶に賜ふ。此立慶は、入木堪能の人にして、大橋流筆法の始祖なる由、菊岡沾涼いへり。按ずるに、息男大橋長左衛門重政、御家流より出て一家をなす。是世間に所謂大橋流と稱するものなり。依て立慶當社を建てゝ、神前に懸くる所の戸帳に、其旨趣を記し置くといへり。當社の舊地は、牛込濟松寺の邊り、今天神町と唱ふる

家、信濃宮宗良親王を供奉して、武藏野合戰ありし時の陣營の舊址なりといへり。（宗良親王は、後醍醐帝第三皇子にして、信濃の宮と申し奉る。）

新葉集雜

あづまの方に久しくはべりて、ひたすらものゝふの道にのみたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、おもひの外なる樣におぼえてよみはべりし。

おもひきや手もふれざりし梓弓起臥わが身なれんものとは　宗良親王

同じ頃、武藏國へ打越えて、小手指が原といふ所におりゐて、手分などしはべりし時、いさみあるべきよし兵どもにめしおほせはべりしついでに、思ひつゞけはべりし。

君のため世のため何かをしからん捨ててかひある命なりせば　同

戸塚 今高田に屬す。古は此地の惣名とす。北條家の分限帳に、恒岡彈正忠、牛込にて富

旗立櫻冑掛の梅杯云ふもありて、稻荷の社前池の邊にありしが、枯て後植えつぎぬるよし、南向亭茶話にみゆ。旗立櫻は 櫻の一種に帆立櫻とて、單六瓣のものあり、中にはなびら一片、別に帆を立てたる如く枉出て、旗を立たるに似たり、是を帆立櫻と呼べり。土人謬傳せるならん。

船繋松は同じ堂の後、山の中腹にありしが、是も今は枯れたり。昔大將軍家此地御遊獵の頃、此松の齡を問せらる、寺僧某凡千年に及べる由答へ奉りければ、千年松〔チトセノマツ〕と唱ふべき旨鈞命ありしとなり。船繫松の事は、第五卷目日暮青雲寺の條下に詳なり。守宮池〔ヰモリノイケ〕も同じ山下にあり、水中蜥蜴多し、故に此名あり。寛永の頃 台命に依て、ゐもりが池とよぶとぞ。

禪英山寶泉寺　稻荷と毘沙門兩社の別當寺にして、天台宗東叡山に屬す。開創の年歷未考へず。本尊藥師如來の像は、傳敎大師の作なり。或人云く、花洛蛸藥師〔タコヤクシ〕と同體なりといへり。相傳ふ、文龜元年辛酉、上杉治部少輔朝良、或は云ふ朝興 靈夢を感じて後、稻荷の宮居を再興し、又當寺を創建して、大檀那となる。禪英とは朝良の法號なりといへり。其後天文十九年庚戌、牛込主膳時國といへる人、宮社寺院共に重修せしよし、棟札に記せり。當寺に楠正成の兜と稱するものあり。裡に越前國豊原の住人貞生作ると彫付けてあり。其信否をしらず。常念佛堂は構の外にあり。本尊阿彌陀佛の像は、聖德太子の作なりといへり。堂内に銅像の地藏尊を安ず。

高田富士山　稻荷の宮の後にあり、巖石を疊んで其容を摸擬す、安永九年庚子に至り成就せしとなり。此地に住める富士山の大先達藤四郎といへる者、これを企てたりといふ。毎歲六月十五日より同十八日まで、山を開きて、參詣をゆるす。山下に淺間宮を勸請してあり。

宗良親王陣營舊址　寶泉寺の山林を指して、其舊跡とす。後村上帝の正平七年壬辰、新田

る者、此靈水を以て洗ふに、はたして奇驗あり。仍て土俗當社をさして水稻荷とも稱せり。毎年二月初午日奉射あり。祭祀は九月九日なり。

神泉　社前榎の樹「ウツロ」よりしたゝり出るをいへり。靈驗ありといへり。

毘沙門堂　同境內小高き丘の上にあり。本尊毘沙門天王の靈像は、慈覺大師の作にして、武藏守藤原秀郷の念持佛なりといへり。相傳ふ、慈覺大師、江州唐崎の濱に至り、ひとつの笛を拾ひ得給ふ、內に御長一寸八分の多門天の靈像あり、大師隨喜して、自ら是を念持佛とす。仁壽年間、舊里下野國に下り、佐野の大慈寺に入り給ひ、御長二尺五寸の多門天の像を彫刻ありて、先の靈像を其胎中に籠めまゐらせ、大慈寺に安置ありしを、天慶中、武藏守秀郷、平將門を征伐の後、此地に移したりとなり。紫の一本「ムラサキノヒトモト」といへる冊子に、秀郷將門を退治するの時、深く毘沙門天を念じ奉りしに、毘沙門天兜の上に現じ給ふを、自ら撰し彫むとあり。寺傳に異なり。拜殿に掲くる所の多聞天の額は、長崎道榮の筆なり。其傍に朝日庵と云ふありて、眺望尤も幽雅なり。此地の時鳥は、世に勝れて早く啼くゆゑに、其名を得たり。旗立櫻は、同じ堂前、石燈籠の側にありて、今は若木なり。或人いふ、秀郷此所にて旗を立つるとも、又は此地昔新田家陣營の舊址なる由云傳へて、

高田稲荷
毘沙門堂
富士山
神泉
守宮池
寶泉寺
富士山

放生池 石階の下にあり、山の腰より淸泉したゝりおつ。實に石淸水の名に應ずるの奇特といふべし。

出現所 坂の半腹、絶壁にそひてあり、往古の靈嵓の舊址なり。近頃迄其地に出現堂となづけて、九品佛の中、下品上生の阿彌陀如來の像を安置せし堂宇ありしが、今は見えず。

能舞臺址 本社の左の方にあり、今礎を存するのみ。寛延三年庚午三月、觀世太夫一代能を興行せし跡なりといふ。

抑當社の別當寺を光松山と號くるも、神木の奇特によそへてなり。神と君との道直にして、治る御代の濁りなく、石淸水の淸き誓、最も尊くぞ思はれける。殊更元祿の頃、御再興ありしより、和光の神德日々に顯れて昭然たり。

高田稻荷明神社 同所八幡宮より右の方、道路を隔てあり、戸塚村の產神と稱す。故に戸塚稻荷とも呼べり。本地佛聖觀世音は、南都德一大師の作なり。相傳ふ、當社の權輿は、最も久遠なりしに、文龜元年辛酉、上杉治部少輔入道朝良、南向亭、朝興とす。靈夢に依て宮居を再興し、戸塚村の地を社領に附せらる。當社に古き棟札を藏す。其文に云く、天文十九年二月二十九日、牛込主膳時國再興、別當寶泉坊秀實、大工與左衛門、同左衛門五郎とあり。按ずるに、牛込主膳時國の名いまだ考へず。上州大胡氏の後裔、武州牛込に住して、天文二十四年、氏を牛込に改むるといふ事、其家系および牛込宗參寺の傳記に載せたり。よつて時代を合せ考ふれば、大胡氏も天文十九年の頃は、いまだ牛込氏に改めざりし時なり。然ればこゝに時國といふは、自ら別の人にてありしならん歟。猶他日訂正すべし。其後元祿十五年壬午四月、靈告ありて、榎の椌より、靈泉涌出す。眼疾を患ふ

得たり。その巖の中石上に、金銅の阿彌陀の靈像一軀たゝせ給へり。〔御長三寸ばかり。〕八幡宮の本地にて、しかも山の號に相應するを以て奇なりとす。〔穴八幡の號こゝに起れり。其舊址今猶ほ坂の傍にあり。〕又此日將軍家御令嗣嚴有公御誕生ありしかば、衆益その靈威をしる。〔江戸名所記に云ふ、同年八月九日、社頭の繞り一町四方に繩張して、其地を開き、本社をば神木の松の本に遷し、八重垣をゆひまはしける、其時加州大守數百の人夫を贈られ、其地を築き固めしむ。依て日あらず成就し、同十四日遷宮の式を執行す。松平新五左衞門尉、其與力の人々を引き具して、的山〔マトヤマ〕の邊に幕を張り、式正〔シキシヤウ〕の小的を建る、神的は射法なればとて、小池の某何がし十二歲にして、是を勤むと云々。〕其後元祿年間、今の如く宮居を御造營ありて、結構備れり。〔南向亭茶話に、嚴有公殊に當社を御崇敬あり、御宿願の事滿ち給ふの後、當社を營せらる、裏門は内藤豐前守、御手水垣は增山兵部少輔等これを寄進すとあり。又江府神社略記、及び和漢三才圖會等の書に、元祿年中桂昌院殿御再興ありしといふ。〕

若宮八幡宮〔本社の前左にあり。〕

東照大權現〔同所に竝ばせ給ふ、每年四月十七日參拜の人多し。〕

氷室明神祠〔本社に相對す。盛德といふ二字を彫りたる額を揭ぐ。祭神大巳貴命、元祿二年十二月二十二日、牧村氏直良十六歲にして疱瘡を患ふ。同三年正月二日、金澤の住人渡邊氏是善、靈夢の應ありて、此神を祭る。直良此神に祈願して平癒す。同七年の頃始めてこゝに鎭座せしむるといひ傳ふ。〕

光松〔別當寺と本社との間、坂の支路にあり。昔の松は延享年間に枯れたりとて、今あるものは後世植繼ぎたる若木なり。南向亭云く、此地昔は松樹繁茂せし山林にて、其中に一株の松あり、暗夜には折として瑞光を現ず、故に其樹を稱して光り松と云ふとぞ。又寛永十三年、始て當社八幡宮勸請の頃、此樹上に山鳩來り遊びしと云々。〕

其二

高田八幡宮
世に穴八まんといふ

法輪寺

總門

幅も廣かりしとなり。其頃は加奈川、又加能川とも稱びけるとなり。或は蟹川に作る。

高田八幡宮　牛込の總鎭守にして、高田にあり。世に穴八幡とよべり。此地を戸塚と云ふ。別當は眞言宗にして、光松山放生會寺と號す。舊名は威盛院中之坊と唱へしとなり。祭禮は八月十五日にて、放生會あり。旅所は牛込神樂坂の中腹にあり。社記に云く、寛永十三年丙子、御弓隊の長松平新五左衞門尉源直次に與力の輩、射術練習の爲、其地に的山を築立てらる。八幡宮は源家の宗廟にして而も弓箭の守護神なればとて、此地に勸請せん事を謀る。此山に素より古松二株あり。其頃山鳩來つて、日々に此松の枝上に遊ぶを以て、靈瑞とし、假に八幡大神の小祠を營みて、件の松樹を神木とす。南向亭云く、此地はいにしへ早稻田邑の地、中島といふ。此地に青柳津六兵衞といへる富民あり。往古北條家に仕へし士にて、其人の持傳へし山林にてありしとぞ。此地昔は阿彌陀山と呼び來りしとなり。されど其所以を知る者なかりしに、同十八年辛巳の夏、中野寶仙寺秀雄法印の會下に、威盛院良昌といへる沙門あり。周防國の產にして、山口八幡の氏人なり。幼くして毛利家の侍榎本氏某に仕へしが、榎本氏沒して後、十九歳の年遁世して、高野山に登り、寶性院の法印春山の弟子となり、一紀の行法をとげて、三十一歳の時より、諸國修行の志をおこし、其間さまざまの奇特をあらはせりといふ。依て此沙門を迎へて、社僧たらしむ。故に同年の秋八月三日、草庵を結ばんとして、山の腰を切り闢く時に、ひとつの靈窟を

誓願寺
西方寺
誓願寺

ありて開山貞義和尚、當寺に遷し奉るとなり。故に三國傳來の稱ありといへり。

自樂居士墓 境內卵塔の地にあり。備前國の產にして、齡を保つ事既に百十四歲なり。常に壯年の人の如く見ゆ。文字を書す事を得ざりしに、衆人のをしへにしたがひ、百歲の頃より壽の一字を學び得て、是を紙に書きて人に與へしとなり。寶曆三年癸酉十二月三日に歿す。

龜鶴山誓閑寺 同北に隣る。易行院と號す。淨土宗にして、靈巖寺に屬す。本尊五智如來の像は、（各長八尺）開山木食本譽上人秋風誓閑和尚の作なり。常念佛の道場にして、淸淨無塵の佛域なり。當寺昔は少しの庵室にして、其前に松樹四株を植ゑて、方位を定めて、方松庵といひけるとぞ。今四五十步南の方、道を隔てゝ向うの側に庚申堂あり。是則ち昔の方松庵の地なり。

稻荷祠 境內にあり。開山誓閑和尚はすべて佛像を作る事を得て、常に吹革〔フイゴ〕をもつて種々の細工をなせり。此故に境內に稻荷を勸請し、十一月八日には、吹革祭をなせしとなり。今もその餘風にて、年々その事あり。 **垂枝櫻** 本堂の前にあり。菊岡沾凉がいはゆる、しらぬ櫻と名付しもの是なり。附て云ふ、當寺境內に橫たはれる小溝の流れをもつて、豐島郡と荏原〔エバラ〕郡との堺とす。當寺鐘の銘にも其事を擧げたり。

金川 同所穴八幡の前を、早稻田の方へ流るゝ小川を云ふとなり。（今は古川と唱へたり。）水源は戶山御庭中より發する所なり。文明年間、太田道灌遊獵の時、急雨に逢ひしは北地にして、昔は川の

本妙山感通寺　高田穴八幡の馬場下南の坂上にあり。日蓮宗にして、小湊の誕生寺に屬す。開山を寂陽院日建上人と號す。當寺に安置の毘沙門天王の靈像は、行基菩薩の作にして、越後國高田の日朝寺に安置せしを、越後少將忠輝卿の御母君、こゝに遷し給ふとなり。日蓮上人傳にいはく、宗祖上人弘むる所の法華經の功德あらはれ、文永十一年、鎌倉より赦免ありて、佐渡國より越後高田にいたりたまふ頃、其地に眞言宗の一寺あり、此寺の毘沙門天老人と化現し給ひ、宗祖大士を導きて、其寺に誘引し宿せしむ。既に本尊の御足泥土に穢れ給ふ、其證あるを以て、寺僧吉祥是を奇とし、直に大士の法化に歸し、日朝と改む。越後國高田の日朝寺これなり。上杉謙信深くこの靈像を尊敬し、其家に相傳せしが、謙信天正六年に卒す。依て其後奥州米澤の城に遷し奉りしを、また當寺に安置し奉るといへり。摩利支天の像は、松樹の下にあり、頼朝卿の勸請にして、頼義朝臣の念持佛といひ傳ふ。此地は往古の鎌倉海道の舊跡なりといへり。客殿の前に一松あり。普聞松と稱す。法華弘通の精舍なれば、妙經に因て、名稱普聞の意を採りて名づくとなり。

三國傳來千手觀音　同所坂より北、西方寺といへる淨刹に安置せり。當寺は增上寺に屬す。寛永十六年己巳建立にして、亨譽貞義和尙開山たり。相傳ふ、往古弘法大師、唐土青龍寺の惠果阿闍梨より授與せられし、中印土の靈佛なりといへり。大師歸朝の後、高野山の大塔に安置ありしを、彼山の麓に住める流水といへる沙門感得して、武州淺草に移し奉りしが、故

神明宮

寺に安置の日蓮大士の像は、世に布引の御影と稱せり。傳云ふ、文永七年庚午、宗祖大士、鎌倉に在しゝ頃、房總の國郡、數月疫癘流行せり。こゝに於て、人民大士に救を求む。乃ち大士佛工をして、自の像を造らしめ、白布に經題を書して、其御手に掛け給ひ、囑して曰く、卽ち是日蓮なりと云々。依て此靈像を其地に移すに、疫疾の患へ頓に退きたり、故に此靈像を小湊の誕生寺に安置したりしが、又宗門流布の爲、寛永七年庚午二月十六日、當寺に移しまゐらすといへり。當寺は加藤肥後守淸正の開基にして、宗祖の靈像は、寒暖に應じ衣服を改むる事、池上に同じきといふ。故ありて、其衣服は年々阿部氏某調進すとなり。

神明宮　早稻田大田圃にあり。祭神天照、春日、八幡三座なり。同所赤城明神の別當等覺寺より兼帶す。祭禮は九月十六日なり。鎭座の年歷詳ならずといへり。天和二年、同所榎町よりうつすといふ。今大御番組林氏某の宅地は、其舊地なりといふ。

赤城明神舊地　同所田の畔、小川に傍ふてあり。大胡氏初て赤城明神を勸請せし地なり。故に祭禮の日は、神輿を此地に渡しまゐらす。

天文十三年甲辰、父重行の菩提を弔はんが爲、當寺を創建し、寺田を寄附し、父重行の法號を採りて、寺の號に呼べり。同二十四年乙卯、從五位下に任す。其時氏康に告げて、大胡を改め、其采邑の名の牛込をもて氏とす。天正十八年、北條氏滅亡の後、勝行の子勝重、天正十九年辛卯、始て大神君に謁し奉り、以後御幕下たり。或人云ふ、勝行の子は俊重といふ。慶長十五年、始て三代大將軍を拜し奉りて、御當家に屬し奉ると。兩說いづれか是ならん。

大胡重行同勝行父子之墓　境内卵塔の中にあり、一基の石碑に、父子の法號および其傳を刻す。或人云ふ大高季明の書なりといへり。しかるや否やをしらず。　榮の梅　開山看榮和尚植えられたりといふ。

三明山千手院

同所七軒寺町にあり。眞言宗、開山は舜倚法印と號す。本尊千手觀音の像は、御長八寸九分、脇士、多門持國の二天、共に赤栴檀にして、毘首羯磨天の作なりといへり。相傳ふ、往古越後國安巨山にありしが、天正年間、豐太閤秀吉公、柴田勝家と戰ふに及んで、蒲生氏鄉の臣殿池玄蕃といふ人、是を感得す、既にして元和年間、蒲生家敗壞の後、殿池は下總國佐倉の城主堀田家に仕ふ、故ありて富永氏某傳へ來りし後、當寺に安置したりといへり。

正定山幸國寺

同所原町にあり、日蓮宗、小湊の誕生寺に屬す。開山を日觀上人と號す。當

りて、此本尊許をば取出して恙なかりしを、後水尾帝深く佛乘に歸し給ふを以て、是を拜し給ひ、又宸翰を賜ひて、釋迦牟尼佛の號を添へ給へり。日意師此本尊を感得し、當寺を闢きて安置し奉るといへり。

雲居山宗參寺　同所辨財天町にあり。（此地を土俗とぶめきといふ。）曹洞派の禪林にして、駒込の吉祥寺に屬す。本尊釋迦如來、脇士は、文殊普賢なり。開山を看榮稟閭和尚と號く。總門の額第一義は、心越禪師の筆。中門の額、雲居山は岡良弼の書。佛殿の額、宗參寺の三字は、崎陽道榮の書。禪堂の額は、黃檗悅山といふ。相傳ふ、當寺開基を牛込宮內少輔藤原勝行と稱す。（弘治元年從五位下に任ず。法名を參秀院殿心外淸雲庵主と號す。當寺に墳墓あり。）鎭守府將軍武藏守秀鄕の後胤大胡重俊（上野國大胡に城を築き、かしこに住す。則ち大胡太郎と稱せり。重行に逮びて、此牛込に移り住す。上人牛込殿と上ぺり。或人云ふ、其家系に、大胡太郎成行十代の孫、同彥次郎重治、上州大胡より武州牛込に移り住するとあり云々。）十代の孫重行の嫡男なり。（重行は宮內少輔といふ。法名は雲居院殿實翁宗參大庵主と號す。天文十二年卒す。又當寺に墓あり。）北條氏康の麾下に屬し、武州牛込、及び今井、（赤坂の今井歟。）櫻田、比々谷、（或人云ふ、其家系日尾谷に作ると。）其餘、下總の堀切、千葉等の地を領し、牛込に住す。（永祿北條家の分限帳に、江戸牛込、比比谷、本鄕、葛西の堀切等の地、大胡氏領するとあれども、今井千葉の兩の名をしるさず。或人云ふ、牛込氏系譜には、牛込、その餘、高田、落合、關口、小日向、富塚〔トツカ〕小石川の金杉、市ヶ谷、田安、櫻田、朝草、同金杉等の地名を、所領の中に注し加ふといへり。按ずるに朝草は淺草を云ふならん。）

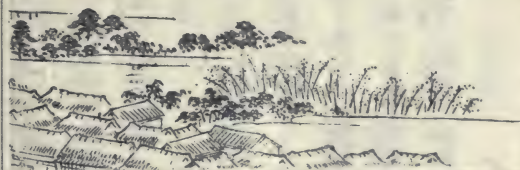
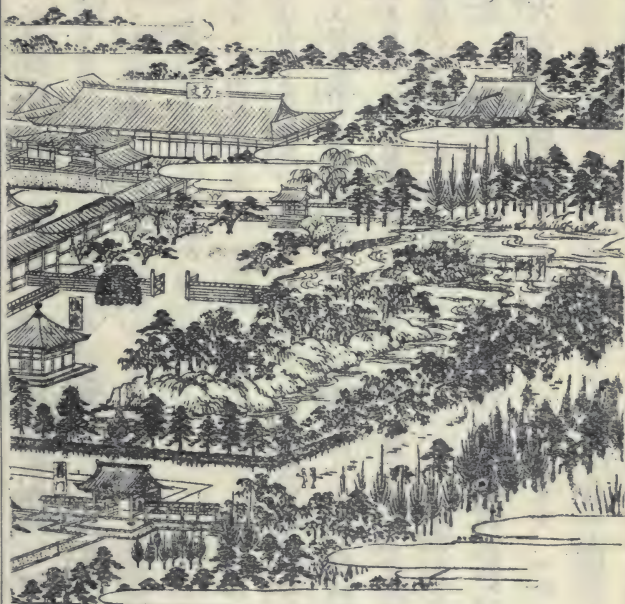
高田本松寺
願満祖師堂
感通寺
裏門
祖師

蟄居せしむ。此地即ち其舊跡なりといへり。南向茶話に云く、大友左兵衛督義統、文祿年間、朝鮮征伐の役に怠りあるをもて、領國を沒收せられ、其後常陸國に於て卒す。嫡子宗五郎義延此地に住む。義延は從四位に叙し、侍從に任ず。ゆゑに豊後小侍從と稱しけるとなり。慶長五年、關ケ原御一戰の後、常州筑波郡に於て、三千五百石の地を賜はるといへども早世す。又江戸鹿子「エドカノコ」といへる草紙に、義乘と記せしは、義延の事を謬るなるべし。其後、大橋立慶此地に居住すといふ。望海毎談といへるものに、寛永十七年の事實を記せし次に、御祐筆大橋龍慶、高田大友のやしきを賜はり、其地に天滿宮の祠ありし事記せり、高田天滿宮の下に詳なり。

大友松　同所天神町の東に續きたる御持筒組高野氏の地にありと云ふ。昔大友義延が別莊の庭前の松なりしが、其後回祿に亡びたりしを、其地の主、舊跡を失はん事を歎き、若木を栽ゑられたりといふ。或人云ふ、大友家の傳説に、大友宗五郎義延武州へ遷る頃、從ひ來る所の家臣吉良傳左衛門某が營作せし數寄屋の前の松にして、陰凉山濟松寺の名も、此松より出てなづけたりとなり。

大友稻荷祠　同所にあり。是も義延の勸請といひ傳ふ。

一樹山宗柏寺　濟松寺向の横小路にあり、日蓮宗京師頂妙寺に屬せり。開山は日意上人と號す。本尊釋迦如來の像は、傳教大師の作なり。相傳ふ、延暦年間、傳教大師、桓武天皇の詔をうけたまはり、鎭護國家除災延命の爲に、叡山に於て、此靈像を彫造ありしとなり。然るに元龜二年辛未、織田信長公、叡山を放火せし時、佛閣僧坊悉く灰燼す。其時護持の人あ

濟松寺
方丈

奉るといへり。祭禮は九月十九日なり。（當社始めて勸請の地は、目白の下、關口領の田の中にあり。今も少しばかりの木立ありて、是を赤城の森とよべり。）

御殿山 同じく東の方、中山家の藩邸の地、其舊址なりとも、或は云ふ、萬昌院の邊なりとも。相傳ふ、太田道灌の別館ありし舊跡なりとぞ。寛永の頃、大將軍家御放鷹の時の御設として、假に建て置き給ひし御殿の地なりといへり。

蔭涼山濟松寺 同所榎町にあり、京師妙心寺派の禪崫にして、（昔は妙心寺より輪番せしといふ。）本尊釋迦如來を安ず。開山は心印正傳禪師、開基は素心尼なり。此尼は牧野兵部少輔政立の女にして、春日局と共に、大將軍家昵近の侍女なり。當寺に御佛殿あり。芳心院御別當を務む。（此寺は芳心尼の開創なり。）御佛殿の前の池を、鳳凰池と號く。靈龜水は、芳心院の地にありて、寛永の頃は、御茶の水に掬さしめ給ふとなり。開山塔は養春院是を預る。すべて僧坊六宇、經堂、鐘樓、庫裡、浴室等、巍々然として軒を連ね、輪煥たり。（三佛堂の額に、天下蔭涼とあるは、隨自意院宮一品准后公啓法親王の眞筆なり。）

豐後小侍從大友義延舊館之地 同寺院を指して其舊跡とす。相傳ふ、文祿二年、大友義延、朝鮮征伐の役に補すといへども、武備怠あるを以て、豐臣太閤罪して當國へ遷し、此地に

本尊に釋迦如來の像を安ず。開山は靈鑑普照禪師と號す。禪師諱は宗丘、字を蓬山といへり。（俗に長刀蓬山といふ。昔境内に猿をつなぎて置きたりとて、今も世に猿寺と號く。舊地は番町なりといへり。觀音堂本尊は聖觀音にて、弘法大師の作なり。）

藥龍山正藏院　同所南の方、横寺町にあり、天台宗東叡山に屬す。開山は圓觀律師、本尊藥師佛の靈像は、傳教大師一刀三禮の作なり。（世に草刈藥師如來と稱せり。）相傳ふ、當寺往昔梅林坂（御城内）の地にありし頃、一人の草刈來りて、開山圓觀師に、此藥師の靈像を授與し去りぬ。長祿年間、太田左金吾入道道灌、當寺を創建して、これを本尊とす。其後上杉朝興、尊信殊に厚く、牛王寶印等を寄附せられたりとて、今も是を傳へたり。當寺昔は平川梅林坂の邊にあり、後年田安の地にうつされ、元和年間、今の所に地をかへさせらるといへり。

赤城明神社　同所北の裏通にあり、牛込の鎭守にして、別當は天台宗東覺寺と號す。祭神上野國赤城山と同神にして、本地佛は將軍地藏尊と云ふ。往古大胡氏深く此御神を崇敬し、始は領地に勸請して、近戸明神と稱す。其子孫重泰、當國に移りて、牛込に住せり。又大胡を改めて、牛込を氏とし、（其居住の地は、牛込わら店［ダナ］の邊なり。先に辨ず。）祖先の志を繼ぎて、此御神をこゝに勸請なし

赤城明神社

牛頭山行元寺　千手院と號す。同所神樂坂の上、寺町道より右にあり、天台宗東叡山に屬す。本尊千手觀音大士の像は、惠心僧都の作なり。襟懸〔エリカケ〕の本尊と稱す。慈覺大師を開山とすと云ふ。上俗傳へ云ふ、當寺昔は大刹にして、總門は今の牛込御門の邊にありて、神樂坂其中門の舊跡なりしとなり。大永の兵亂に堂塔破壞す。其頃のものとて、古き大般若經を祕藏せりと云ふ。昔門内左右に南天樹多かりしとて、世俗今も南天寺とあざなせり。本尊緣起に云く、右大將賴朝卿、石橋山合戰の後、安房上總を歷て、下總國より此國に打越給ふ頃、尊前に通夜す。其夜の夢に、賴朝卿自ら此靈像を襟にかけたてまつり、源家の武運を開くと見給ふ。後果して天下を一統せられたりしより、賴朝襟懸の尊像と稱へ奉ると云々。

牛込城址　同所藁店の上の方、其舊地なりと云傳ふ。天文の頃牛込宮内少輔勝行、此地に住みたりし城壘の跡なりといへり。

閻魔堂　同所寺町の通、左側、天台宗養善院に安置す、閻王の像は、佛工運慶の作なりといふ。正月と七月の十六日には、參詣の輩群集す。昔は御城内平川の地にありしといひ傳へ、其證として今も平川寺と號く。中興を智導法印といふ。

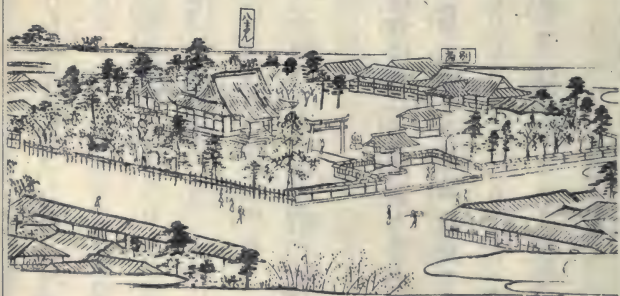
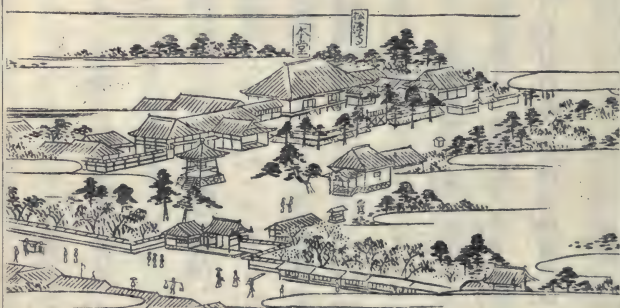
蒼龍山松源寺　同所向側にあり、華洛妙心寺派の禪林にして、江戸の觸頭四ヶ寺の一員たり。

して美佐吾にあひぬ。ありしにかはらぬ姿なりしかば、うれしとおぼえて、しばしむつみかたらふと思ひたるに、其姿の消うせにければ、美佐吾が身まかりぬるよと知りて、此あたりの淵に身を投げて、空しくなりたりとなり。これより後、此所を逢坂とはいへりとなん。（神樂坂の西の小坂を、土俗幽靈坂とよべり。恐らくは逢坂と混じたる歟。又地名をあふ坂といひ、女の名をさねかづらといふ、好事の人の付會せる事知るべし。されど傳ふる事久しければ、やむ事を得ずしてこゝに出す。）

神樂坂　同所牛込の御門より外の坂をいへり。坂の半腹右側に、高田穴八幡の旅所あり。祭禮の時は、神輿此所に渡らせらるゝ、其時神樂を奏する故に、此號ありといふ。（或は云ふ、津久土明神田安の地より今の處へ遷座の時、此坂にて神樂を奏せし故にしかなづくとも、又若宮八幡の社近くして、常に神樂の音此坂迄きこゆるゆゑなりともいひ傳たり。）

若宮八幡宮　同所若宮坂の上、若宮町にあり。（或は若宮小路ともいへり。）別當は天台宗普門院と號す。相傳ふ、文治五年の秋、右大將頼朝卿、奥州の泰衡を征伐せんが爲に發向す。其時宿願ありて、奥州平治の後、當社を營み、鎌倉鶴ヶ岡の若宮八幡宮を移し奉らるゝといへり。（若宮は仁德天皇なり。後應神天皇に改め祭ると云ふ。）文明年間、太田道灌、江戸城鎭護の爲、當社を再興し、社壇を江戸城に相對せしむるとなり。

松源寺
行元寺
若宮八幡宮
行元寺

牛込神樂坂

師彫造し給ふ所の阿彌陀如來を本地佛とし、小祠を經始す、其後文明年間、江戸の城主上杉朝興、社壇を修飾し、此地の產土神とすといふ。或書にいふ、當社の地は往古管領上杉時氏の壘「トリデ」の舊跡にして、時氏の弓箭を以て八幡宮に勸請なし奉ると云々。

逢坂或大坂に作る牛込船河原町の西、今輕子坂と呼べるは是なり。此坂下御溝端の町家を揚場町と稱ふるは、此所迄船の通行ありて、此所より荷を揚ぐる故に揚場町の唱あり。此地に多く輕子の住居ある故に、また坂の名とせりと云ふ。里諺に云ふ、昔奈良帝の御宇、小野美佐吾といへる人、武藏守に任じて此國へ下る。其頃此ところに玄及藤といひて、みめかたちいつくしき女ありけり。美佐吾思ひそめてこれをむかへたり。月日經て美佐吾は帝のめしにより、奈良の都に上り、若草山の麓に住みけるが、いく程もなくみまかりぬ。其時美佐吾いひけるは、我死なん後はかならず亡骸を武藏の國におくり、さねかづらが住める邊へ葬るべしとぞ。されど境はるかに隔りぬる事なればとて、大和の國なりける若草山の麓に葬りつ、其所を武藏野となづけそめ、また其塚をもむさし塚とは呼びならはせしとなり。其地の古老傳へ云く、むさし塚は大納言兼武藏守良岑安世卿の古墳なりと。かくて後、さねかづらは美佐吾が身まかりぬる事もしらざりしが、ひとり戀慕ひて、神にねぎ、佛にちかひ、あけくれ歎き悲みしに、ある夜夢のさとしありければ、此所にきたりしに、はた

津久戸明神は氷川と同躰の由なれば、素盞嗚尊なりとあり。

按ずるに、將門の靈は後に合祭したるならん歟。南向亭茶話に云く、筑戸いにしへは次戸と書す、往古は江戸明神とて、江戸城の鎭守たり、江と次と字形相似たる故に、いづれの頃よりか謬り來りしなるべしとあり。是に依て考ふれば、當社は武藏國風土記に載する所の、江戸神社ならん歟。祭神もまた素盞嗚尊にして、よく風土記に合せり。猶第五卷神田明神の條下、江戸の神社の考を附せり。てらしあはせて見るべし。

當社は往古上平川の地にありしを、天正七年己卯、田安の地に遷座、又元和二年丙辰、今の地へ移し奉る。（昔は筑戸に作る、後改めて築土とす。）中古田安の地に鎭座の頃は、田安明神と唱へしとなり。祭禮は九月十五日なり。

築土八幡宮　津久戸明神の宮居に竝ぶ地主の神にして、別當は天台宗松靈山無量寺と號す。祭神應神天皇、神功皇后、仲哀天皇、以上三座なり。相傳ふ、嵯峨天皇の御宇、此地に一人の老翁住めり。常に八幡宮を尊信す。或時當社の御神、此翁が夢中に託して、永く此地に跡を垂れ給はんとなり、老翁奇異の思をなす、其翌日一松樹の上に、瑞雲靉靆して、旌旗の如くなるを見る。（松靈山の號、こゝにおこると云ふ。）時に一羽の白鳩來つて、同じ樹間にやどろ。郷人翁が靈夢を聞きて、直に此樹下に瑞籬を繞らして、八幡宮と崇む、遙の後慈覺大師東國遊化の頃、傳教大

築土八幡宮
同明神社

餘株ありしとぞ。（今存する所の古木、一國にあまるものまゝあり。延享の頃までは、年々に官府よりこれを植ゑつがせ給ひしとなり。今は其數大に減じて凡そ三百株あまりあり。）立春より五十四五日目の頃開き初めて、六十日目を滿開の期とす。七十日目の頃に至りては落花す。尤も其年の寒暖によりて、少しの遲速はありといへども、大方は違はず。就中金井橋の邊は佳境にして、爛漫たる盛には、兩岸の櫻、玉川の流を夾んで、一目千里、實に前後盡る際をしらず、こゝに遊べば、さながら白雲の中にあるが如く、蓬壺の仙臺に至るかとあやしまる。最も奇觀たる故に、近年都下の騷人韻士、遠を厭はずしてこゝに來り、遊賞す。

津久土明神社　築土銀町にあり。（此地は牛込と小日向〔コビナタ〕の界にして、當社の方は牛込に屬す。）別當は天台宗にして、善龍山成就院と號す。本地佛は聖觀音、傳敎大師の作なり。相傳ふ、天慶三年庚子、相馬將門誅せられし後、其首級を當國江戸平川の觀音堂へ移し、是を齋ひて津久戸明神と稱す、文明十年戊戌、太田道灌、江戸城の鎭守として、宮社を造立ありしといへり。永享記に、武州入間郡川越の城の乾に、氷川明神の社あるに準へ、文明十年戊戌六月五日、江戸城の乾に、津久戸明神を勸請すと云々。（江戸砂子〔エドスナゴ〕に永享記を引きてかくいひたれど、永享記に此事見えず、考ふべし。）又中古治亂記江戸城を築し條下に、

夷の樹に、御小柄をもて井頭と彫付けたまふ。是より後此池の名とす、（其辛夷の木は大盛寺に收藏す。）承應年間、官府より井頭の水道を開かせられ、初て神田に引き給ふ、（故に神田上水の稱あり。寛永八年辛未の夏、池水渇る〻事ありしを、天海大僧正加持し給ひしに、其頃靈威の事ありて、其後は舊の如く湧出して、涸る〻事なしといへり。今も毎年三月十五日より四月十五日迄、水加持あり。）御楊枝の柳は、聖天堂の後にあり。（御腰掛の柳と稱す。）臥龍の藤。（今在所さだかならず。）三ツ柳は神木と稱す。西北の方の丘陵を、今御殿山といふは、昔省耕の御殿館ありし跡なる故に、かく唱ふるといへり。（今は官林となりて、樹木繁生す。）此池は清泉にして、炎天にも水の減ずる事なし、常に泌沸として湧出す。其地最も閑寂にして池邊柳樹多く、初夏の頃に至れば、新葉黯々として蔭をなし、淺翠嬌青碧空を蔽ふに似たり。

金井橋　多摩川の上水堀兩岸の芝塘にあり。金井村にわたす、ゆゑに名とす。（水源小川村より、新橋の東北千川〔センカハ〕上水の掛口の所まで、凡そ一里あまり、兩岸ことごとく櫻にして、左右の兩岸九村に跨る。また架す所の橋、大小七ケ所ありて、何れも其地名によりて唱ふ。いはゆる金井橋の類なり。此水流、西の方羽村より、北にわかれて、江戸に至るまで直流凡そ十里あまり、是を玉川上水と號す。承應の頃、始て此水流を大江戸に引き給ふといへり。）此地の櫻花は、享保年間（或云元文二年丁巳）郡官川崎某、台命を奉じ、和州吉野山、および常州櫻川等の地より、櫻の苗を植ゑらる〻所にして、其數凡そ一萬

春の夜ハ
さくらに
あけて
しまひけり
芭蕉

小金井橋は小金井邑の地に傍て流るゝ所の玉川上水の素堀りに架す故に此名あり岸を夾む櫻花は数千株の樹を並へ落英繽紛たり開花の時は橋上より眺望すれは雪とあり雲とまかひて一目千里花の後盡る際なし仍て都下の騒人遠きを厭はすして遊賞するもの多し橋詰は酒を煖め茶を煮るの茶店あり遊人或は謳ひ或は吟して

小金井橋春景
旅亭

井頭池
弁財天社

當寺に安置の日蓮大士の像は、日朗上人の作なり。相傳ふ、弘長元年辛酉五月十二日、大士伊豆の伊東に謫せらる、朗師、大士の別を惜みまゐらせ、靈木を得て、大士の影像二軀を彫刻あり、（一躯は坐像にして、始め碑文谷〔ヒモンヤ〕の法華寺にありしが、後堀の内妙法寺に安置す。其二は立像にして、當寺に安置す。即ち此靈像是なり。旅行の躰相ある故に、世に光明木旅立の御影〔タビダチノミエイ〕とも稱したり。）大士鎌倉へ立歸りたまふの後、點眼ありしとなり。

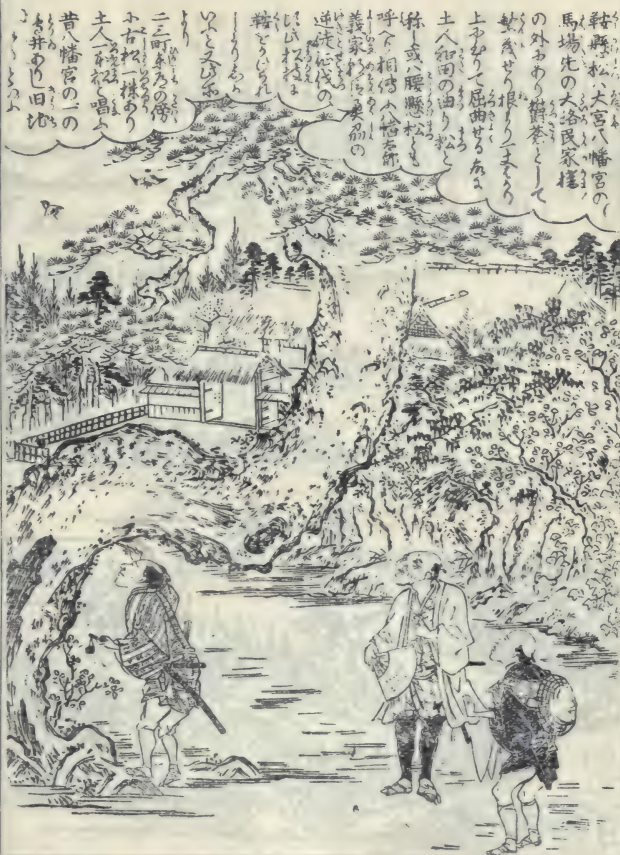
井頭辨財天宮　牟禮村にあり。井頭の池靈にして、中島に宮居す。別當は天台宗にして、大盛寺と號す。相傳ふ、建久八年、鎌倉右府將軍賴朝卿創建し給ふと。（正慶年間、新田義貞鎌倉と對陣の時、當社に軍勝利を祈念し、北條家を亡ぼされたりとなり。）本尊天女の靈像は、傳敎大師作なり。（寛永十三年丙子社御建立あり。）

井頭池　神田上水の源なり。長さは西北より、東南へ曲りて、三百歩ばかり、巾は百歩あまりあり。池中に清泉涌出する所七所ありて、旱魃にも涸るゝ事なし。故に世に七井の池とも稱ふ。相傳ふ、慶長十一年、大神君適こゝに至らせ給ひ、池水清冷にして、味の甘美なるを賞揚し給ひ、御茶の水に汲せらる。又寛永六年大將軍家こゝに渡御なし給ひ、深く此池水を愛させられ、大城の御許に引せらるべき旨、鈞命ありて、御手づから池の傍なる辛

を附し給へりといへり。

幡ヶ谷不動明王　幡ヶ谷村にあり。眞言宗光明山荘嚴寺に安置す。本尊不動明王の像は、智證大師の作なり。毎年四月八日より同十八日迄、内拜せしむ。相傳ふ、往古智證大師、江州三井寺を創建の時、彫刻の靈像なりといへり。天慶年間、平將門東國に在りて逆威を震ひ、帝を惱し奉る故に、平貞盛、及び藤原秀郷等、追伐の宣旨を蒙り、東國に發向す。其時三井寺より此本尊を奉持して、陣中に移し奉り、軍の勝利を祈誓せしが、同三年庚子、果して將門を討亡したりしにより、後此靈像を下野國小山鄕へ遷しまゐらす。然るに永祿の頃、武田信玄甲州に安座し奉りしを、又北條氏政奪ひ取りて、相州粲井といへる所の寺院に入れ奉りしを、竟に天正十八年、四海安靖なるに及んで、當國多摩郡宅部の三光院に傳へありしを、靈夢の應あるを以て、延享四年丁卯、永く當寺に安置し奉るといへり。

井口山慈宏寺　大宮前新田川越海道の右側にあり、日蓮宗にして、寛文年中の草創、開山は日賢上人と號す。本尊に三寶を安ず。

寺と號く。昔は中野の寶仙寺奉祀たりしとなり。例祭は九月十九日とす。二十一日迄三日の間市立ちて賑はへり。神躰應神天皇、又左右に二神されども、往古の兵燹に罹りて、舊記亡びたりとて、神名詳ならず。疑ふらくは、仁德天皇と、高良臣なるべきか。何れも靈妙奇異にして、文彩を加へず、太古質朴の風ありて、彫刻最も巧ならず。いかなる故にや、元祿の末より、神厨子を釘もてかため、拜する事あたはざりしを、天明年間、別當祐照法印一七日行法ありて後、愼んでこれを開き、神像を拜し奉るといへり。近年建部氏昌盈なる人、信心の人に施しあたへんため、自ら神影を圖畫し奉り、梓にちりばめたり。相傳ふ、當社は其先多田滿仲の勸請なりといへり。後源賴義朝臣、奥州征伐出陣の時、種々の靈瑞ありて、神像を感得し、康平六年凱陣の時に至りて、宮居を營建し、源家守護の神とす。故に右大將賴朝卿、又相州鶴ヶ岡に等しく、神殿僧坊を重修ありて、信心最も厚し。昔は大社にして、壯麗たる宮居なりしかば、地名をも大宮と呼び來るとなり。然るに、足利將軍の世、越後の上杉、相摸の北條と戰ふ頃、上杉の勢兵此地に屯し、放火す。此時神像は火焔を出て、山中大樹の下に遁れ給ふを、別當眞順法印袈裟に移し奉る故に、恙なしといふ。こゝにおいて、社領は賊の爲に掠められ、神巫社僧も四方へ分散しければ、神躰のみ纔に叢祠に安じ奉りしに、天正の頃、大石信濃守當社の古きを尋ねて、神宮を建る。同十九年、忝くも大神君此地に台駕をめぐらされ、源家累代守護の靈神なる事をしろしめされ、新に神領

當社廣前の老松ハ矯々として雲を拂ひ數百歳の相を標せり白石先生も此松を賞して奥羽をはしめ房総豆相東海一路畿内濃尾の諸州にも未ざる長松の多き所なりと新安手簡に記されたり

又社前の大路ハ往古の鎌倉街道にして今土人正用街道と唱へり上高井戸に鎌倉橋とよぶものあるもいにしへ街道なりし旧跡といへり

大宮八幡宮

いへり。當寺住侶日性師の代なり。相傳ふ、弘長元年辛酉、日蓮上人四十歳。伊豆の伊東へ配流せらる。日朗師隨身して其地に至らんとすれど、此事協はず、依て其時上人の命により、日朗師は鎌倉由井の濱に止り、日夜師の赦免を祈請す、或夕同じ海上にして、一箇の靈木を感得し、日蓮上人の眞像を手刻し、常に仕へて怠らず。此御影は宗祖大師の像を造るの權輿〔ハジメ〕なり。諸天感應の時至りてや、弘長三年癸亥五月、赦免ありて、日蓮上人鎌倉に還り給ふ、其頃此尊像を見て感悅ましく／＼、我心神今より此木像にうつれり、永く來際に到る迄、救護衆生の利益無窮ならん、我既に四十二歳にして救を得しかば、此木像に除厄の號を稱ふべしとて、自ら點眼なし給ふとなり。

加持符 有信の輩、三七日の間此符に對し正念に唱題誦經すれば、寄願成就するとて、諸人これを受くる。病を患ふるものは、其病床のあたり、壁上或は家の柱などへ貼す。故に世俗張御符〔ハリゴフウ〕といへり。相傳ふ、日蓮上人伊豆の伊東なりける配所に在せし頃、八郎左衛門といへるもの難病を患ふ、依て此妙符を授與し給ひ、靈應あり、後日朗師是を傳はりしより已降、世々に相承するといへり。當寺は遙に都下を離れたりといへども、靈驗著しき故に、諸人遠を厭はずして歩行を運び、渇仰す。毎年七月法華千部、十月十三日御影供を修行す。其間群參稻麻の如し。

大宮八幡宮 和田村にある故に、和田八幡宮とも稱せり。別當は眞言宗にして、幡降山大宮

月十六日を祭祀の辰とす。別當は眞言宗にして、阿谷山世尊院と號す。（中野の寶仙寺に屬す。則ち寶仙寺の舊地なり。）相傳ふ、景行天皇の四十四年、日本武尊東夷を征伐し給ひて、御凱陣の時、この地に休らひ給ひしかば、其後土人等尊の武功を慕ひ奉り、其地を封じて一社を經營し、神明宮を勸請す。然るに建久の頃、此地の農民横井兵部といへる人、（此人の遠裔今も此地に住して、子孫連綿たりといふ。其昔源頼義朝臣奥州征伐の時、此地に至り給ふに、此横井氏の祖兵部といふ者、隨兵に加りてありしが、急に病に臨みて、戰場に赴く事なりがたく、こゝに止り、終に農民となる由、其家に傳ふと云ふ。）祈願あるにより、伊勢太神宮へ參詣せんと、勢州能保野の驛舍に宿す。其夜太神宮の靈示ありて、翌日宮川の水中にして、一顆の靈石を得たり、依て神意に任せ、舊里に携へ歸り、件の神明宮の社に安置して、神躰となし奉るといへり。其後祇海といへる沙門、神告あるにより、社を今の地に遷すとなり。（其舊地は七八町東の方にあり、土人これを元伊勢と稱す。）

日圓山妙法寺　堀の内村にあり、日蓮宗一致派にして、頗る盛大の寺院たり。宗祖日蓮大士の靈像は、世に除厄の御影と稱す。日朗上人の作にして、其先は碑文谷の妙法華寺にありしを、元祿の頃、故ありて法華寺を天台宗に改められし頃、此靈像をば當寺に移しまゐらすと

本堂
祖師堂
回廊

堀の内
妙法寺
当寺に安置の日蓮大士の
玄関
庫裡
楼門

桃園春興

おのがすむ國は千里のそなたよりはるぐ\きさのこゝろをぞ思ふ　公福

名にきゝし遠きさかひの獸をうつし給ならで見るもめづらし　爲久

桃園。同所西北の方、十町ばかりを隔つ。享保の頃、此邊の田畝に、悉く桃樹を栽ゑしめ給ひ、其頃台命によりて、此地を桃園と呼ばせ給ひしといへり。今も彌生の頃、紅白色をまじへて、一時の奇觀たり。此地に大將軍家御遊獵の時の御腰掛の地あり。又岡の前を流るゝ小川に架せる橋を、石神橋と唱ふ。（此ながれは、石神の三寶寺の池より發する所の餘流なり。）

桃園觀音堂　土人は桃堂と稱せり。同所高圓寺村の高圓寺といへる禪林に安置す。本尊は聖觀音にして、惠心僧都の彫像なりといへり。（當寺は中野の成願寺に屬す。弘治年間の草創にして、開山を建室和尚となづく。むかしは大將軍家度々當寺へ立寄らせ給ひ、假の御殿ありしかば、當寺の山號を御殿山ともとなへ侍るとなり。又當寺境内其頃は桃樹多かりしによりて、桃園と稱すべき旨、台命あり。其後享保に至り、新に中野の地に桃園をうつし給ひ、田圃の間々に桃樹を多く栽ゑしめ、桃園と命ぜられたりとなり。故に土人は當寺をさして桃園の舊地なりといへり。）

阿佐ヶ谷神明宮　同西の方、阿佐ヶ谷にあり、中野の通よりは右へ入りて、十八町許あり。（阿佐ヶ谷は小田原北條家の所領役帳に、中野内阿佐ヶ谷とあり。太田新六郎の所領にして、昔は中野に屬せし小名なりしとおぼし。）祭神伊勢に相同じ。神躰は一顆の靈石なり。毎歳九

めづらしく都にきさの唐やまとすぎし野山は幾千里なる　靈元法皇

情しろきさのこゝろよから人にあらぬやつこの手にもなれきて　同

これもまた此時なりとかきつめて見そむるきさのやまとことの葉　同

不昧直院集

此國にきさもなつくやさまことに見ゆるものから猛からずして　光榮

竹の葉をかふ獸のまづや來し實をはむ鳥もまたん御代とて　同

芳雲集

たがへして民のちからもそふべくば豐なる世のきざしとぞ見る　實蔭

いざやまだ見ぬを見しかなやまとなるきさ山まつの名には聞ても　同

民をだにたすけてきさのたがやさばとしあらん世ぞ豐なるべき　同

家集

この君をしるけだものや心あるすがたも洞にけふは見すらん　通躬

く鼻にあり、起きて行かんとする時も、先づ鼻を以て地を拄へて、後あしを運ぶ。口は頤にかくれて、地を去る事遠く、常には見ゆる事なし。牙の長一尺二寸程、或は一尺四寸、圍は元の方にて一尺六寸許ありといへり。眼の長さ三寸、或は一寸五分、形さゝの葉の如しと云ふ。耳の幅八寸餘、或は一尺三寸とも。形は蝙蝠の翅又銀杏葉の形に似たりともいふ。胴の長さ七尺四寸、同圍一丈、背の高さ五尺、或は五尺七寸ともいへり。足の長さ二尺二寸、同圍一尺五寸、或三尺五寸、圍二尺五寸ともいへり。足の形は圓き柱の如くにして指なく、爪は五枚ありて、栗の形に似たりといふ。惣身ふくやかに擁腫すれども、峻嶺にのぼり、羊腸を下るに、電の如く深き水を渉る事捷く、其性能く人に馴れて、其意を解す。故に象奴たる者其くびすぢに跨り、鉄鈎〔オシキ〕を以て釣り、進退曲折左右すといふ。

尾の長さ三尺三寸。或は二尺七八寸とも。形牛尾に似たりとなり。

牝象五歳 總身灰色にして、頭の長さ二尺五寸、鼻の長さ二尺八寸、胴の長さ五尺許、同圍八尺六寸、背の高さ四尺七寸、或は四尺なりと。牙の長さ五寸程ありて、その餘は牡象に等しといへり。

此牝象は、長崎にありし頃死したり。江戸へ來りしは、牡象のみなり。

飼料 一日の間に新菜二百斤、さゝの葉百五十斤、青草百斤、芭蕉二株(根を省く)、大唐米八升、其内四升程は粥に焚きて冷し置きて是を飼ひ、湿水(一度に二斗許)あんなし饅頭五十、橙五十、九年母三十、又折節大豆を煮冷して飼ふ事あり、青草の中、殊に俗間角力取草「スマウトリグサ」と稱するものを好みて食ふ。青草なき折には、籾を茎穂ともに飼ひ、或は薬大根のたぐひも食ふとなり。又好んで酒を飲むといへり。

時しあればひとの國なるけだものもけふ九重に見るがうれしき　御製

甘露集

足利の代に至り、今の地に遷すとなり。されど大永の頃、兵燹に罹りて、佛殿、僧坊悉く焦土となる。因て其頃の舊記も廢亡したりとて、開創の時世等詳ならず。境内普門院に不動尊の靈像を安置す。良辨僧都の作とも、或は願行の作なりともいふ。

馴象之枯骨　享保十三年戊申、交趾國より鄭大威なる者、廣南に產る所の大象牝牡の二頭を牽ゐ來つて、本邦に貢獻す。林信言の事物權輿には、大泥國より來るとあり。牝象は同申年九月十一日長崎に於て斃せり。　同年六月十三日、長崎に著す。同十九日上陸す。象奴〔ザウツカヒ〕二人、曰く譚數譚綿、譯官〔ツウジ〕二人、曰く李錫明廣南陳阿卯等、各從ひ來る。　翌十四年己酉三年十三日、崎陽を出て、四月十六日大阪に至り、同二十六日伏見より京華に入り、同二十八日禁腋に朝して、天覽を蒙る。爵位なくして禁闕に參入のためしなければとて、獸類といへども從四位に叙せられ、廣南從四位白象と稱へられたりといへり。　同五月二十五日、江戸に迎へ給ひ、同二十七日營中に於て上覽あり。其後中野に象廐を建てて、是を飼せられたりしが、二十餘年を歷て、寬延の頃斃せりといふ。當寺に存するものは、其牡象の枯骨なり。

牡象 七歲　總身灰色にして、頭の長さ二尺七寸、頭は俯さず、又顧廻する事能はず。　鼻の長さは四尺程、或は三尺三寸とも云ふ。　同圍一尺五寸、末の方にては、六寸許ありといふ。鼻弘〔ハナノアナ〕二ツ端ふかく凹〔ナカクボ〕にしてよく開闔す。中に小き肉爪ありて、よく針を拾ひ芥子をつまむ。水を飲み酒を啜るにも又鼻を以てし、食する時も鼻を以て捲入る。一身の力は皆悉

本堂
玄関
庫裡

中野 寶仙寺
當寺に享保十四年
交趾國より貢献
ありし馴象の
枯骨あり

葉の末にも、たゞ白雲のみかゝれるを限りとおもひて、又

なかやどりの里にかへり侍りて、

露はらふ道は袖よりむらぎえの草葉にかへるむさし野の原　堯恵

中野七塔　今其所在をしるべからず。或人云ふ、三所ばかりは知れてありとぞ。里諺に、中野長者昌蓮、佛に供養の爲、高田より大窪迄の間に、百八員の塚を築くと云傳ふ。（次の高田百八塚の條下を照し合はせて見るべし。）こゝに七塔といへるも、其類のものならん歟。また中野の通の右側、叢林の中に、三層の塔あり。七塔の一ならんか。傳へ云ふ、中野長者鈴木九郎正蓮が建つる所にして、昔は成願寺の境にありしを、後世今の地に移すといへり。今大日如來を本尊とす。（昔の本尊は釋迦如來なり。後世成願寺の本尊とす。）中に長者鈴木氏夫婦の肖像と稱するものを安ぜり。

明王山寶仙寺　無動院と號す。寺領あり。古義の眞言宗にして、同西の方、右側にあり。良辨僧都開基なりと云傳ふ。本尊は弘法大師等身の像にして、願行の作なり。中興開山を聖永和尚と號す。往古は大刹にして、此地より二十町ばかり北の方、阿佐ヶ谷の地にありしを、

中野塔

す。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、島津又次郎といふ人の所領の内に、中野内正觀寺といへる號を注したるは、當寺の事なるべし。しかる時は、永祿の頃迄は正觀寺と呼び、其後に至りて成願寺とは改めしならん。諸堂および三層の塔を造立し、生涯優婆塞を勤行して、遂に永享十二年庚申の歳終をとれり。三層塔は、今中野の通り道より右にあり、次の條下をみるべし。當寺境内に、塔屋敷と稱する地あるは、其舊跡にて當寺本尊の釋迦如來の像も、其塔中の本尊なりといふ。其後文明八年丙申に至り、春屋禪師より四世、川庵宗鼎和尚當寺に董席して、傳燈を挑ぐ。法嗣今に連綿たり。總門に掲けたる多寶山の額、本堂に掲けたる成願禪寺の四字は、雪峯和尚の筆なり。

中野長者正蓮墳墓　同じ境内叢林の中にあり、開基鈴木九郎の墓なり。其石塔今崩れて、なかば土中に埋れてあり。紫一本（ムラサキノヒトモト）といへる册子に、武州多摩郡中野の中正觀寺といふ藥師の棟札に、朝日長者昌蓮と記してありと云々。昌正同音なり。同卷高田百八塚の條下と照し合はせて見るべし。

中野　淀橋の西をいへり。淀橋の下を流るゝ上水川を以て、豐島郡と多摩郡の郡界とす。此地は多摩郡に屬す。武藏野の中央なるをもつて、しか號くと云傳ふ。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、太田新六郎知行の中に、中野うち阿佐ケ谷、又中野大場源七郎分とある地を、注し加ふ。

北國記行　むさし野のうち中野といふ所に、平重俊といへるが催によりて、渺々たる朝露を分け入りて瞻望するに、いづれの草

社を再興し、更めて十二所の御神を勸請し奉り、田園等若干を附す。數世を歷て後、荒廢におよび、神燈火疎に、祭奠常に闕くといへども、猶感應の速なるを以て、村民恐怖し、遂に享保の頃、官府に訴て、成願寺奉祀の宮とす。しかありしより已降、神供嚴重に、祭祀懈る事なし。九月二十一日を祭祀の辰とす。

多寶山成願禪寺　同所上水川を隔てゝ西の方、同じ川端に臨んで、本鄕村にあり。曹洞派の禪刹にして、相州田原村香雲寺に屬す。當寺は角筈十二所權現宮の別當たり。本尊釋迦如來の像は、聖德太子の眞作なりといふ。前の十二所權現の社記に載る所の鈴木九郞某、本國紀州を出て、其妻と共に、此中野の地に移り住みたりしが、後幸福を得て、其家富み榮えたり。されども宿因にやありけん、一人の娘俄に死して、蛇形を顯せしが、春屋禪師（相州關本の最勝寺に住せらる。）の法化に依て、畜身を解脱し、上天する事を得たり。（十二所權現宮の御手洗池を蛇池〔ヘビガイケ〕と唱ふるは、彼の蛇のみたりし故に、土俗かくはなづくといふ。其時春屋禪師の著せし法服、今猶當寺に傳ふ。）こゝに於て、父母頻に菩提心を發し、法喜受戒して、自ら正蓮と改む。又居宅を壞ちて精舍となし、女の法名正觀の文字を以て、其寺號とす。（女の法名を眞窓正觀禪女と號

成願寺

松と稱ふる古松あり。是も其兜を埋めたる印と云ふ。

淀橋　成子宿と中野村との間に架す大小二の橋ありて、橋より此方に水車あり。昔大將軍家此地に御放鷹の頃、山城の淀に準へ、此橋を淀橋と唱ふべき旨上意あり。因て號とすといへり。或人云ふ、淀橋は餘戸橋ならん、和名抄に、武藏國豐島郡に餘戸〔ヨド〕といへる村あり、此地は豐島郡と多摩郡の中間にて、上古のあまりべなりし故に、餘戸橋と唱へたりしならんと。しかれども其是非をしらず。舊名は面影の橋、姿見ずの橋なども呼びたりしとなり。

十二所權現社　淀橋の南、角筈村にあり。祭神紀州熊野權現に同じ。本鄉村成願禪寺奉祀の宮なり。社記に云ふ、應永年間、鈴木莊司重邦が後裔、鈴木九郎某なる人ありて、紀州藤代に住りしが、流落して此中野の地に移り住す。熊野權現は產土神たるにより、宅の邊の丘陵を闢きて小祠を營み、尊信深かりし。然るに九郎或時北總葛西の市に飼ふ所の疲馬を賣りて、價一貫文を得たる歸路に臨んで、淺草に至り、其得る所の錢の緡を解きて見るに、悉く大觀錢なり。九郎心裏に思ふ所ありて、即ち觀音堂に詣で、其錢を寶前に奉り、手を空うして歸りしが、夫より後、はからざる幸福を得て、其家大に富をなせり。故に應永十年癸亥、

其二
熊野の瀧

角筈村
熊野十二所權現社
世人誤く
十二そうと
いふ多景にして遊觀
多し

淀橋水車

淀ばしハ成子と
中野との間に
わたせり大橋
小橋あり其橋
より此方に水車
田舎ながら山城
淀川に準へて
淀橋と名
付べき旨
台命ありし
より名とせ
といへり大橋の
下を流るゝは
神田の
上水
堀
あり

し奉るといふ。承平二年壬辰、平將門威を東關に振ふ。天慶三年、藤原秀鄉是を亡さんが爲、軍勢を帥して、當國中野に至る。時に右の臂に疾あり。軍中醫藥なく、大に是を憂ふ。其夜靈示あるを以て、當寺の本尊に祈りければ、病苦忽に平愈せり。其時又將門征伐の願書を獻ず。果して將門を誅戮す。故に凱陣の後、堂宇を建立して、圓照寺と號す。其後建仁二年壬戌に至り、江戸民部大輔賴助修營なすといへども、弘安八年、兵燹に罹り、佛宇回祿す。其後永仁元年癸巳、賴瑜僧正茅宇を葺覆し、舊記を修補すといへども、天正中越の景虎此地に戰ひし頃、復兵火の爲に廢亡せしを、寬永十八年辛巳に至り、春日局官裁を乞て、重て修復せられたり。

右衞門櫻　當寺堂前にあり、單瓣にして芳香殊にすぐれ、類なき名樹なり。里諺にいふ、昔武田右衞門といへる人、こゝに住んで、此櫻を愛す、柏木村にありて名高き櫻なればとて、源氏物語の柏木の右衞門といへる名に就きて、かくは呼びしとなり。小田原北條家の所領役帳に、綾部惣四郎所領柏木角筈〔ツノハズ〕とあり。

鎧明神祠　圓照寺の艮の方にあり。圓照寺の持なり。相傳ふ、藤原秀鄉將門を誅戮し、凱陣の後、將門の鎧を此地に埋藏し、上に禿倉を建てて、鎧明神と稱すといふ。社前に兜

柏木邑右衛門櫻

鏡明神社

圓照寺

て、本理山自證寺と唱へしが、元文年間、故ありて天台宗に改めらる。當寺を世にふし寺と字す。諸堂字悉く種々の節ある木を集めて造立したる故に、衆人見て奇異なりとす。因て此稱あり。蜘蛛の井といふは、當寺の境内にあり。來由は誌すに堪へず、こゝに略す。昔は山林に櫻多かりし由、諸書に見えたれども、多くは枯れ失せて、今纔に古木二三株存せるのみ。

紅葉山西迎寺　同巽の方二町ばかりを隔てゝ、四谷北寺町にあり。淨土宗にして、增上寺に屬す。往古太田持資の臣、伏見勘七といへる人の草創なりといへり。舊は御城中紅葉山の地にありしを、天正の後此地に移すといふ。本尊阿彌陀如來、開山は儀蓮社仁譽上人存公和尚と號す。

醫光山圓照寺　瑠璃光院と號す。柏木村にあり。眞言宗にして、田端の與樂寺に屬す。本尊藥師如來の像は、行基大士の作、脇士は日光月光の二菩薩なり。又左右の壇上に十二神將の像を安ず。相傳ふ、醍醐帝の御宇、理源大師の法弟、筑波の貞崇僧都、此像を此地に安置

自證院
山王

本堂
玄関
方丈
庫裡

大久保の映山紅ハ
弥生の末ば盛となり
最丈餘のもの数株
ありて其紅絶て愛
するの輩こゝに群遊す
花開微かといへども
叢り開て枝葉を蔽ひ
さらに満庭紅を灌
ぐ如く夕陽に映して
錦繍の林にうた
此辺の壮観
なるべし

諏訪谷村（すわやむら）

諏訪明神社

大久保七面宮

青山氏某、郷人と共に謀て、祠を經營す。聖護院宮道晃法親王、東國下向の時、大僧都元信をして當社の別當たらしむ。こゝにおいて神廟漸く備はり、四時の祭典綿々として怠る事なし。

七面大明神社　同東の隣日蓮宗春時山法善寺に安置す。祭禮は九月十三日より十九日に至り、誦經、説法等あり。尊影は日護上人の作といふ。相傳ふ、此七面尊は、江戸の地に七面宮を勸請するの最初にして、往古駿州大久保に、三澤氏某勸請す。萬治年間、當寺へ移し奉ると。（或人云ふ、三澤氏は、小次郎政廣と云ふ淡州の人なり、後に駿河國富士郡大鹿村に移り住す、富士十七騎の一なり、延慶二年己酉五月十八日に没す、法號三澤院法性日弘と號すと。）或は云ふ、延寶年間、甲州身延山よりこゝに移すと。境内櫻樹多くありて、彌生の盛をもて一時の奇觀とす。（寛文三年より、此神前において常經讀誦をはじめ、永世に絶えざらしむ。）

鎭護山自證院　同所西の方、道より右側にあり。（土俗此所を饅頭ヶ谷と云ふ。）圓融寺と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。尾州亞相光友卿の御簾中千代姫君の御母堂、自證院殿光山曉桂大姉御菩提の爲に開創せし精舍なり。本尊は阿彌陀如來、開山を日須上人と號す。當寺始は日蓮宗に

大窪天満宮
社壇西に向ふ故に
西向といひ又も
東の天神と称ずる
ことは東の来由
あるによれり境内
すこぶる幽邃なり

としたりとなり。當寺に、俊寛僧都の持ち傳へし、性法寺の後光佛、及び洛の壬生寺同木の地藏尊等を安置す。

七寶山藥王寺 同所西南の方にありて、其間四町許を隔つ。黄檗派の禪林にして、山城宇治の萬福寺に屬す。昔は眞言宗の古藍なりしかども、中古大に衰廢し、纔に草庵の形のみなりしを、元祿の頃凌雲禪師興復せられたりといふ。凌雲和尚は甲州の産なり。武田典厩の女の腹に生じて、まさしく典厩の外孫なり。同國小諸曹洞宗海音院にて剃髪し、後黄檗となる。江戸に出て所々にある所の草庵をして、新に一宇の寺院とせん事を謀るといへども、もとより寺院を新建する事は、官禁にしてなりがたかりけれども、其德の至れるにや、つひに免許ありしかば、江戸の中八箇の庵室と唱へしもの、悉く一寺となる。青山の海藏寺、深川の萬祥寺等、いづれも其中なりといへり。

一ッ木藥師如來 同境内に安置す。いにしへは赤坂一ッ木の地に立たせ給ひ、行基菩薩創建ありし一寺の本尊たりしとなり。今は人繼〔ヒトツギ〕と書けり。

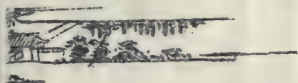
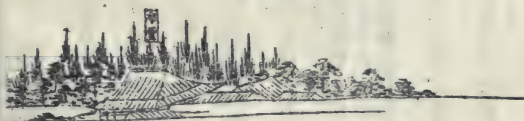
大窪天滿宮 大窪にあり、此地の鎭守とす。祭禮は六月廿五日なり。別當は梅松山大聖院と號して、聖護院宮の直末、本山派の江戸役所にして、大先達たり。當社を世に棗の天神或は西向の天神とも稱せり。社壇西に向ふ故に云ふなるべし。棗と稱する來由しるべからず。 相傳ふ、安貞年間、栂尾明惠上人の勸請にして、明慶覺運等是を奉祀す。後又太田道灌神田を寄附す。然るに、天正年間兵燹にかかり、烏有となりし頃、其神躰溪間の櫻の枝に移り止り給ふ。其木を瑞現櫻〔ズキゲンザクラ〕となづく。今は枯れたりしといふ。此時、

安産寶珠 當寺に安ず。將軍足利尊氏公の御臺所これを所持ありしとなり。此靈珠を拜する婦女は、難産の憂なしとて、大に崇敬せり。始め當寺を平安寺と號したりしも、出産平安の意によるならんか。

清光山安養寺 市ヶ谷谷町にあり。林泉院と號す。淨土宗にして、京師知恩院に屬す。天正二年甲戌の草創にして、開山を心蓮者深譽上人貞公和尚と號く。本尊阿彌陀如來の立像は、三尺三寸あり。惠心僧都の彫造にて、京師眞如堂の本尊と同木なりといふ。相傳ふ、天長年間、慈覺大師江州苗鹿明神より靈木を得て、是を打割しに、其木理自ら佛躰の形をなせり、其一片の木をもて、阿彌陀佛二軀を彫刻し、日吉念佛堂、及び洛の眞如堂等に安ず、其後惠心僧都靈威を蒙り、其餘材を得て、此本尊を造るといふ。相傳ふ、昔開山上人一宇の精舍を開創せんとし、其地を求られしに、林の下より清泉涌出する所あり。市ヶ谷富士見坂其舊地にして、今は尾陽公御館の内に入るといふ。又傍に小き洞ありて、うちより一疋の白狐顯れ出て、深譽上人に見え、恭禮するが如し。依て靈地なる事を推知し、其地の主島田氏某に乞ひ得て、其地に梵宇を建つるとなり。明暦二年丙申、此年今の地へうつれり。

稻荷祠 境内にあり。萬治元年正月朔日の夜、白衣の老翁住侶秀譽上人の夢に見えて告げしらする事あり、秀譽上人夢覺めて後思ひめぐらし、そのかみ開山上人に見えたりし白狐ならんと、直に稻荷明神に勸請すと也。又其頃此地に宇田國宗といへる鍛冶居住したりけるが、深く尊信し、此神の加護によりて、火災を免かれたりとて、俗間火防稻荷(ヒフセギイナリ)と稱す。

八幡宮 同じく境内にあり。雲州の尼子伊豫守經久、城内の鎭守に崇めたりしを、故ありてこゝに移し奉るといふ。本地阿彌陀佛は、定朝の作にして、治安元年詔をうけたまはりて造立せりとなり。後、月輪殿下兼家公の家に傳へ給ひしを、經久、城の鎭守

藥王寺
月桂寺

稻荷山藥王寺　東光院と號す。同所より西北の方、河田ヶ窪にあり。新義の眞言宗にして、大塚の護國寺に屬せり。開山を澄覺法印と號く。本尊藥師如來の像は、弘法大師、天台四明の洞の靈石を得て、彫刻し給ひし靈像なりといふ。貞享の初、須田氏某、當寺に安置なし奉るとなり。當寺昔は愛染院と稱したりといふ。

稻荷祠　境内にあり、相傳ふ、太田道灌の勸請にして、むかしは今の市ヶ谷御門の邊にありしとなり。元和の頃當寺より二町ばかり北の方へ遷し、其後又此地へうつして當寺の護法神とせり。

正覺山月桂寺　同所三町ばかりを隔てゝ、西南の方にあり。濟家の禪林にして、鎌倉圓覺寺に屬せり。關東十刹の一員にして、澁江氏通玄院徹齋の創立、喜連川家の香華院たり。總門に揭くる額に、正覺山とあるは、南禪寺の普濟禪師崇寬の書なり。鐘樓の額に、華應閣と署せしは、香山侯書なり。當寺は文祿年間の基立にして、雪山和尙開山たり。本尊釋迦如來の像は、天竺佛にして、鑑眞和尙携來る所の靈佛なりといへり。腹中に佛舍梨を收むと云ふ。當寺古は市ヶ谷にありて、圓桂山平安寺と號けたりしを、明曆元年乙未のとし、喜連川左衛門督源賴純君の嫡女、月桂院龍室宗珠大禪定尼を葬せしより、寺號を改むるといへり。

り。鶴ヶ岡もいにしへ稲荷の社地なり。蓋し此例に本づくと云ふ。又自親松椎等の樹を栽ゑて社木とし、社壇城廓ともに繁榮ならん事を祝す。土俗道灌松となづく。枝葉蓁々として、今尚存す。其後、天正年間の兵燹に罹りて破壞せしを、慶長年間、別當源空少僧都、此頽基を憤激し、己が餘鉢を傾け、百歩許の遺址を點檢し、草を結び擔とし、木を伐て扉とし、一宇を再營し、神殿に擬儀し、絕えたるを繼ぎ、廢れたるを興す。然れども、諸を古の壯觀に比すれば、いまだ十の一を得る事あたはず。唯幣帛を捧げ、粢具を盛り、寶祚の萬々を泰山の安に置き、武運の綿々たるを芥石の長に護り、兼ては又、萬姓の豐樂を祈り奉るのみなりしか、大神君關東御入城の時、當社の來由を問はしめ給ひ、其後御三代大將軍家、社領を附せられ、朱璽を賜ふ。然るに元祿十五年壬午の夏、賢母從一位桂昌院殿、當社の事蹟を聞しめされ、神輿の足らざるを憾み思はせられ、黃金數枚を寄捨して、新に是を奉造なし給へり。こゝに於て、三基の神輿全くそなはる。しかありしより、神威昭々として著く、社殿の經營も、亦いつしか輪煥として、宿昔の壯觀に倍せり。南向亭茶話に云く、市ケ谷八幡宮の舊地は、市ケ谷御門の内、今大番所のある所より、北の方の向ふかど、山本氏の邸の隅に、榎の大樹ある地これなり。寬永年間今の地に遷し奉る。故に此榎を神木と稱するとなり。

市谷八幡宮

或人の説に市谷昔八市の立し地なりしかば
市買に作りしとも又然れとも詳ならず
按に鎌倉鶴岡八幡宮に蔵せる永和の延文
三年十二月廿二日の基氏の古證文に鶴岡
八幡の雑掌任阿申武蔵國金曽木
彦三郎市谷四郎等のす江戸淡路守
押領を止む正和元年八月十一日の
寄進状に任せ社家に付て
沙汰せらるへしと
云々證とすへし
社地に蔵臺
楊弓の類ひ
ありて常に
賑へし又社
前の大路は
四谷への
往来なれは
行人
絡繹たり

江戸名所圖會

天權之部

卷之四

市ヶ谷八幡宮　市ヶ谷御門の外にあり。別當は東圓寺と號す。南紀高野山金剛峯寺に屬して、古義の眞言宗なり。

本社祭神　應神天皇（甲冑の神跡なり。相傳ふ、多田滿仲崇信ありし靈軀にして、往古攝州多田の廟にありしを、太田持資こゝにうつし奉るといへり。本地佛は愛染明王なり。）東は神功皇后（應神天皇の御母君なり。）西は妃大神（天皇の御姉君寶滿菩薩なり。）三神鎭座。

稻荷祠（當社地主の神なり。石階の中段左の方にあり、世俗茶の木稻荷と稱す。其來由信ずるにたらず、故にこゝに略せり。此神の産子は、毎歳正月元三の間茶を飲まず、眼疾を患ふる者は、一七日又三七日と日數を定めて茶を斷ち祈願する時は、靈驗いちじるしく、もろ〳〵の願ひ成就せざる事なしといへり。）社記に曰く、文明年間、太田持資、江戸城擁護のために、相州鶴ヶ岡の八幡大神を勸請し、山林及び神田等若干を附して、東圓寺を創建す。（山號を稻嶺といふは、此地もとより稻荷のやしろありて、地主の神とする故な

弦巻川(つるまきがは)

大行院(たいぎやうゐん)

蓮成寺(れんじやうじ)〔以下の目錄は本文庫三卷に收む〕

津久戸明神社　築土八幡宮　逢坂　神樂坂
若宮八幡宮　行元寺 襟掛觀音　牛込城址　閻魔堂
松源寺　正藏院　赤城明神社　御殿山
濟松寺　豐後小侍從大友義延舊館之地　大友松 大友稻荷祠
宗柏寺　宗參寺 大胡氏墓 栗の梅　千手院　幸國寺 布引祖師
願滿祖師堂　早稻田神明宮　赤城明神舊地　感通寺 毘沙門天 摩利支天
三國傳來千手觀世音 西方寺 自樂居士墓　誓閑寺 稻荷 垂枝櫻　金川
高田八幡宮 若宮八幡宮 光松 鐘樓 御宮 樓門 本地堂 放生池 氷室明神祠 出現所 觀音 能舞臺跡　高田稻荷社 神泉　毘沙門堂 朝日庵 千年松 旗立櫻 守宮池
寶泉寺　高田富士山 淺間祠　宗良親王陣營舊址　戶塚
百八塚　高田天滿宮　高田馬場　和田戶山
荒闇山　山吹の里　三島山 三嶋祠 山吹井　高田七面堂 世尊堂 朝日樓 朝日堂 諏訪祠
俤の橋　姿見の橋　南藏院 藥師堂 鴛宿梅　氷川明神社

江戸名所圖會 卷之四

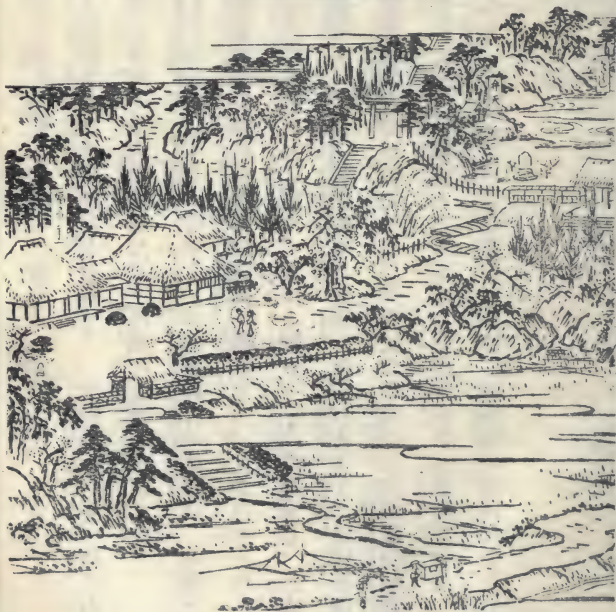
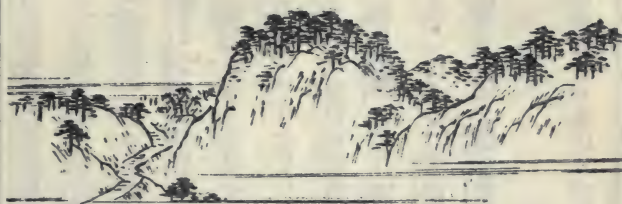
天權之部目錄 〔原本十一より十三まで三冊〕

とす。昔は小澤の白清水といふ。是も壽福寺十境の一なり。

大谷山法泉寺　吉祥院と號す。壽福寺の南十町ばかりを隔てゝ、菅村の内、府中道の右にあり。（稻毛領にして小澤郷に屬す。）天台宗にして深大寺村の深大寺に屬せり。阿彌陀如來を本尊とす。

藥師堂（寺より西の後一町半ばかりにあり。毎歳八月十二日獅子舞ならびに弓を携へて踊る事あり。又縁日は九月八日十二日にて此日もすこぶる賑はへり。）本尊藥師如來の像は、慈覺大師彫造し給ふといふ。相傳ふ、左馬頭義朝の御臺所常盤御前護持の靈像たり。文治三年丁未八月叡山の文顯阿闍梨此地の領主稻毛三郎重成と共に謀り、當山を闢き一字の梵刹とし、此靈像を安置せらる。後平政子御前崇敬あり。其頃賴朝卿よりも香花の資料として、當國高麗郡の地を寄附せらる。建久八年丁巳賴朝卿當寺へ詣し給ふ。又康元二年丙辰五月賴嗣公賴經公の菩提のため、御堂再興なし給ひしより、大伽藍となりしが、正慶建武の兵亂に廢壞せしより後、舊觀に復する事なしといへり。鎧兜唐木小机等の二品は、賴朝卿の寄附なりと云傳へて、當寺の什寶とす。

弁天

法泉寺
ほふせん
本堂

す。其頃當寺本尊に開運を祈る。後果して感に遇ふことを獲たり。昔小澤太郎重政毎晨歩を像前に旋して、現當の善因を修す、然るに兵災に遭ひて、寺宇既に敗壞する事年久し。爰に鎌倉建長寺の大安禪師大方慶和尚、此地に卓錫し、荒廢を興し、始て禪風を振ふが故に、僧俗雲集す。或云ふ建長寺八十四世法慶和尚是なり、大方慶といふも誤なり。然るに永德二年壬戌鎌倉左兵衛督氏滿、師の德操を慕ひて參謁するの次で、三個の殿宇を造營せられたりとなり。三個とは、所謂大會堂、善應殿、擁護廟是也。

展翼峰　壽福寺の左に續たる山を云ふ。俗に神明山といふ。其形鳥の翼を展たるが如し。故に號とす。相傳ふ、當社神明宮は昔小机より飛來り、こゝに鎭座なし給ひたりと云ふ。壽福寺十境の一なり。

淺間山　同じ山續にして、山頂に淺間の小祠ある故に名とす。土人は城の淺間山と云ふ。是も壽福寺十境の一にして、光照崖と號す。荊棘をひき小篠をわけ、登る事數十歩、絶頂に至り崖に臨みて眺望すれば、眼界蒼茫として、山水の美筆端に盡しがたし。淺間の祠ある所より少し下りて小澤の城跡と稱する地あり、小澤の城の下に詳なり

吐玉泉　壽福寺より後の方の谷を隔てゝ西の山際、農民の地にあり。水源白砂を吹出す故に號

俗雲集。永徳壬戌年。鎌倉左兵衛督氏滿。號永安寺殿壁山全公。雅慕ニ師之徳操一。而參謁之次。再修ニ補此經之蠧損一。草造ニ營三個殿宇一。既而安ニ十一面大悲像於大會堂一。安ニ彌陀善逝像於善應殿一。奉ニ請辨財尊天。大黑尊天。八幡大菩薩。稻荷大明神於擁護庵一。繇レ是仰ニ皇圖之鞏固一。祈ニ佛運之紹隆一。而亹々不レ怠焉。

應永十四丁亥稔六月十八日

沙門宗圓敬記焉

相傳ふ、推古天皇六年戊午、聖徳皇太子高橋の妃の亡妣入阿彌尼公終焉の地に就て、七區の練若を剏建し、以て冥福を資るの舊跡なり。山を仙谷といふは、仙人道鏡なる者、此山に隱栖し、練行修身事積りて年あり。故に亦道鏡谷ともいへり。今古怪異の事甚多し、是仙人の所爲なりと云ふ。寺を壽福といふは、嘗て芟レ榛夷レ地の時、虚空藏薩埵の像を得たり、因て福一滿の聖號を標して、以て寺の遠大を祝す。後亀長曬侍者、虚空藏經一軸を贈するのみ、石室善形禪師の手墨鋟梓して寺に寄す。康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時、中路茲に宿

壽福寺（じゆふくじ）

八幡

裏門

庵

蓋山曰仙谷者。有仙人道鏡者。栖遅于此山。錬行修身積有年矣。故亦曰道鏡谷也。今古怪異之事甚多矣。是仙人所爲也。寺曰壽福者。曾芟榛夷地之時。得虛空藏薩埵之像。因標福一滿之聖號。以祝寺之遠大。而安今號焉。後建長曜侍者。謄虛空藏經一軸。而乞石室玖禪師之手墨。鋟梓寄焉寺。像十一面觀自在薩埵者。權化之人喃時來手彫刻焉自爾以來。靈感滋衆矣。或曰。和州長谷寺之像。同木同雕也。康平年中。八幡太郎義家。欲排付奥州逆徒。出陣之時。中路而宿于玆。竭忱祈開運於斯像。後果獲遇感矣。在昔小澤小太郎重政。每晨旋步像前。勉於晨香夕燈。修現當之善因矣。梵函大般若經者。名緇高素之毫痕也。文治年中。源義經泊辨慶。暫憇行於此地。追曾祖之例跡。祈恢復之應驗。特復繕寫經之闕。而今尚現存矣。雖然間遭兵災。寺旣敗壞年久矣。爰有前住建長大安禪師大方慶和尙。卓錫此地。力興荒癈。始振禪風。僧

仙谷山壽福禪寺 谷口の東の山續、矢口渡場より十三町東南の方、菅村にあり。此地は多摩郡、後橘樹郡に屬せり。此邊を小澤鄕ともいへり。 推古天皇六年戊午、聖德太子草創なし給ふ佛刹なりといふ。昔は天台宗たり。建長寺の大安禪師の時より禪林とす。今は曹洞派となりて、越前の永平寺に屬す。

本堂本尊十一面觀世音 相傳ふ、鳥佛師の彫刻、或は云ふ、和州長谷寺の像と同木同彫なりといふ、大會堂〔タイエダウ〕と號く、當寺十境の一なり。 **鐘** 右にあり、井田六郎右衛門尉榮應永七年庚辰、當寺住持の沙門比丘宗圓の頃半鐘を寄進す、破裂によりて、寛文二年鑄改るよし當寺住持比丘融峯の文にみえたり。 **阿彌陀堂** 同じ左にあり、善應殿と號す。本尊は坐像四尺五六寸、作者不知、左右に地藏多門等の像を安ず。 **鎭守宮** 門の左にあり、八幡稻荷大黑辨天の四座をまつる、謂廟と號す、當寺十境の一なり。 **指月橋** 當寺門外の流れに架する板橋を號く、是も十境の一なり。

餐霞谷 同所の庫裡の後の谷を云ふ、道教の舊跡なり、故に今此地をあざなして、仙谷〔センコク〕と號く、是も當寺十境の一なり。 **採藥阜** 秦の徐福日本に來り仙藥を採ると云ふ。 **攫霧松** 同所閣の左にありしが、今は枯れたり、土俗道祖神の松と云ふ。一根五枝にして霧を攫むが如き故に名とす、當寺十境の一なり。 **方丈** 晩成室といふ、十境の一なり。

大般若經六百卷 梵函に收藏す、紙は黃色にして薄し、上古名緇高素の毫痕なり、其中源義經と辨慶が筆蹟なりと稱するもの四卷ありて、其名を注せり。 相傳ふ、文治年間源義經と辨慶曾く此地に憩ひ、曾祖の例跡を追ひ、當寺觀音の尊前に恢復の應驗を祈り、特に大會堂に入りて文治年間經卷の闕けたるを繕寫す。 永德壬戌鎌倉左兵衛督氏滿、師の德を慕ひ參謁のついで、再び此經の虧損を修補する由緣起にみえたり。

夫仙谷山壽福寺者。推古天皇六代戊午年。聖德皇太子就于高橋妃之亡妣。入阿彌尼公終焉之地。剏建七區練若。以資薦冥福之舊趾也。

いつのまに向の岡の小松原月もるまでになりにけるかな　後鳥羽院

歌林名所考

夕日さす向の岡の時鳥雲のはたてにをりはへてなく　隆源

都筑の岳 綴喜或は綴綫に作る。 小佛の嶺より小山田里迄は多摩郡に屬せり。平山或は横山などいひ、既に古歌にも玉の横山と詠ぜる、皆此間にあり。又官林の案内山と云ふより、神奈川迄の間は都筑郡に屬せり。南北に高底なく、坂東路凡そ百里あまりあり續く故に、つゞきの岳の名ありといへり。

青沼明神 同所長沼村八王子通道の傍にあり。祭神太田命、猿田彦大神二神なり、勸請の初をしらずといふ。社司福島氏奉祀す。祭禮は八月十五日なり。 太平記に正平七年閏二月、小手差原〔コテサシガハラ〕合戰の條下に、將軍の御陣へ馳せ參る人々の中に、青沼判官といふ名みえたり。此地より出たる人歟。

按ずるに、當社は延喜式内青渭神社ならん歟。土人相傳ふ、往古此地は大なる沼のありし地なる故に、長沼の號ありと云ふ。さればにや、今も此邊地を掘穿つときは、土中悉く沼土なりと。和名類聚抄に、武藏國比企郡に渭後〔ヌマノシリ〕といへる地名を載せて、沼乃之利と訓ず、然る時は、當社を以て延喜式内の青渭神社とするもよりどころあるに似たり、猶後人の考を俟つのみ。

多磨郡東限₂草窪岡₁。西限₂金川₁。南限₂華田浦₁。北限₂向岡₁。云云。

新勅撰　　　　　　　　　　　　　　　　　小町
武藏野の向の岡の草なれはねを尋ねてもあはれとぞ思ふ

續古今　　　　　　　　　　　　　　　　　知家
朝な朝なよそにやはみる十寸鏡向の岡につもるしらゆき

玉葉　　　　　　　　　　　　　　　　　　後一條入道
秋霧の絶間をみれば朝づく日むかひの岡は色づきにけり

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　定家
ゆふづく日向の岡の薄もみぢまだき淋しき秋の色かな

夫木　　　　　　　　　　　　　　　　　　爲家
もと茂き向の岡の菊のえに交りて青き花の下草

御家集

倉大草紙に、文明九年長尾四郎左衞門尉景春、山内上杉の家務職を承らざるを憤り、逆心を企て顯定を亡さんとて、武州相州の內一味同心の兵を催し、上杉家を襲ふといへる條下に、金子掃部助は小澤と云ふ城に楯籠る間、太田左衞門入道下知として扇ヶ谷より勢を遣し、同三月十八日溝呂木の城を攻落す。同日に磯の要害を攻らる。一日防ぎ戰ひ夜に入けれぱ、越後五郎四郎かなはずして城を渡し降參す。夫より小澤城へ押寄攻けれども、城難所にて落がたし。中略景春一味の寶相寺竝に吉里宮內左衞門尉以下小澤の城の後詰として、橫山より打出當國府中に陣を取る。中略同年四月十八日金子掃部助が籠りたる小澤の城も攻落すとあり。

向の岡　今向の岡と稱する地は、多摩川を北に帶て、西は關戶より發て、東は末長に終るもの是なり。連岡の長さ凡そ六里あまりあり。

或は云ふ、今向の岡と稱する連岡、向の岡にはあらざる歟。武藏國風土記殘篇によりて考ふれば、多摩郡北は向の岡に限るとあるを以ても、此地にあらざる事しるべしと、然るに、同郡狹山は、南北東西五里尾引山（チヒキヤマ）より八國山（ハチコクヤマ）にいたり、東西二十里の連岡なり、四方共に武藏野にして、何れの方よりも岡に相對する故に、向の岡の名ありといへり。依て今向の岡と稱する地は、都筑が岳として佳ならんと、しかるや否はしらざれども、暫く是をこゝに擧ぐるのみ。

武藏國風土記殘編曰

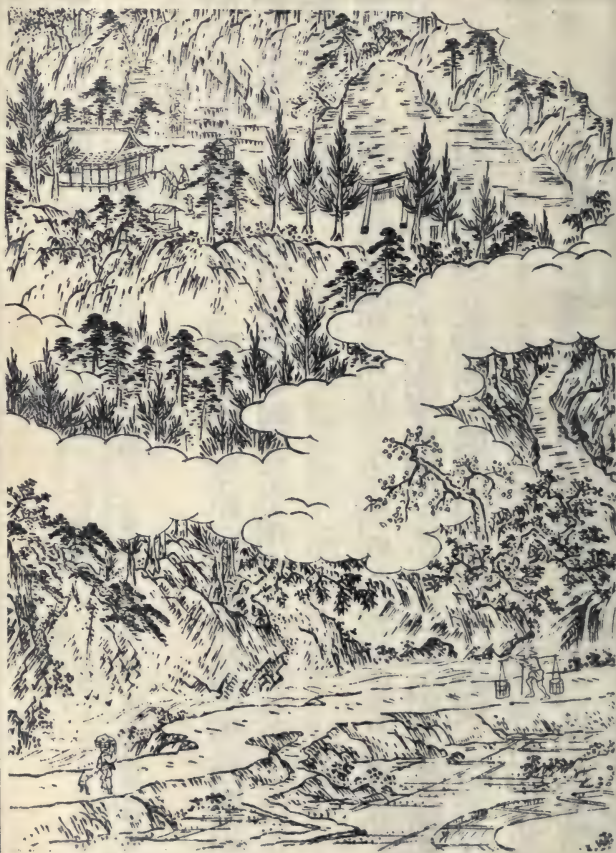
穴澤天神社云

武藏國風土記殘編曰　武藏國　多磨郡

穴澤天神　圭田三十六束三毛田　孝安天皇四年壬辰三月所祭

少名彦神也。云云。

當社の麓を澗水流て多摩川に合す。其流を隔てゝ山岨に一の巖窟あり。故に穴澤の名あり。昔の巖洞は崩れたりとて、今新に堀穿てる洞穴あり。洞口は一にして内は二つに分てあり。内に種々の神佛の石像を造立す。

小澤城址　谷口天神の山續、淺間山の西に竝べり。東鑑に、元久二年乙丑六月廿三日稻毛入道大河戸三郎が爲に誅せらる。子息小澤次郎重政は宇佐美與一是を誅すと。又同書に、同年十一月三日小澤左近將監信重、綾小路三位師季の息女を相伴て、京都より參著す。行光を以て事の由を尼御臺に啓す下略。又同月四日夜に入り、綾小路の姫君尼御臺所の御亭に參らる。御猶子たるべきの義なり。武藏國小澤鄉稻毛入道遺領なり。知行せらるべきの由仰らるゝとあり。鎌

谷之口
穴澤天神社

は僧形にして、寳珠と劒とを持し給ふ形なり。

穴澤天神社　谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔てゝ、同じ往還右の方小道を入りてあり。社は山の中腹にあり。此邊を小澤ヶ原と唱ふ。今祭神詳ならず。後世菅神を合祭せり。祭禮は七月廿五日なり。又同日神樂を修行し、九月廿五日に獅子舞を興行す。別當は眞言宗にして威光寺と號す。

延喜式神名帳曰　　武藏國　多磨郡

郡狛江鄕の主なり、今同郡佐須村に其舊館の地と稱するものありて、此地より程遠からず。東鑑刊本に、柏江に作るは誤なり。江戸の雜司ヶ谷は其間七里隔つべし。されども當寺は天明年間の火災に、舊記亡びたりとて、さらに古へを考へ合すべきたよりなし。猶他日訂正すべきのみ。

國安明神祠　威光寺の南五十歩斗を隔てゝ、同じ側、左の小道を三十歩斗入てあり。神主山本氏奉祀す。神體は左の如きものにして、世に云ふ所の鑄形の神像なり。相傳ふ、往古小澤左衞門尉國高といへる人、此地を領す。國高此地に逍遙ありしところ、松樹の下に白髪の老翁現じ、示て曰く、我は大國主神なり、此地に崇め祀らば萬民國安かるべしと云ふ。國高奇異の思ひをなし、宮居を營んで、たゞちに國安明神と崇め祭り。社領の地八百五十坪を寄附ありて、武運長久ならん事を祈念すといふ。

按ずるに、小澤左衞門尉國高は、東鑑に擧ぐる所の、小澤次郎重政、同左近將監信重などの氏族の人ならん、その時世いまだしるべからず。

國安神像

銅物、わたり六寸四分ばかり、上に天蓋など付けたりしと覺しき跡あり、下の方にも花瓶の如きものありて、上の方に口あり、神體

然平家滅亡畢。有御感沙汰之處。爲小山太郎有高被押領寺領之由。捧去年九月所給御下文所訴申也。下略。

同書曰

文治元年　九月五日　小山太郎有高。押妨威光寺領之由。寺僧捧解狀。仍令停止其妨。任例可經寺用。若有由緒者。令參上政所。可言上子細之旨。被仰下。惟宗孝尙。橘判官代以廣。藤判官代邦道等奉行之。

下略。

同書曰

承元二年戊辰　七月十五日　武藏國威光寺院主僧圓海參訴曰。柏江入道增西。去月廿六日。率五十餘人惡黨。亂入寺領。及刈田狼藉

下略。

按ずるに、江戸雜司ヶ谷鬼子母神の別當威光山法明寺を以て、東鑑に載する所の威光寺なるよし、其寺に云ひ傳ふるといへども、恐らくは誤なるべし。東鑑にも狛江入道增西五十餘人の惡黨を率ゐて、當寺の寺領の田を刈り、狼藉に及ぶなどあり、狛江入道は、多

作といふ。今は一尺斗の正觀音を彫造して、其體中に祕安せり。

小澤小太郎居宅舊地　當寺境内の邊を云ふ。今猶馬場の舊跡なりと稱する地あり。又當寺の前に小高き岡ありて藏地下と號く。其頃兵粮を收めたる倉の跡なりと云ふ。次の小澤の城址の條下にも、小澤某の名有りて是を云ひ傳ふ。こゝに小太郎といへるも其氏族の人なるべし。

草原山威光寺　同所明覺寺より道を隔てゝ一町斗向側、二町斗左へ入りてあり。新義眞言宗にして、坂濱高勝寺に屬す。本尊は大日如來、坐像三尺ばかりあり。當寺は穴澤天神の別當なり。天明年間火災に罹りて、殿堂僧坊悉く燒亡して舊記を亡ぼせり。

東鑑曰

治承四年庚子十一月十五日。武藏國威光寺者。依レ爲ニ源家數代御祈禱所一。院主僧僧圓相承之僧坊寺領。如レ元被レ奉レ免レ之。云云。

同書曰

元暦二年四月十三日　武藏國威光寺院主長榮。懇祈日夜不レ怠。

威光寺

國安宮
威光寺
明覺寺

迚も討死すべき命なれば、鎌倉へ打入て足利左馬頭基氏に逢て命を失はばやと、夜半過る頃關戸を過ぎ給ひけるに、石堂入道三浦介等の五六千騎の勢に出逢給ひ、神奈川を經、鎌倉へ打入り、勝利を得給ふ頃、此坂より馬の沓をとり、はたせにて打ち給ふと、依て名とすといふ。

赤坂臺　關戸より十六七町東の方、蓮光寺村を横ぎりて赤坂と號く。坂を登れば赤坂臺なり。一里半斗を經て、河原谷と云ふ地あり。

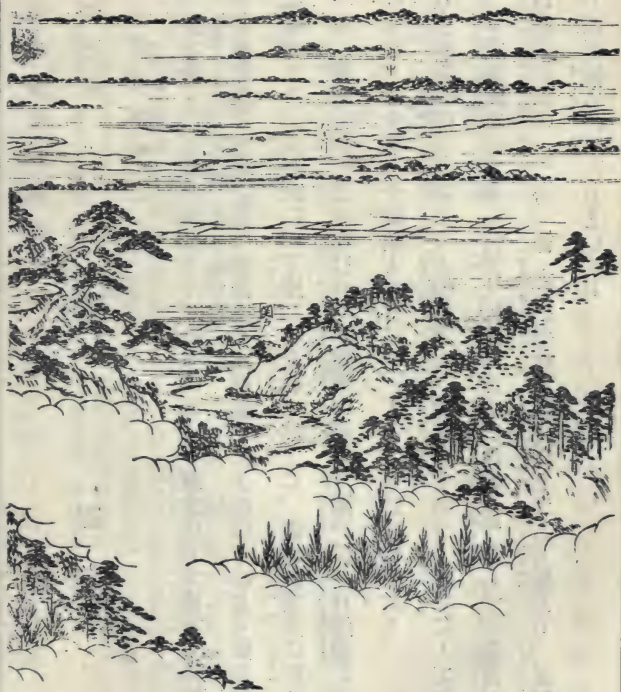
平臺　赤坂臺の東の續をいふ。此所に三圍にあまれる老松一株あり。土人甚兵衛松と字す。此地は矢の口に屬す。

騰雲山明覺寺　矢の口村街道より南の横にあり。渡場の南十五町あまりあり。臨濟派の禪林にして、鎌倉建長寺に屬す。本尊釋迦如來は唐佛にして、坐像八寸ばかりあり。當寺は往古足利義晴公建立なし給ふ佛刹にして、其後廢寺となりしを、慶長年間加藤太郎左衛門再興して菩提寺となすと云ふ。中興開基は揚雲和尚（永祿四年に中興す。）と號す。當寺に長坂血鎗九郎陣中守護の爲、鎧の中に籠め奉りしといふ伽羅の正觀音を安置せり。立像三寸ばかり、弘法大師の

城山　延命寺の後の山續をいふ。土中稀に古瓦を得る事あり。されども其城主及び時世等詳ならず。土人云ふ、昔小田原北條家の幕下關戸駿河守といへる人こゝにありとも、又は永祿の頃、佐伯市助道永といへる武士、小田原の北條家に仕へ、此地に住するともいへり。（故に此所を佐伯谷とも號けたり。）明徳元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて、吉祥山壽徳寺と云ふ禪院を再興す。（此寺は關戸入口道より右側にあり。）道永自ら中興開基となり、日舜宗惠大和尚を請じて、中興開山とす。（市助法名を道永庵と稱す。永祿十二年己巳二月三日陸奥に戰死す。道永の子孫三河守道也。和泉守道安、同隼人筑後などいへる人等、皆此地に住し終に民間に下りしとなり。）

天守臺　同じ山續西の方にあり。城山の半腹より曲折して山頂に至るまで老松繁茂す。此所より四望するに尤も絶景なり。（近頃山頂に金毘羅權現の宮を營建せり。）

沓切坂　下關戸の宿の南の坂を云ふ。坂の上を古市場と唱ふ。昔商戸驛舍等ありし地なり。天正已來此地の古道廢して、今は名のみとなれり。されども府中より横切て、相州矢倉澤大磯等への官用の次場なり。（今も相州大山石尊富士詣など常州野州邊より此道にかゝれり。）相傳ふ、正平七年壬二月八日武藏野合戰の時、新田義貞公、脇屋義治公纔に二百餘騎に討なされ、御方の勢も散々に行方しらずなりしかば、

関戸
天守臺
関戸

候に付ては可レ爲レ曲事者也仍如件。

子九月廿三日　　　　　　　　憲　秀　花押

有山源右衛門どの

此地は昔鎌倉時世、關を居られける舊跡にして、建久の頃より鎌倉の右大將家、淺間三原及び入間野等へ御狩、其餘陸奥、上毛、信濃、越後等へ軍を發し給ふ時は、必しも關戸口の大將を定られし事諸書に載せたり。太平記に、正慶二年合戰の條下に、義貞數箇度の戰に打勝給ひぬと聞えしかば、東八箇國の武士ども順ひ付く事雲霞の如く、關戸に一日逗留ありて、軍勢の著到を著られけるに、六十萬七千餘騎とぞ注ける、とあるも此所の事なり。

延命寺　壽德寺より三四町南の方、道より右側にあり。地藏院と號す。時宗にして相州藤澤の清淨光寺に屬す。本尊地藏尊は立像一尺五寸ばかりあり。作者詳ならず。開山を普國上人と號す。門の入口右の方畑の傍に、榛木の老樹を以て印とする古塚あり。正慶二年武藏野合戰に討死せし四百餘人の墓なりといへり。

治承五年　四月廿日　小山田三郎重成。聊背御意之間。成怖畏籠居是以武藏國多摩郡內吉富。竝一宮蓮光寺等。注加所領之內。去年東國御家人。安緒本領之時。同賜御下文訖。而爲平太弘貞領所之旨。捧申狀之間。糺明之處。無相違。仍被付弘貞也。云云。

同書曰

建曆三年　十月十八日　以宗監孝尙爲武藏國新關實撿被遣。圖書允淸定奉行。云云。

按ずるに、東鑑に載する所の武藏國の新關、其地名を注さず、恐らくは此小山田の關も其一ならん歟。小田原北條家の所領役帳に、小山田彌三郎小山田庄にて、成瀨、高ヶ坂、森、町田、眞光寺、鶴間、大谷、廣袴、小川、木曾、山崎、直ヶ谷、黑川、金森、金井、大倉等の地を領する由、注せり。又同書に、松田左馬助及び布施善三など、小山田庄內小野地ならびに栗飯原四ヶ村落合などありて、小山田庄の廣豁なる事をしるべし。武藏國の圖を以て考ふるに、此關戸は、小山田庄の咽喉の地なり、故に小山田の關の稱ある歟、關戸の里正相澤氏某の家に、古文書を藏す。一は天文二十四年關戸宿商人の問屋免許盛秀判形の證狀なり。二は關戸鄉中河原の內正戒に、有山源右衞門新宿立込邊の芝原田地となすべきの由申出るによりて、七年芝野に定め置かるゝ由、岡谷某の證文。又三は關戸鄉市の定日ならびに濁酒鹽あい物役赦免等、岩本某の證文、又其四は關錢五貫文、有山源右衞門へ申付る旨の證文なり。

其地關之儀如前之可置候少も私曲之筋目自横合聞屆

六百番歌合
小山田の
顕昭

小山田旧関
をやまだのきうくわん
関戸惣圖
せきどのそうづ

の郎従、一言芳恩の軍勢共三百餘人、引返し討死しける間に、大將四郎左近入道は其身恙なくして、山内迄引れけるとあり。安保入道父子の墓も此邊近きにあるべけれども、今しりがたし。關戸入口相澤氏の構の中に古墳あり、上に樅の古樹茂りてあり、されども何人の墓のしるしなる事しるべからず。相澤氏の說に、安保入道の墳墓ならん歟といへども、今是非をしるべきにあらず。

小山田關舊址　今關戸と稱するところ則ちこれなり。或人云ふ、此地熊野社邊左右、高札場の地、其關の舊址なりと云ふ。按ずるに、此地に天守臺と云ふ所あり。此頂より眺望すれば、眼下に玉川の流を平臨し、又遙に上下野州迄一望に入りぬ。多摩川の南岸にそひて、古へ府中より帝都、及び鎌倉への街道なり。東奥北越の二道、共に此地を往還せざるはなし。小山田は、莊の名にして、此地も昔は同じ庄内にてありしなり。今は邑名にのみ殘りて、此所より二里ばかり南の方に小山田村と稱するこれあり。

夫木抄　或爲世

逢ふ事を苗代水にまかせてぞこさんこさじは小山田の關　讀人不知

六百番歌合

あふ事は苗代水に引きとめてとほしいでぬや小山田の關　顯昭

東鑑曰

祠官、府中に至り一宮小野三所の神輿を供奉しまゐらせ、御旅所において捧ぐる所の神幣を持し、神輿歸社の折も又供奉して、六所宮に至り、神事終るの後件の神幣を守護して直に一宮に歸り、當社の內殿に收め、粢盛を供し祭奠をなすを舊禮とするはもとつ社なればなりといへり。按ずるに、當社一宮の事、舊史に所見なしといへども、既に地名を一宮と號し、祠をも一宮と稱したるは、開國の祖神第一に鎭座なし給ふが故に、かく一宮とは稱したりしとおぼしく、舊祠なる事、疑ふべくもあらざるべし。依て考ふるに、東鑑治承五年四月二十日小山田三郎重成平太弘貞が所領を自らの所領に注し加ふると云ふ條下には、多摩郡の內吉富、ならびに一宮蓮光寺等の地名を載せ、百草村松蓮寺所藏の建久四年の經筒には、一宮別當松蓮寺と銘せり。しかる時は建久のむかし松蓮寺當社の別當たりし歟。又高幡村金剛寺に存する所の、文永十八年の鰐口の銘にも、一宮田人鍋師源經有と有りて、一宮の地名往々見あたれり。

一本榎　一宮より南の方半町ばかりを隔てゝ耕田の中にあり、樹の本に注連を繞らせり。土人百草八幡宮の一鳥居の舊跡なりと云ふ。（此所より百草の八幡宮へは其間凡そ十町ばかりあり。）

横溝八郎墳墓　小山田舊關の地より一町あまり西南、道より右の方の畑の中にあり。塚上松槻等の老樹繁茂せり。太平記に、正慶二年五月十六日新田左中將義貞公武州分倍河原へ押寄るといふ條下に、四郎左近大夫入道（相模入道の舍弟にして慧性と號す。）大勢なりといへども、三浦が一時の謀に破られて、落行勢は散々に、鎌倉をさして引退く。討るゝ者は數を不知、大將左近入道も關戸邊にて已に討れぬべく見えけるを、横溝八郎踏止りて、近付く敵二十三騎時の間に射落し、主從三騎討死す。安保入道道堪父子三人、相隨ふ兵百餘人、同枕に討死す。其外譜代奉公

一宮大明神社（いちのみやだいみやうじん）

朽に傳へんとす。比觀音の事は、松蓮寺の下に詳なり。又此時五百石の祭田を寄附の事ありしと云ふ。且つ兩將軍の隨兵等も、各軍功を祈り、帶する處の刀杖を收め、神德を謝す。爾來鎌倉賴朝卿當社の神を崇敬なし給ひ、建久四年法華經を書寫し給ひ、金壺に入て奉納ありしかども、星霜を經て件の寶器散失せしを、正德年間二王塚の地を穿て、再び是を得たりといふ。寺僧云ふ、當社境內の樹木、枯るゝ後は悉く奧州の方へ向て倒るゝ事、昔より今に至てしかり。是當社の一奇事たりと云ふ。

一宮大明神社　百草八幡宮より十五六町北の方、多摩川の南岸一宮村にあり。六所宮よりは、西南一里あまりを隔つ。祠官新田氏太田氏兩家より奉祀す。祭神は天下春命なり。後瀨織津比咩及び稻倉魂大神を合祭して、三神一社三扉とす。祭神今は小野神社に同じ。舊事本記に、饒速日命地神二代天忍穗耳尊の子なり。此葦原の中津國に降臨し給ふ時、輔佐として隨駕し給る三十二神の其一神にして、卽ち三十二國に分降給ふ。其時信濃國へは天表春命、武藏國へは天下春命降臨なし給ひ、國を開き給ふと見えたり。

社司相傳ふ、神代の昔當社下春命、此地に止り給ひし歟、或は又國の祖の神なれば後に國つ神たち之を祀り給ひし歟、今しるべきにあらず。社傳に一宮下春命小野宮村小野神社へ遷座ありて、倉稻魂命を配祀なし、小野神社三神となせしは、其時世詳ならず、然るに成務天皇の御宇、國造兄多毛比命武藏國多麻の地に府を開き給ひし後、一宮は開國の祖神小野宮は同鄕の舊社なれば、國造崇敬ありて倉稻魂命と共に合せて、再び六所の宮の相殿に遷しまゐらせ、これを祀るに國社の禮を設けられしとなり。又每歲五月五日六所宮大祭の辰、當社の

八幡社記にいはく、建久四年鎌倉右大將家法華經を書寫し、金壺に入れて當社に納め給ふ。其書寫する所の竹紙法華經の文字、多くは朽敗して、僅に殘るのみ。

升井 本堂の後山麓にあり、寺中常に是を掬す、尤も清泉也。

八國見 本堂の後の山の上にあり。此所に登れば八箇國の山々みえわたる故に此號ありといへり。

二王塚 松蓮寺より東南五町ばかりを隔てたる、山間の、少しく小高き所に、松樹十株あまり繁茂せし地をさしてしか稱す。此下を新堂と字するは、古堂宇のありし地なる故に名とす。又寶藏と唱ふる地もありて、今猶礎石こゝかしこに存せり。古へ大伽藍ありしなるべし。今松蓮寺に收むる所の經筒、および自然銅一寸八分の觀音の像ならびに、石瓶、朽壞の刀劍數十柄、華皿等のたぐひは此所に穿ちて得たりといふ。

百草八幡宮 松蓮寺より西の方、山の中腹にあり。則ち松蓮寺奉祀の宮たり。八月十五日を以て祭辰とす、本社向拜の額八幡宮の三字は、梅小路大納言定福卿の筆なり。寺僧曰く、正殿に安置する所の神躰は、八幡宮、神宮、王仁、津戸明、神武内大臣、義家公等の木像なりと云ふ。相傳ふ、康平五年源賴義、義家兩公奥州の夷賊征伐の時、山城國男山正八幡宮の社壇の土を穿ちて、石瓶に盛來つて、一字の社を造營して、此地に勸請なし奉り、願書等を收めらる。其後凶徒悉く平げ凱歌の時、再此地に至り給ひ、金銅の觀世音の像をも安置し、永く祭祀を不

の銘文あり。左の如し。

敬白治磨金銅影像法體彌陀坐光三尺六寸

奉爲皇帝　日本主君　當國府君　地頭名主
御願圓滿　安穩泰平　信心法主　子孫平安
悉地成就　師長父母　二親互魂　助成合力
同共往生　乃至法界　平等利益　建長二年
大歲庚戌　孟夏之天　七日壬子　南閻浮提
日本武州　多西吉富　眞慈悲寺　施主源氏
願主佛子　慶祐敬白

按ずるに、當寺の彌陀佛背面の銘文に、眞慈悲寺の號を注せり。東鑑文治二年二月三日の條下に、武藏國眞慈悲寺は、御祈禱の靈場なり、然りといへども、いまだ莊園寄附なきにより、佛は供具の備なく、僧は衣鉢の貯を失ふ、爰に僧あり、今日參上して當寺に一切經を安置し、破壞を修理すべきの旨申請の間、院主職に補せらるゝとあり。又同書建久三年五月八日の條下にも、法皇四十九日の御佛事を南御堂に於て修せられ、百僧供あり、僧衆は眞慈悲寺より三口とあり。又同書治承五年四月二十日の條下に小山田三郎友成多摩郡內吉富竝に一宮蓮光寺等の地を自の所領に注し加ふるなどあるによれば、吉富は此邊なりとおぼし。されども眞慈悲寺いつの頃廢せしや、今は其舊跡さへさだかならず。

大勸進
僧堯尊
大檀主藤原氏滿貞刊
永萬元年九月十七日天
其蓋裏曰
大勸進所百草村
松連寺

同一箇 金銅を以て製す、長さ五寸口濶り三寸一分、其文左の如し。

承
鈞命　祈
日本幕下
建久四年　一宮別當
八月　松連寺
修之

八幡宮本地佛阿彌陀如來の像金銅一尺四寸あり。土中出現の物にして、佛躰の背に鐫る所

經筒三箇、其銘文左の如し。一は銅を以て製す。長さ九寸二分、口廣さ四寸五分。

長寛元年大歳癸未十月十三日庚午

工匠藤原守道

大勸進聖人　僧辨豪

結緣者　僧玄久

如法書寫　僧觀賢

奉納妙法蓮華經

僧定圓

僧瑞久

僧定阿

僧堯尊

僧辨意

駈仕僧樂西

同一箇　銅を以て製す、長さ七寸五分、口廣さ渡り四寸一分其文左の如し。

茂草
松蓮寺

平氏の家に、小田原北條氏直の下文ありといへり。

慈岳山松蓮壽昌禪寺

高幡より十二町斗東南の方、百草邑にあり。昔は茂草に作る。八幡宮社地に源頼義義家兄弟、奥州征伐凱陣の時山號升井を改て増威とすと云々。　黄檗派の禪林にして、江戸白銀の瑞聖寺に屬せり。昔は天台宗にして、増井山と號す。天平年間道璿の高弟釋道廣大勸進し、始て七堂全備の精舍を創建す。其後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時、此地をよぎり給ひ、松蓮寺に投宿し、八幡宮を再興ありて、朝敵追伐の御祈願あり。又建久年間頼朝卿以來源家累代の祈願所に定られ、建長七年當寺の住持祐慶、相州より琳長師を請じて禪院に改むるといふ。慶長十五年松蓮寺方丈建營の棟札あり。本尊釋迦佛、坐像三尺斗あり。脇士は阿難迦葉の立像三尺なり。佛師藤村中圓彫造する所なりと云ふ。中圓は華人にして肥前長崎にありしとなり。　中興開山は慧極和尚と號せり。享保六年辛丑八月廿四日示寂。享保二年丁酉大久保加賀守忠英侯の夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基たり。元長尼は享保六年薙染して壽昌院慈岳と稱す。常に三寶を恭敬し竟に當寺を再興せらる當寺に。四十五才の木像あり。本堂内陣の額松蓮壽昌禪寺の六大字、及び總門の額慈岳山等は、何れも中興開山明慧極の筆なり。本尊の前に揚げたる紫金光の額は、隱元禪師の書なり。

祀の宮社たり。傳へ云ふ、金剛寺の本尊不動明王の脇士二童子を彫刻せし異僧、その像を造り終るの後、立去らんとす。近里の道俗喜悅のあまり、其跡に隨ひて此地まで來りけるに、件の異僧は忽にみえずなりぬ。貴賤奇異とし、此地に一社を建立し、別旅明神と稱す。地名も又別旅邑といふとぞ。

平惟盛之墓　金剛寺より一町ばかり西南、平村（平山村に隣れり。）農民又右衞門といへる人の構の中にあり。青き一片の板石にして、高さ七尺五寸あまり、巾二尺程、厚さ二寸斗あり。上の方にきりて字を彫り、下に文永八年辛未中冬日とあり。土人相傳へて平惟盛の碑なりと云ふ。往古此地に平助綱と云ふ武士住めり、平氏の遠裔なれば、惟盛の菩提を弔はんが爲に是を造るか。（年歷尤もいぶかし）或は又助綱が墓なりとも云ふ。同じ南の方二町斗山を登りて中腹に、又古碑あり。剝落して讀べからず。只今の一字のみ鮮明なり。高さ六尺餘り巾二尺ばかり、下は土中に埋む。其餘古石塔二基、何れも高さ四尺斗あり。土人平山季重或は又平氏の人の墳墓とも云ひ傳へて分明ならず。（此所は農民平氏某が家累世の塋域なり。康正年號の碑等もあり。）此地邑名を平と稱し、殊に平氏の人多し。里正

平村
平惟盛古墳
文永八年辛未

鎌倉大草紙に曰く、享德四年正月二十一日武州府中分倍川原へ寄來る、成氏五百餘騎にて馳出で、短兵急にとりひしぎ、火出る程に攻戰ひける間、上杉方の先手の大將右馬助入道憲顯深手負て引かねけるが、高旗寺にて自害す。鎌倉勢も勝軍はしけれども、石堂一色以下百五十人討死して戰ひつかれ、分倍河原に陣を取る云々（高旗寺といふは當寺の事をいふなるべし。）緣起に曰く、平山武者所季重幼より當寺の不動尊を崇敬し、世に强勇の名を顯せり、治承の頃平家追討の時も、鎌倉の右大將家に屬し、義經に隨ひて西國に赴き、一の谷に勇を輝し、武名世に明けし。故に其後當山の頂に、此本尊の御堂を建立す。然るに建武二年乙亥八月四日暴風の災に罹て、殿堂破壞す。依て後平地にうつせり。其頃の財主は平助綱、及び大中臣女等なりといふ。爾來天下風水或は疫癘等の諸災あらんとする時は、佛體汗を生じ給ふとなり。其威靈は枚擧すべからず。

木切澤　金剛寺より半町ばかり西の方の谷を云ふ。平季重御堂建立の時、此所より、堂材を伐出したる舊跡なりと云ひ傳ふ。

番匠ヶ谷　同じく一町ばかり西へ入る谷を云ふ。是も季重御堂建立の時、番匠の削彫の地なりといひ傳へり。

別旅明神　金剛寺より三町ばかり東の方、別旅邑にありて、此地の產土神とす。則ち金剛寺奉

高幡不動堂

奉懸

右尋當寺者。慈覺大師建立。淸和天皇御願所。第二建立斗圓陽成天皇。

彼時賴義朝臣。自於登山奉崇八幡。第三建立永意得行聟兩檀。

大檀那美作助眞幷記氏一宮田人鍋師源恒有

文永十年癸酉五月二十日

銀念西守氏　鐵青蓮

服石（ふくいし）　不動堂の後、愛宕祠の傍にあり。巾六尺ばかり、高さも五六尺ばかりあり。□あるもの此石を拜すれば穢に觸れずといふ。故に忌明の時、土人此石に詣て後、諸の佛神に參詣すといへり。

二王門（にわうもん）　左右に金剛密迹の像を置きたり。額（がく）　高幡山　僧正泊如（そうじやうはくによ）の筆（ふで）

惣門（そうもん）　二王門の左に竝ぶ。額（がく）　高幡山　僧浩然（そうかうねん）の筆（ふで）

鼻井（はなゐ）　庫裡の前左の方の山の裾にあり。廣サ七尺斗の井泉を云ふ。相傳ふ、建武二年乙亥八月四日の夜大風發り、御堂忽に顚倒す、故に平地に引下すといへり。其頃本尊の御首の墮ちたる所に淸泉涌出す、後鼻井と稱し阿伽とす。諸人寒熱の二病腫物眼疾等、其餘諸病ともに或は飲み或は痛む處に塗りて平愈せずといふ事なしといへり。

仁治二年辛丑十月二十二日丙子。以₂武藏野₁可レ被レ開₂水田₁之由議定訖。就レ之可レ被レ懸₂上多磨河水₁之間。可レ爲₂犯土之儀₁歟。云云。

按ずるに、武藏野に水田を闢き、又多摩川の水を用水に引きたりし權輿なるべし。

此河は武藏野の勝槩にして、日野津より以西は、水石の美、奇絶最も多し。以東は平地といへども、長流の經る所往々觀を改め、亦勝景なきにあらず。鮎を以て此川の名産とす。故に初夏の頃より晩秋の頃迄、都下の人遠きを厭はずしてこゝに來り遊獵せり。

高幡山金剛寺　高幢邑にあり。東鑑に高幡三郎と云ふ人の名あり、此所より出る歟。新義の眞言宗にして、花洛三寶院御門跡に屬す、大寶より以前の開創にして、其後弘法大師再興あり。又慈覺大師再興すといふ。本尊不動明王は、古佛にして作不詳。坐像一丈餘あり。炎光に布字十有九を刻し、利益無邊自心堅固の相をあらはせり。脇士二童子化人の作なりといふ。寺記に云ふ、或時忽然として化僧一人來り、告げて云く、此本尊に二童子なきは不可なり、予是を作るべしと。住持諾す、依て化僧は一室に入て戸を閉ぢ敢て戸外に出る事なし、不日にして造功畢ぬ、竟に異僧は去て其行方をしらずと云々。其室の地に稻荷を勸請す。古鰐口一口　不動堂に懸けたり、徑一尺九寸、文字九十四字を刻す。其一左のごとし。

敬白

拾遺愚草
定家

玉川ハ砂場廣く豁にして其流れ一帯ならす多く雨後ごとに渡口移轉して定まらず西北は秩父よりして甲州の諸山を望み東南ハ堤塘の斜に連るを見る鮎を此川の産とす夏秋の間漁多く常に漁人絶えず

其二
大山
長尾山
宿河原

登戸

多磨川
高尾山
常村
矢の口渡
中の島

登戸、二子、小杉、平間、河崎、等の地に傍ひ、荏原郡は、瀨田、等々力、下丸子、矢口、八幡塚、羽田、等の地に傍ひて流れたり。甲州國境より當國多摩郡羽村迄十餘里、羽村より六郷迄十六里と云ふ。武藏野地名考に、周流する事、凡そ四十里とあるは水源よりの行程なるべし。

萬葉十四

多麻河泊爾左良須氐豆久利佐良左良爾奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎

此詠を拾遺集戀の四には、よみ人しらずとありて、玉川にさらす手つくりさら〳〵にむかしの人の戀しきやなぞ、とあり。又六帖には、昔の今に戀しきやなぞともあり。

拾遺愚草

調布やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里　定家

建保名所百首

玉河にさらすてつくり更に世を頼む日かげのあはれ過ぎ行く　家隆

武藏國風土記曰　多磨郡　多磨河

出諸鱗及鵬鴿鶺等。亦里人作調布納内藏寮云云。

東鑑曰

額　本堂向拜に掲ぐ。南岳悅山の筆。

醫王山

額　堂內家帶に掲る當寺中興別峯旦筆

東光院

聯　左右の柱に掛る黄檗高泉の筆なり

[illegible]

[illegible]

諏訪社　八幡宮より六十歩斗東にあり。祭神建御名方命一座。相傳ふ、弘仁二年辛卯七月廿一日に勸請せしといふ。當社も宮崎氏兼帶奉祀す。

多摩川　當國第一の勝槩とす。和名類聚抄多磨に作り太婆と訓ず。萬葉集多麻に從ひ。武藏國風土記殘篇多摩とす。後世玉に作るものは山城、攝津及び紀伊、近江、陸奧等の國々にある所の玉川と共にあはせて六玉川と稱せしより、かく文字をあらためたりしなるべし。此川は武甲の堺丹波山に發し多摩郡の丹波村に添て流るゝ故に多波川とはいひたるなり。日蓮上人注畫讃大士臨終の時池上に移り給ふ條に、武藏國田波河の邊にして滅を示すべしともみえ、又北條家の分限帳にも多波川とあり。

水源は甲州丹波山に發し、田澤義章の武藏野地名考に、此丹波山を武藏とせしは誤なり。當國多摩郡に入ては日原川も會流す。多摩郡日原山小菅山等の山谷より發すと云ふ御嶽山の麓を經て、青梅の南に傍ひ、羽村四谷上水の掛口あり。及び福生拜島等の地に至る。又此地にて秋川の流も落會ひ、甲州境の地より發して、多摩郡伊奈村五日市村等の邊に傍て流るゝもの秋川なり又石田と云に至り淺井川も合し、八王子の山間より出たり。和泉村中島村等の地より末は、多摩、荏原、橘樹、三郡の間を東流し海に會せり。橘樹郡の方は

武州多東郡立河郷芝崎村八幡本地幷興願主立河宮内おねか

于時天正拾四甲戌年三月十五日

本願大夫式部

大工椎名土佐守

後光鏡之銘曰

武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮　鏡一面

爲家内安全　五十嵐與八郎

元文四年己未八月

醫王山萬願寺　同所南の方四十歩斗を隔つ。黄檗派の禪窟にして、鐵牛禪師居住の草庵の舊跡なりしを、後に一宇の蘭若となせしといふ。本尊藥師如來は坐像三尺斗、惠心僧都の作にして、脇士に日光月光十二神將等の像を安ぜり。

傳へたり。前に顯せし永祿三年の感狀にも、五十嵐市左衛門といへる名を注したり。何れも其氏族の徒なるべし。此故に今も此地に五十嵐氏の人尤も多し。按ずるに、五十嵐小文治は和田合戰に、朝比奈義秀に討れたる人なり。是を混じて土人あやまり傳へたる歟。

八幡宮　同所二町ばかり北の方にあり。神主宮崎氏奉祀す。祭神本多別命一座。相傳ふ、建長四年癸子八月十五日勸請せりと云ふ。本地佛は阿彌陀如來にして、黄金佛御丈四寸八分ありて、弘法大師の作なりといへり。背面は假面の如く、凹にして甚古色なり、按ずるに、世俗後光佛と稱するもの是なり。然るに天正年間野火の爲に神殿烏有となれり。此時に至り本尊失せ給ひて、其所在を知る人なし。仍て此地の領主立川宮内某の室此事を深く歎き思ひ、新に彌陀像一軀を鑄て當社に收らるゝといへり。其佛體の背面に鐫る所の文次に記せり、按ずるに、新像の際に梅鉢の紋あり、疑ふらくは、立川氏の家の紋ならん歟、或は其室の家の紋ならん歟。其後寶永年間宮社を造立せんとせし時、境内松の枯株の根を穿て、鋤下に失ふ所の本地佛金像の彌陀如來を得たり。其時の鋤の刄の跡尊像の御肸に印せり。又安永五年の夏賊の爲に奪はるゝといへども、靈威あるを以て、同年八月四日再び當社に還座なし給ふとなり。

天正年間新造立所之本地佛之銘曰

立川
八幡宮
諏訪社
満願寺

普濟寺境内六角古碑
高サ五尺寸 巾一尺四寸計
那羅延堅固
密迹金剛
增長天王

朝義軍敗。太田下野守爲」始多兵死。

南朝紀傳、康正元年巳亥正月廿一日、鎌倉成氏と房顯は、定政上杉長尾景中と武州立川原てに合戰云々。

小田原記に云ふ永正元年甲子九月二十七日、駿河の今川氏輝並に小田原の松田左衞門賴重はせ加りければ、此勢を合せて扇ケ谷の五郎賴良大將軍として武州立河原へ陣營を布き、山内の管領上杉民部大輔可淳入道並に當屋形憲房東八州の軍兵を催し押寄せ戰ふたり、夜に入りければ山内の加勢として、越後の軍勢はせ來りければ、朝良あらてにかけたてられて河越の城に落延び、梅酸の渇をやすむるよしみえたり。

六面塔　朔塔の中にあり、高さ六尺ばかり一片の幅一尺五寸あまりありて、六面の石は一片々々に盤石と臺石とを穿ちて立て合せたるものなり。前面の二枚には金剛密迹の二王を彫刻し、後面左右の四枚は、四天王の像を刻せり、上の方は何れも寶蓋タカラヅクシ」の如きものを鐫りて、其ありさま尋常の石工の手に出るものにあらず、極めて妙作なり、增長天の一片に年號等を刻せり、其文左の如し

延文六年辛丑七月六日　施財性了立

道圓刊

按ずるに、前に擧ぐる所の開山大定禪師肖像座下の記文に性了の名あり。六面塔の財主性了一なるべし。延文六年は康安と改元の年なり。應安三年に至り、わづかに十年なり。然ればいよ〳〵此人なるべし。

當寺境内の地は、多摩川の流に臨み勝景の地なり。富士箱根秩父郡の遠嶂等、一望に遮り、尤も幽趣あり。北の方は往古立川宮内大輔某の城營の舊址にして、其形勢を存し、懷舊の情を催さしむ。又小田原の北條幕下なりし五十嵐小文治といへる人も此地にありし由、土人云

應安三年戊十二月三日敬記

當寺境内北の方は、往古立川宮内大輔某の宅地たりしとなり。數年合戰の地にして、今猶林中に首塚と稱するものあるは、其謂なりと云ふ。（今も隍の跡と覺しき地存して、山中折として矢の根の類の武器を得る事ありといへり。又慶長の頃立川承賀などいへる人あり。ここに云ふ宮内大輔何れも其一族なるべし。）豐太閤の朱章あるを以て、當寺天叟宗祐和尚、御開國の砌寺領を乞奉り、朱璽をたまふ。又宮内大輔爲討伐佛閣を放火なし給ひ、靜謐の後は修理すべきとある證狀を賜ふ。其後住持覺榮宗理（天叟の弟子。）其事を愁訴する故に、御加増あるべき旨被仰下といへども、遲々するが故に、先榮和尚改衣の爲上京なし、途中遷化せり。其後久く無住の寺となり、朱章を缺くと云ふ。然るに寛永の末住持大年といへる僧、當寺に住せしが、故ありて廣福寺といへるに退去せられ、什寶の古文書古器の類を悉く持し去れりと云ひて、今は寺の朱章を傳へ存するのみ。

日本年代配合鈔曰

永正元年甲子九月廿五日。立河原於。山内顯定。扇谷上杉朝義合戰。

普濟寺
境内に延文
年間の銘ある
所の六面乃
石塔を存す

作者をしらず。此本尊の胎中に立川氏の家譜其餘の古文書を籠むるといふ、其記に平重能、平義親、平高親等の名を記せりといふ。

五十嵐市左衛門感狀曰

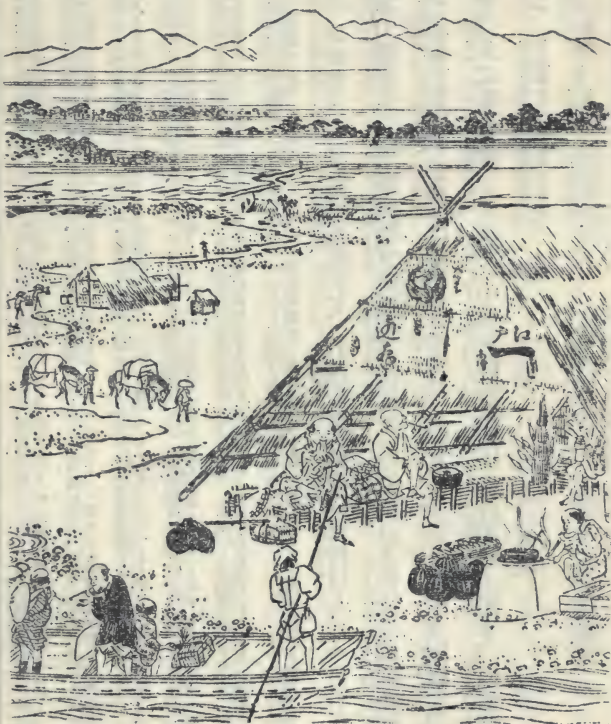
景虎御出陣の砌三田彈正忠政定先陣而大幡の陣所八王子城主北條氏照と及二一戰一没落の所五十嵐市左衛門竹田新八郎と云武士を討取二番著到賞功不レ跡時芝崎三十貫文所を被仰下者也依而如レ件

永祿三庚申年三月七日

立川宮内重能　在判

開山大定禪師眞像座下之記曰

彩色啓端。造立助緣、芳衞、辨翁、啓範、宗來、啓一、宗華、宗義、啓端、宗順、啓勝宗範啓壽壽、性了宗、宗快翁。塗師行盛。佛師上總法橋朝宗、幹緣。比丘啓達

日野津
ひのゝつ

年の遠忌により、其後裔津戸六郎右衞門法名順譽といへる者、造立する所の石碑なり。又爲守が住みたりし地は、同所多摩川の南岸石田といふ地にあり、今も八幡宿の中に其子孫連綿として相續せり。津戸三郎爲守は法名を尊願と號す、文章博士菅原孝標常陸介に任じ、下國の時武藏國の總追補使秩父權守平重綱が娘に嫁して一子を生ず、名を津戸次郎爲廣といふ、其三男爲守なり。爲守生年十八歳にして治承四年八月石橋山の合戰に馳參じて、賴朝公の旗下に屬し、度々軍に忠を顯し、名をあげずといふ事なし。建久六年二月南都東大寺供養の爲將軍上洛の事ありしにも、爲守供奉して同三月洛に入る、同じ廿一日法然上人の庵に參り、念佛往生の道を承りて後は、念佛の行者となり、建保七年竟に出家をとげ其先上人より贈らるゝ所の法名をつぎて尊願と號す、仁治三年十月廿八日より三七日の間、如法念佛を修す、同十一月十八日結願の夜穢土の住居無益なりと高聲に念佛し、ひそかに自ら腹かき切り五臟六腑を取出し練の大口に包み、忍びて後の河へ捨てさせにけれども、夜陰の事なれば人更に知る事なし。されども苦痛もなく十九日に至りても猶臨終の心地なかりければ、息男民部太夫守朝に此事を告げけるにより、始て人も知りける。翌る四年の正月十三日の夜夢に、來る十五日午剋に迎ふべき由、上人告げ給ふとみる。覺めて後件の日に至り上人より賜ふ所の袈裟をかけ、念珠を持て西に向ひ端座合掌して高聲に念佛し、午の正中に息絶ぬ、紫雲空に靉靆し異香室にみちつ、腹切て後水漿を斷て五十七日氣力常の如くして往生をとげけるも甚奇にして、殆ど信をとりがたしと雖も、彼子孫上人の御消息ならびに念袈珠裟等を相傳して披露する事、世以てかくれなし。唯是尊願が不思議の奇特を載するのみ(以上圓光大師行狀翼賛の要を摘採す)

玄武山普濟禪寺

日野渡口より此方の岸頭を、右へ十町斗入て、芝崎村と云ふにあり。此所を立川と云ふ昔の郷の名なり今は小名となれり。濟家の禪林にして、相州鎌倉の建長寺に屬せり。開山は眞照大定禪師物外可什和尚と號す。貞治二年癸卯十二月八日寂す、禪師の墳墓及び肖像あり本尊は正觀世音坐像二尺斗あり。左右に十六阿羅漢、十大弟子等の木像を安ず。共に作者詳ならず。中興大檀那は立川宮內大輔と稱す。法名は寶山道貴大禪定門といふ。靈牌は當寺にあれども其墳墓の所在をしらず

佛殿　惣門の內にあり。本尊は釋尊にして、坐像三尺斗あり。脇士、文殊普賢二尺斗、共に

菅原道武朝臣舊館地　同所二町斗南にあり。空堀城門の跡と覺しき所も見えて、四方二町あまりの封境なり。土人三郎殿屋敷跡と稱す。相傳ふ、三郎道武此地に住し、當地の縣主上平太貞盛の女を娶り、一子を得たり。其子を菅原道英と號す。夫より六世の孫を、津戸三郎爲守と號くると。（津戸爲守の事は安樂寺の條下に詳也。）或は云ふ、此地は貞盛舊館の地なりとも。（道武主貞盛の女を娶りたる等の事は未だ考へず。）

假家坂　同所安樂寺の門前百歩許街道の西の方へ向ひて上る坂を云ふ。建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向し給ひし頃、假に旅館を設けし舊跡なる故に此號ありと云ふ。

梅香山安樂寺　松壽西院と號す。天神社より一町半あまり西北の方、街道より右側にあり。天台宗にして東叡山に屬せり。當寺は天滿宮の別當寺にして、天暦年間法圓大僧正開創せりと云ふ。中興は津戸三郎爲守尊願なり。本尊阿彌陀如來は法然上人の作にして、坐像一尺五寸斗あり。佛躰の中に爲守注する所の血文を收むると云ふ。其餘什寶に爲守の太刀一振、同畫像一幅、同甲冑の中に籠たりと云ふ藥師佛あり、傳教大師の作と云ふ。像材は沈香にして、十二神將の像迄、悉く高サ一寸斗の厨子の内に造り籠られたり。（津戸三郎爲守の墓は、八王子の市中觀池山大善寺といふ十八檀林の淨刹にあり、寛保壬戌五百

額　天滿宮　後宇多天皇の勅、世尊寺經朝卿の筆

額の裏に左の如きの二十四字を刻せり。又外に、同じ額の寫一枚あり、水戸黄門光圀卿、これを奉納なし給ひしとて、裏書に元祿三年庚午眉毛軒河埜門入敬彫とあり。

經朝卿の筆せられし額の背面に曰く、

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣經朝

常盤淸水　裏門出口道の端に小き池あり、中島に辨財天を安置す。淸泉湧出する事尤も夥しく、下流水車を設けて日用の助とせり。延寶年間筑紫の僧某、當社へ詣でし頃、和歌を詠ずるより常盤の淸水と稱ふるとなり。

本地堂　本社の右の岡にあり、本尊十一面觀音の像は慈覺大師の作と云ふ。　道武朝臣靈社　本社の後にあり、土人三郎殿と稱す。

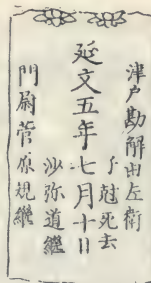
社傳に云く、昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左遷の時、御三男菅原道武朝臣も又此地に流されさせ給ひ、三年の星霜を經給ひしに、延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫にて亡び給ひぬと聞き、悲歎のあまり配所の徒然に、父君の御像を手親模刻し給ひ、旦暮在すが如く事へ、孝道の誠を盡され給ひしを、後に一社に奉じまゐらすとなり。　昔は大社にて僧房も多かりしとなり。櫻本坊、呂盛坊、尊住坊、梅本坊、松本坊、瀧の坊以上六坊中古迄も猶殘りてありし、夫さへ廢れて今は瀧の院と號する一字のみ存せり、是古への瀧の坊なり。　天曆に至ては、村上帝狛犬一雙を寄附なし給ふ。今猶存せり甚の古物にして奇なりとす。又大般若經四卷を收む。源義經朝臣の奉納なりと云ふ。伊勢三郎龜井六郎及び辨慶等の四人書寫する所の經の卷なりといへり。

清水立場
甲州街道の立場に
して此辺にてかしこに
清泉湧出するゆゑに
清水村の称ありと
云此地に酒舗あり
て店前清泉沸
流を夏日ハ索麪
を湛して行人を饗
應せり故に此地
往来の人こゝに
憩ひて炎暑
を避るハ
なし

谷保天神社
社内に常磐の
清水と称する
靈水あり

宗にして府中の妙光院に屬す。開創の始久うして、今しるべきにあらず。永正二年乙丑權大僧都法印良尊中興す。本尊大日如來は一尺斗の坐像にして、作者未だ詳ならず。當寺に津戸勘解由左衛門尉菅原規繼墓あり。

墓碑如圖

津戸勘解由左衛
延文五年七月十日 了魁死去
沙弥道継
門尉菅原規継

按ずるに、此勘解由左衛門規繼は、津戸三郎爲守の氏族ならん。爲守の墓は八王子の觀池山大善寺にあり。今八幡宿の農民六右衛門といへるものあり、津戸氏にして其遠裔なりといふ。

谷保天神社　同じ街道西の方、谷保村道より左側にあり。此所は分倍の庄栗原の郷と云ふ 別當は安樂寺と號す。祭禮は毎歳二月と八月の廿五日、又三月十五日には開扉あり。十一月三日は當社往古天神島と稱る地より、今の地に遷座なし奉りし緣により、此日に小菜供を献備するといへり。本社祭神天滿大自在天神一座、神躰は菅家第三嗣菅原道武朝臣の手刻なり。

と號す。本堂に武野禪林の額あり、筆者詳ならず。

藤原秀郷靈祠　境内坤の方にあり、今稲荷明神に勸請す。此地は秀郷の宅地の舊跡なるによれり。

辨慶硯水井　堂の後の竹藪にある所の古井をいふ。辨慶此井水を汲んで硯の水とし大般若經を書寫せしといふ。然れども、其經は燒失したりとて今はなし。又辨慶の畫なりとて、辨慶机によりて經を書寫する樣を畫きし掛幅あり、絹地にして甚古雅なるものなり。又こゝに西北の方甲州街道に架する所の橋をも辨慶橋と號け、東の坂を辨慶坂と呼べり。すべて辨慶に因ある事而已多けれども、辨慶が事は水戸黄門光圀卿の撰び給ひし大日本史にも除き給ひしは、名ありて實なく、證とすべき事なければなるべし。

觀音堂　表門を入て正面にあり、本尊正觀音は木佛立像七尺あり、左右六觀音の像は、何れも四尺五六寸あり、作者詳ならず。當寺は足利家の再興により、永德元年鎌倉左兵衛督氏滿小山義政退治として發向ありし頃も、當寺に陣座を設けらる。又應永六年には左兵衛督滿兼、周防の大内助義弘が京都に於て逆心を起せし時、同十一月廿一日京都の手合として、當寺に動座なし給ひ、同三十年癸卯春も又、常陸國の住人小栗孫五郎平滿重が謀反により、鎌倉より持氏公結城へ發向、同年八月小栗落城の後、同十六日當寺に歸座、同三十一年十月廿三日當寺炎上ありしかば、同十一月十四日持氏公鎌倉へ還御ありし等の事、鎌倉大草紙に見えたり。當寺什寶の中に、往古尊氏公陣中にて用ひられしと云ふ古き銅鑼一口ありしが、近頃紛失なしたりとて今は見えず。

石上山彌勒寺　般若院と號す。高安寺より六町あまり西の方、同じ街道の右側にあり。眞言

按ずるに、延喜式に、小川牧とあるものは則ち小野の牧の事なるべし。小野は府中の總稱にして、府中古へ小川郷に屬せし事、武藏國風土記にみえたり。今小川といふは戀ケ窪の西北にありて、漸く小名に殘れり。今小金井村の上の方を小川新田といふも、その小川より出たる名なり。

諸源山稱名寺　府中番場宿北の横小路の右側にあり。時宗にして相州藤澤の淸淨光寺に屬す。本尊には惠心僧都彫造の阿彌陀如來、立像三尺八寸あまりの靈佛を安ず。此地は往古六孫王逕基居館の舊跡なりと云傳ふ。古は六孫王山經基寺と號せしとなり、中古は正明に作る、今稱名に改む。其後一光道和上人當寺を草創す。應永元年三月七日寂す。後復遊行上人當寺を再興ありしとなり。當寺に古き太鼓の胴を收む。尤も古物にして、内に年號等を記すといへども、文字讀得べからず。按ずるに往古の陣太鼓ならん。

龍門山高安護國禪寺　等持院と號す。六所宮御旅所より九町ばかりを隔てゝ西の方、甲州街道の左側にあり。洞家の禪宗にして、多摩郡二俣の海禪寺に屬す。本尊釋迦如來御丈一尺五寸計。脇士文殊普賢の像、賢俊法眼の作なりと云ふ。當寺は俵藤太秀郷の開基にして、秀郷の宅地の舊跡なりといへり。其後足利將軍尊氏公中興あり。故に尊氏公の法號を採て、等持院と稱す。則ち尊氏將軍の肖像あり。當寺其先は市川山見性寺と號せしと也、當寺を秀郷居住の舊跡の故にしか呼ぶと云ふ。東西南の三方今も堀を構へたる形殘れり。開山は大徹心悟禪師

石川　田（由歟）比　立野　小野　秩父　已上武藏

延喜式　左右馬寮式曰

御牧　武藏國

石川牧　由比牧　小川牧　立野牧

右諸牧駒者。每年九月十日。國司與二牧監若別當人等一。（信濃、甲斐、上野、三國仕二牧監一、武藏國、仕二別當一。）臨レ牧撿印。共署二其帳簡一。繫二齒四歲已上所レ堪レ用者一調レ良。明年八月。附二牧監等一貢上。若不レ中レ貢者。便充二驛傳馬一。下略。

又同書曰

凡年貢御馬者。中略武藏國五十疋。（諸牧三十疋。立野牧二十疋。）凡諸國所レ貢繫二飼馬牛一者二寮均分撿領。訖移二兵部省一。其數中略武藏國馬十疋。下略。

此餘北山抄、西宮記、中右記、猶其外にも小野の牧の名往々にみえたり。悉く擧ぐるにいとまあらず。

年中行事歌合

むさしのをわけこし駒の幾日(いくか)へて今日(けふ)紫の庭に出づらん　頓阿

欅枯樹　社の後にあり、今蟠根を存するのみ、周圍十尋斗其根上百人を座せしむべし。蘖既に枝高く聳へ天を摩し殆ど二千餘歳の想あり。

神道　多摩川の南、一宮より此地小野神社へ通ずる田畝の徑路を云ふ。古へ一宮御神より小野遷幸の時の舊路にして、中古迄は一宮の祠官此路を經て小野社に至り、然して後六所宮へ來りしとなり。其頃は一宮より空輿を舁來れるにより、小野宮邑の里民擧て多摩川の岸頭まで送迎せしよし、一宮祠官の口碑に傳ふ。

小野牧　今いふ所は府中の北國分寺の邊より、小川砂川の間の農田となりし地、其牧の舊跡なりと云傳ふ。小野はすべて府中の惣稱にして尤も舊名なり。猶前の小野宮地名の條下に詳なり。往古當國の國造、年々八月に至れば、此地にて駒を選びて鳳闕に獻じたるとなり。公事根元に、八月廿日武藏國小野御馬四十疋をひかるゝとあり。六所宮馬市及び馬場の條下に詳なり合せみるべし。

拾芥抄曰　年中行事部

八月二十日。牽二武藏小野御馬一云云。

又同書　牧名

延喜式神名帳曰　多磨郡八座

小野神社。云云。

三代實錄　光孝天皇紀

元慶八年七月十五日癸酉。授武藏國從五位上小野神正五位上。云云。

社記に云く、當社祭神上古は瀨織津比咩一座なりしに、一宮下春命を遷座なし奉り、又倉稻魂命を配祀して、小野神社を三神となしまゐらせし事は、其時世しるべからず。最も舊社なるを以て、成務天皇五年乙亥の秋、諸國に令して、國郡に造長を置き給ふ時、兄多毛比命も詔を奉り、當國の國造として此地に至り、小野縣に府を闢き給ひしより後、崇敬厚く、再び當社の御神を六所宮の相殿に遷しまゐらせられたりとなり。（六所宮に、客來三所と稱するものは即ち是なり。下春命は後に遷座の御神なれ共、却て是を尊み祭りしとおぼしく、六所宮にても客來三所の内下春命を第一とせり。）しかありしより、僅に茅祠一宇を存して、其舊址を標するのみなりといへども、實に千載の古を想像つべし。

小野神社

陣街道　小野宮と分倍との間の耕田の地にして、府中本町より關戸へ行く道の名とす。昔奥羽等の國々より、鎌倉或は大磯などへの往還の道にして、鎌倉より北國東國へ軍勢を向けらるる頃の通路なりし故にかく稱すといふ。

小野宮村　陣街道を隔てゝ、分倍より艮に當れる地をしかいふ。府中本宿の内、僅に家數三十軒ばかりの間をも小野宮とよべり。小野は上古郡村定らざる時よりの號にして、小野縣と稱せしもの是なり。今は府中の舊名となれり。和名類聚抄に、多磨郡小野乎乃とあり。此地墾田となりしは、元龜天正の頃にして、小野宮の耕田をさして向田といふ。田地開發の始は、漸く田數五反程ありしとて、土人五反田と字せりといふ。又小野宮の北田間の塚は、中古の甲州街道、府中より日野へ往還の一里塚にして、今も其野徑を古街道と唱ふ。

小野神社舊址　小野宮村陣街道の右にあり。今纔に叢祠を存するのみ。六所宮の條下に詳也、合せみるべし。

武藏國風土記曰　多磨郡　小川鄕

小野神社　圭田五十六束三字田。

所祭瀨織津比咩也。

垂仁天皇三年甲午。始行祭禮。有神戶巫戶等。云云。

て陣をとる。兩軍府中の驛にて相戰ふ。以上の合戰は、太平記、鎌倉大草紙、北條五代記等に出て詳なり。此餘も度々血戰ありし地にして、土人今も遇此所の田間を穿て兵器を得るものあり。此地小野宮内藤重斎といへる人、此地にて一ツの矢の根を得て是を藏す。

大サ圖の如し櫻の花は透しにしたるものなり。

三千人塚 六所宮より南の方十五六町斗を隔てゝ道端にあり。高さ三尺斗方九尺あまりの塚ありて、上に其巾二尺八九寸、土より上に出る所二尺八九寸の青き板石の古碑を建てたり。漸く大なる梵字一字のみあらはれて、其餘は土中に埋れて其根をしらず先の年縣令の下知によりて、此石碑を掘出したりしに、三千人の亡骨を埋藏するよしの文字を鐫てありしよし、此地里正の口碑に傳ふ。按ずるに、正慶、享徳、享祿等の合戰に分倍河原にて討死せし人の墓なるべし。

代小川 府中の南を流る。西の方二里あまりを隔てゝ、青柳村より多摩川の水を分て、此邊耕田の用水となせり。或人云ふ、古へ此地を小川郷と號す。今の代小川は即ち往古の小川の變稱ならん歟といへり。しかるやいなやをしらず。

按ずるに、慶長年間官府より六所宮へ寄せたまひし書の中に、六所宮川端にありと注されたるは、其頃多摩川の水流數條に分れて、其社邊をも流れたりし故にしかあるならん。されど慶長以後樋を製し川を埋め墾田とせしより、川漸く減じ、今の如き地勢となりしともはる、依て再び按ずるに、今小野宮耕田をさして土人向田と字し、同じ南を中河原と號するなど、何れも川を隔てし證とすべき歟。

の像もあり。内陣の額に毗尼藏とあるは、准后公遵法親王の眞筆なり。解脱居士の墓は堂の後にあり。彼岸山文庫は本堂の右にあり。庫中收藏する所の書籍は、解脱居士の藏書にして、すべて百二十二箱あり。此文庫に收むる所の書籍目錄一冊あり。

津保宮　同所四町ばかり西南の方、下河原農民の地にあり。當社は國造の靈社なりといふ。今纔に茅祠を存するのみ。されど每歳五月五日六所宮大祭の節は、當社より六所宮へ奉幣使を立る事舊式にして、則ち六所宮の神官馬に乘して是を勤む。

按ずるに、津保は壺の謂にして、つぼきといふ意ならん。源氏物語桐壺卷にあん前のつぼせんざいの、いとおもしろきさかりなるを、ごらんずるやうにてと云々。河海抄に、延喜元年に壺前栽に草を植ゑ木を加へらるゝ由みえたり。壺とは家居の建て籠めたる中の庭を云ふなるべし。當社も、むかしの國造の庭にありし宮居なりし故にかくは稱ふるならん歟。

分倍河原　同所の南、代小川を隔たる耕田をいふ。今下河原中河原などと稱ふ。太平記、鎌倉大草紙、南朝記傳等分倍に作る。分梅に作るは其證をしらず。正慶二年の夏、新田義貞朝臣鎌倉勢と合戰ありし地にして、其時討死せし人の墓あり。土人首塚、胴塚など稱へて、今猶此所の田間に存す。亨德四年の春も、鎌倉成氏、上杉房顯ならびに持朝と此地にて爭戰し、大に上杉勢敗北す。又亨祿三年の夏は、北條氏康向ヶ岡の小澤の原に屯し、上杉朝興は多摩川を前にあて

分倍河原
陣街道
首塚
胴塚

按ずるに、國造は、神武天皇都を大倭國橿原に定め天皇の位に即き給ふ時、葛城の國の造〔ミヤツコ〕を定め其餘功ある者に國造を賜ひ、又縣主〔アガタヌシ〕を定め給ふよりこのかた、代々に任ぜられたり。和銅の頃迄總任の國造百四十四員あり、皇朝上世は百四十四箇國にて、國毎に國造一人づつありて神祇祭祀を掌り、かねて民事を治めたりしなり（嵯峨天皇より以後諸國に分割併省なし。ゆゑに六十六國に壹岐對馬の二島邊要して、六十八國なり）日本紀によつて考ふるに、仁德帝の御宇に、遠江國司又崇峻帝の御宇に、河內國司と云ふ事あり、聖德太子の憲法にも國司國造の事みえたり。天武紀にもろ〳〵の國司國造郡司および百姓等とあれば、後又國司を置き給ひ、尤も國司は國造より位高く權重き故に、國司國造と次第して稱せられしとおぼゆ。これより後世々の國史にも往々國司國造の事を載せられたり。されどいづれの世に國造をやめられしといふ事もなく、いつしか廢せしと思はれたり。

是政村　府中の南、多摩川の北の岸頭にあり。此地の里正に井田氏の人あり。其家系を按ずるに、祖先は畠山庄司重忠の四男、井田四郎重政の末葉にして、小田原北條家の臣、井田攝津守是政が子孫なりと云ふ。天正十八年小田原沒落の頃、八王子の城敗れしより後此地に住す。依て是政村の名あり。

悲願山善明寺　圓養院と號す。府中本町より、關戶へ行く道の右側にあり。（相模街道にして古の鎌倉通道なり。）天台律院にして、常明院に屬す。本尊に阿彌陀如來の像を安ず。坐像一丈六尺あり。（胎中に慈覺大士彫造の彌陀如來の像を安ず。）開創年久く、中古寺院荒廢して記錄を失す。然るに近來編無爲解脫居士（俗稱依田伊織貞鎭といふ。）當寺を再興ありて、證海上人を中興開山とし、田園等を寄附せり。故に居士の肖像あり。（束帶の像なり側に弟子證海

安養寺

大悲殿の額は、僧禪大僧正覺眼の筆と云ふ。本尊十一面觀音の像は、御長二尺五寸ありて、聖德太子の作といふ。當寺什寶に北條氏照の書簡二通を藏す。其餘蘆に鷺の畫幅は、御筆の物にして、牡丹唐草に扇を縫物したる五條の袈裟と共に、御當家より賜ふところなりといへり。

古磬一枚 華物にして銅色愛すべし。臺は左甚五郎が作る所なりと云ふ。

叡光山安養寺 妙光院の南の小路を隔てゝおなじ竝にあり。此地の小名を矢の崎といふ。天台宗上州世良田の長樂寺に屬す。本尊阿彌陀如來は坐像一尺六寸ばかりあり。作者詳ならず。永仁年間尊海上人中興開山たり。近き年地魚の災に罹りて、舊記を亡すといへり。

武藏國造兄武日命殿館舊跡 妙光院の前の岡を云ふ。上古國造居館の地なり。御入國の後此舊跡に省耕の御殿を建させられしより、大樹屢こゝに入らせられたりしかども、正保三年丙戌十月十二日府中本町より出火して、此御殿燒亡せり。其後は御再興もなきにより、享保年間里民の乞ふに任せ、陸田となし下さるゝとなり。故に土人は御殿地と稱せり。此所の眺望尤も勝れたり。

札の辻の傍にあり。毎歳五月五日大祭の辰、其夜六所宮の神輿をこゝに遷し奉る。其式は前の條下に詳なり。

御田　六所宮の後の小徑を過ぎて、百歩ばかりにあり。豁然たる稻田なり。東は悠遠にして、眺望分明ならず。南は多摩川の流を隔てゝ、長岡の上に短松の立するを見る。世に所謂向ヶ岡是なり。此地北は府中の驛舍にして、六所の林叢鬱然たり。（御田植の神事の次第は前の六所宮年中行事の下に詳なり。）

本覺山妙光院　眞如寺と號す。府中本町の南の小路にあり。新義の眞言宗にして、花洛仁和寺の御門跡に屬す。淸和天皇の御宇貞觀紀元の年、眞如法親王の御願によりて、慈齊僧正創建ありし佛刹たり。行基大士彫造の地藏薩唾を本尊とし。（長五寸五分）若干の田園を附せらる。然るに當寺度々の兵燹に罹り、大に荒廢なしたりしを、永享十一年己未、法印宥源（長祿三年己卯七月二十四日寂す）再建して當寺中興の開山となれり。（天正十九年辛卯、御當家より寺領を賜ふといふ。）本堂家帶の額、眞如寺の三大字は、勝仙院僧正日光の筆。同じ向拜に揭る本覺山の額は、南山の沙門乘鎭の書。裏門本覺山の額は天漪の筆。書院無爲心の額は、佐々木立龍の書なり。觀音堂は門の入口、左の山の上にあり。

四年右大將頼朝公當社に詣で請禱し、大に戰勝の功あり。文治年間宮社を再興し、又壽永年間繼嗣を求め、頼家公を儲く。葛西三郎清重をして、神器を獻ぜしむ。寛喜四年にも、武藏左衛門尉資頼を奉行として、當社破壞の修理を加へらる。命ずる所の祭祀、今に連綿として廢せず。其後足利家に至る迄、世々の將軍家相繼で崇敬衰へず。就中御入國に逮んで、御當家より尊信なし給ひ、社領五百石を附し、御祈禱の事を命ぜらる。關原大阪の兩役には、當社の神主猿渡左衛門佐盛道をして、御勝利の御祈禱を修せしめ給ひ、御感狀御直書を賜ふ。其後二代將軍家よりも、又御書判の御直書を賜ふ。殊に御在國の總社たるを以て、慶長年間石見守大久保氏某をして、神殿を新にし、國家の祀典に列せしむ。且命を下して馬市の法則を定め給ふ。其後正保三年府中本町より火出て、當社神領の地に至る迄、皆悉く燒亡す。依て寛文七年丁未、大和守久世廣之侯をして、造營使となし給ひ、宮社御再建ありしなり。寛永元年註す所の社記に云く、神主猿渡三河守藤原盛道、天正年間北條陸奥守氏照の爲に八王子の城に籠る、此城没落の時、盛道こゝに戰死す。又此兵火の災にかゝりて、當社悉く灰燼せり。故に其頃世々將軍家の證狀、或は祕藏の神寶等こと〲く亡びたりとなり云々。

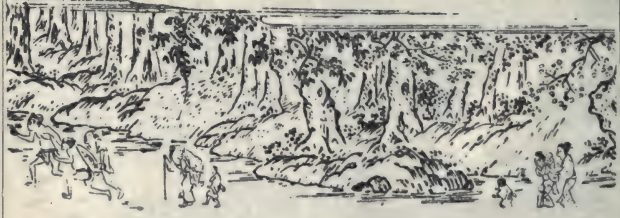
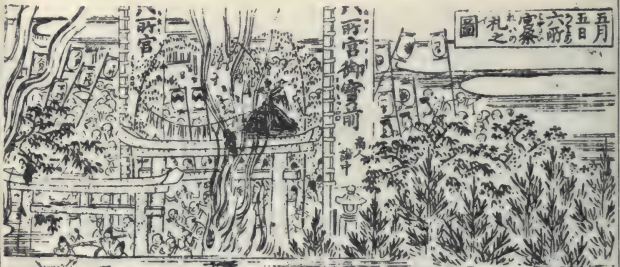
六所宮御旅所　六所明神より一町半ばかり西の方、府中番場宿の中程、相模街道への岐道

り、祠を經營して里人崇敬し奉る。大麻止乃豆乃天神是なり。延喜式大麻止乃豆とし、風土記大麻止乃知とす、知と豆は通音なり。又大麻止を以て於保麻止とし、或は布止麻止多麻止など、さま〴〵に稱へたり。其後成務天皇五年乙亥、兄多毛比命をして、此地に國造たらしむ。天穗日命の孫出雲の臣祖、名は二井宇迦諸忍之神狹命十世の孫なり。因て玆に府を開き給ふ。武藏國の國造のはじめにして府中の發るもとなり又大巳貴命は此地出現の靈神なれば、是を崇み、其祖神なるを以て、素盞嗚尊を合祭し、兄多毛比命は出雲の臣の裔なるを以ての故にして、當社祭神の內、殊に素盞嗚尊を崇尊する事、神祕ありと云ふ。相殿に伊弉册尊、瓊々杵尊、大宮女命、布留大神等の四神を配祀し、新に此地に宮祠を經營ありて、圭田を附して以て國社となし、此を稱して六所宮大麻止乃知天神と云ふ。又天下春命一宮の祭神なり、其條下に詳なり。瀬織津比咩小野神社の祭神なり、其條下に詳なり。倉稻魂大神小野神社相殿の神なり。以上の三神を、六所宮の相殿に遷座なして、客來三所と稱し奉り、是を祭るに國社の禮を以てす。爾來大麻止乃知天神、小野神社二社合祀の社とはなりたりしなり。安閑天皇乙卯年に至りては、春冬二時の祭祀を行はるゝ由舊史にみえたり。然るに星霜を歷て康平五年に至り、源賴義、義家兩公、奥州安倍貞任、宗任一族征伐發向の時、當社に詣で給ひ、軍の勝利を祈願ありて、夷賊平治凱歌の時、報賽として一華表の內、左右兩邊に槻數株を種しめて、以て成功を謝し奉る。其列樹今猶存す。治承

六所宮
田植
五月六日ハ御田植
の神事とて武蔵
國の人民早苗を
携へ来りて神田に
是を挿めり御童
白鷺の形の造り
物ある蓋鉾をさゝ
げてせんざいこうしろ乃
傘と唄ひ鼓ハ又

八所大明神

五月五日六所宮祭禮之圖

神樂（かぐら）　同月四日、拜殿に於て修行す。

競馬（くらべうま）　毎歳五月三日の夜、六所宮の御旅所の前、甲州街道府中番場宿の大路にて、駒役の者十二疋の駒に乘じ、燈火を消して後、暗夜に乘り競ぶ。此夜社家の輩檢使として、御旅所の傍なる假家に伺候す。

大神事（だいしんじ）　同五日に修行す。當社の御神出現鎭座の辰なる故に、殊に恐れかしこみ、神官各々四月二十五日品川の海濱に至りてみそぎし、其日より禁足して齋に籠る。當日は終日神樂を執行す。黄昏に及び、社家一統神主の宅に集會す、其後神殿に至り神勇（カミイサメ）の大祝詞を捧げ、終て燈火を消し暗となして、神輿をわたし奉る。神輿八基の内、七基は二の華表の前より甲州街道の大路を西へ渡しまゐらす、一基は隨身門の前より左にわかれ府中本町の方より出て、ともに番場宿の角札辻の御旅所へ遷しまゐらす。此間社家の輩馬に乘じ下河原に鎭座の津保宮に至り、深祕の神事ありて。大幣を捧げ、歸り來て御旅所に入り奉幣の式あり、神事終て神主猿渡氏、農夫野口といへるが家に假家を設けたるに至り、古例の祝事をなせり。相傳ふ、此野口と稱ふる家は、往古大巳貴命始めて出現の時一夜此家にとゞまり、給ひしとなり又同じ農家岡野といへるは、其夜門戸を閉て深く愼み居る事舊例なり。此家は大巳貴命出現の時、宿を求め給ひしかど思ひの事ありて一家穢れはべりしかば辭し申せし事の古き例を改めずして、かくするといへり。御旅所の神事舊式悉く終りて、禰宜本社に歸り、還幸の設をなせり神主は神馬に乘じ御旅所の前において流鏑馬を行ふ。終りて太鼓を打ちならせば、凡て社壇より、市店に至る迄一時に燈火を點ずる事先の闇きに引かへて尤めざまし。神主は馬上にて前驅たり、鳳輿に及で二鳥居の左右と本社の前隨身門の前西の馬場缺場の方へ至るの間等、凡て四箇所にて篝火を焚て白晝の如し。又神輿供奉の道路を照す所の提灯尤も多くして實に壯觀たり。

御田植神事（おんたうゑのしんじ）　同六日に修行す、祠の後百歩あまりを隔てゝ南の方の稻田に於てこれを行ふ。此日當國の人民當社に詣で神田の豐熟我上におよばん事を願ふが故に秧を持し來りて田上に集り、一朝にうゑ終りて後、或は踊り或は角力を催し、其興とりどりなり。依て秧悉く泥に浸すといへども明日に至れば勃然として起く、又其種を異にすといへども終に穗を同くし、節の進退により違あるも、歲として稔ならざる事なく、水旱蝗螟の災なし。俗傳へて、當社七奇事の一とす。

天下泰平神事（てんかたいへいのしんじ）　六月廿日に修行す。粢饋を供し、神樂を奏す、康平五年六月廿日賴義、義家兩公奧州發向の時、戰勝ありしより此日を以て祭るといふ。

小祭（こまつり）　七月七日に修行す　俗帷子祭、又は帷子市とも稱ふるは、古へ此邊多く、麻布を製すを以て產業とす、其頃此府に出し、國守の選ありて都に貢奉り其餘のものをば此地にて交易せしなり。中にも七月七日を專らとせし故に此名ありといへり。

天下泰平神事（てんかたいへいのしんじ）　七月十二日十三日兩日の間宮之姫社と本社とにおいて、神樂を奏す。前の宮之姫の社の前に詳なり。

田面神事（たのものしんじ）　八月朔日神樂を奏す。參詣の輩、其年の豐熟を祈る。此日角力を興行せり。其餘一年の間の祭事は尤多く、ことごとくこれを擧るに遑あらずして、こゝに其大槪を記すのみ。

社記（しやき）に曰（いは）く、景行天皇（けいかうてんわう）の四十一年辛亥五月五日、大巳貴命（おほあなむちのみこと）此小野縣（このをののあがた）に出現（しゆつげん）、神託（しんたく）あるによ

くは社司の住居となりて、わづかに其形を存するのみ。されど細馬缺馬等の馬場の地は、古へ牧の駒をえらびたりし舊跡なりといふ。

馬市（うまいち） 毎歳五月三日に始りて、九月晦日に終るを定規とす。社前大路の傍に制札を建て以て誓す。此地の馬市は、國造の在せし頃、毎歳牧の馬を取り、其良二十五匹をえらびて是を帝闕に獻ず。しかして後諸國より牽き來る所の馬を集めて、人民市をなすとなり。

此馬市享保年間に止て、其後は江戸淺草の藪の内と麻布十番との二所へ引かれたり。然りといへども、御佳例の馬市なればとて、今も江戸馬口勞頭高木源兵衛、山本傳左衛門、毎年當社に詣で、此所の馬場において賜はる所の御馬に乘じ、舊式をなして後社内に安座なし奉れる東照大權現宮へ參詣す。

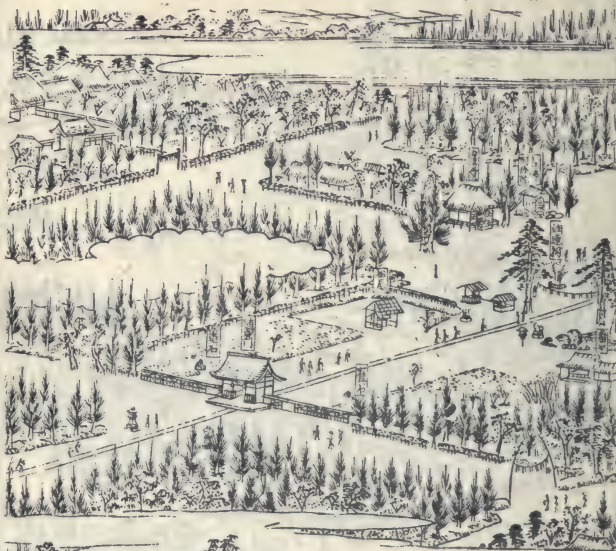
制札（せいさつ） 社前大路の入口にあり。慶長年間に建てらるゝと云ふ。

掟

一此所において馬町立之事
五月三日駒くらべより初
め九月晦日を限るべし
彌堅此おもむきを相守べ
し若違背之輩於有之者曲
事たるべき者也仍下知如
件

月　日　　奉　行

当社随身門より外の列樹に鵠或ハ鷺其余さまざまの水禽巣を作り栖す日毎に品川等の海浜より其餌へ運び其雛を育せり然れとも随身門より内へハ一羽とても入ることなきを当社七奇の一とす又寒中に至れハ一羽も宿るなく翌る年の春暖を待て来りて巣をくふとなり

此辺
旅店

府中六所宮
小野宮と分倍の境府中より関戸へ行道ハ往昔奥州より鎌倉への通路にしてこれを陣海道と称ふる元弘より永享の間屢戦争の地にてありしゆゑかくハ字せるとあり

本地堂 本社の左にあり。中尊は釋迦如來、左右に正觀音と地藏尊とを安置す。社僧六箇寺にてこれをあづかる年中恒例神事等の節は、拜殿において大般若經轉讀し此堂においても法樂修行せり。 **神輿庫** 同じ並にありて神輿八基を收む。其内二神一基のものあり、故に九基ならず社司神祕とす。 **阿彌陀如來銕像** 同左に並ぶ。高さ七尺ばかりの坐像なり。上にかりそめの雨覆の堂を建てたり。佛像の肩に銘文あり。文字は高く鑄上げたり。又同じ膝に藤原氏と二所まで、同じ文字を鑄上にせり。里諺に云く、昔秩父庄司重忠愛妓の菩提の爲に、造立するといひ傳へて、其先綴ヶ窪村の地、今阿彌陀坂といふにありしを、後こゝにうつすと云といへども妄譚なり。次に擧げたる銘文を讀得て、重忠の造立にあらざるをしるべし。重忠は元久二年、武藏國二俣河において誅に伏せり。建長五年は元久二年より四十八年を歷たる後の年號なり、證とすべし。又云ふ、或人の說に、此銅像は當國の國分寺に安置のものにして、昔賊の爲に盗まれたりしを、此處に捨て置きたりしよりこゝに安置すともいへり。其文左の如し。

大勸進念阿彌陀佛明蓮大士藤原助近。
右志者過去二親。並行嚴□新發意。乃至
法界衆生平等利益。奉鑄一丈二尺佛身也。
建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

護摩堂 同じ並にあり。不動尊の像を安置す。社僧明王院これをあづかる。 **御供所** 本社の前右にあり。

東照大權現宮 本社の右に安座す。元和四年戊午御創建といふ。 **注連樹** 本社の後倉林の中にあり。欅の枯株にして數十圍あり。相傳ふ、上古國造此所より社參ありし頃、門戸のありし址なる故に、注連を引きはへたりしよりかくは號くといへり。 **隨身門** 櫛岩間戸命、豐岩間戸命の木像を安置せり。 **宮之姬社** 隨身門の前左の方の林間にあり。祭神須勢理比咩命、奇稻田比咩命、木花開耶比咩命、以上三神にして、本社の后妃の神なり。例年七月十二日十三日近邑の神職來り集りて、社前において神樂を奏す。むかし鎌倉時世賴朝卿下知ありてより、此神事を執行するとなり。賴朝卿の下知狀は天正の兵火に亡びたりといへり。

馬場 二の華表の内左右森の外にあり。東の方の一條を細馬(センバ)といひ、西の方の一條を缺馬(カケバ)といふ、又大門甲州街道を隔て北の方一の華表の内の左右には二條の馬場あり。慶長年間、大阪御勝利の後御寄附ありしより後世細馬缺馬等の馬場の地、多

武藏國多磨郡八座。大麻止乃豆乃天神社。云云。

武藏國風土記曰　　多磨郡

大麻止乃智天神　　圭田六十七束毛田

所祭大巳貴命也。安閑天皇乙卯。始奠宮社。花時以花祭之。新稻之時以新稻祭之。云云。

東鑑曰

治承六年八月十一日己酉。及晩御臺所有御產氣。武衛渡御。中略爲御祈禱。被立奉幣御使於伊豆筥根兩所權現幷近國宮社。武藏六所宮。葛西三郎。云云。

同書曰

寛喜四年二月二十四日。武藏國六所宮拜殿破壞。有修造之儀。武藏左衛門尉資賴奉行之。云云。

府中
称名寺
弥勒寺、
善明寺
尚安寺
称名寺

舊名を小野縣と稱す。武藏國府にして、上古國造居館の地なり。和名類聚抄にも、武藏國府は多麻郡にありと載せたり。徴とすべし。延喜延長の頃、一變して此邊すべて小川鄕と稱す。風土記に曰く、小川鄕公穀二百六十七束、三毛田、貢は松排鞍靴之類云々。又其後小野小川の稱止で、府中領と總稱す。尙此郡玉川を境とし、川南を多西郡、川北を多東郡とも稱したりし事、古文書にみえたり。常陸、對馬、長門、越前、越後、皆府中と稱せり。

武藏國總社六所明神社　府中驛路の左側にあり。延喜式內大麻止乃豆乃天神社是なり。後世に至て、同じく式內小野神社を合せ祭る。故に今兩社一社の稱あり。神主は猿渡氏、其餘社司社僧等奉祀す。

本社祭神　大巳貴命。　相殿　素盞嗚尊　伊弉册尊　瓊々杵尊　大宮女大神　布留大神

以上六神これを俗に六所明神と稱せり。

天下春命　瀨織津比咩命　倉稻魂大神　以上三神、これを客來三所の御神と稱せり。

すべて九神、合せて共六所宮と稱す。此三神の事は一宮と小野神社との條下に詳なり。

延喜式神名帳曰

八幡宮　府中六所宮の末社にして、甲州街道八幡宿の道より左にあり。祭所應神天皇なり。六所宮の神主猿渡氏兼帶奉祀す。相傳ふ、聖武天皇の御宇、日域の國々に勸請し、營宮する所のもの皆これ八幡村の八幡宮といふ。多くは總社神祠の近きにあり。當社も古は本社禮殿竝び建て、莊嚴蕩々たり。其後は漸く衰弊に逮び、今は卽ち茅宮小社なり。（四十年あまり前までは老杉一株ありて空に聳え千歳の徴とするにたれり。されど其樹明和年間の暴風に吹き折れて、今は其あとのみを存せり。）又社境圃園の中に、權の正といふ地名あり。古の宮守居住の跡なりといへり。

瀧の社　當社も六所宮の末社にして、八幡宮より三町あまり東南の方にあり。祭神倉稻魂大神なり。社の傍に少し斗の飛泉あり。六所宮の御手洗池と稱す。毎年五月五日大祭の時、神幸供奉の輩は、五月朔日より此瀧に浸りて身を清め、神事にたづさはれりと云ふ。

石塚社　當社も又六所宮の末社にして、同所南の方代小川の邊にあり。祭神磐筒男命、磐筒女命二座なり。

府中驛舍　甲州街道の官驛にして、江戸日本橋より七里、（布田より一里廿七丁、日野へ二里八丁あり。）旅舍多し。（新宿本宿番場宿等の名あり）

府中
八幡宮
八幡

唐陸勳志怪錄曰

深州東鹿縣中有二水影一長七八尺。遙望見下人馬往來如レ在二水中一乃至レ前不レ見レ水。

周處風土記曰

廣野中陽燄。望レ之如二波濤奔馬一謂二之水影一此天地之氣。絪縕盪潏回薄變幻。何往不レ有。

按ずるに、性靈集其餘前に載する所の書、いづれも陽燄の氣のなす所なりとす。先の說思ひあはすべし。されど今は悉く民居又は田圃に沿革して彿をさへ殘す事なし。

武藏野の勝槩たるや、名所多きが中にも、殊更に其聞え高く、凡そ東西十三里、南北十里あまりもやあらん。舊記に四方八百里に餘れりと書るは、筆のすさびと云ふべし。天正以來、江戸の地を以て御城營に定させられしより、廣莫の原野も、田に鋤き畑に耕し、尾花が浪も民家林藪に沿革して、萬が一を殘せるのみ。元祿中柳澤侯川越を領せられし頃、北武藏野新田開發により、下宿（ゲシユク）といふ地の傍に原野の形勢を殘され大野と號くる故に、月にろそぶき露をあはれみ、また千草の花をめでゝ、蟲の音を賞せんとて、中秋の頃幽情をしたふの輩こゝに遊べり、其行程江戸よりは十里あまりあり

によりて、遠く望めば草の葉末の風に靡くが、水の流るゝ如く見ゆるをいふ、依て其所とおぼしき邊へ至れども、もと水流あるにあらざれば、終に其水の原に至る事を得ず、故に此名ありといふぞよろしかるべき。

夫木

東路にありといふなる迯水のにげかくれても世を過すかな　俊頼

同

むさし野の草葉がくれに行く水の迯げかくれてもありとこそきけ　讀人不知

性靈集詠陽餤喩

遲々春日風光動。陽餤紛々曠野飛。擧體空々無所有。狂兒迷渴遂忘歸。遠而似水近無物。走馬流川何處依。下畧。

運敞註智論曰

飢渴悶極。見熱氣如野馬。謂之爲水。疾走趣之。轉近轉滅。走馬流川。皆謂陽炎狀貌也。

紫草三千三百斤。云云

古今

紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る　讀人不知

後撰

むさし野は袖ひつばかりわけしかど若紫は尋ねわびにき　同

新勅撰

武藏野の野中をわけて摘み初めし若紫の色はかぎりか　九條右大臣

續古今

むさし野に生ふとし聞けば紫のその色ならぬ草もむつまじ　小町

迯水　武藏野の景物なり。里老曰く、仲秋の末、霖雨の頃、此野を行くに、凹なる所に水湛へて通ひがたし。此所に除け、彼所にさけて行くに、道も定ならず、草根沼の如し、故に往來の人、吟呻歩行を云ふ。此說信とするに足さるべし。或は云ふ、天日快明の時、曠野陽焰の氣

れたるさまにて物ものたまはず、やゝ久しくありて、西行いかなる人のかくてはおはするやらんと問ひけれども、答ふる事なし。重ねて我は都のほとりのものなり、あづまのかたゆかしくて下りはべりしが、武藏野のけしきふるさとにて聞きしよりもあはれに覺えてわけ入る程になん、これより人住む方もはるかなりと聞く、何を御たよりの御すま居にか、古への御事もゆかしくなん、といへば、老僧郁芳門院の侍の一臈にてはべりしが、女院かくれさせ給ひて後出家して、國々修行せしが、此野べ佛道修行のかくれ家にたよりありと思ひて、廿九の年よりすでに六十餘年此所にとゞまれり、されば讀誦の數七萬餘部なりと語る。西行も郁芳門院の御事もよそならぬ御事なれば、耳に語り、こけのたもとをしぼり、名殘をしくおぼえたれども、あかつきまた立ちわかるゝて、

いかでわれきよくくもらぬ身となりて心の月のかげをみがかん

いかゞすべき世にあらばやは世をも捨てあなうの世やとさらに思はん

秋はただこよひばかりの名なりけり同じ雲井に月はすめども

紫草　武藏野の景物とす。和名類聚抄、無良散岐と訓ず。紫は最上の色にして、古歌にも免の色、又位の色など詠みあはせたり。根を碎て染むる故に、紫の根染、又紫の根摺ともいへり。女に比しては緣の色などもいへり。江戸の紫染は最も絶妙にして、他邦に比類なし。故に江戸むらさきの稱あり。

延喜式　內藏寮式曰

紫草二萬二百斤。武藏國。信濃國二千八百斤。云々。

同書曰　民部省式曰

へだつなよ我れ世の中の人なればしるもしらぬも草の一本　同

武藏野の古歌は萬葉集をはじめとし、代々の撰集其餘歌合および家々の集等にあまたあれども枚擧にいとまあらずたゞ世に耳なれたることの其百がひとつを記しはべるのみ。

武藏野翁　翁は其鄉姓語らず、たゞ郁芳門院の一臈士と云ふ。院崩ずるの後、齡二十九にして世を避て、諸國を遊歷し、此に止る。庵を結び、月に臥して、武藏野の廣を愛す。六十年を經て、西行法師に邂逅す。一宿を投じて、通宵古を談し、涙を緇衲に濺ぎ、曉に迨で別る。

續扶桑隱逸傳の文意をとる。

西行物語

さしていづくを心ざすともなければ、月のひかりにさそはれて、はる〴〵と武藏野にわけ入る程に、をばなが露にやどる月、末こす風に玉ちりて、小萩がもとの蟲のねいと心細く、むさし野の草のゆかりを尋ねけんもなつかしく、宿をば月に忘れて、あすの道行なんど口すさびて行く程に、道より五六町ばかりさし入て經を讀誦する聲しければ、人里は此末に遙にへだたりたるとこそ聞しに、あやしと思ひて、聲につきて尋ね入りてみれば、わづかなる庵のうへをばうすかる萱にてふき、秋女郎花色々の秋の草にてめぐりをかこひ、夜ふす所とおぼえて東によりてわらびのほとろを折りしき、西の壁に畫像の普賢をかけ奉り、御前には法華八軸を置かれたり。庭には千草の花露に傾き、蟲のこゑ〴〵所がらにあはれに、いづくぞと問ふ人もあらじと思へば、かよひぢもたえにけり。庵の内を見いれたれば、頭には雪ふり、眉には霜をたれたる老僧、九十有餘とおぼえたるが、在於閑處修攝其心とよみたてまつる、もし仙人などにてもやとあやしく思ひて、八月十五夜名にたがはぬ月のかげなれば、いづくのかくれ家までもまがふべきもなし。あゆみより前に侍りけれども、互にあき

桂林集

むさし野に長陣せし時ほとゝぎすを聞て

むさしのは木蔭も見えず時鳥幾日を草の原に鳴くらん　直朝

武藏野記行

天文十五年仲秋の頃、むさし野をみんと此年月思ひ立ぬる事なれば、人々あまたうちつれて、小鷹がりして遊ばんとて、(中略)むさし野をかり行くに、まことに行けどもはてあらばこそ、萩薄女郎花の露にやどれる蟲の聲々あはれをもよほすばかりなり。

むさし野はいづくをさして分け入らん行くも歸るもはてしなければ　氏康

いにしへの草のゆかりもなつかしければなり、是もむらさきのひともとゆゑなるべし。

むさしのは猶行く末も秋萩の花摺衣かぎりしられず　讀人不知

續後拾遺

春もまだ色には出でずむさしのや若紫の雪の下草　家隆

新續古今

むらさきのゆかりの色も問ひわびぬ皆がら霞むむさしのの原　定家

千五百番歌合

若菜摘むゆかりにみれば武藏野の草はみながら春雨ぞふる　雅經

夫木

花の色もこもりし妻やこれならん一本菊のむさしのの原　爲實

廻國雜記

武藏野にて殘月をながめて

山遠し有明のこるひろ野かな　道興准后

受安良牟
武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻爾末爾吾者余利
爾思乎
和我世故乎安杼可母伊波武牟射志野乃宇家良我波奈乃登吉奈
伎母能乎

新古今
行く末は空もひとつの武藏野に草の原より出づる月かげ　攝政太政大臣

續古今
むさしのは月の入るべき山もなし尾花が末にかゝる白雲　通方

玉葉
旅人の行くかたぐ\にふみわけて道あまたあるむさし野の原　右大臣

續千載

頃より、昔に引かへ十萬戸の炊煙、紫霞と共に棚引き、僅に其舊跡の殘りたりしも、承應より享保に至り、四度迄新田開發ありて、耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狹山に登りて、四隣を顧望するときは、曠野蒼茫、千里無垠、往古の狀を想像するにたれり。

狹山は第四卷の中に入れたり。

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良敝可多也伎麻左氏爾毛乃良奴伎美我名宇良爾低爾家里
（ムサシノニウラヘカタヤキマサデニモノラヌキミガナウラニデニケリ）

武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與比欲利世呂爾安波奈布與
（ムサシノノヲグキガキキシタチワカレイニシヨヒヨリセロニアハナフヨ）

古非思家波素氏毛布良武乎牟射志野乃宇家良我波奈乃伊呂爾豆奈由米
（コヒシケバソデモフラムヲムサシノノウケラガハナノイロニヅナユメ）

伊可爾思氐古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我波奈乃伊呂爾低
（イカニシテコヒバカイモニムサシノノウケラガハナノイロニデ）

佛は重忠愛せし遊君の菩提の爲、造立する所の佛佛なりといへども、其佛像の銘文年號等を考ふれば、重忠との時世大に違ひ、誤なる事明らけし、猶六所の宮の牀下をみるべし。

戀ヶ窪　同所坂より下の低き地をいふ。古へ東奥北越等の國々より、京師及び鎌倉等へ至るの驛路にて、其頃は遊女の家居などありて、いとにぎはしかりしとなり。此地に牛頭天王の叢祠あり。竹林の中に凹なる地あるを、古への北國街道の舊址なりといへり

廻國雜記

戀が窪といへる所にて

朽ちはてぬ名のみ殘れる戀が窪今はた訪ふもちぎりならずや　道興准后

傾城ヶ松　同所艮の方、八幡宮の社地にあり。同程の古松二株雙立せり。土人重忠が愛せし遊君の塚印の松なりといひ傳ふ。然れども社地なるものは、此八幡宮の神樹なるべし。

武藏野　南は多摩川、北は荒川、東は隅田川、西は大嶽秩父根を限として、多摩、橘樹、都筑、荏原、豐島、足立、新座、高麗、比企、入間等すべて十郡に跨る。草より出て草に入る、又草の枕に旅寢の日數を忘れ、問べき里の遙なりなど、代々の歌人袂をしぼりしが、御入國の

道興准后

戀ヶ窪
阿弥陀堂
傾城松
牛頭天王
回國雜記

國分寺村
炭かま

富士見塚　國分寺より西の方五町斗を隔つ。此所に登れば、一瞬千里、殊に奇觀たり。東は浩茫として限なく、天涯はるかに地に接するを見るのみ。中秋の夕、月のあかきには、草より出て草に入るの古詠に、古を想像て、感情少からず。此故に幽人騷客こゝに來りて遊賞せり。高さ三丈ばかり、めぐり五十歩あまりあり。

阿彌陀坂　富士見塚より十三町あまりを隔てゝ、戀ヶ窪村の地、北へ向て下る坂を云ふ。此坂の左に傍たる岡に草庵あり。土人阿彌陀堂と稱す。木像の阿彌陀如來を本尊とす。延享四年鶴心と云ふ僧此草庵の毀れたるを興す。土人云ふ、古の本尊は銅像にして、今府中六所宮の社地にあるもの是なりと。相傳ふ、往古畠山庄司次郎重忠、此地戀ヶ窪の驛舍にやどりし頃、寵愛せし遊君ありしが、重忠平家追討につきて、西國へ出陣せらる。然るに其後をこの者ありて、重忠討死したる由、いつはりすかしたりしを實とし、かの遊君歎のあまり、終に自殺したりしを、のち重忠聞てあはれみ、彼遊君が節操を感じ、菩提の爲に此阿彌陀堂建立し、銕を以て彌陀如來の像を鑄て安置せしといふ。ちなみに云ふ、此地に道場畑とあざなする地あり。土人云ふ、昔此地に無量山道成寺と號する寺院ありし故に、しか唱ふるとぞ。然る時は此阿彌陀堂も其境内にありしものなるべき歟。又云ふ、今府中六所宮の社地にある所の銕像の彌陀

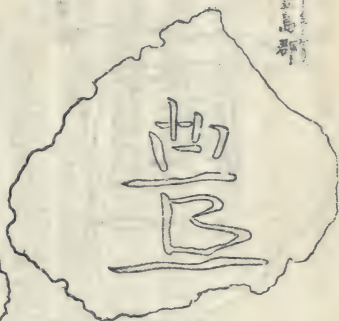
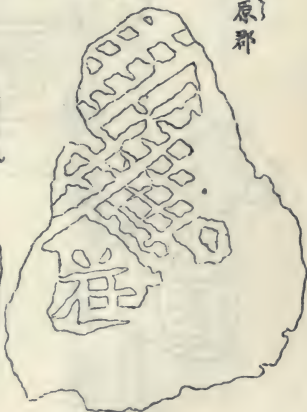
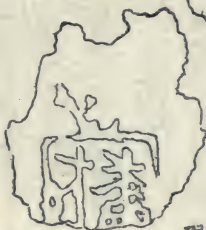
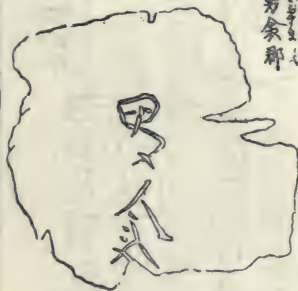
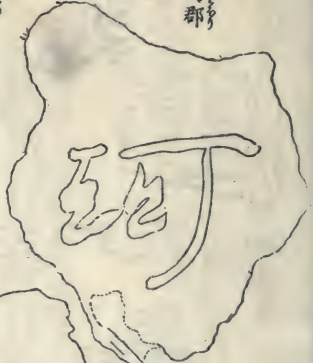
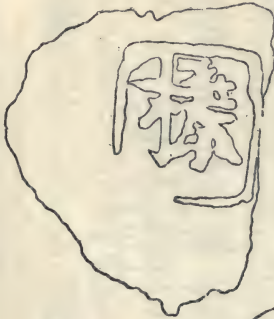
豊島郡
崎玉郡
幡羅郡
荏原郡
男衾郡

榛澤郡

那珂郡

比企郡

秩父郡

大里郡

たのもしな世を祈れとて定めつゝ國をわかてる寺のかず〳〵　稱名院

下二關東御分國々行然奉二行之一云云。

二王門舊跡　寺前半町あまりを隔てゝ、南の方の畑の中に其礎石を存せり。

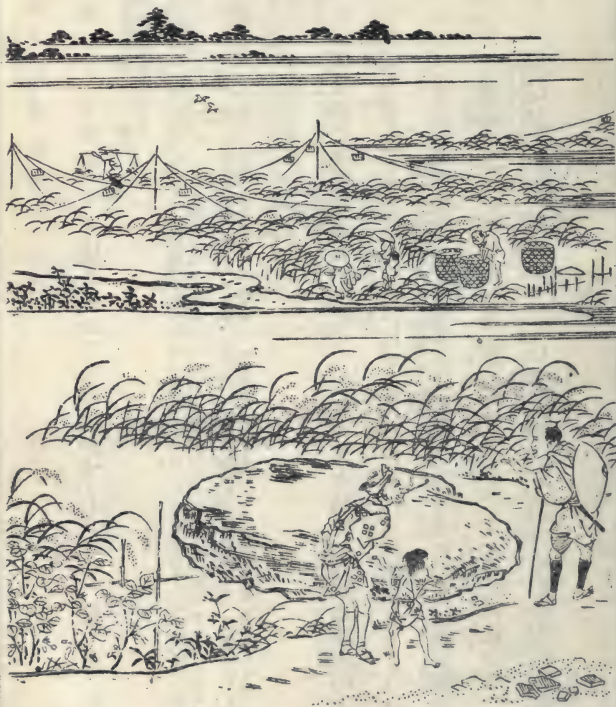
層塔舊跡　國分寺の少し東南半町あまりを隔てゝあり。草樹繁茂する所の少しの岡なり。方九尺ばかり六角に礎を据たり。往古其塔の中眞を收めたるものなりとて、中に經〔ワタリ〕三尺ばかり、石にて疊みたる空穴ありて、内に水をたゝへたり。

古瓦　二王門舊跡の邊り數百歩の間、いにしへの古瓦の破碎せるものあり、皆堅密にして形全からずといへども、文綵奇にして國分寺の古へ大伽藍なりし事、想像にたれり。其地にして得たる古瓦の中、武藏國郡の名を印せしもののこゝに其形を擧げて證とす。

國分寺碑　藥師堂の前右の方にあり、碑文は服元雄中英先生撰む。書は河保壽にして當寺法印賢盛建つる所なり。

當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐發向の頃も、當寺へ入り給ひ、其頃は盛大の寺院なりしと云ふ。あまたの星霜を經て、元弘の兵火に亡びしを、新田家にて再興ありしも、兵革の世終に古に復す事なし。然るに寶暦年間、權大僧都法印賢盛衆緣を募り、新に醫王閣を營建し、傳ふる所の靈像を安じて靈跡を表す。今古伽藍の礎石のみ嚴然として田間阡陌の間に埋れて、懷舊の情を催せり。此寺前畑の中に、かつたい塚、かうかけ場など字する地あり。或人云ふ、かつたいは乞食〔カツタヰ〕かうかけ場は頸掛場〔カウカケバ〕なるべしと。依て按ずるに、古へ合戰の後敵方の首級を掛けし地なれば、其傍に乞食など住居してありしならん歟。

國分寺伽藍旧跡

國分寺

二王門（にわうもん） 石階の中腹にあり。金剛密迹の二像を置く、作者未詳、堂材は古へのものにして、舊地は半町あまり南にあり。

續日本紀聖武紀曰

天平十九年十一月己卯。詔天下。諸國々別令造金光明寺法華寺。下略

延喜式第二十六卷曰

武藏國正税公廨各四十萬束。國分寺料五萬束。藥師寺料四萬二十束。梵釋四王料七千七百束。云云。

東鑑曰

建久五年十一月二十七日。 近國一宮竝國分寺可修復破壞之旨被仰下。云云。

同書曰

寛喜三年。五月五日。 任綸旨。於國分寺。可轉讀最勝王經之由。被仰

かけひきしれる勇者とはみな人申しはべりき云々。

深大寺城跡　深大寺佛堂の後の方の山續にして、其間六七町を隔たり。空堀或は柵門などありしと覺しき形、今猶嚴然たり。北條五代記に、大永四年の頃、氏綱江戸の城を襲ふ。上杉匠作はいまだ河越の城に引籠り、十餘年の春秋を送り迎へぬ。いつよりか例ならず心地そこなひて、天文六年の卯月下旬、世を早く去て、嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を繼ぎ給ひぬ。ていれば七々ヶ日の服忌さへ經ずして、道をあらため兵を起し、深大寺といふ古城を再興し、氏綱へ向ひて弓矢の企専らなり、とあるは、則ち此所の事なり。

醫王山國分寺　最勝院と號す。國分寺村にあり。府中より北の方十八町を隔つ。當寺は天平年間、行基菩薩草創する所にして、聖武天王の勅願所なり。中興開山を教心阿闍梨と號す。今は新義の眞言宗なり。

藥師堂　本尊藥師如來　脇士日光月光十二神將の像は、共に開山行基大士の作なり。

額　金光明四天王護國之寺　深見玄岱の筆

通念佛百遍を受させ給ひ、忝も結縁の名帳に、御諱を記させ給ひぬる事は、當寺融通念佛の緣起に詳なり。此念佛は大原の良忍上人、まのあたりに如來の示敎を得て、弘通し給ふ所なり。此法や、或は十返百返乃至千返万返を日課とし、我が唱ふる所の稱名の功德をば他の人の爲とし、他の人の唱ふる所の稱名をば自ちの爲として、互に融通し、自他平等に修するが故に、其功德廣大無邊にしてはかるべからず、昔鞍馬山の毘沙門天王も、この念佛の結縁に入り給ひし事ありし由、其緣起にみえたり。

深大寺蕎麥　當寺の名產とす。是を產する地、裏門の前、少しく高き畑にして、纔に八反一畝程のよし、都下に稱して佳品とす。然れども、眞とするもの甚少し、今近隣の村野より產するものおしなべて此名を冠らしむるといへども佳ならず。

難波田彈正城址　深大寺大門松列樹の東の方の岡を云ふ。土人は城山と呼り。今は麥畑となるといへども、此所彼所に湟池の形殘れり。此地は往古　淸和帝の御宇　藏宗卿武藏國司たりし時、こゝに住せられたりし舊館の跡にして、天文の頃、上杉朝定の家臣難波田彈正忠廣宗、松山の城の出張として、こゝに　城廓を構へたりしとなり。

北條五代記に曰く、上杉修理大夫朝興の嫡男五郎朝定、生年十三歲にして家を繼ぎ、武州深大寺といへる古城を再興し、北條氏綱に向ひ弓矢の企專らなりといへる條下に、（此軍は天文六年七月廿日なり）さればたけき中にやさしきあり、その日のいくさ、大將難波田あやなくうしろを見せ、松山さして落ち行くを、北條方に山中主膳駒かけよせ、一首はかくぞきこえける、

あしからじよかれとてこそたゝかはめなど難波田のくづれ行くらむ

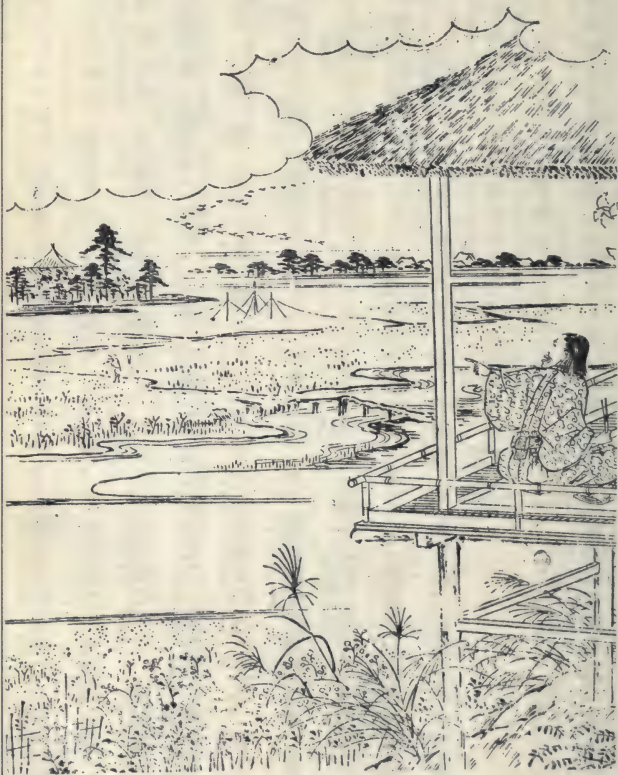
と俳諧躰によみかけしに、難波田も、さすがよしある武士にて、くつばみいさゝか引きかへし。

君を置きてあだし心を吾もたば末の松山浪もこえなむ

われ作りがほに古今集の歌をとりあはせて、返答ありていそがはしく駒のあしはやめて過ぎ行きぬ。げにさもありぬべし。主君朝定を館に殘し置き、難波田うたれなば、松山は寄せくる浪もこえぬべし、身を全うして君につかふるを忠臣の法といふ事あり、作者といひ、功者といひ、

靈木の流れ漂ふあり。則ち是を得て、藥師佛三體を彫刻し、一體を當社に納む。餘二躰は下野國日光山及び出羽國にあり。此由叡聞に達しければ、廢帝の御宇、勅願所に定られ、浮岳山深大寺と震翰を灑ぎ、扁額を賜ふ。又貞觀年間、武藏國司藏宗卿叛逆す。叡山の惠亮和尚に仰て、亂賊降伏を祈らしめ給ふ。和尚當國の國分寺に至り、不動の利劒を虚空に投げ給ひ、隕る所の勝地を道場とせんと誓ひ給ふに、遙に飛で當寺井泉の邊の石上に隕ぬ。此石を劒立の石と云ふ。依て五大尊を勸請し、此地に於て祕法を修練せられしに、行力空からず、逆徒悉く降伏せり。依て叡感のあまり當寺を惠亮に賜ひ、此所にて七邑の地を寄附なし給ふ。是を深大寺の七邑と唱ふ。しかありしより、法相宗を轉じ、台宗にあらためられ、護國安民の祕法怠る事なく、關東第一の密場となれり。昔は十二宇の塔頭ありて大伽藍なりしかども、度々の兵火に亡びて今は昔に違へり。其後野火の災に罹りて灰燼となりしを、世田ヶ谷の吉良家深く尊信して、再び堂宇を營み、波平行安の刀等を寄附す。無銘長四尺五寸あり。

繪卷物幷詞書二卷　參議右中將藤原公尹卿の筆

抑當寺は關東融通念佛最初弘通の道場にして、慈眼大師、大猷公の上聞にたつし奉り、融

深大寺蕎麥
當寺の名產
にして
味ひ甚
佳なり
都下に
称して
深大寺
蕎麥
といふ

山に入り水に臨んで、殺生を業とす。ある時やんごとなき女來りて妻となる。名を虎といへり。此妻常に夫をいましめて殺生をとゞむ。右近は妻のいふに隨ひ、竟に狩漁を止む。其後一人の娘をまうけ、いつきかしづく事おほかたならず。早く生長なれり。然るに福滿と唱ふる童子ありて、此娘に逢初にければ、父母大に怒り、かばかり賤き人にあはせん事本意ならずとて、二人が中をさけ、娘をば此里の池の中島に家を營み、かしこに居らしむ。福滿は日毎に岸に至て是を歎くといへどもかひなし。昔もろこしの玄弉三藏渡天の時、流砂川に至りて佛を念ぜしかば、深砂王現れ給ひ、川を渉し給ひし事を思ひて、一心に念じければ、一の靈龜浮み出ぬ。福滿其甲に乗て島に至り、娘にあふ事を得たり。父母後に此事を聞て、神明の冥助ある事を知り、隨喜して娘を福滿に妻あはせければ、竟に一人の男子をまうく。父母の願によりて、此兒家出し、滿功上人といふ。其後もろこしに渡り、大乘法相の旨を傳へて歸朝し、天平五年癸酉父の本誓により、深砂大王の社を建立し、當寺を創す。其時神靈水中の岩上に現れ給ふ。上人其尊容を模しとゞめんとするに御衣木なし。然るに七月七日玉川に

滅罪生善　令人正覺

永和二年丙辰八月十五日　　大工山城守宗光

大行事院主法印權少僧都辨運

別當前大僧正法印大和尚位守慧

龜島辨財天祠 門前左の方の池の中島にあり。縁起に所謂福滿童子を背負てわたせし靈龜をして、後に滿功上人辨天に崇められたりといふ。

毘沙門天吉祥天社 昔は各別社にてありしを、後辨天の相殿に合祭すといふ。福滿童子は毘沙門天の化身、吉祥天は縁起に出る所の童女をあがめ祭る所なりといへり。

深砂大王社 大門並木に相對す、縁起に曰く、天平五年癸酉滿功上人此地に當社を營みて、深大の二字を採て寺號とし、一字を草創せらるゝといふ。東照大權現宮及び八幡八劒權現等を相殿とす。**深砂大王影向池** 社の後にあり、往古深砂大王影向ありし舊跡と云ひ傳へて、池中一ッの靈石あり。

劒立石 同じ池のもとにあり、往古惠亮和尚、當國に勝地を求め給はんとして、當國の國分寺に至り、不動の利劒を虚空に投げ給ひしに、其劒此石上に立ちしとなり、しかりしにより此號ありといひ傳ふ。**福滿童子祠** 深砂大王の祠前右の方にあり。**仁王塚** 同所社前の道を一町斗り西へ登る坂を塔坂とよべり。往古塔などありしならん歟。其邊を二王塚と字す。相傳ふ、昔何某の一子當寺二王門の邊に遊びてありしが忽に姿を見失ふ、人々驚き一山大に騷動す、しかるに當寺二王門の二王尊の脣に、其兒の常に著する所の衣服殘りとゞまりて、兒を呑みたるに似たり、依て里民此二王の像をこぼちて門を破却し、土中に埋めたりしより、二王塚の號ありといひ傳ふ。

縁起に曰く、聖武天皇の御宇、武藏國多摩郡柏野村に獵師あり。柏野村今佐須村といふ。名を右近といふ。年頃

天王
山王
弁天

深大寺

元三大師堂 本堂の前左に傍ひてあり。寺記に云ふ、應和四年慈惠大師叡山に於て自ら彫刻なし給ひし靈像なりしを、慈忍和尚と惠心僧都と心をひとつにし、武藏國深大寺は代々の帝勅願の地にして尤も靈跡たり 永く此影像を遷し奉りて、關東の群生を化益せんとて、正暦二年の春こゝに安置なす。爾來靈應いちじるしく、月毎の三日十八日殊に正五九月の十八日には、別業護摩供を修行あるが故に、近郷の人群參せり。此日門前に市を立る。

降魔尊像 先の靈像と共に、叡山より當寺に遷座なしまゐらすと云ふ。靈驗尤も著し。

五大尊石 大師堂の北の山際清泉の中にあり。此水旱魃にも減ずる事なしといへり。土人旱魃の年は此所に來り．此水を汲干さんとす、果して雷雨ありとなり。

要石 同じ泉水の中島、稲荷の宮の傍にあり。昔此山崖など崩るゝ事屢なりしかば、其頃の寺主祈念して、此石を建て要石と號くと云ふ。

鐘樓 大師堂の後の山上にあり。

武藏國多東郡深大寺

奉冶鑄槌鐘　長四尺三寸　口二尺三寸

右伏以當山蒲牢。開基以來。革更其數不一。或雖冶鑄。有破裂而無聲。或雖討得。有薄略而不鳴。爰緇素數輩。競勠力。廼命鳧氏。遂鑄鴻鐘。當知三寶垂感。諸天降臨。仰願皇風永煽。佛日彌明。伽藍鎮靜。法輪常轉。更乞諸檀施主。二世善願一切成就。仍昭銘功德。其辭曰。

寺號深大　山名浮岳　新鑄鳧鐘　聲形卓犖
百千萬劫　定期渉邈　驚起塵夢　消除煩濁

いへり。祭神詳ならず。世に青波天神とも稱せり。相傳ふ、古は社前に湖水ありし故、青波の稱ありと。社前槻の老樹あり、數百餘霜を經たるものなり。

延喜式神名帳曰　武藏國多磨郡

青渭神社。云云。

按ずるに、神名帳に青渭とあるを、今本阿遠伊と訓ず。土人云ふ、古へ當社の前は湖水滿ちたゝえたり、故に青波の稱ありといへり。今青波に作り阿遠葉と訓ずるは據あるに似たり。猶同卷青沼明神の條下と照らしあはせてみるべし。

青渭堤　青渭神社の邊なり。古は青渭の湖水湛たりしを、後世堤を切開きて、水を乾し、耕田となすといへり。故に今此所彼所に、六七歩或は十歩にあまれる塚の如きもの殘り存して、草樹繁茂せるは、其堤の舊跡なりといふ。

浮岳山深大寺　昌樂院と號す。深大寺邑にあり。（此所も佐須村と云ふ、昔は柏野里と號せしとなり。）太古は法相宗なりしが、惠亮和尚以來、天台宗に改む。本尊は寶冠の阿彌陀如來、惠心僧都の作なりといふ。當寺は福滿童子の宿願によりて、天平五年癸酉に草創する所の佛域なり。（日本年代配合鈔に曰く、天平勝寶二年庚寅深大寺建立云々。）四十七代廢帝の御宇に、勅願所と定められしより、平城、淸和兩朝も、又勅願所となし給ひしと云ふ。

狛江入道
旧跡
祇園寺

斗の彌陀如來の木佛を安置す。作者未詳本堂の向拜に揭ぐる所の虎柏山の三大字は筆者をしらず。

藥師堂　本堂の前右の方にあり。藥師佛は立像御長一尺ばかりありて、行基大士の彫造なりといへり。佛龕の内に弘法大師の眞跡の般若心經を收む。此堂宇二百有餘年ばかり前迄は、此地より東南の方三四十歩を隔てて、耕田の中にありしとなり。今に古藥師堂といへる地是なり。其頃屢賊の爲に佛器の類を奪はれしかば、終に祇園寺の境内に遷せしとなり。今藥師堂より一町程南に、藥師堂面とあざなして、一反六畝ばかりの除地あり。鎌倉時世より前に附する所なるよし、土人いひ傳へたり。

狛江入道舊館地　祇園寺より艮の方六七町を隔てゝ、二百歩あまりの岡なり。空堀の形など嚴然として殘れり。此地に入道崇むる所の稻荷の小祠あり。土人里の稻荷と稱す。祠前樫の老樹一株、六圍にあまるもの存せり。東鑑に、承元二年戊辰七月十五日狛江入道增西惡黨五十餘人を率ゐて、武藏國威光寺領内に亂入し田を刈り狼籍に及ぶ由、院主の僧圓海訴出るといふ事を擧げたり。刊本柏江に作るは、狛江を誤りたるものならん。又云ふ、こゝに狛江入道と云ひ傳ふるも、此增西の事をいふなるべし。又同書に建久元年庚戌十一月七日二品入洛供奉の人名の内に駒江平四郎といふ名を注す。

按ずるに、續日本後紀に、仁明天皇の承和十一年甲子五月、武藏國多摩郡狛江鄕より節婦を出す事を載せられたり。刊本猪江に作るは狛を誤れる事必せり、武藏國風土記殘編にも多摩郡の内に狛江鄕といへる地名を出したり。和名類聚抄にも同じ郡の鄕名に狛江とありて古乃江と訓ず。されど此地を今は佐須村と稱ふ。しかるに多摩川の北宇奈根村に隣りて駒井邑と呼ぶ地あり、恐らくは狛江の鄕の轉訛ならん。北條家分限帳に多波川の北、駒井本鄕太田新六郎知行の内にあり。此所駒井の舊地なる事しるべし。

青渭神社　虎柏神社より北の方、深大寺村の中にあり。土人此地を字して、天神ヶ谷戸と

青渭社
虎狛社

布田天神社。云云。

虎柏神社　同所北の方十町斗を隔てゝ左須村にあり。左須は古へ當社の神主の姓なりしを、後地名に呼たりしとなり。今も其遠裔此地の里正にして連綿たり。社前に古松二株鬱叢と聳えたり。九月十三日を以て祭祀の辰とす。

武藏國風土記曰　武藏國多磨郡狛江鄕。
虎柏神社。圭田七十三束。所祭大歲御祖神也。崇峻天皇二年己酉八月。始祭事有之。云云。

延喜式神名帳曰　武藏國多磨郡。
虎柏神社。云云。

按ずるに、深大寺縁起に、滿功上人の祖母の名の虎と、祖父の住みたりし柏野の里の名とによりて、虎柏の神社ありといへるは、其是非をしらず、柏字古は犬に從ひ狛に作りたるを、後世字形相似たるを以て、今は木に從ひ柏に誤れるならん歟。又當社の南にある所の耕田は、古へ社領なりしとて、今も宮田と稱へたり。風土記に擧ぐる七十三束の圭田是なんら歟。

虎柏山祇園寺　同所三町ばかり東の方にあり。日光院と號す。天台宗深大寺に屬せり。當寺は天平勝寶二年庚寅、深大寺の滿功上人開創する所の佛域なりといへり。本尊には立像二尺

布多天神社

さらすによろしと思はる。故に合せ考ふれば、此邊其實跡なるべからん。又云ふ、毎歳三月の頃より七八月に至り、此邊の童兒等うたひ躍りありく事あり、其形勢及び唄ひ物の言葉にも調布の事を專とす其唄に云く、

此川の流のするゝはどこ迄、布を流さば海まで

又云ふ

あの子はヤレ紅屋の子、ヤレいつもかはらぬ紅絞り、さらし手拭いつ染めた、さむい瀬につくもさらすも、皆もわかしゆが見たさに、御若衆がみたいまゝとて、春の月夜の思ひそよ。

又云ふ

鎌倉の鶴が二三羽、まひにち日にちかよひやる山越えて、山を越へて、こゝな川瀬に何の用、さらしあげたうつくしき、布とおわかしゆが見たさに

此唄ひもの其古へを思ひあはするに足れり。附て云ふ、此地より西府中までの間に染屋邑〔ソメヤムラ〕と稱する地あり。是も古へ紺かきの家多くありて、調布を染めたりし故に、此名あるならん。按ずるに、東鑑建久六年七月廿八日の條下に、武藏國染殿別當の事、安房上野局に仰付らる、糸所別當の事は近瀬局これを奉るとあるも、此邊の事をいふならん歟。又云ふ、和名抄白絲布を天都久利乃沼乃〔テツクリノヌノ〕と訓ず、同書に今按ずるに俗に手作布の三字を用ゆると云々。調布は和名抄に豆岐の沼能とありて貢になす布の事をいへり。

布多天神社

上布多驛舍の邊より、右の方四町ばかりにあり。別當は眞言宗にして、廣福山榮法寺と號す。〔淺尾王禪寺に屬す。〕祭禮は隔年九月二十五日に修行す。當社祭神詳ならず。今菅神を相殿に勸請して二座とす。當社昔は多摩川の岸頭にありしが、洪水の難に罹るの後、今の地へ遷すとあり。〔今も其地に元天神と稱して小祠を存せりといへり。〕

延喜式神名帳曰　武藏國多磨郡

貢　薇蕨諸草菜及禽魚等。

爾布田川　出鮎鮊鮒等。云云。

和名類聚抄曰

武藏國　多磨郡　新田爾布多。云云。

按ずるに、風土記に出る所の爾布田、及び和名抄に載する所の新田、共に此地の事を云ふならん、後世上略して爾布多〔ニフタ〕を布田〔フタ〕とばかり唱ふる歟。又風土記に、爾布田川の名あれども今しるべかず。

萬　葉

多麻河泊爾左良須氐豆久利佐良左良爾奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎

家　集

手作やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里　定家

按ずるに、萬葉集多磨を多麻に作り、布田も又古へは布多とす。往古麻の布を多く產せしにより、假字にはあれど其意を含みて麻には作るならん歟。當國の府は此地より西南にありて其間遠からず、古へ國毎に朝廷へ調布〔ツキノヌノ〕を貢せし事國史等に詳なり。風土記多麻川の條下に、里人調布を作り內藏寮に納るとあり。然れば此國より貢奉る處の調布は當國に產するものを集めて、此川邊にて晒し、しかして府に携へ國司の許へ出せしなるべし。依て多麻川の水流を考ふるに、府中の邊より水源は河瀨狹くして巨石多く、布田より下流は漸く海に近きが故に、潮の盈虚ありて調布に便りよろしからず、たゞ此布田の邊のみ河瀨の廣狹水流の滔々たる、實に布を

にして、上高井戸は此所より西にあり。小田原北條家の分限帳に、大橋氏某の所領に、無連高井堂とあり。無連（ムレ）は無禮、高井堂は此地の事をいふ。道興准后の回國雜記に、堀兼（ホリカネ）の井見にまかりて詠る、今は高井戸といふとありて和歌あれども、堀兼の井此地にありや今しるべからず、其和歌は第四卷堀兼井の條下に詳なり。

鬼子母神　下高井戸の道、淸月山覺藏寺といへる日蓮宗の寺に安置す。鬼子母神の靈像は、宗祖大士の作にして、佛像の背に、建長五年癸丑八月八日日蓮刻之とあり。

緣起に曰く、文永八年九月十二日、日蓮大士相州龍口において、誅に伏さんとせられ給ひし頃、一人の老女ありて、胡麻の餠を供養せり、大士歡喜の餘り、建長五年の夏、始めて妙法蓮華經の首題を唱へ始め給ひし時、廣宣流布の祈願の爲、自ら彫造ありし法流守護の鬼子母神の靈像を彼の老女に授與し給ふ。然るに鎌倉福田村といへる地に、安田武左衞門といへる農民あり。則ち老女が裔にして家に此靈像を傳ふ。時に享保十八年癸丑五月、此尊像俗家にありて法味に乏しきが故に出家の許に贈るべき旨靈示あり。依て當寺第十世の住侶日曜師、鎌倉松葉ヶ谷妙法寺に在せし頃、彼の武左衞門此尊像を携へ來り、來由を告げて日曜師に附屬せり、然るに日曜師當寺の破壞を歎き、寺院再興の爲爰に移住せられし頃、當寺へ遷しまゐらせしと云々。

布多里　今所謂布田邑是なり。布田或は布多に作る。此地布多天神社の御制札には補陀郷（フダノガウ）とあり。此地は甲州街道にして、上下と分れたり。石原上下國領等を合せて布田五宿と稱ふ。

武藏國風土記曰

多磨郡

爾布田。或新田。公穀三百七十二束三字田假粟二百十三丸三字田

根太橋

天台宗にして、寶珠山福泉寺智妙院と號す。いにしは知明に作る。相傳ふ、當社は往古源頼家公の旗下なりける近藤三郎是茂の家人荒井外記智明といへる者、故ありて相州を退き、此代々木野に蟄居し、宗友と名を改め、年月を送れり。八幡宮は本國の產土神たるにより、常に尊信怠る事なし。然るに建曆二年八月十五日の夜、夢中に鶴ヶ岡八幡宮の靈示ありて、寶珠の如き鏡を感得す。依て同九月一三日此地を求て荆棘を拂ひ、小祠を營んで、初て鶴ヶ岡八幡宮を勸請し奉るとなり。

鞍懸松　同所の岡に在り。傳へ云ふ、源義家朝臣奥州征伐の頃、此地に陣を取り、此松樹の枝に鞍をかけられしより、此名ありといふ。江戸鹿子といへる冊子には是を賴朝卿とす。

代太橋　甲州街道萩窪の立場より、三町あまり先の方、松原、赤堤、泉、廻、代太等の五箇村入合の辻にありて、曲折する所の道路を横切て流る小川に架す。此所迄は道より左に添て流る、橋より右に添て流れ、橋下にて水流左右に替れり。橋上に土を覆ふ。故に其形顯れず。此橋下を流るゝは多摩川の上水なり。

高井戸　此所も甲州街道にして、驛舍あり。四ッ谷内藤新宿より此所を一里廿五丁、上石原へは二里一丁あり、八王子へも此所を行けり。此所は下高井戸

代々木八幡宮

白山

千駄ヶ谷八幡宮

千駄ヶ谷八幡宮　同所一町斗西にあり。此邊の惣鎮守にして、例祭は九月廿七日なり。別當は眞言宗高雲山瑞圓寺と號く。

鈴懸松　門前に松の老樹有り、寛永の頃、大樹此地に御放鷹の時、御鷹の鈴此松の枝にかゝりしと也、故に名とすと。

社記に云く、往昔此地深林の中に、時として瑞雲現じける。又或時碧空より白氣降りて雲上に散ず。村民怪んで彼林の下に至るに、忽然として白鳩數多西をさして飛去れり。依て其靈瑞を稱し小祠を營み、名づけて鳩森といふ。貞觀二年慈覺大師東國遊化の頃、村民等大師に鳩森の神躰を乞求む。依て宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移り給ふ古を思ひて、神功皇后、應神天皇、春日明神等の尊躰を作り添て、正八幡宮と崇め給ふ。遙に後久壽年間、澁谷正俊領地に鎮座の御神なるを以て、金王丸生前隨身の本尊、惠心僧都の作の彌陀如來の像を本地佛とし、社を造營して、此地の產土神と稱し奉りしより、靈應は照々として日々に新なり。　南向亭云く、當社の前路は鎌倉街道の舊跡にして、今も鎌倉路と字せり、青山の原宿より此地をへて大窪へかゝりし也とぞ。北條家分限帳、島津孫四郎所領の中に、千駄ヶ谷の名有り。

代々木野八幡宮　同西の方代々木野にあり。此野も武藏野の中なり。祭禮九月廿三日に修行す。別當は

寺は紀州公御母堂養珠院日心大姉、正保紀元甲申草創あり。當寺の鬼子母神は、同大姉甲の延嶺にして靈示を感じ、大野の邊の土中に得られて、後當寺開創落成の日、安置ありしとなり。同所一町ばかり東南、龍岩寺といへる濟家の禪宗の寺の庭中に、笠松と稱するあり。枝のわたり三間あまりあり。

千駄ヶ谷觀音堂　寂光寺より二町ばかり西北の方にあり。觀谷山聖輪寺と號くる眞言宗の寺に安置す。

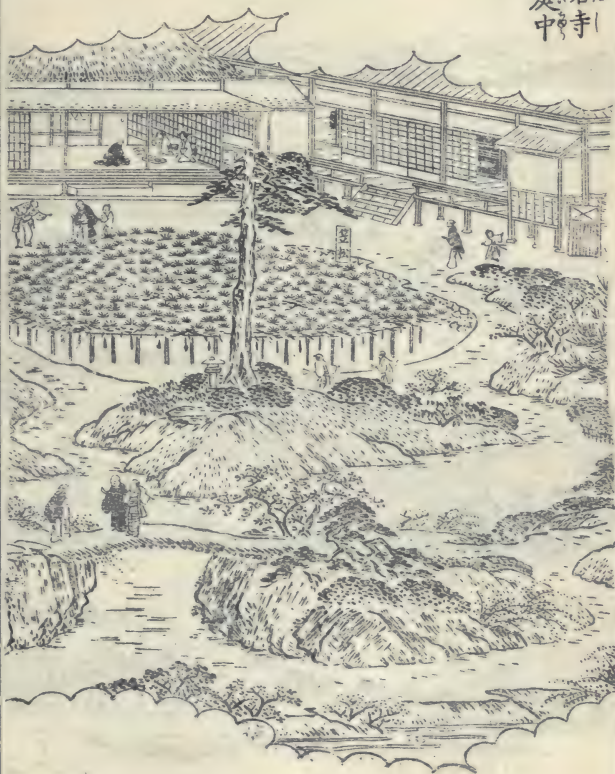
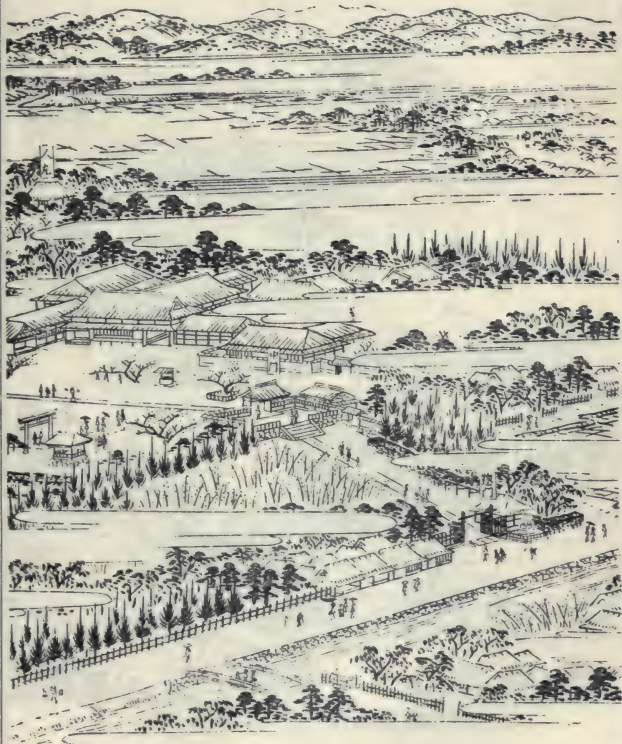
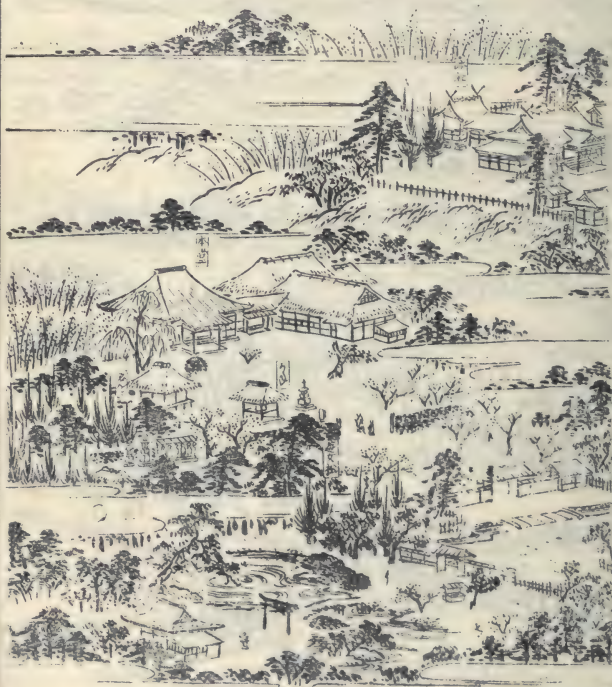
本尊如意輪觀音は、當寺開山行基大士の彫像にして、御丈三尺五寸あり。世俗目玉の觀音と字し奉る。往古慶長三年の春、盜賊來り此本尊の御双眼は精金「インス」なりと聞き傳へ、鑿りとりて去らんとせしが、冥罰にやよりけん自ら持てる所の刄に貫かれて死せり。此地の高橋氏某まのあたり是をみて驚歎し當字を再興す。此故に里民目玉の觀音と字したてまつるよし本尊緣起にみゆ。菊岡沾涼翁の說に、江戸寺院の中、千有餘歳を歷たるものは淺草寺と當寺也といへり。

緣起に曰く、神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃、同年初夏に暫く此地に息ひ給ふ。時に如意輪觀世音傍の谷より出現し給ひ、大士に靈示あり。依て佛意に應じ、かしこにありし古株を佛材として此本尊を彫刻し奉る。故に觀谷聖輪の號ありといへり。

本堂

千駄谷
観音堂

竜岩寺庭中

仙壽院
庭中

千駄谷
大神宮
寂光寺

太神宮　同所御焔硝倉の西の方に有り。相傳ふ、萬治年間、關東大に疫疾流行す。富士の根方より、神送して此地に祭りぬ。然るに其神輿の中に、太神宮の御祓有り。依て此地鎭護の爲、同所八幡宮の地に祠を建て、是を勸請す。後此地にうつすといへり、神主は小川氏なり。

遊女の松　同所西に隣る天台宗寂光寺の境地に有り。當寺昔は麹町の貝塚の地にありしが、御城廓御造營の時、此地にうつさるゝとなり。始は日蓮宗なりしが、元祿の頃、天台宗に改む。今の開基は自證大僧都圓雄師なり。相傳ふ、此地は往古の奥州街道にして、廣豁の原野なりしに、此松樹の鬱蒼として榮茂し、遠く見え渡りし故に、霞の松と號しが、寛永の頃、大樹此地に御放鷹の時、御鷹翦て御氣色あしかりしが、此松にありて御拳に止る。故に御褒賞として其御鷹の名を此松に命ぜられ、遊女と唱へしめ給ふとなり。

新日暮里　同所二町ばかり西南の小川を隔てゝ、法雲山仙壽院といふ日蓮宗の寺の庭をしかよべり。此邊の地勢および寺院の林泉の趣、谷中日暮里に似て頗る美觀たり。故に日暮里に相對して、假初に新日暮と字せり。彌生の頃、爛漫たる花の盛には、大に群集せり。當

摧太原
長禪寺

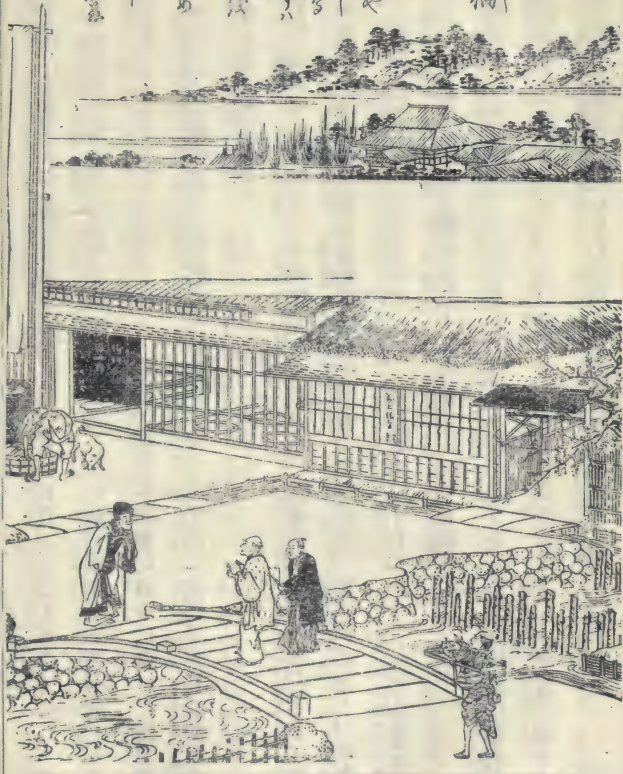
鳥の跡

さびしさや友なしちどり聲せずば何に心をなぐさめがはし　茂睡

永固山一行院　鮫河橋の西の方、千日谷に在り。淨土宗にして、開山は源蓮社本譽利覺和尚といふ。慶長年間草創す。昔は僅の草庵なりしを、永井家開基して、一字の淨刹とす。開山利覺和尚は則ち永井信濃守尚政に仕へけるが、剃染して此地に庵をむすび、千日の間常行念佛をす。結願の時、千日不退轉の回向を勸む。依て道俗群集せしより、千日寺と唱へ、又此所を千日谷と呼ぶとなり。案の一本といへる冊子に、さめが橋を渡り信濃原へ行く谷を千日谷といふとあり。永井家の屋敷ある故なるべし。今は信濃町といひ、又永井原とも云ふと云々。

阿彌陀佛銅像　權太原淨家長禪寺境内に在り、高さ五尺ばかり、佛像の背に應永十四年丁亥八月二十五日と彫付てあり。舊東本願寺の佛にて、大阪の御城内にありしを、寛永の頃江戸に移し、當寺に安置せり。

按ずるに、應永十四年は足利將軍義持の時世なり。佛軀こゝかしこに穴あり、疑ふらくは昔兵亂の時に損せしものならん歟。

吾妻堤　同所にあり。往古の街道の餘波なりとて、堤の形今も僅に殘れり。

なりしを、寛永の頃、内藤大和守重頼此地を賜りし時、此地に住める道心者ありしに、重頼若干の地を與へられしが、廣豁なるを以て大宗なりと云しかば、重頼とりあへず、さあらんには寺號を大宗と付よとありしより號とすと。當寺牌堂の本尊彌陀善逝の像は、鎌倉佛師の作なりといへり。齋藤伊勢守二親菩提の爲と記してありとぞ、此齋藤といへるは、代々鎌倉に仕へて、齋藤禪門淨圓が裔なりといへり。門の内に沙門正元坊が造立する所の銅像の地藏尊あり。江戸六地藏の第二番目なり。

護本山天龍寺 同所追分より南の方、甲州街道の左にあり。濟家の禪窟にして、本尊千手觀音、開山は春屋和尚なり。當寺其先は遠州の天龍川の邊にありしを、後江戸に遷し、牛込にありしが、天和三年癸亥二月十六日火災にかゝり、竟に此地に引れたり。延寶の江戸圖に依て考ふるに、今の牛込御徒歩町の西馬場のある地其舊跡にして今も元天龍寺前といへり。境内に地藏堂と觀音堂有り、又構の内に一里塚有り。

鮫河橋 紀州公御中館の後、西南の方、坂の下を流るゝ小溝に架すを云ふ。今此邊の惣名となれり。里諺に、昔此地海に續きたりしかば、鮫のあがりし故に名とすといへども、證とするにたらず。或人云く、天和二年公家の御記録に、上一ッ木村鮫ヶ橋とありと云ふ。然る時は此邊も一ッ木の内なりとおぼし。又佐目河に作る。千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘に鮫が村ともあり。

御入國の頃迄は、此地の左右は谷にて一筋道なり。此關にて往還の人を糺問せらる。近頃迄江戸より附出す駄賃馬の、荷物送狀なきを通さざりしとなり。今も猶駄賃馬の荷鞍なきをば、江戸宿又は荷問屋等の手形を出して通るは其遺風なり。この故にや、こゝの番屋は、町の持なれども、突棒指胯錑等を飾り置けり。是往古關のありし時の遺風ならん。又同所西の方の往還の道を横ぎりて、石橋の下を右へ流るゝ小溝を櫻川とよべり。

内藤新宿　甲州街道の官驛なり。（此地は舊内藤家の第宅の地なりしが、後町屋となる、故に名とす。）日本橋より高井土迄の行程凡そ四里餘にして人馬共に勞す。依て元祿の頃、此地の土人官府に訴へて、新に驛舍を取立る故に、新宿の名有り。然りといへ共、故有りて享保の始廢亡せしが、又明和九年壬辰再び公許を得て、驛舍を再興し、今は繁昌の地となれり。（此所より高井戸へ一里廿五町あり。）追分といふは、同所甲州街道八王子通、及び青梅等への分道なればなり。

霞關山大宗寺　内藤新宿右側中程、大木戸より二町餘に有り。淨土宗にして緣山に屬す。本尊は阿彌陀如來にして、惠心僧都の作。開山念譽故心學立和倘と號す。昔はわづかなる草菴

四谷内藤新驛

四谷大木戸
嵐雪

篠寺といへるハ四谷塩町の
通り道より左の傍にあり
長善禅寺と号す　昔
御放鷹の頃当寺へいらせらる
の庵室に満庭小篠
のミ所せく繁茂
せしハ篠寺なりと
おほせありしより
字とハなりぬる
とかや　今も
堂前に方三尺
ばかりの小篠の
隈ありて
其證を
永世に残せり

本尊聖觀音 作者詳ならず、一尺斗の石の上に立せ給ふ。此臺石潮の盈虚〔ミチヒ〕には必ず濕ることなり。

忍原 同所四谷通の小名なり。傳へ云ふ、寛永十年癸酉、武州忍の城を松平豆州侯に賜ふ。其頃は御番城なりしかば、勤番の面々御家人を江戸へ召歸され、此地において宅地を賜ふ。されど其頃は廣原なりし故に、字に忍原とは呼しとなり。忍川と唱ふる地は、四谷の通り傳馬町の西にあり。

篠寺 同所鹽町三丁目の左の側に有り。四谷山長善寺といへる禪林にして、篠寺は其異名也。天正三年乙亥の草創にして、開山は文叟憐學和尚、本尊は釋迦如來、脇士は普賢文殊なり。傳へ云ふ、當寺は長善庵と呼び、形ばかりの草菴にて、滿地小篠のみ繁茂せり。寛永の頃大樹此邊御鷹狩のとき、嚴命ありて篠寺とよばせ給ひ、此地を寺境に賜ふより後此名あり。故に其證として、今も堂前に方三尺斗の地に小篠の隈あり。總門の額に笹寺と書せしは、永平寺承天和尚の筆なり。

四谷大木戸 又大關戸に作る。甲州及び青梅への街道なり。土俗云ふ、霞ヶ關或は旭ノ關とも云ふとぞ。

本堂

日宗寺
戒行寺
汐干觀音

住人鎌田氏某此靈像を傳來せしが、本尊の靈示によりて、享保十三年當寺に安じ奉るといへり。

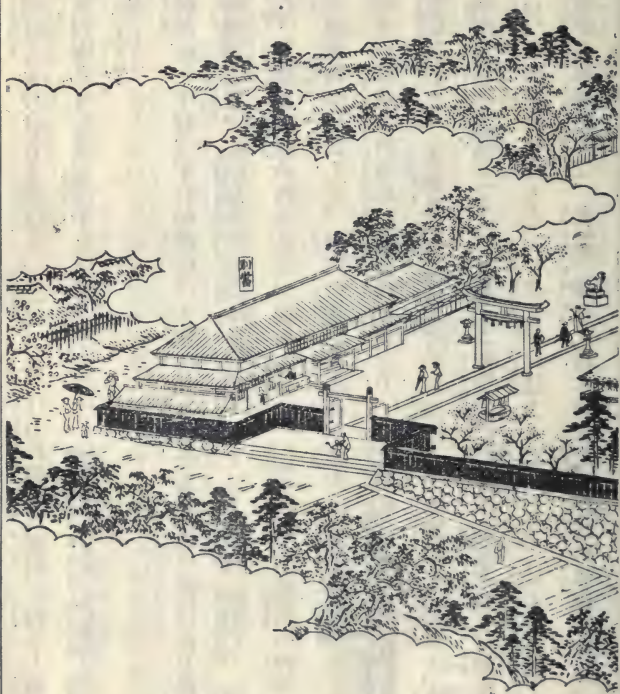
妙典山戒行寺　同所南に隣る日蓮宗にして、延山に屬せり。寛永の頃迄は麴町一丁目の御堀端にありて、常唱題目修行の庵室なりしが、近隣宮重氏庵主と共に力を合せて、遂に一寺とす。當寺の日貞師は山本勘助晴幸入道道鬼齋が孫にて、延山日悅上人の徒弟なり。寛保中八十餘歲にして遷化せらる。當寺は明曆に至り此地に遷さる。總門の額に妙典山と書せしは、朝鮮國李彥の書なり。此所の坂を戒行寺坂、又其下の谷を戒行寺谷と唱へたり。

分身鬼子母神　寺中圓立院に安置す、定朝の作なり。始め四谷北伊賀町永田安節といふ醫師の家に傳來す。來由は事長ければ爰に略して記さず。

汐干觀世音菩薩　同所南寺町戒行寺の裏の坂口、眞言宗錦敬山眞成院にあり。此本尊は越後國村上義淸が守佛にして、其末流村上兵部入道道樂齋大阪御陣の時、上杉景勝に從ひ、奥州米澤より彼地に赴く。後江戸に歸り、當寺に收むるといへり。或人云く、此本尊を鹽踏〔シホフミ〕觀世音とも號く、村上天皇襲身の尊像なり。依て村上肥後守賴淸常に崇信し、其後堂宇を造り安置す、大阪御陣のみぎり、村上覺玄齋當寺第三世看心に授與し當寺に安ずといふ。

此地は永祿の頃、霞村とよびけると云傳ふ。或は云ふ、往古此地は武藏野に續きし曠原にて、事跡合考〔ジセキガツカウ〕に、往古今の尾州公御屋敷表門の地及び坂町其餘二所共に民家四軒ありしにより、鳴子高井戸の方より四ツ家と稱して往來にやすらひたりとあり。此所彼所に土民の家四家ありし故、四家と云へりともいふ。

牛頭天王社　同所傳馬町一丁目二丁目の間の、左側の横小路を入りて、二町ばかり西にあり。故に俗字して、此小路を天王横町といふ。祭神素盞嗚尊、本地佛は藥師、弘法作。紫の一本に四谷の人家開けてよりの產土神とすと。神主は芝崎氏、神田明神の神主なり。別當を寶藏院と號す。眞言宗中野寶仙寺の末。祭禮は每歲六月十八日、同所石切町傳馬町一丁目の横町を云ふ。の旅所へ神幸ありて、廿一日歸輿す。地主は稻荷明神にして、共に此地の產土神と崇む。本地は十一面觀音行基大士の作也。

鬼子母神　同所坂の下、南寺町日蓮宗日宗寺に安置せり。當寺むかし麴町清水谷に在りて乘蓮寺と號す。此地へ移されて後、藤堂大學頭高次の室、高見院心月日宗大姉の法號を採て山を高見と號し、寺を日宗と唱へ、其家より寺院再興ありしとなり。本尊鬼子神神の像は、日法上人の彫像なり。相傳ふ、文永元年十月三日日蓮上人四十三歲母君を拜せんとし、舊里安房國小湊に歸る。母君悅の餘り頓死す。上人大に歎て、生活の祈念をせんとして、先徒弟日法上人に命じて、此本尊を造らしむ。依て此本尊に祈願し奉るに驗ありて、其曉蘇生し給ふ。後壽を保つ事四年なり。鎌倉の

四谷牛頭天王社

止宿彼宅。清重令二妻女備一御膳。但不レ申二其實一爲二御給一構二自他一所レ招青女之由言上。云云。

回國雜記

まりこの里にてよめる

東路のまりこの里に行きかよりあしもやすめず急ぐくれかな　　道興准后

駒林といへる所にいたりて云云

按ずるに、回國雜記にまりこの里とあるにより、東海道鞠子驛と混ずる事あるべけれども、此記行に出でたるは丸子の事をいへるなり此記行に芝の浦といへる所にいたり、此浦を過ぎてあらいと見るより、まりこの里、駒林に宿をかり、新羽〔ニッパ〕を立ちて鎌倉にいたりし事を記せるを以て、此所なる事をしるべし。

四谷　四谷御門の外より西の方、內藤新宿のあたり迄の惣名なり。里老云ふ、此地の四方に谷あり、故に四谷と號くると。

南向亭云く、昔麹町六七丁目の地と、糀町の地に谷有りしが、寛永十三年外郭營造の時、御堀の揚土を以て、東西の兩谷を埋めたる故に、平地となりしかど、舊名はうしなはずして、糀町の入口を今も坂町と字する、其故也。又古へ坂にて有りし頃は、民家一軒ありて、夫婦くちしの人居住せし故に、夫婦坂と呼びしと云ふ。

或人云ふ、御入國の頃は、今の麹町兩側番町、永田町に至り、本多彌八郎、高木九助兩家の下屋敷として下し置れしかども、御城近かりしにより、市ケ谷の臺、此原を永代御諚にて下し給ふ、表四百八十間に只四人指置かれしにより、四家といへりと。

ども、今祕してみる事なしといふ。今二十石の神領を添へ給ふ。文明八年當社燒亡により舊記を亡すといへり。小田原北條家の古文書二通、今猶存せり。

羽黒權現　稻毛山王より、八町斗南の方、中丸子村にあり。別當は眞言宗にして、瑠璃光山無量寺と號す。相傳ふ、天正年間羽州羽黒山より勸請すと云ひて、本地佛彌陀、藥師、觀音等の木像を安置す。行基大士の作なりといへり。土人云く、昔奥州會津若松の産にて小歌三藏といへる馬追あり、江戸に住みたりしが、年久しく中風の病に侵され、半身不隨にして、竟に非人となりて、此所彼所にさまよひあるき、其頃當社を己が栖とせしが、承應三年甲午六月一日、山伏一人來り告げて曰く、汝此社殿にあれども其身甚だ穢はし早く薙染して名を珍海と改むべしとなり、故に姿をあらため珍海となづく、同四年乙未正月十一日當社の御神の靈示によりて、病全快する事を得たりしかば、神恩を報じまゐらせんが爲、此地にありて、朝夕神前へ香花神燈を奉り、生涯此御神に仕へ奉りしとなり。華表の額に羽黒大權現と書せしは、朝鮮國雪峯の筆と云ふ。

丸子渡口　相模街道にして、其邑上中下に分れたり。上丸子、中丸子は、多摩川より西にありて、橘樹郡に屬せり。永祿二年北條家の分限帳に、上丸子の地、千葉殿所領とあり。又下丸子は荏原郡に屬して、川より東にあり、下丸子は布施善三といふ人領するよし、同書にみゆ。

東鑑曰

治承四年庚子十月十日。以武藏國丸子庄。賜葛西三郎淸重。今夜御

中丸子
羽黒權現

東鑑曰

承久三年辛巳六月十四日。宇治橋合戰。手負人々中。加世左近將監。

同彌次郎死了。云云。

小杉御殿地　最明密寺の大門の傍、農家の後園の地、其舊跡なりと云ふ。慶長十三年に御造營ありて、其後万治三年にたゝませらるゝと云ふ。則ち此邊省耕の爲に設け給ひし御殿なりといふ。

按ずるに、永祿二年小田原北條家の分限帳に、小菅大炊助と云ふ名あり。又同書に小菅攝津守稲毛小田村の地を領すとあり。小菅正字なるべし。小田原記に、大永四年正月十三日上杉の家臣太田源六、同源六郎謀反を起し、小田原へ相圖を定め、氏綱伊豆相模を引率せしに、江戸の城には上杉修理大夫朝興居住したりしが、居ながら敵をうけん事武略なきに似たりとて、品川小杉へ打向つて敵をまつとあるも、此地の事をいへり。

山王權現社　上丸子渡口より、五町ばかり西南、道より左の小路にあり。祭神大己貴命一座なり。祭禮は六月十四日、神主山本氏奉祀す。（此山本氏祖先を山本平内左衛門と稱す、往古當社勸請の頃、近江國より此地に遷り住むといふ。）相傳ふ、人皇三十代欽明天皇の御宇庚申の年（元年なり。）近江國坂本より移しまゐらすと云ふ。後平重盛公上下の丸子及び今井等の地を、當社の神領に寄附ありしとなり。（其頃重盛公奉納の短刀と稱するものあり、又重盛公の印と云ひ傳ふる物あれ

壽源寺

道興准后

丸子渡

最明寺
田園雜記

相傳ふ、日本武尊東征の時、此海上逆浪の災に逢ひ給ふ。其頃弟橘姫の御衣及び御冠の具など流れ寄りたりしを、土中へ收めたる舊跡なりといふ。

大戸明神　橘明神の社より、後へ二町あまり廻て、西の方の山の上にあり。蓮乘院兼帶す。祭神大斗乃辨神を祀ると云ふ。（神世七代の中にして二柱神也、則ち女神にましまして、男神を意富斗能地神〔オホトノヂノカミ〕と申し奉る。）神躰は一尺三四寸ありて、男女の容貌にして二軀あり。（按ずるに、男神形は意富斗能地神、女神の形は大斗乃辨神の神影なるべし。）祭禮は隔年九月九日に修行せり。

龍宿山最明寺　金剛院と號す。丸子街道の西、小杉邑にあり。新義の眞言宗にして、江戸愛宕下の眞福寺に屬せり。大日如來の木像を本尊とす。北條時頼公の創建なりと云傳へて、堂宇に三鱗の紋を附けたり。（元祿の頃洪水の災にかゝりて舊記を失ふといへり。）

普照山壽源寺　唯稱名院と號す。南加瀬村岡の中腹にあり。淨土宗なり。四十六世念譽覺榮和尚、今の堂宇を營建して、坐像丈六の觀音を安置せり。當寺梁牌の銘に、建武元年甲戌創建にして、往古は加瀬山智惠光院新如來寺と號せしとなり。開山は良山上人と稱す。十一世良察上人の頃、寛正元年庚辰、兵火の爲に亡びたりとなり。

登戸渡

登戸宿

道三貞同四郎入道道儀等率多勢構城廓無是非擬及合戰候之不能相渡候若此條僞申候ば八幡大菩薩六所大明神御罰可罷蒙候以此旨可有御披露候恐惶謹言

至徳元年七月廿三日　沙彌聖影

進上　御奉行所　在判

相傳ふ、往古日本武尊東征の時、此地より發船なし給へりと云ふ。（先に擧ぐる所の船河原、其舊跡なりと云ふ。上古は品川、神奈川の地共に一の海なりしとなり。）或は武尊此海中風浪の難に逢ひ給ひし頃、橘姫の御衣及び御冠の具など、此山の下に漂著せしとも云ひて、その説一ならず。（舟田も尊の御船の著てありし舊跡なりと云ふ。）

右近屋敷　（社地の右にあり、農民藤七といふ人居住す、右近古へは當社を奉祀のものにして、藤七は其末裔なりとて、今猶連綿として子孫繁昌せり。）

左近屋敷　（同じく社地の左にありて、右近屋敷と共に除地たり。されど左近屋敷の方は、今畑となりて人居はあらず。）

橘姫神廟　（社地より二町ばかり東に當りて、山の中腹にあり、五六歩の地を封じて茅篠の類鬱茂せり。）

橘明神祠

ある時は、必ず先當社に詣で、然して後發足せざれば、路中過ありとて、大に恐怖せり。

古文書一通　子母口村の里正（ナヌシ）伊藤氏の家に藏す、子母口昔は澁口なる事此書によりて明けし。

澁口鄕目錄

一町　大戸宮　神田

二段　立花宮　神田

領家方　能登出作

字田壹町四反

田壹町　散在

合貳町四反　此内四段小せきめん御公事免の如く以上一貫貳百三十七文分錢

以下略之

岩松禮郡代國經申武藏國稻毛新庄内澁口鄕事任被仰下之旨差遣使者欲沙汰付下地於國經候也處江戸藏人入道希全同信濃入

十三塚(じふさんつか)

び改て橘樹郡を寺に充てしむ。此年の春三月、竟に惟仁太子御位につかせ給ふ。清和帝是なり。是偏に此本尊の衛護のよつてしからしむる故ならんとて、威徳山と號けられ、近江國蒲生郡の地を御寄附の宣旨ありしといふ。

十三塚　土人は十三本墓と呼べり。野川村の耕地の中、此所彼所に散在せり。雜樹茅草茂れり。相傳ふ、新田佐兵衛佐、江戸遠江守の爲に伐れて、矢口の渡にて亡び給ひし時、隨ふ所の家臣の墳墓なりといへども、詳ならず。

舟田　子母口村の內、府中道の右にあり。橘明神の神田にして、長二十歩ばかり、幅十四歩あまりある水田なり。舟の形にして、其回は悉く陸田なり。舟河原と稱する地は、社より十町ばかり東に當りて、今は民村の字となれり。次の橘明神の條下と合せみるべし。

橘明神社　同所府中道より四町あまり右の方、山の上にあり。別當は眞言宗にして、蓮乘院と號す。祭禮は隔年九月九日に修行す。祭神は弟橘媛を祀ると云ふ。神體は一尺三四寸斗ありて、男躰女躰二軀を安置せり。女躰は弟橘媛、男躰は日本武尊。勸請の始詳ならず。此地の人他邦へ出る事

き給ふ所、實に奇特の靈石にして、彼地も又靈佛安座の勝刹なり、早く一の伽藍を建立し、醫王尊を安置し給はゞ、皇后の御惱立所に平愈あるべし、殊更王城の鎭護として、國土豐饒たるべしと。座を立給ふと見て、其行方を見失ひ給ふ。天皇此奇特をしろしめされ、行基菩薩に藥師佛彫造の勅あり。又武藏國に勅使を下し給ふ。同年四月八日勅使當國に下向ありて、此靈地を探り得給ひ、竟に伽藍造立あり。又行基菩薩は良材を得て、藥師佛の尊像を彫刻し給ふ。（此地を去る事五十餘町巽の方小倉と號くる地に一の池あり、此間夜毎に龍燈を捧ぐ。又后の御惱も四月八日よりおこたり給ふとなり。）佛堂造立落成の後、橘樹郡の地を以て寄附し給ふ。時に天平十二年庚辰十一月なり。其後文德天皇の御宇にあたり、惟喬、惟仁御同胞の太子御位定の時、慈覺大師、惟仁皇子の御爲に、種々の御祈ありて、天安元年丁丑の八月、當山に勅使を立られ、堂塔御再營あり。翌年戊寅初秋、悉く落慶して、舊觀に復す。同年八月本尊を京師より移し給ふ。（本尊駿河國青島の里に至り給ふ夜、自らさきだつて當山辰巳の方の大盤石の上に立せ給ふ、人々奇異とす、則ち影向石是なり。）其時大師曰く、我此山の躰をみるに、靈石靈水四の谷四の峯あり、是八葉胎藏の德を備へたり、末世に至る迄、二世の悉地圓滿すべき相ありとて、勅使と共に歸洛の後奏聞ありしかば、天皇再

稲毛薬師堂

得二其驗一。偶至レ此禱レ之。則雙明漸愈。雖レ未レ如二平人一焉。大半獲レ快矣。嗚呼靈泉之妙。河潤千里也哉。敬拜二神靈之威德一。而片石以識二不朽一。且表二尊信之志一也矣。延享丙寅季秋　東都法眼桂川先生門人。和州城下郡大泉村。森本宜直立レ之。

東武　菊地政房代撰

平林惇信書

緣起に曰く、天平十一年己卯九月十二日寅の尅に至り、聖武天皇の妃（光明皇后是なり、不比等の大臣の二女なり。）俄に御惱あり。天皇自ら藥師佛を御祈念ありしに、翌年辛辰二月十二日の夜、一人の沙門忽然として天皇の御前に佇み、告奉りて曰く、武藏國橘樹の里に、（和名抄、橘樹郡の中に橘樹といへる地名を記したり。今此地名亡びたりといへども、疑ふらくは此あたりを云ひし）なるべし。一の靈石あり、中心に水を湛へたり、佛在世の時、佛此靈石に向ひ、三國に飛行して、永く有緣の地に止るべしと云々。然るに其石忽然とし飛行し、此日本の地に移り、彼地に止れり。件の靈石は釋尊の御足を捧げ奉りし大蓮花の、其一葉を踏とゞめて、末世に殘し置

喜式内、同國都筑郡星川邑鎭座の杉山神社の模なるべし。祭禮は九月廿九日なり。此社へ觸穢の者詣れば必ず災ありとて、土人甚恐怖せり。

稻毛藥師堂　野川邑の内、府中往來の道より、三町斗西にあり。醫王山影向寺と號す。天台宗多摩郡深大寺に屬せり。聖武天皇の御願にして、行基大士開基す。其後文德、清和兩帝御再興ありて、慈覺大師修造せり。三帝の勅願、兩大師構營の靈場にして、利益著し。此故に、上古は僧坊百戸三箇寺九院ありて、晝夜仕候し、いとも盛大の寺院なりしといへり。

本堂　本尊瑠璃光如來　御頭〔ミグシ〕ばかり行基大師の作にして、再興の本尊は坐像長五尺脇士日光月光天共に五八五寸ありて、慈覺大師の作なり。　影向石　又佛足石とも稱す。堂前右の方にあり。垣をめぐらし入口に戸鎖ありて猥に人をして入らしむる事なし。石の大サ六尺四方、石面は平にして中眞に一尺五寸斗の凹なる所ありて、常に水を湛へて上に家根を覆ふ、これを醫王水と稱し、病あるもの服飲して靈驗を得るといふ。

影向石之碑　入口の左に建てたり、其文左のごとし。

影向石碑

嗚呼神道之妙。聰明正直也哉。此地堂構。往昔天平之年初基焉。文德帝之御宇中興焉。悉因王造云。有石象。凹淸泉常滿。一飮其水。則沈痾盡愈。人々至誠所以感於神也矣。余曾患眼也多年矣。醫藥極術。而未

妙樂寺
七面山

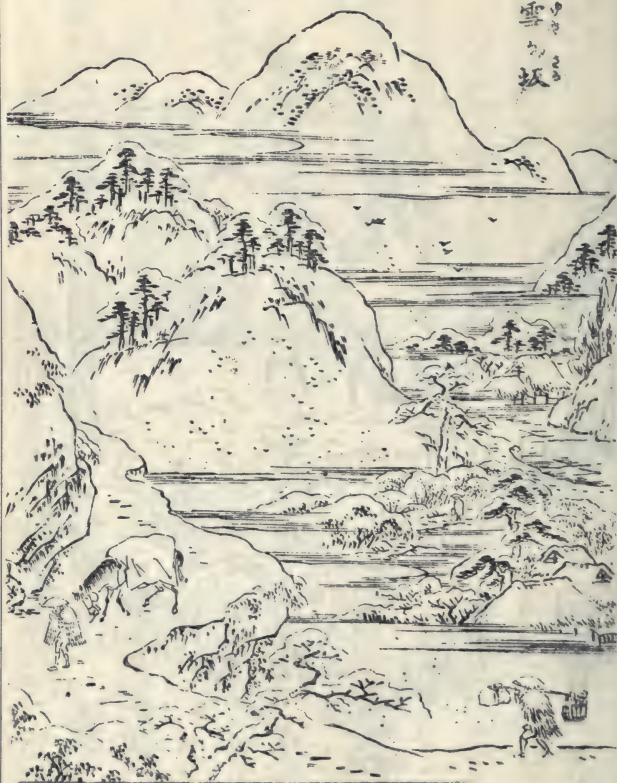
藥師堂　長尾村の内、二子街道の右側、山の上にあり。本尊藥師如來の靈像は、影向寺の本尊と同木にして、慈覺大師の彫造なりと云ふ。祕佛にして常に拜する事なし。天台宗同所妙樂寺別當たり。

大師巖室　土人大師穴と稱ふ。藥師堂の山の後、西向の所にあり。入口は一間四方ばかりあり。空中は二間四方にして、高も相同じ。享保の頃、一人の山伏、心願の事ありとて、斷食にて、此窟中に一七日の間籠りたりと云傳ふるのみにて、大師と稱する所謂知りがたし。今窟中に青き板石の古碑四五枚あり。

五所權現社　藥師堂の南の山續にあり。祭神詳ならず。神躰は何も坐像にして、丈七八寸ばかり、烏帽子を冠るが如きもの、或は僧形のものもありて、都て五躰なり。荒木彫にして尤古物なり、形勢見分けがたし。毎年正月二日、桃樹の枝を伐て弓とし、箭を放つ舊式の祭事あり。

杉山明神祠　相州厚木街道溝口の驛より、左に入て十六町ばかり南の方、久本邑にあり。上の宮と稱するは、別當龍臺寺天台宗深大寺に屬す、毘沙門堂の本尊は慈覺大師の作なり。の西の山續にありて、其間一町斗を隔つ。下の宮も同じ。寺の堂の左の方、石階の上にあり。祭神詳ならずといふ。當社は延

大師穴

雪坂

日蓮宗安立寺奉祀せり。

祭神　長森稻荷明神　右星夜明神　左海光曜明神。以上三神

眷族の神。長現金狐神、渡一銀狐神、阿通相狐神、阿參玄狐神阿權白狐神。以上五神。

相傳ふ、元祿十年、伊豫國宇和島の浪人、相馬左仲といへるもの、花洛にありし頃、鳥羽繩手にして一人の美女に逢ふ。其美女の云く、我は伏見藤森長森明神の臣、渡一銀狐神と稱せりとて靈示あり。翌る十一年の夏四月二十日、又神告あるに任せ、江戸に至り、麻布日ヶ窪に住る中原與兵衞といふ者の家に勸請なし、大に奇瑞靈驗あり。然るに正德五年の夏の頃、左仲沒するの後、一子加藤次といへる者、此御神を讓請て尊信す。終に元文五年十一月、安立寺の主僧日現上人、此地に遷しまゐらせて、法華勸請の御神となせり。中原與兵衞が裔なりける有隅次兵衞といふ人此神を尊信し、稻穗および銀封伽羅等を感得せし奇瑞あり、今ことごとく安立寺に收めて稻荷の寶物とす。

雪ヶ坂　飯室山の南の續より、曲折して西へ下る坂路を云ふ。登戸の邊より、平村邊への通道なり。頗る美景の地なり。

ありて、升の形狀をなす。故にしか號く。重成は小山田別當有重の子、北條時政前腹の女の聟たり。秩父大夫重弘が甥、重忠從弟にして、賴朝公の幕下に屬して、稻毛の地を所領とす。然るに重成は重忠と日頃不和なるより、牧の方と共に時政に讒したれば、元久二年乙丑六月二十二日、重忠野心の企とて、時政勢を向けて、畠山一族を誅伐す。重成親族の好を忘れ、重忠を讒害せし事、天道に背くの罪遁がたしとて、終に和田義盛、大河戸三郎、宇佐美與一等をして、武藏國へ發向せしめ、同二十四日稻毛入道父子を誅せらるゝよし、東鑑、北條九代記等の書に見えたり。稻毛と稱する地尤も廣大なり、登戸の渡より川崎の邊までの地すべて稻毛領と稱して、往古は四萬八千石の地なりしといへり。太平記には、江戸遠江守同下野守伯父甥か所領稻毛庄十二郷とあり。又小田原記に、信玄江戸を廻りて、小田原へ押寄んとするといふ條下に、矢口の渡を船にてわたり、稻毛の平間と云ふ地へわたり、稻毛の十六郷を追捕すともあり。又永祿二年北條家の分限帳に、竹內、木月、小倉、長尾、鈴木、小田中分、鹿島、田端宿中田分、鹿島田中村分、矢向平間、染屋經久、末長、久本、小田、溝口、平の村高田等いづれも稻毛の內とす、證とすべし。又同じ頃北條家の武士行方「ナメカタ」彈正明連か家臣田島兵部左衞門之房、橫山式部弘成、駒林圖書定朝等皆此地に住したりといひ傳ふ。

飯室山　同所左の山續にして、山頂に七面富士淺間を勸請す。長者穴　同じ山の東の麓にあり、入口は一間四方ばかりなれども、窟中甚廣く、同じ程の巖室二つ並びてあり、土人も其名義をしらずといへり。

長森稻荷社　同所四町斗を隔てゝ、菅生村府中往來の街より右の方、蒼林の中にあり。同所

同書曰

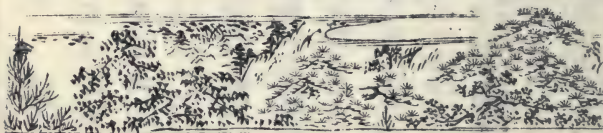
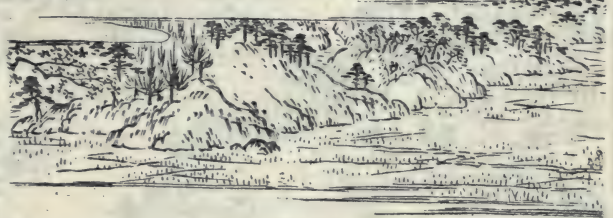
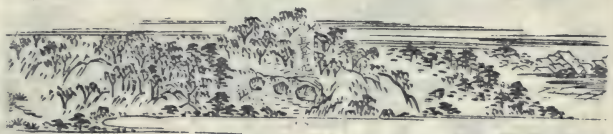
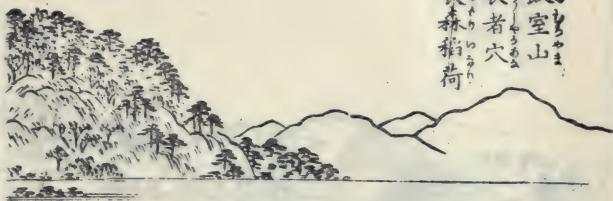
同年七月四日丙戌。稲毛三郎重成妻。於武藏國他界。日來病惱頻。雖加鵲療。終被侵風痾畢。重成不耐別離之愁。頗倦勇敢心。忽遂出家。云云。

稲毛三郎重成基　観音堂の後の方、山の上にあり。小き五輪の石塔にしてなかば土中に埋れたり。

當寺境内は櫻樹多く、春時爛漫たり。故に近邑の土人、開花の時を待得て、此地に至り宴を催し、遅々たる春の日も、猶暮惜く思ふなるべし。

韋駄天宮　廣福寺の前の小路を隔てゝ、向の山の中腹にあり。廣福寺奉祀する所にして、韋駄天の尊像は、廣福寺の佛殿に安置せり。祭禮は九月十五日に執行す。

按ずるに、此地の小名を稲の目と稱ふ。或人云ふ、延喜式神名帳に、武藏國男衾郡稲實神と云々。又神名帳頭註に稲乃賣神（イナノメノカミ）は稲田姫なりとあり、疑ふらくは當社往古は稲乃賣社なりしを、後世稲田姫と韋駄天とを混じて誤りたるならん歟といへり。しからば稲荷も又稲の目の誤ならん歟。

升形山　廣福寺より南の方の後の山を云ふ。稲毛入道重成居城の舊趾にして、山頂八町四方

飯室山
長者穴
長森稲荷

韋駄天山
廣福寺

稻毛三郎平重成禪門法名道全 名の上に丸の中に上羽蝶の下に一文字の紋を畫きたり。

元久二乙丑年六月廿四日

其餘重成の父、小山田別當平有重法名寂照、同舍弟榛谷（ハンヤ）四郎平重朝法名諦悟、同甥の榛谷太郎平重秀法名蓮風、同小次郎平重秀法名如月、一子小澤次郎平重政法名眞悟、等以上五人の靈牌あり、いづれも元久二年乙丑六月二十三日とあり。又同じ形の靈牌に森五郎平行重法名玄理と注せしものも存すれども、歿卒の年月忌日を注さず、追て考ふべし。

按ずるに、元久二年六月北條時政の室牧の方、小山朝政が讒訴を請け、重忠父子を誅さんと計議ありて、同廿二日由比濱において畠山六郎を誅す。同日申刻二俣河において、重忠愛甲三郎季隆が箭に中りて誅せらる。後小次郎重秀ならびに郎從等自害す。翌廿三日又鎌倉中騒動す。三浦平六兵衛尉、謀て榛谷四郎重朝、同嫡男太郎重季、次郎秀重等を經師ヶ谷に誅す。稻毛入道は大河戸三郎が爲に誅せらる。子息小澤次郎重政は宇佐美興一に誅せらるゝ由、東鑑に見えたり。何れも此時死亡の人々にして、重成の一族なる故に、當寺に靈牌を置きたるべし、又按ずるに、榛谷太郎當寺靈牌には重秀とあり、大系圖東鑑等には重季とす。同小次郎靈牌には重秀とし、大系圖には季重に作る。猶可考。

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月十四日

かく注せし靈牌もあり。寺僧も其人をしらずといへり。東鑑に因て考ふに、即ち稻毛三郎重成の室なる事明けし。

東鑑曰

建久六年乙卯六月二十八日辛巳。稻毛三郎重成妻。北條殿息女。於武藏國病惱太危急之由。飛脚到著。下略。

號す。相傳ふ、孝謙天皇の御宇、天下大に旱魃す、依て良辨僧都請雨の法を修せられしに、奇特ありて、淸泉湧出すと云ふ。卽ち門外南の方に有る靈泉是なり。此地を和泉邑と名づくるも、此淸泉によるとなり。又小田原北條家の分限帳に、川村某の所領に江戸泉村七貫文とある地を加へたり。

靈泉、總門に並て右の方にあり。槻の樹の根より湧出して、泌沸たり。此池水いかなる旱魃にも枯る事なく、此近里悉く耕田の用水に引くといへり。寺號も此靈泉に依て名づくと見えたり。池の中島に蛇形の辨天の像を安ぜし宮居あり。此靈像は良辨僧都の作なりといふ。

經塚　寺より後の方用水堀を越て一町あまり艮〔ウシトラ〕の方畑の中にあり。少き岡の上に三圍ばかりの老樹あり。往古良辨僧都此所に佛經を埋め松を植ゑて印とす、此樹下に古碑六枚あり、一は上に梵字を刻し、下に六字名號を記し、左右に明應六年巳正月十六日とあり。又一は上に梵字を刻し、下に阿舍梨良辨と記し、右に明應三年壬申六月十一日とあり。又左に毎自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身とあり、其餘の四枚は缺損して文字讀み得がたし。

松本山廣福寺　昔は稻毛山と號したりといふ。菅村の內、府中往來の道より右の方、四町ばかりにあり。新義の眞言宗にして、三ッ濱の高勝寺に屬す。本尊五智如來は、坐像九尺斗あり。開山は慈覺大師、中興は長辨阿闍梨と號す。安貞元年丁亥正月十日化寂す。

觀音堂　本堂より後の山にあり。本尊正觀世音の像五寸ばかりありて、胎中に稻毛三郎重成念持佛の觀音の小像を收むるといへり。此堂中重成の自像ならびに重成以下の位牌を置きたり。

同背面曰

于時永祿十三庚午歲卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表　左右石柱に、承應三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝、同五郎左衛門重恒等建立するよし鐫付てあり。

馬頭觀音堂　華表の右の方にあり、喜多見重某の乘馬の斃れしを埋藏して、觀音に崇むるといふ。

江戸遠江守舊館地　氷川明神の社地より一町斗巽の方、小篠の猥雜たる所を名づく、今は除地とす。延文三年十月十日、竹澤右京亮と共に謀り、矢口の渡にして、新田左兵衛佐義興を亡したりし江戸遠江守是なり。其事は第一巻矢口明神の條下に詳なり。

雲松山泉龍寺　氷川明神より八町ばかりを隔てゝ西北の方、和泉村にあり。曹洞派の禪刹にして、相州高座の寶泉寺に屬せり。本尊釋迦如來の坐像は、八寸斗ありて、脇士には阿難、迦葉の像を置きたり。丈七寸ばかり 脇檀に聖觀音の像を安置す。良辨僧都の作なりと云ふ。當寺は良辨僧都の草創にして、往古は法相華嚴を兼て大伽藍なりしとなり。中興を鐵叟瑞牛和尚と

和泉村
湧泉

経塚

泉龍寺
本堂
庫裡
弁天

部少輔賴忠を以て大檀那とす、（此賴忠は、江戶太郎重長より五代の孫、江戶彥次郎常光の子にして小田原北條家に屬す。）

藥師堂　本堂の前左の方にあり、立像一尺八寸斗の木像にして、作者しるべからず。宿願あるもの其家へ遷しまゐらせ、よもすがら法施供養なし奉る、故に道俗宿藥師（ヤドヤクシ）如來と稱しまゐらするといふ。

氷川明神社　同所の左に竝ぶ。禱善寺別當奉祀す。祭禮は九月十八日なり。相傳ふ、勸請の年歷久遠にして、詳ならずといへり。永祿十三年庚午四月、江戶刑部少輔賴忠社を建立せし頃の梁牌一枚、當社に存す。（寛永二年乙丑五月江戶氏の遺裔喜多見勝重當社を重建せしといふ。）

梁牌銘曰

別當宮本房　　代官　香取新兵衛

聖主天中天　加陵頻伽聲

奉再造氷川明神社頭一字天道納受攸

哀愍衆生者　我等今敬禮

大檀那江戶刑部少輔賴忠　　大工　石渡

鍛冶　正吉

せり。相傳ふ、往古澤庵和尚堺南宗寺に勸請せられしを、承應年間、喜多見久大夫重勝大阪にありし頃、神木の梅樹と共にこの地に移し、自の園中に勸請す。天神森其舊跡なりと云ふ。神影は畫像にして、古土佐の筆と云ふ。後故ありて此地石井兼重の家に傳へ、梅樹も又自庭前につうしたりしが、後兼重の子通兼と云ふ人、大藏村の永安寺に安置すとなり。故に永安寺にも、神木の若木あり。

除蝮蛇神符　北見村の内宿といへる地に住める農家、齋藤伊右衞門某が家に傳ふ。毎歳四月八日に、此神符を諸人に與ふ。蝮蛇に咬れたる人此家に至り、禁呪を乞へば、忽に其痛を去り、毒を消する事甚奇なり。其神符に、永祿二年未九月廿日、齋藤道善藤原忠嘉再改之と注したり。

普命山禱善寺　華藏院と號す。同所北の方へ廻て、三町餘にあり。天台宗にして、深大寺村の深大寺に屬せり。（氷川明神の別當寺にして昔は宮本坊と號くると云ふ。）本尊は坐像の藥師如來にして、二尺五寸斗あり。脇士に十二神將の像を置きたり。往古江戸刑

一字を存するのみ。往古堂舍兵火の爲に灰燼せし頃も、本尊は自ら火焔を遁れ給ひて恙なし。其後此里に住める川邊氏代〻の安產を祈り奉りて奇瑞ありしかば、報恩の爲永世當寺の檀那となり、其頃田園等を喜捨し奉りしなり。

觀音寺　吉祥院より八町ばかり西の方、宇奈根村にあり。當寺は永正年間、天台の沙門實海、河越喜多院第十四世なり天正五年八月十七日化寂す。創建する所の寺院にして、深大寺に屬す。本尊十一面觀音の木像は、傳敎大師の作なり。故に寺號とせりといふ。昔は相州小田原にありて圓正寺と號したりしが、兵火に亡びたる故に、炎上の響あるをいとひて寺號を更むるといふ。

荒井對馬治義墓　當寺にあり。相傳ふ、治義天文中上野國新田より出て小田原の北條家に仕へ、後此地に遁れて民間に交り、天正元年癸酉二月十七日沒する由碑面にみえたり。此地に荒井氏の子孫今に連綿として相續するものは此ゆゑなり。

永劫山慶元寺　華林院と號す。觀音寺より七町あまり西の方、喜多見村にあり。淨業の精舍にして、木机の泉谷寺に屬す。本尊阿彌陀如來の坐像は、一尺斗ありて、惠心僧都の作なりと云ふ。開山は眞蓮社空譽上人と號せり。當寺は江戶遠江守の後裔、江戶刑部少輔賴忠の子を、江戶攝津守朝忠とよべり、此人も賴忠に同じく小田原に屬せり。賴忠の次男勝重(始め勝忠と云ふ)より江戶氏を改めて其釆邑喜多見の地名を以て氏とし、喜多見若狹守勝重とよべり、小田原沒落の後遊客となり、御當家に屬し奉る。故に江戶は御當家御居城の地なるを以てはゞかりて氏を改むといふ。勝重の二男喜多見五郞左衞門重恒、其子若狹守重政より後其家滅す。喜多見氏建立の寺院なりといふ。

天神森　慶元寺の前、小高き岡にあり。北見氏陣屋の跡なりと云ふ　歌枕天神と號す。歌枕の來由しるべからず。天王を相殿と

夏の頃より初秋に至る迄當寺に宿せられし頃、御寄附ありしとなり。日輪弘法大師畫影（嵯峨帝八宗論の御影なり。同大師の眞筆にて、是も仁和寺の宮御寄附なりといへり。）緣起に曰く、天平十二年庚辰、行基大士勅を承りて、諸國に伽藍を造立し給ふにより、其頃當國に至り給ふ。然るに此地に齡六十ばかりの貧女住り。幼より地藏尊を信じ參らせ、稱名しばらくも止時なくて供養し奉りける。彼貧女一日行基菩薩の御許に至り、未來成佛の道を問奉る。同十三年辛巳正月二十四日行基菩薩此地に至り給ひ、地藏尊の像を彫刻ありて、これを貧女に與て曰く、此地は則ち本尊有緣の靈地なり、汝直に精舍を營むべし、吾其勝地を卜すべしとて、拄杖を以て地上に畫して是を定め給ふ。（今地藏屋敷と云ふは其舊跡なりとぞ。）依て貧女は、（其頃世に地藏尼と字せしとなり。）薙染して寺院建立の大志を企つるに、同鄕の富民秦氏某なる人、糧財を喜捨し、田園を附しければ、精舍僧坊悉く落成し、稱名散花梵唄の聲絕る事なかりし。然るに建武二年の兵亂に、堂宇悉く灰燼となりしより已降、本尊のみ假に草堂に安じ奉りしに、遙の後世田ヶ谷の吉良氏、不測の靈夢を蒙り、大に崇敬ありて、寺院再興ありしかど、竟に天正の頃、小田原北條家沒落の後は、吉良氏の家も共に亡びたりしにより、其後は漸香花の備もおろそかになりて、今は僅の草堂

氷川明神社
禱善寺
慶元寺

見守兼周、その子同左衛門尉兼章、仁治元年庚子、執權武藏守經時の吹擧により、始て武州石井郷を賜はりて、此地に移り住す。石井郷も、明暦の頃、大藏邑と共に多摩郡の内に加へられ、今は大藏邑に屬して小名となれり。今石井神社の舊地を石井土谷といふも、古の稱を失はざるの證なり、此地古き御圖帳、あるひは古碑の類ひにも荏原大藏邑とあり。證とすべし。又等々力滿願寺古文書の中に、弘治二年丙辰十二月十八日吉良左兵衛佐賴康より賜ふ所の文に、大藏村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫滿願寺へ一貫分と云々。故に石井を以て氏とし、則ち當社を尊崇し奉り、石井氏累世、鎭護の神とすといふ。

按ずるに、荏原郡不入斗(イリヤマズ)村に鎭座まします鈴の森八幡宮を以て、社司等は式内磐井神社と稱し、又石川中納言豐人卿武藏守に任じ、荏原郡に在せし頃、靈示によりて經始せし宮社なりと云傳ふ。按ずるに、續日本紀に延暦七年二月中宮大夫從四位上石川朝臣豐人を兼武藏守とす、同年七月大藏卿とすと云々。然るに國の守上古は府中に在せし事舊史にみゆ。當國の府古へ多摩郡にあり、大藏村其頃荏原郡に屬すといへども、多摩郡に接ししかも府に遠からず、恐らくは豐人卿此地に在してより、後世大藏の號おこるならんか。又武藏國風土記殘編荏原郡磐井神社の條下に、社邊に盤井ありとしるせり。然るに當社の舊地石井土谷も今は多摩郡に加へられたれども昔は荏原郡なり。其舊地甘泉涌出して石井と號く。かたがた鑑みれば因あるに似たり。猶第二巻鈴の森八幡宮の條下を照し合せてみるべし。

東覺山吉祥院 地藏寺と號す。大藏邑の南、鎌田村にあり。天平十二年庚辰、行基大士開創す。新義の眞言宗にして、小杉の西明寺に屬せり。

本堂 本尊地藏菩薩、(立像御長一尺七寸) 行基大士の彫像なり。

不動尊 同じ堂内に安置す。良辨僧都の作にして、刑部少輔源義光願所の本尊なりといへり。

印子歡喜天 弘法大師の作、鎌倉副元帥平泰時祈禱の本尊なりといふ。 **七觀音畫影** 興教大師の筆なりといふ。往古當寺盛なりし頃は、仁和寺に屬せしにより、久安四年己辰守覺法親王兵亂をさけて此地に下り給ひ、同年中

按ずるに、石井家の先祖良覺は、武州久良岐郡釜利谷〔カマリヤ〕の伊丹氏によりて、小田原に屬し しばらく伊丹氏を冒せる事あり。然るを後世丹を田に誤り傳へて云ふならん歟。されど中務大輔兼紀と名乘りたるは其家にも所傳なしといへり。後世土人傳へ誤るものなるべし。又先に擧げたる氷川明神の棟札に石井内匠助兼實とあるは、良覺の子にして、其子孫今猶連綿たり。

ともいへり。

太神宮祠　殿山の中にあり、永安寺より別當兼帶す、神木は至ての老松にして土人乳垂〔チタレ〕の松と號す。

石井神社　弦巻村より西南の方、大藏村石井氏某が地にあり。大藏邑古へ荏原郡に屬す、明暦より已降多摩郡に入たり。祭神詳ならず。寛永年間、石井氏兼忠社を舊地石井土谷と云ふ。より今の地へ移し奉り、稻荷を相殿に合祭せり。又近世故ありて同兼昌、磐井と齋の假名は違へども、其訓の相似たるを以て、齋稻荷とも稱せりとなり。土人云ふ、當社は武藏國荏原郡二座の内、延喜式神名帳に載られたる磐井神社是なりと。石の文字古事記日本紀等に伊斯〔イシ〕或は伊波〔イハ〕ともありて一字二訓なり。土人云ふ、磐の文字最筆畫多くして煩はしきが故に、其便ならざるを厭ひて石の文字に改めたりといふ。地名の文字改めかゆる事其例多し。舊地は今の社より七八町を隔てゝ、同邑石井土谷といへるにありて、其地に甘泉あり。武藏國風土記殘編に、所謂荏原郡磐井神社の邊磐井ありと記されたるは、則ち此靈泉なりと云云。相傳ふ、往古鎌倉右大將家の幕下、安達藤九郎盛長の孫、同出羽守景盛の次男、石井石

庄屋　大野新兵衛　大工　石

帯刀先生義賢之墓　大藏村石井土の内、殿山といふ地の東南、北見村の堺なり。農家清水氏の宅地の傍にあり。清水氏は清水冠者義高の後裔なりと云ふ。さきに擧げたる氷川宮梁牌の中に、清水源兵衛とあるは、則ちこの清水氏の事なりといへり。土人は大將塚と呼べり。

東鑑曰

治承四年庚子九月七日丙辰。源氏木曾冠者義仲主者。帯刀先生義賢二男也。義賢者久壽二年八月於武藏國大倉館。爲鎌倉惡源太義平主被討亡。于時義仲爲三歳嬰兒也。乳母夫中三權守兼遠。懐之遁于信濃國。令養育之。云云。

相傳ふ、此處は義賢居館の舊址なりし故に、殿山の稱ありといふ。天明年間、此地の農民清水氏義賢の塚をあばきたりしに、石壁の中に古刀及び砂金の類を存せしとなり。されど祟あるにより舊の如く埋藏したりとなり。其後大永年間、石井氏某法名良覺と云し人、京都より此殿山の地に移り住す。土人云く、同所新坂の上神明宮の脇に第六天の宮あり、此良覺の靈を祭ると云ふ。或は伊田中務大輔兼紀と云ふ人の居跡なり

なり。昔の神躰は、江戸氏の兜の立物にして、黄金の瓶子に、畠山重忠と銘してありしとなり。されどもいつの頃にか失ひたりとて今はなしといふ。

棟札一枚　當地石井氏の家に傳ふ。按ずるに、棟札に神主田中松井坊敬白とあり、しかちば田中と松井坊別人にあらずして、田中は松井坊が俗姓にてありしか。

面

哀愍衆生者　永祿八年乙丑正月十九日

武藏國荏原郡石井土郷　大藏村氷川大明神第四ノ宮

我等今敬禮　神主田中松井坊敬白云云

裏

長島源太郎　伊丹孫次郎

再建副願主清水源兵衛　河野大學

石井玄蕃

大旦那

武運長久　石井内匠助平兼實敬白云云

不動明王畫幅　妙澤筆、聖護院道興准后開眼せられしと云傳ふ、即ち紙中に花押を注してあり。

妙澤和尚は、嘉慶の頃の人にして、足利三代義滿公の時世に當れり。大草紙（鎌倉大草紙）に、妙澤は夢窓國師の法嗣にして、不動明王の化身なり。兒の時より、好みて不動尊の御影を畫き（本朝畫史に云ふ、毎日一尊を畫き敢て怠る事なく、終に廿餘年に至る靈驗甚多しと云々）奇特をあらはせし事を擧げたり。文明十八年道興准后東奧下向の時、其門徒なりし松井坊に宿し給ひ、これを開眼ありしとて、即ち紙中に花押をおかれたり。後石井氏の家に傳へしを秉重といへる人の時、當寺に附與すとなり。

岡本半助裁許狀一通　武藏七黨系圖　古寫本なり。

氷川明神社

大藏村にあり。永安寺別當奉祀せり。祭神五座、大己貴尊、素盞嗚尊、奇稻田姫、手摩乳、脚摩乳等なり。祭禮は毎年九月廿一日なり。相傳ふ、曆仁元年、（九月九日遷宮同廿一日始祭禮を行ふ）當地の主江戸氏、（此江戸氏は、桓武平氏の裔良文の流畠山の一族にして北見氏の祖なり。）足立郡大宮の御神を勸請すと云ふ。舊は唯一宗源の社なりしに、其後二百有餘年を經て、天文年間、松井坊といへる山伏奉祀の宮となり、兩部習合とす。（此松井坊は、武州都筑郡の人にして太田道眞の臣なり、依て道眞尊崇せし處の十一面觀音の像を傳來したりしかば、當社の別當に補するの後、氷川明神の本地佛となし奉るといへり。或は云ふ、永祿の頃迄は松井坊奉祀たりしに後田中三河守といへる人神職となり再び唯一とせしと云ふ。）當社昔は五所に竝び建て宮居巍々たりしに、いつの頃より歟、荒亡して、唯此一社のみ殘れりと云ふ。（其證は次の棟札に載て氷川明神第四の宮とあるにてしるべし。）然るに明曆年間、永安寺第九世辨榮法印、別當に補せられしより、再び習合の社となし、神躰及び本地佛等を新に安置せられたりと

ひ、闘諍遂に止時なく、享徳四年六月十六日、今川上總介が爲に、鎌倉を追捕せられ、當社宮殿民居に至る迄、悉く灰燼となり、永安寺も又廢れぬ。こゝに於て足利六世の繁昌一時に滅し、都會空く草莽の地となれり。こゝに二階堂信濃守なる者あり、持氏朝臣に仕へて、不二股肱の臣なり。永享の時公の從臣悉く永安寺に死す。信濃守一人、公の遺命する事あるを以て、倶に死する事を免されずして遁る。其後裔孫名は某、法名淸仙と云ふ者あり。永安寺は鎌倉幕府世々の墳壟安鎭の地たりしに、荒亡年久く、兵馬馳走の巷となれるを患へとし、終に再復の願を發し、延徳二年三月、勝長壽院の門主（寺記に持氏公の季子とのみありて其諱を注さず。）の命を奉じて、此武州中丸郷大藏村は、其名鎌倉の舊地に同きを因據として、禪刹一宇を建立し、鎌倉幕府世々の神主を安置し、寺號をも又永安寺と稱す。門主某の功を擧て長壽院と云ふ。（當寺の開闢なり。）天正年間、當寺第六世良深より以後、台密の二教に改て、堂宇を修補す。然といへどもいまだ柴緣草堂のみなりしを、明暦の頃石井兼忠といへる人、其父良賢居士の沒後、追福のため、堂塔を重修し、佛殿を莊嚴す。是中興開基なり。

にして、祭禮は八月十五日なり。

龍華山永安寺　長壽院と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。本尊千手觀音は、惠心僧都の作なりといふ。開山は淸仙上人、(俗姓は二階堂氏なり。)開基は鎌倉公方源氏滿朝臣なり。中興開山は乘海法印、(俗姓石井氏なり。)同く中興開基は石井內匠兼雄、法名を良賢居士と號す。龍華樹(堂前櫻樹をなづく、今は枯れたり。當寺の開山淸仙上人鎌倉大藏ヶ谷永安寺の舊地より遷し栽ゑたりとなり。當寺を龍華山と號くるも此樹によるとなり。永安寺の舊跡は鎌倉大藏ヶ谷瑞泉寺の門外右の谷を云ふ。往古永安寺は源氏滿朝臣の菩提所なりしと云ふ。)

石井氏移塋碑(本堂北の側にあり。)

相傳ふ、鎌倉公方氏滿朝臣(左馬頭基氏の子なり。)應永五年十一月四日逝去あり。永安寺殿璧山全公と號す。仍て鎌倉の大藏ヶ谷に、新に一精舍を造り、直に其法號を採て永安寺と號し、建長寺の曇芳和尙を請じて、寺主たらしむ。(諱は周應、夢窓國師の法嗣なり、建長寺瑞林菴の開祖なり。)夫より後滿兼朝臣、持氏朝臣、相繼て重修ありしに、永享十一年二月十日、持氏朝臣此寺に於て自害せられしかば、(管領上杉憲實の所爲なり。)其男成氏公(永壽王殿と云ふ。)幼稚なるに依て、暫く難を美濃國に避け給ふ。然るに嘉吉元年、京都將軍の命を奉じて、再び鎌倉に歸入し給ふといへども、上杉の兩執事、良もすれば上を蔑し、權柄を爭

仕へ奉り、後仕を致して世田ヶ谷の地に退居し、慶長十七年壬子十一月十二日行年八十八歳にして終る、依て當寺に葬するよし、延寶八年の冬孝孫、行隆、正武、正次等これを立つるよし銘せり。

吉良氏古塋　堂前左の方にあり。賴康の古墳も當寺にありといへども定ならず。或田の勝國寺にあるもの信なりともいふ、興善寺の墓塔も竝びてあり。

鶴松山實相院　登戸の通道、世田ヶ谷元宿の左の裏通、弦巻村にあり。曹洞派の禪林にして、同所勝光院に屬す。當寺は世田ヶ谷の吉良家七世孫、左兵衛佐氏朝閑居の舊跡にして、其閑居の號を學翁齋と稱せしと云ふ。學翁齋卒去の後、（學翁齋は、慶長八年癸卯九月六日卒とあり。）其息賴久當寺を開創ありて、法號實相院殿學翁玄譽大居士の文字を採て、寺號に用ひ、天永琳達和尚開山たり。（或は應天和尚ともいふよしいへり。）本尊阿彌陀如來、作詳ならず。學翁齋の墓碑境内にあり。又當山開闢鶴松院殿快窓壽溪大姉と稱する石塔竝び立り。鶴松院何人なる事をしらず。猶尋ぬべし。（氏朝は吉良左兵衛佐賴康の養子にして、今川の一族堀越治部少輔貞基の次男にて、駿州瀨名陸奥守一秀の弟なりといふ。）

弦巻郷　世田ヶ谷にあり。此地は昔桑原右京進といへる人の所領たりし由、永祿二年小田原北條家の所領役帳に見えたり。

世田ヶ谷八幡宮　同所にあり。相傳ふ、八幡太郎義家朝臣の勸請なりとぞ。則ち此地の産土神

又當寺に相傳ふ賴氏法號は、興善寺殿月山清公と號す。故に始め當寺を興善山と號くると云ひ。世田ケ谷私記といふものには、興善寺を治氏の法號とす。又豪德寺吉良系圖の中に、政忠の二男文貞といふ人の名の下に、禪興寺ともありて、諸說紛々其實を得難し。

鎌倉建長寺の吟峯龍公禪師開山たり。（文和三年甲午五月七日示寂す。）其後天文十五年丙午、世田ヶ谷吉良家六世の孫、左兵衞佐源賴康（豪德寺吉良系圖に、正三位、或は云ふ左兵衞督とす。法號は勝光院殿脫山淨森居士とあり。）中興開基たり。然るに天正元年癸酉、同吉良家七嗣の孫、左兵衞佐從四位下源氏朝（豪德寺所藏吉良系圖に、左兵衞督とし、法號を實相院殿と號し、弦卷の實相院を建るとあり。）當寺の號を勝光院とあらたむ。又天永琳達和尙（琳達和尙は小机村梅林寺の住持なりしを、氏朝請じて當寺に居らしむ。）今の如く曹洞派の寺院とす。（當寺過去帳に延命院殿商山栄久大居士と云ふ法名を載せたり。疑ふらくは、當寺の山號此號より出たるならん歟、此延命院歿卒の年號忌日をしるさず、又何人なる事をしらず。按ずるに、世田ケ谷私記といへるものに、延命院は吉良經家ならんとあり。經家は奧州の吉良家にて又太郎と號せし人なり。）

愛緣藥師如來、丈二尺斗、木像、運慶の作なりと云ふ。相傳ふ、往古北條氏康卿の息女崎君、常に此靈像を崇信し、天文六年の春、此尊像の靈示により、（蒔田の地にて三千石けはひめん（化粧料か）として添へらるゝといふ。）終に永祿元年世田ヶ谷御所賴康卿の室となられし事、緣起に見えたりといへども、中興のものにして、尤も拙文、ことに疑ふべき事少からず。故に其文を略してこゝに記さす。

按ずるに、崎君は氏綱の女にして氏康にあらず。

廣戸備後又三郎正之碑（當寺佛殿の右にあり。正之は駿州の產にして、二階堂山城三郎行村十三世孫、其先は京都柳營社稷の臣なり。高祖五郎久行、江州廣戸鄕を管領するにちなみ氏とす。永祿十二年己巳召に應じて御當家に

にして、勸請の年歷詳ならず。天文十五年、吉良賴貞當社を建立すと云ふ。或は義家朝臣、勸請せられし御神にして吉良家再興とも云ひ傳ふれども、義家勸請と云ふ事疑少からず。祭禮は八月十五日にして、社司大場氏の奉祀たり。社内に存するところの櫻は、賴貞親植るところと云傳ふ。

按ずるに、こゝに賴定と云ふは、賴康の事なるべし。當社建立の棟札に注する所の賴貞の花押と、等々力〔トドロキ〕村大平某所藏の賴康の古文書に印する所の花押尤同じ、然る時は賴貞は賴康の始の名にてありしならんとおぼし。

當社梁牌一枚　當社に藏す。文左のごとし。

天文十五丙午八月廿日立柱　同十一月十四日上棟　同廿日卯尅御遷供養道師　鶴岡相承院法印大和尚位快元　□□□□□□□□□□
同等覺院權律師□□
當社八幡宮新建立大檀那源朝臣賴貞（花押）　鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗　同极原藤大貝　熊澤入道々祢
大工青木右馬助安重
于時惣奉行江戸攝津守法名淨仙　大工奉行石渡戸新兵衛　常久惣大工　番匠山井大藏丞　番匠由木内匠助　鶴岡兼任法橋丸圓
西村左近一持　鑒吉重　法橋丸喜

延命山勝光禪院　豪德寺の前の道を隔てゝ向にあり。洞家の禪刹にして、八王子安下の心源院に屬せり。本尊は虛空藏菩薩にして、坐像二尺斗あり。作者知るべからず。建武二年乙亥、世田ヶ谷御所吉良兵部大輔源賴氏開創の精舍にして、往古は濟家の禪宗にて龍鳳寺と號す。豪德寺所藏吉良系圖に左京大夫とあり。

世田谷（せたがや）
八幡社（はちまんのやしろ）
本社

よりて令嗣直澄、其遺骸を當寺に葬す。故に弘徳を豪徳に更む。（弘豪同音なるによれり。）爾後直孝侯の賢娘、掃雲院殿無染了心禪尼、先考の冥福を弔はんがため、許多の淨資を喜捨して、堂宇を經營し、三世佛の木像を安置して、良田數十頃を寄らるゝとなり。

吉良氏古城跡　豪徳寺構の内、右の方に續きたる地を云ふ。（今は井伊家の林となれり。）堤の形二重に殘り、空堀の跡と見ゆる所もあり。其封内一町四方にして、櫓を構へたりしと覺しき跡、三ヶ所迄存せり。又居館の跡と稱するもの、築地或は林泉の形殘りて、水を湛へたる地などあり。富士見松とよべる老樹あり。其地より斜に芙蓉の峯を眺望せり。舊は同じ所に、御所櫻と稱せしものありしが、後世枯たりと云ひて、今は此樹なし。（世田ケ谷の吉良家は、清和天皇十世の苗胤、足利左馬頭義氏に二子あり、嫡男を義繼と名づけ、次男を長氏と名づく。長氏三州に居る、これを三州の吉良と稱す。義繼は奥州に居る故に、奥州の吉良と稱す。是則ち吉良姓の祖なり。義繼六傳を吉良治部大輔治家と號く。治家始め武州世田谷ヶ城に住す、時の人、世田ケ谷御所と稱す。又六傳を吉良政忠と稱す。法號を洞春院といふ。其後賴久の世に至り、吉良家は三州東城西城の外稱號すべからず、宜しく蒔田に改むべき旨台命あるにより、蒔田「マイタ」と號す。則ち久良岐郡の蒔田村に住する故に在名をもちゆると云ふ。小田原北條家關東を領せられし頃は、其緣あるを以て許多の地を領せしよし云ひ傳ふれども、其貫高しるべからず。今世田ケ谷領と稱せし村數五十七箇村あり、其頃一圓所領たりし歟。）

宮坂八幡宮　同じ寺より、西の方の岡續にありて、其間三町斗を隔つ。鎌倉鶴岡八幡宮の模

世田谷
豪德寺
當寺十景

洪鐘　佛殿の前左の方にあり、舊鐘の銘は寛文十二年鐵牛和尚の制文にして、和尚の自枚摘稿（ジマイテキカウ）に出でたり。今存する所のものは、延寶七年中興天極秀道和尚銘する所なり。

照心堂　客殿の左林叢の中にあり。當寺十勝の一員なり。

吉良氏古塋　照心堂の前、卵塔の中大なる松樹の下にあり。古き五輪の石塔並び立てり。一は世田ケ谷御所、吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり。當寺過去帳に、前の開基洞春院殿照岳道旭居士、文龜二年壬戌六月十七日卒すとあり。又一は政忠の伯母、弘德院久榮理椿大姉の墓なり。弘德院は當寺過去帳に、文明十二年庚子十二月二日逝すとあり。

古石燈籠一基　同じ墓の前にあり、政忠庭中のものなりと云ふ、世に云ふ地藏形これなり。

當寺開基碑　佛殿の西に立つる。寛政十一年の冬當寺十五世靈潭和尚の撰文にして、往古吉良家に因ある者、力を戮せて靈潭和尚の志を補助し、これを立つるといふ。

碧雲關　總門の名なり、これも當寺十勝の一なり。其餘黃鳥哺は同じ門の左の叢林の中にある所の梅樹を云ふ。松柏壇も又同じ方の樹林を名く。楓樹林も同じ奧にありて、晩秋の紅錦賞すべし。

清涼橋　總門の前の小川に架する橋の名にして、これも十勝の一なり。

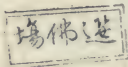
當寺は文明年間（或は十二年庚子開創とも。）世田ヶ谷御所吉良右京大夫政忠（其先吉良治部大輔治家、上野國飽間（アカマ）の地にありしに、基氏より、此世田ケ谷郷を賜はり、初てこゝに移住す。それより後、世田ケ谷殿と稱せり。）伯母弘德院殿久榮理椿大姉の爲に創建する所の精舍なり。（過去帳に文明十二年庚子十二月二日とみゆ。）直に其法號を採て、弘德庵と號け、昌譽禪師を請じて、開山祖とす。（其始は濟家の禪刹たり。）天正年間に至り、宗關禪師來りて薰席し、洞門に改む。萬治年間江州彦根城主正四位上左中將井伊直孝侯此世田ヶ谷の地を賜ふ。（或は寛永十年癸酉に賜ふとも。）萬治二年己亥六月二十八日逝す。（法號久昌院殿豪德天英大居士と號す。）遺言に

守が女なるよし、世田ヶ谷私記にみえたり。

按ずるに、此橋より二十歩ばかり東の方、道より北側に松を植ゑたる塚あり、是を常盤の墓と云ふ。上に不動の石像あり、又同じ南の方にも塚あり、是なりともいへど、いづれか實ならん。

大溪山豪德禪寺　常盤橋より五町斗西の方にあり。曹洞派の禪刹にして、江戸高輪の泉岳寺に屬す。當寺は文明年間吉良家創建の精舍にして、舊は弘德庵と號す。其頃は濟家にして、馬堂昌譽禪師開山祖たり。其後門庵宗關禪師、今の如く曹洞派にあらたむ。中興の開基は、井伊掃部守直孝侯、同中興開山は、天極秀道和尚なり。

佛殿　本尊釋迦、彌勒、彌陀等の三世佛の木像を安置す。

額　佛殿の二重家根の軒に掲る月舟の筆なり

選佛場　佛殿の右に竝ぶ。當寺十勝の一なり。額は二重家根の軒に掲く當寺十五世靈潭の筆なり

石燈籠　佛殿前左右に立てたり。延寶五年井伊家掃雲院殿の寄附なり。

臥龍櫻　佛殿の前右の方にあり。當寺十勝の一にして、往古吉良政忠居中にありしと云ふ、至ての老樹にして單瓣白花なり。

常盤橋
ときわばし

當寺開基　心覺宗圓菴主

北條家孫左近太郎入道成願

長立山常光寺　弦巻村世田ヶ谷上宿の南にあり。日蓮宗身延の末にして、天正十三年乙酉八月草創す。開基は越後人泉藏院日禮と號す。日禮朶雲の頃、此地青山氏の家に至る。此人嗣なきを愁ふ。日禮妙經祕呪の奇特をあらはし、一子を出生せしむ。故に此人宗教を尊み、日禮に歸依し、更に精舍を創立し、日禮を開山祖とし、弟子の禮を設く。（青山氏後、日林と號す。當寺の第二世たり。）本尊釋迦如來、額は如松の二字にして、廣澤の筆なり。石水盤は、喜多見家寄附する所なり。又淺野内匠頭長矩の寄附の三方あり。（黒漆を以て塗り、松に鶴の描畫あり。此器は馬牽澤大敎寺にあり。ことごとく彼の室の寄附なりしが、後所々に分散せりといふ。）

常盤橋　二子街道中馬牽澤村世田ヶ谷入口、三軒茶屋の往還、角の所より向へ三町斗入りて、小溝に渡す石橋をしか名づく。里諺に云く、昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人、不義の事ありて此所に害せらる。然るに其靈里人に祟す。依て其靈を辨天に崇め、其腹に出生の男子を、若宮八幡と崇め奉るといふ。何れも上馬牽澤村にあり。此常盤といへる女は、大平出羽

社記に云く、當社八幡宮は、何れの時世の創建なることをしらず、社廟傾廢神體も又ある事なし。然るに天和二年、此地の領主大久保侯藤原忠誠、當社を修造せんとして、其頃經塚と云ふ地を穿ち、土中一の壺を得らる。又其壺中小銅器あり。前に擧げたり。德治三年戊申北條左近大夫入道成願、沙彌見佛等の名を銘し、内に今存する所の神體を籠たり。又其一箇は法華經六部を書寫し、又一千部を讀誦する由銘せり。依て忠誠當社の修造經營落成の日、新に法華經六部を書寫して銅壺に收め、社の礎下に埋藏し、駿州建穗寺の僧隆範をして、遷宮の式を執行せしむるといふ。

八幡山宗圓禪寺　同所二子街道の左、品川上水の端にあり。當寺は若宮八幡の別當寺なり。洞家の禪院にして、江戸駒込の大圓寺に屬す。本尊には坐像の釋迦如來を安置せり。當寺は北條左近太郎入道成願の開創にして、存應林可和尚中興たり。北條左近太郎入道成願靈牌。

文保元丁巳年十月二十三日寂

右志者爲身心大施主現世安穩

後生善所親類安穩福壽增長

南無法界平等利益

同　紫銅にして、かこみ八寸あまり長五寸ありて、二の經筒は共に天和年間當社修造の時、經塚といへる地より當社の神躰と共に穿ち得たりとなり。

德治三年戊申十月廿三日　沙彌見佛

左近太郎入道成願

按ずるに、皇朝年代略記、皇代記、如是院年代記等に德治三年戊申十月九日改元ありて、延慶とせらるゝよしあり、されど將軍執權次第には、十一月廿五日改元とありて、こゝに注す所不審とす。

田中辨財天祠（たなかべんざいてん）　同じ社地にあり、常盤御前此地に崇むると云ふ。一說に常盤御前沒するの後、辨天に崇むるともいへり。神躰は坐像にして一尺五寸斗あり、龜の背面に左の如く記してあり。

天文四壬未年七月

香林院殿海岸寶樹大姉

田中辨天之施主　常盤御前御法號也

按ずるに、上馬牽澤村の隣村若林村に、香林寺といふ洞家の禪刹あり。其寺に常盤御前の靈牌墳墓あり、過去帳に香林寺殿海岸寶樹大姉天文四年未七月七日とあり。香林寺は即ち常盤御前の開創なり、こゝに常盤御前と稱するは吉良家の令室なり。

馬牽澤古事

若宮八幡宮　上馬牽澤村二子街道より右の方、三町斗入りて小き森の中にあり。駒留八幡宮と稱す。北條相模守時頼朝臣崇尊の靈像にして、神體は一寸五分斗ありて、左の御手に弓を持し給へり。像の背に木牌を建る。其牌面に銘する文左の如し。

最明寺時頼公守本尊

經塚駒留八幡宮

北條左近太郎入道成願

奉安鎭所德治三戊申年十月廿三日

經筒　紫銅にして、合せ目をば鋲にて留めたるものとおぼしく見ゆれども、朽ち損して鋲の跡のみ存せり。かこみ五寸六分、長五寸あり。

敬白

八幡大菩薩御寶前

奉如法書寫六部妙法蓮華經

奉讀誦妙法蓮華經一千部

辛未九月十二日、相州龍口に於て、大士誅に伏せんとせられし時、刀刃段々壞の奇瑞あるを以て、終に北條時頼の赦免により、誅を遁れて同國依智に移り、本間六郎左衞門重連が家に入り給ふ。重連大士の化を尊み、大士手刻の自像を賜はらん事を乞ふ。依て自らの像を彫造ありて、重連に附屬せられたりしを、後故ありて當寺に安置するといへり。靈驗照々たるが故に、詣人常に絶えず。

正一位子明神社　二子街道下馬牽澤邑道より左の方、耕田を隔てゝ丘の上にあり。別當は天台宗宿山村壽福寺より兼帶す。

馬牽澤舊跡　同所子明神の前、今田畑となれる地の舊名なりといへども、今は上目黒世田ヶ谷へ跨り、都て上中下と三に分れたる邑名となれり。里諺に云ふ、文治年間頼朝卿奥州征伐の時、澁谷八幡宮へ參籠あり。其時荏原野より、東條蘆毛の馬を選んで獻ぜられんとし、此地を牽れたりしに、蹎たるにより是を止られしと云ふ。或は云ふ、頼朝卿御狩の時この所にして乘り給ふ所の馬、頻に驚き躍て澤に落入て死せり、故に塚に築留めたりとも。其事は足毛塚の條下を照し合せてみるべし。又云ふ、頼朝卿の乘り給ひしは蘆毛なりしとて、今も此地にては蘆毛馬を畜はずとなり、もしあやまつてこれを畜ふ事あるときは必ず祟ありとて、恐れつゝしめりと云ふ。

子明神
ねのみやうじん

石劔　同じ社地稻荷の小祠に收む、長二尺二寸斗圓もとにて八九寸廻りあり。往古當神の靈像を感得せし時、同じ土中より得たりといへり。

北澤淡島明神社　北澤村八幡山森巖寺といへる、淨土宗の寺院に勸請す。當寺は此地八幡宮の別當たり、故に八幡山の號あり。又森巖寺淨光院と稱するは、越州黃門秀康卿の法號を採て寺の號とすと云ふ。淸譽上人其師萬世上人の遺命を奉じ、慶長十二年丁未四月當寺を開創し惠心僧都の作の坐像一尺五寸の阿彌陀如來を本尊とす、脇士觀音勢至の兩像は、行基大士の作と云ふ。此邊西瓜を產す上品とす。世田ケ谷大丸の邊同じ西と稱せり。

祭神は紀州名草郡加太の淡島明神に同じ。相傳ふ、當寺開山淸譽上人、紀州名草郡の產なり、故に產土神とす。修行成就の後、當寺を開創せらるゝといへども、常に腰痛の患あり、依て年月淡島明神に祈願を籠奉り、夢中靈示あるを以て灸治し、終に積年の病痾を遁れたりしかば、其報賽として、紀州加田淡島明神の神主に告て、此御神を此地に勸請なし奉り、法樂ありしと云ふ。此故に累世の住僧、連綿として此灸治の法を口授相傳し、衆病悉除の爲毎月三八の日是を施せり。依て灸治を求んとする輩、遠きを厭はずして、此地に至る者少からず。祭禮は三月十九日と云ふ。

除劔難日蓮大士堂　同所八町斗南の方、池尻村二子街道の右側、常光院といふ日蓮宗の寺に安置す。此寺は日義上人の開基にして、往古は碑文谷法華寺の南坊なりと云ふ。日蓮大士の木像は、丈二寸二歩あり。相傳ふ、文永八年

北澤
栗島社
池尻
祖師堂

伐の頃此地に至り給ひ、酒宴ありし土器を、後土人等此地に埋て、義家朝臣の武功英名を尊ぶのあまり、土器塚と稱すと云ふ。其塚の側を同勢山と呼ぶは、義家朝臣供奉の輩の居たりし舊跡といふ。按ずるに、此地に蘆毛塚と稱するものあり、疑ふらくは土器塚も騢塚（カハラケヅカ」を誤るものにして、そのかみは馬などを埋めたる塚なるべし。

足毛塚　宿山と小地名に稱ふる地の里正、金子氏構の内にあり。頼朝卿乘ずる所の蘆毛馬の斃たるを埋藏せし舊跡と云ふ。

氷川明神祠　駒場野官林より此方の岡にあり。祭神素盞嗚命一座、天正年間甲州郡内上の原といへる地にありしを、加藤氏加藤氏の事は先の駒場野の條下にあり。此地に移り住する頃、産土神なるゆゑに、こゝに此神を勸請なし奉るといへり。祭禮は毎歳九月二十九日に執行せり。此神の氏子は古へより疱瘡の患をしらずといひ傳ふ。

天滿宮　同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方にあり。相傳ふ、往古此地の農民市兵衛といふもの地を穿ちて小き壺の中より、印子の菅神の像を感得せりといふ。坐像一寸四五分とぞ。故に此地に宮居を營みて、鎭守に崇むると云ふ。昔の菅神の像は賊の爲に奪はれたりとて、今一尺斗に石を以て造れる菅神のを、宮中に安置す。往古祠跡を掘穿ちたりし地は、封じて松を栽ゑてしるす、其松は宮居より半町斗西の方にして今中川侯の山屋敷の中に入ると云ふ。

によりていこひたりとなり。今駒場坂の下用水堀の傍に一株の古松あるを混じて道玄松と稱すれども、一本松と稱して此松と別也。里諺に云ふ、道玄此松樹に登り、往來の人を見下し、小賊に命じて、衣服物の具を奪ひ取しめたりしとなり。

駒場野　道玄坂より乾の方十四五町斗を隔たり。代々木野に續きたる廣原にして、上目黑村に屬す。雲雀、鶉、野雉、兎の類多く、御遊獵の地なり。此地の官林は、享保の初め御狩場に定めさせられたりとなり。又此地の里正加藤氏某は小田原北條家の臣加藤丹後守といへる人の後裔にして、小田原落去の後、此地に緣あるを以て蟄居し、終に農民となれりとなり。丹後守は武州多摩郡箱根崎にて討死せしとて、其一族の墳墓箱根崎圓福寺といふに存せりとす。

蛇池　官林の中にありと云ふ。享保三年此地御遊獵の地に定めさせられし翌年の夏、風雨驟しく、此池中に栖みたりし蛇こゝを立去りたりといふ。故に此名あり。

鐘鑄塚　駒場野の中にありと云ふ。方九尺斗高さ七八尺斗なりとぞ。むかし此所にて梵鐘を鑄たる舊跡なりと云ひ傳ふれども、何れの寺の鐘にや知るべからず。富士見坂の下の水流、下澁谷分水掛口の地の名に道場ケ淵と云ふあり、いづれ此近邊に盛大の寺院ありしなるべし。

去我苦塚　別所臺と云ふ地にあり。塚の高さ一丈あまりあり。相傳ふ、昔澁谷長者某、此邊の人民を語らひ、時として此塚の邊にて酒宴を催し歡樂せしにより、苦を去の所謂なりと云ふ。此邊都て古居館佛堂の類ありし地にや、近頃道路を作らんとして岨「ヤマ」を掘穿ちて土中布目の紋理ある古瓦數枚を得たりといふ。

土器塚　駒場野の内なり。里諺に云ふ、往古此地奥州街道なりしにより、源義家朝臣奥州征

駒ヶ場の野

下中略。和田四郎左衛門尉義直 年卅七。 爲伊具馬太郎盛重。被討取。父義盛 年六十七。殊歎息。於今者勵合戰無益。云云。揚聲悲哭。迷惑東西。遂被討于江戸左衛門尉能範所從。云云。同男五郎兵衛尉義重 年三十四 六郎兵衛尉義信 廿八 七郎秀盛 十五 以下張本七人。共伏誅。朝夷名三郎義秀 三十八。竝數率等。出海濱。棹船赴安房國。其勢五百騎。船六艘。云云。又新左衛門尉常盛 四十二。山内先次郎左衛門尉。岡崎餘一左衛門尉。横山馬允。古郡左衛門尉。和田新兵衛入道。以上大將軍六人。遁戰場逐電。云云。

按ずるに、大和田は大多和なるべき歟、三浦一族の中に大多和と號するあり。東鑑に、治承四年八月廿二日三浦次郎義澄、同十郎義連、大多和三郎義久、子息義成、和田太郎義盛、同次郎義茂中畧、三浦を出て參向すとあり。或人云ふ、道玄は沙門にして、此地に昔一宇の寺院ありて道玄寺と稱したり、故に坂の名に呼び來れるともいひて、一ならず。

道玄物見松　道玄坂を登りて、七町あまり西の方、同じ街道大坂と云ふより此方右側にありしが、明和の頃枯たりしかば伐たりと云ふ。木の圍五かこみ程ありて、根より三丈ばかり上にて、東西へ廿間斗南北へ十六七間斗に枝ながれ蒼々たりしにより、炎暑の頃は行人此樹下

登戸〔ノボリト〕の渡、又二子の渡へ通ず。右へ行けば駒場野の御用屋敷の前通り北澤淡島への道也。世田ヶ谷へ行く道なり。道玄或は道元に作る。里諺に云ふ、大和田氏道玄は和田義盛の一族なり。建暦三年五月、和田の一族滅亡す。其殘黨此所の窟中に隱れ住て、山賊を業とす。故に道玄坂といふとなり。

東鑑二十一云

建暦三年癸酉五月二日壬寅。和田左衛門尉義盛。率伴黨忽襲將軍幕下。謂件與力衆者。嫡男和田新左衛門尉常盛。同子息新兵衛尉朝盛入道。三男朝夷名三郎義秀。四男和田四郎左衛門尉義直。五男同五郎兵衛尉義重。六男同六郎兵衛尉義信。七男同七郎秀盛。此外土屋大學助義清。古郡左衛門尉保忠。澁谷次郎高重。横山權守時重聟中山四郎重政。同太郎行重。土肥先次郎左衛門尉惟平。岡崎左衛門尉實忠眞田與一義忠ガ子。梶原六郎朝景。同次郎景衡。同三郎景盛。同七郎景氏。大庭小次郎景兼。深澤三郎景家。大方五郎政直。同太郎遠政。鹽屋三郎惟守。以

富士見坂一本松

玉池　同所にあり。里人云く、天文の頃、天下大に旱魃し、河水は流を絶し、池沼は平地に異ならず、時に此水涌出する事常に倍せり。此里に住る一女子水を掬んとして、水器の中に手鞠の如き一顆の寶珠を得たり。玉精其女子に託して云く、是はこれ八幡宮の神器なり、大永の兵火をさけて此井中にあり、直に神祠に收むべしとなり。依て里民大に恐れ謹て、是を神祠に收むるとぞ。（此寶珠今澁谷八幡宮に收むると云ふ。）此故に玉の井とも唱へたりしといへり。

神仙水　八幡の西にあり。相傳ふ、往古空鉢仙人此谷に入て、不老長生の仙丹を煉たりし靈泉なり。故に神仙谷とも云ふとなり。鉢山といふは法道仙人の鉢、此所に自ら飛來る故に號とすとなり。

富士見坂　澁谷宮益町より、西へ向ひて下る坂を云ふ。斜に芙蓉の峯に對ふ故に名とす。相模街道の立場にして茶店酒亭あり。麓の小川に架せる橋をも、富士見橋と名づけたり。（相生街道の中坂の數四十八ありとなり、此富士見坂は其はじめなりといへり。）

道玄坂　富士見坂の下、耕地を隔てゝ向ふの方、西へ登る坂をいふ。（此坂を登りて三町程行けば岐路あり直路は大山道にして、三間茶屋より

之聽。招于庫倉之內。密々羞膳勸。下略。

養和元年八月二十七日。澁谷庄司重國次男高重。竭無貳忠節之上。依令感心。操之隱便。給知行澁谷下鄕。所濟乃貢等所被免除也。云云。

同　書

河崎庄司次郎高重宅舊趾　同堀の内にあり。土俗傳へ云ふ、此重國は違論の事ありて、六鄕の河崎へ引移れり。其頃此地にありし山王の社をも、彼地へ引たりとて、其舊地に稻荷の叢祠を殘し留めたり。

姉尾平次左衞門光景舊館地　是も同所にあり。今も光景が馬を冷したりといへる小池あり。旱魃にも涸る事なく、霖雨にも溢るゝ事なし。常に岩間をもり出て、清冷たり。傍に駒繫榎と稱するあり。光景が愛せし安達栗毛といひし駿足を繫ぎて、水を飼ひしとなり。

甘露水　同所にあり。里俗傳へ云ふ、天慶年間、六孫王經基朝臣此地に旅宿ありし頃、此水を捧ぐ、味美にして甘露の如くなりと、褒詞ありしより名とせりとぞ。

金王麿産湯水

て、母堂の許に殘しとゞめけると云云。其像は鎧衣(ヨロヒ)に二刀を帶するかたちなり。

按ずるに、金王麿祖先は高望王より五代の後裔、村岡五郎良文が曾孫、秩父別當武基の子、同十郎武綱、其子を六郎基家といへり。此時に至り始て澁谷を以て氏とす。同く一子重家河崎平三太夫のち從五位下に任じ土佐守と云ふ、嗣なきをうれへ、當社八幡宮に祈請し奉り、永治元年一子を得たり。八月十五日に生る。金〃夜叉明王の化身なるよし靈示あるを以て、上下の文字を借用ひて金王麿とは名づけたりとぞ。一說に金王麿は庄司重國の子なりといへども時代違へるに似たり。保元物語を以て考ふるに、金王麿は左馬頭源義朝に仕へし童にして、度々てがらをあらはし頗る大功の者なり。義朝平治元年に大納言藤原信賴にくみしてむほんを起し、待賢門の軍に打負け、尾張國野間の内海にありし御家人長田庄司忠宗がもとに落ちのびたまひしを、長田心がはりして浴室に義朝を弑し奉る、金王麿くちをしく思ひ、走り廻りむかふ者共をきりふせて、其後都に登り義朝の妾常盤がもとに參り、其ありさまをかたりて後義朝の跡をとぶらひまゐらせんとて出家して諸國を修行し、其終る所をしらずとなり。金王丸より澁谷と唱ふるも、緣起には重家寛治六年澁谷の姓を賜はると見ゆれども違へり。系圖を見るに、重家の子重國、其子高重、其子金王丸とあり。社記には重家一子なきをうれへ、八幡宮へ祈り授る所金王丸といふ。高重は金王丸より後にして文治年中賴朝時代の人なりと云ふこと違へり。

金王麿產湯水 同所一町ばかり西の方、堀の内といふにあり。誕生池とも號く。八幡宮の社記に、一度此靈泉に觸るゝ者は、齡千歲を保つと云傳ふとあり。此邊すべて澁谷氏居館の地にして、土人城跡と稱す。馬場の形、築地の跡など存せり。古井こゝかしこにあり。

東鑑

治承四年庚子八月二十六日。入レ夜定綱盛綱高綱等。出ニ宮根深山之處。行逢ニ醍醐禪師全成。相伴之到ニ于重國澁谷之館。重國乍レ喜憚ニ世上

金王麿影堂

毒蛇長刀　金王丸長田(チサダ)が館野間の内海(ウツミ)にて勢ひを振ひしも、ひとへに此薙刀の威徳なりとぞ。

六孫王經基髪搔　經基より權守興世に賜ふを、義家朝臣當社へ納められしとなり。幷橋是にもとづく。

社記に曰く、當社は高望王より五代の後裔、村岡五郎良文か曾孫、秩父別當武基の一子に、同十郎武綱といへる英雄あり。寛治三年六月淸原武衡、同家衡が猛威を擅き、奥羽の間に勢を揮ひ、名譽を天下に輝かしぬ。故に將軍義家朝臣是を感じ、勸賞として、其子六郎基家（河崎土佐守と云ふ由社記にみゆ。）に、武藏國谷盛莊を賜ふ。（谷盛莊代矢盛に作る。此庄に七鄕ありしとなり。所謂澁谷、赤坂、に々木、麻布、飯倉、一ツ木、今井等是なりと云ふ。）依て基家勝地を擇び、同六年正月、始て采邑の地に當社を營建し、金王麿迄、代々氏神と稱し、尊重嚴なりけるとぞ。別當は天台宗にして、澁谷山東福寺と號す。相傳ふ、六孫王經基の開創にして、昔は親王院と呼びしとなり。開山は圓鎭僧正と號す。養和元年、百十一歲にして化寂ありしと云々。

金王麿影堂　同所向側、叢林の中にあり。八幡宮社記にいはく、金王麿十七歲の時、主君義朝の命により、鎌倉に赴く頃、其母別を惜み、悲歎の泪に沈む。依て金王麿自ら姿を造り

金王八幡社

矢拾觀世音 社前にあり。本尊は慈覺大師の作にして金王麿尊信の靈像なりといへり。社傳に、保元年間の戰に此本尊軍卒に化現し、欲の弓矢を多く拾ひ集めて味方の陣中へ入れ給ひしより、かく稱したてまつると云々。

子安藥師如來 同所にあり。龍宮出現の尊像なりとぞ。義朝誕生の時龍宮より出現し、又頼朝尾張國幡屋(ハタヤ)において出生の時も守護たりしとぞ。佛體に念珠をかけたり。世俗是を安産守護の念珠と唱へ大に崇信せり。

金王櫻 一名憂忘櫻ともなづけたりしとぞ。傳へ云ふ、往古久壽の頃源義朝鎌倉龜ヶ谷の館に植ゑおかれしを、金王丸に賜ふの後、此地に移し氏神八幡宮の瑞籬にうゝるとなり。或社記に云ふ、文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の頃當社に詣で給ひ、太刀一振を收め給ひ、又金王丸の影堂に立寄り、其誠忠を感じ給ひ、鎌倉龜ヶ谷より櫻一株を栽られて、金王櫻と號けられたるともあり。又紫の一本といへる冊子に、紀州亞相頼宣卿の御母堂養珠院殿此櫻の實を御庭に植ゑさせられ、やゝ生立て花も開かんとせし頃、八幡の社内なりける元木の櫻、既に枯たりしかば、御家臣澁谷善入といふ人は金王丸の遠裔なれば、他の人の植たらんよりは、祖先への孝養にもなるべしとて件の實生の櫻を善入に下し賜ふ。善入恭しく是を拜受して、其枯株の跡へ植繼ぎける、今の櫻是なりとしるせり。

鎭座の松 境内本社の前左の方にあり。大永四年五月十三日北條氏綱と上杉朝興、高輪の原にて合戰の時、氏綱の後陣大道寺八郎兵衛小杉をまはりて、澁谷へ攻入り放火す、其餘煙當社を燬ふ、此時神體此松樹の上に遷りとゞまり給ふ、故に此名ありとぞ。むかしは社地に三十六株の神木ありしが、今は僅に古松五六株社地の邊に存せり。

什寶 月輪御籏一流 社記に云く、後一條帝の長元元年五月、平忠常北總に兵亂を起し近國を掠む、源頼信朝臣忠常追討の祈願として、秩父の峯に八流の旗を收め給ふ、其内日月の二流は武基に賜はり、大宮の妙見山に收め[illegible]八幡宮とあがむ、其後河崎土佐守基家に、白旗一流賜はり、獨り仙北金澤城を攻め落せり、依て義家朝臣基家を召され此軍勝利ありしは全く正八幡の加護たるべき事を示し、寛治六年正月義家朝臣凱陣の時、谷盛庄へ立ち寄らせ給ひ、月の御籏をば當社にとゞめ給ふ、されども此御籏をみだりに拜する者ある時は、かならず祟ありといふをもつて、能證阿闍梨深く社ろつにひめ置て、うつしを出し置けりといふ。開帳の時節諸人に拜せしむるは其うつしなり。

兜建觀世音 社記に云ふ、源義家公陣中奉持の靈佛にして、後年基家に賜はり、重家および金王丸等傳へて尊信せりと云々。

獅子丸太刀 河崎土佐守仙北金澤にして猛威を振ひ、城を攻破る、其頃勸賞として義家朝臣より賜ふといへり。

作にして、則ち金王麿尊信ありし靈像なりといへり。開山は瑞翁和尙、中興は不中的と號す。

鶴ヶ谷　同所にありといへども今しるべからず。傳へ云ふ、建久二年右大將賴朝卿飼るゝ所の鶴、此地に巣を作る、故に鶴ヶ谷、或は又鶴澤とも云ふとなり。羽澤といふも同所にありといへり。羽澤に花洛妙心寺派の禪宗曾光山吸江寺と云ふありと。

朝霧ヶ瀧　是も同所にありといへども未だ其地をしらず。里諺にいふ、昔此地に澁谷宗順といへる富民あり、女を撫子姬とよべり、容貌衆に勝たり、一年彌生の頃、圓證寺の櫻を看んとして、父母其女を誘引て、彼寺に往きたりしに、朝霧といふ可髮ありて、姬を戀慕し、竟に思を遂ざるを恨み、此瀧の下に身を沈たりといふ。其傍に小高き岡あり。顱山といふは、其塚なりと云ふ。又東の傍に圓證寺の舊跡もあり。

澁谷八幡宮　同所中澁谷にあり。此所の產土神とす。祭禮は八月十五日なり。

本社祭神　應神天皇一座　社記に云く、此神像は上古弘法大師豐前國宇佐八幡宮のつげあるにより、しばらく山城國鞍馬寺に安置し奉りしを、澁谷次郞高重護持して、當社の神體とあがむると云々。本地佛阿彌陀如來の像は、慈覺大師の作なり。圓證阿闍梨東福寺創建の時行脚の僧來りて授與せしとなり。

渋谷 しぶや
氷川明神社 ひかはみやうじんのやしろ

作なりといへり。開山は門庵宗關和尚たり。當寺昔は赤坂溜池の上にありて、龍雲院といひしを、天正十二年甲申此地に移し、寺號をも改むるといへり。或人云ふ、當寺昔は山口氏重政の開基にして、青山の屋敷の中に建立し、母堂龍雲院の號を寺號とし、山口家の香花院たりしとなり。されど其後故ありて離檀ありし由、其家の記録にみゆるといへり。

古佛倉 本堂の右にあり、希世の靈佛靈神の像を安じて庫中に充滿せり、此地の住人鶴見内藏助秀治といふ人當寺へ納むる所にして、すべて百四十一躰ありと云ふ。世に澁谷長者といふは是なりとぞ。

當寺境内は古杉老松蓊鬱として、常に寂々寥々たれば、座禪公案の爲に便あしからず、佛目祖風をあふぐには、勤てよろしかるべくなん。

氷川明神社 澁谷川の端にあり。相傳ふ、右大將賴朝卿の勸請なりと。則ち此地の產土神にして、祭禮は九月廿九日なり。此日社前にて角力を興行す。別當は天台宗にして、恵日山藥王院寶泉寺と號す。慈覺大師の開基、本尊は藥師如來也。作者詳ならず。

澁谷川寺前を流る。此北の端に、源秀山室泉寺といへる眞言律の寺院あり。閑寂玄隱の地なり。近頃法如比丘もこゝに住せらる。

金王麿守佛正觀世音 上澁谷慈雲山長泉寺といへる禪院に安置す。本尊觀世音は、運慶の

笄橋

按ずるに、竏橋は國府が谷橋〔コフガヤバシ〕なるべし。世に長祿年間の江戸の舊圖と稱するものに、青山の邊に國府方といへる地名あり。永祿二年北條家の所領役帳にも、森彌三郎といへる人の、江戸の所領の內に、國府方といへる名を注し加へたり。是等を合せ考ふるに、此所は昔國府方と稱せし地にして、其谷合に架せし橋なれば、國府が谷橋と唱へしなるべし。やといは通音なり。俗間市谷越谷、鳩谷、などいふにひとしく、やをいに唱へかへたりしより、後人髮搔〔カウガイ〕にちなみてさま〴〵の臆說をば爲せしとおぼえたり。

澁谷長者墳墓 同所松前家の第宅の地にあり。小高き塚にして、頂に松樹繁茂す。相傳ふ、應安の頃迄此地に富農ありて、是を澁谷長者と稱せしとなり。今同所百人町の南を、長者が丸と唱ふるも、其宅地の舊跡なればさはいふとぞ。其長者が子孫近き頃まてかすかなる百姓にてありしとなり。

按ずるに、江戸砂子に、澁谷百姓町岡部家の別莊の地は、そのかみ富民慶福といひし者の宅地なりとあり。又青山原田の松平豐州侯の別莊に稻荷の叢祠ありて、其前に古き石の燈ありあり。其棹石に、康曆二年十月日願主四郎太夫とあり、是を澁谷長者建立のものとす、然らば四郎太夫慶福など稱せしにや。されど其姓氏等も知るべからず、江戸砂子には澁谷長者の名は宗順といひけるとあり。

通明觀 澁谷岡部家別莊の號なり。風景他に越え、四時共に美觀たり。土民の云ふ、此地は往古澁谷重國舊館の跡とも、又は富民慶福といひしものゝ住し跡なりともいへり。

普陀山長谷寺 同所にあり。曹洞派の禪窟にして、江戸檀林の一室なり。野州富田の大中寺に屬す。本尊十一面觀音の像は、和州長谷寺の觀音の模形にして、立像二丈六尺あり。御首の中に御丈四寸の十一面觀音の靈像を安置す。則ち和州長谷寺の本尊と同木の樟にして、同

大和尙の時、寶永二年台命に依て、此地へ遷されけるとなり。今谷中に善光寺坂と號くるは、其舊地なるが故にして、其舊跡は、今の玉林寺の地なりと云ふ。什寶に中將姬自の毛髮を以て製造する所の、六字の名號あり。

觀音堂　本堂の左に並ぶ、堂内觀音百體を安ず、本尊は聖觀音にして其丈二尺ばかりあり、惠心僧都の作なり。當寺むかし谷中にありし頃火災にかゝりし時、自ら火中を遁れ出給ひし靈像なりといへり。故にあざなして火除とも、又は火災の時榎に飛びうつり給ひしにより榎觀世音とも稱するといへり。

斥候塚　一名を去我苦塚ともいふとなり。百人町の通り田村下總侯邸の中にあり。相傳ふ、澁谷の金王麿斥候の塚なりと。此塚に登りて四方を顧望すれば、二三里が間は手にとりつべく、遠くは富士、筑波、信、甲、相、武の靑嶽、房、總の翠巒畫くが如く、憂悲苦惱を去る、依て號とすといふ。或人云ふ、此ものみ塚のたぐひ府中武藏野のあたり、こゝかしこにあり、古へ府中野火留のあたり迄一向〔ヒタスラ〕の原野にて、行くとも秋の果もなく、月の入るべき山の端さへなき、名にしおふ大原なれば、旅人の道に迷はざらん爲に、所々にかゝる塚を築き置て、其上より望めば道筋こと〳〵くわかる樣にそなへしものならんといへり。又府中の北に富士見塚、或は佛位、八國山などいふたぐひ、四五箇所迄存せり。この所にあるも又其たぐひなるべし。又或人云ふ、去我苦塚と云ふは、申樂塚の誤なるべし、昔此所にて申樂興行ありし舊跡なる故に此名あり、斥候塚も又見物の人の登り居たる故に、物見塚と唱へしなるべしと云々。未その是非をしらず、昔の鎌倉海道の舊跡此塚の下に彿殘りてあり。

笄橋　靑山長者ヶ丸の谷間の小溝に架せり。里俗云ふ昔は此川を龍川といひて大河なりしと云ふ。或は鶉ヶ谷に作り、鉤匙とす。菊岡沾涼云く、往古六孫王經基佩刀の笄を、此地の關守に與へられしによりて名づくと、故に笄橋といひ、又は經基橋とも號くるといへども臆說なるべし。笄は和名抄加美左之〔カミサシ〕と訓ず、髮搔として可ならん。其餘髮搔に因む所の諸說は繁きを厭ひてこゝに漏しつ。

青山善光寺

熊野社

海蔵寺
開山堂
方丈
庫裡

藏庵と號して、寛文十一年井伊侯夫人掃雲院殿の營建なり。其頃鐵眼禪師をして、此草庵に居らしむ。竟に正德三年に至り、公許を蒙り、一字の蘭若とす。菊岡沾凉云ふ、開山寶州和尚と云ふ。當寺より唐板の一切經を出す。

熊野權現社　同所東南の方三町斗を隔て、原宿町にあり。祭る所南紀の熊野權現に同じく三社なり。靑山の鎭守にして、祭禮は隔年九月廿一日に修行す。別當は眞言宗にして、淨性院と號す。

心見觀音　同北に隣る天台宗にして、竹園山教學院と號す。本尊は聖德太子の眞作といふ。

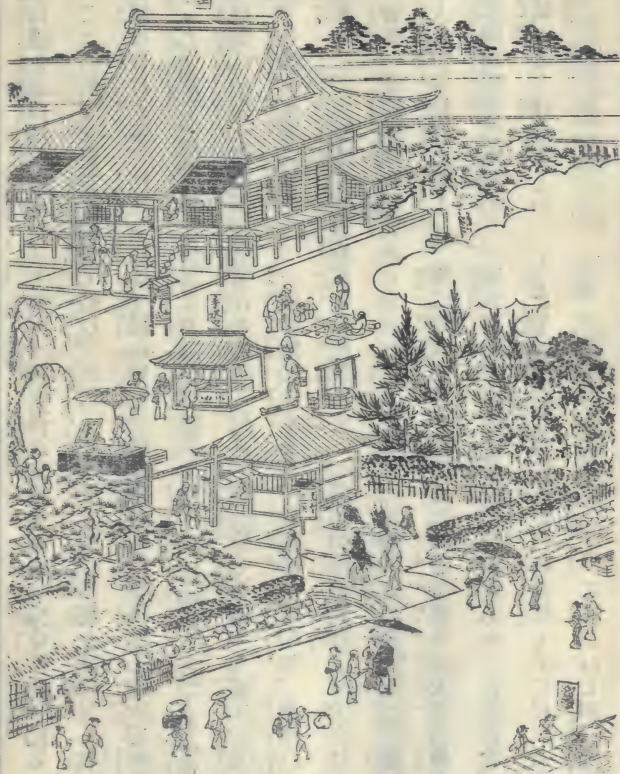
南命山善光寺　同所百人町右側にあり。信州善光寺本願上人の宿院にして、淨土宗尼寺なり。本尊阿彌陀如來は、御長一尺五寸、脇士、觀音勢至の二菩薩は、共に一尺づつあり。稱德天皇の景雲元年八月十五夜、法如尼和州當麻の紫雲庵にて、念佛誦持の頃、信州善光寺の如來來現ありしを拜し奉り、直に一刀三禮にして、其御形を摸さる。是則ち當寺の本尊なり。當寺は永祿元年戊午の創建にして、始は谷中にありしを、中興光蓮社心譽知善上人明觀

て、僅に蘖生の若木を存し、高間櫻の名を遺せり。當寺の西隣は、卽ち梅窓院なり。

長青山梅窓院 寶樹寺と號す。青山久保町道より左側にあり。淨土宗にして、京師知恩院に屬す。當寺は青山家累世布金の佛園なり。本尊阿彌陀如來の像は、聖德太子の作なり。當寺は寛永年間戴蓮社頂譽冠中南龍和尙開基し、觀智國師を請じて開山祖にす。國師は緣山中興開山なり。惣門の額長青山の三大字は、黄檗悅山の筆なり。

泰平觀世音 自然銅御丈三寸三分の千手大悲の靈像なり、天竺佛と稱して不空三藏傳持し、鑑眞大師天平十五年來朝の頃齎來し、聖武帝に獻り、南都大佛殿の傍にありしを、源賴義公兄弟奥州追討の頃、此靈像を奉持して陣中守護とす、凱陣の時奥州伊達郡に安置ありしが、故ありて青山家に傳はり、後又當寺にうつし奉ると云ふ。靈驗いちじるしとて常に參詣絕えず。 **羅漢堂** 中尊は紫銅の釋尊、左右は十六阿羅漢及び二十五菩薩等の像を安置す、何れも順譽上人の作なり。 **鯨鐘** 樓に掲る寶永七年十一月當寺第八世法蓮社壽譽鐘的上人の時、舊鐘を鑄改んとせしに、或夜龍女夢中に告て云く、我今畜身を解脫せんが爲、一面の鏡を携へ來れり師願はくは是を加へ給ひてすみやかに佛果を得せしめ給へとなり、夢覺て後枕上正に一面の鏡を存せり、師是を奇とし其鏡をも加へて終に洪鐘成就す。依て其證として夢に見し所の龍女に寶光祐龍大姉と法號をあたへられ鏡の面に其號を鐫ましむ。 **楔地藏尊** 慈覺大師の作なりといふ。當寺九世順譽上人北總行德の海濱湊村の法傳寺にいませし頃、夢中靈應によりて、同所の海岸にして感得あり、海岸楔ありて本尊得がたし、然に其楔と思ひしは則ち此本尊なり故に名とす。 **百濟稻荷** 享保の始和州百濟より緣山へ下向の僧に託して、此梅窓精舍に鎭座ありて永く衆生を度せんとなり、依て一社に奉ずと云ふ。 **拾櫻** 當寺第二世峰譽上人門前にして、苗木をひろひ手親ら栽ゑられしとて、今堂前に存する所の垂枝櫻是なり。 **虛空藏堂** 卵塔の奥にあり、本尊は坐像にして御丈二尺ばかりあり、當寺順譽上人作られしといふ。

青山海藏寺 同所一町ばかりを隔てゝ、乾の横町右側にあり。黄檗派の禪宗にして、始は海

泰平觀音堂
本堂

年五十八、大和國金峯山に毒龍栖むことあり。霖雨洪水五穀登らず、山中修歴の徒もこれが爲に廢絶す。こゝに於て天皇宸襟を悩し給ひ、師に詔を下して、毒龍を降伏せしむ。師勅を奉り、金峯に分け入り、法威を震ふて龍を伏し、抖擻修行の道を再興し、次で奏聞を經て、吉野郡に一寺を創建し給ふ。鳳閣寺是なり。卽ち尊師の上足貞崇僧正を以て第一世とし、昌泰三年始て此處に於て、峯受灌頂の密法を興行し給ふ。爾來七百餘年を經て、元祿年中中興俊尊僧都、寺號を東都に移して、一派總綱の役寺とし、神祖御由緒の地、遠州白山一諦坊康松院を兼領して、天下泰平國家利民の御祈願所とし、每年の四月八日七月十九日には、順逆二峰の神事、柴燈護摩の儀式あり。此日諸人群參す。當寺本尊不動明王は、靈驗の尊像にして、里人出世不動尊と稱して、常に詣人あり。脇壇には神變菩薩理源大師の像を安置す。寺内に三峯權現稻荷の小祠あり。境内に櫻樹有り。暮春の頃淸賞あり。此樹は當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を取しめて、もと昌平坂の舊地に植ゑて、高間櫻と名づけたる名木なりしが、寛政年中聖堂御造營の節、替地を賜ひて、當寺を今の處に移されし刻、舊樹は枯

猿啼霜降月色淸　　雞人未唱客先行
狗不夜吠王舍城　　猪觸金山轉峥嶸

崑崙山玉窓寺　同所右側、青山家の邸第の間にあり。禪宗にして、開山は普光禪師、開基は青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉たり。故に寺號とす。本尊觀世音の像は、中將姬香を以て是を製する所といへり。

青山は赤坂の西澁谷よりは北なり。此地もとより麻布の郷に屬せり。天正の後此地を青山因幡守忠俊にたまふ。其頃は澁谷筋への街道も共に構への中にして、殊に廣かりしにより、其中間に路を開き、兄弟路を隔てて住居せられしなり、忠俊の寺は道より北にありて、玉窓寺といふ。則ち當寺是なり。又道より南にあるを幸成の寺とするは、梅窓院是なり。或人云ふ、此地は天正の頃山口重政の弟宅なりしが、後罡の高木主水正正次に地を割て與へられしとなり、故ありて後この地を青山家に賜ふとへり。其地の廣かりしによりいつしか青山と唱へ來れるなり。

百螺山鳳閣密寺眞言敎院　當寺は醍醐の院室にして、戒定慧院と號し、諸國呪驗末寺の總綱たり。本坊は和州吉野郡鳥栖山に在て、開基根本理源大師、諱を聖寶僧正と號す。光仁天皇の皇子葛聲王の令子なり。弘法大師の肉弟眞雅僧正に投じて剃度し、螢雪の功年を積み、南都の諸名公に參じて、法相三論、華嚴唯識を學び、慧業日々に進み給ひしかば、萬乘の聖主、一時の公卿、尊師の德を仰慕し給ふこと淺からず。時に宇多天皇寛平元年己酉、尊師

武州赤坂圓通寺。募鑄千斤銅鐘。備乎十二辰之候。按大集經。菩薩應類悲願。化作十二時獸。在寶山中。修法緣慈。而爲一切精魅之主。制彼撓亂。護持世界。圓通之擧。其意在玆。住持僧某。介於人乞銘於余。因以十二獸辨之句。勸爲十二韻贈焉。客曰。雖然如其似遊戲何。余曰。諸佛菩薩。爲羣類示種々身。現種々土。設種々法。以至吹螺擊鼓鳴鐘。悉是莫不遊戲。故云。遊諸世間。如幻師。如兒戲。余亦窃學之人也。會作此銘又遊戲翰墨。爲佛事。其爲似遊戲也亦宜。

銘曰。

鼠山流光人未驚　牛王出世振梵聲
虎狼野干氣縱橫　兎角方便誘群情
龍宮高處擊華鯨　蛇室睡破覺心生
馬腹忽變聖胎成　羊鹿牛車休復轟

今井古城址　氷川明神の西北の方、松平藝州侯の中屋敷の地をいへり。今井四郎兼平が城址なりといふ。紫の一本といへる草紙には、齋藤別當實盛の城とし、或は田子先生義賢の出城なりともいひ傳ふれども、共に詳ならず。〔北條家の所領役帳に、太田新六郎渡邊丹後などいへる人、此地を所領に加ふ。又牛込氏家系に、宮内少輔勝行北條家より此所を所領に賜ふとあり。〕

赤根山　紀州公御中屋敷の地をいふとぞ。昔は此地に多く茜を産す。故に茜山とよびけるとなり。今紀伊國坂と呼ぶ地、昔は赤坂と稱へしとなり。赤根山の坂なれば、かく赤坂とは名けたりと云ふ。

圓通寺舊跡　同所寺町にあり。此地申の方より寅の方へ向ひて下る坂を圓通寺坂と云ふも此故なり。今此地に佛智山圓通寺といへる日蓮宗の寺あれども、古の圓通寺とは異なり。往古廢せし圓通寺の洪鐘は、圓通坊といへる沙門建立する所とす。銘は深草元政法師の撰する所なり。其鐘今は亡びてなしといへども、古を存せんが爲、草山集に出るを以て、こゝに記して其舊跡を失はざらしむ。

赤坂圓通寺鐘銘竝序

種徳寺

心僧都の作。丈三尺 開山は寂蓮社曇譽上人と號す。昔は青山にありて、勢至菩薩を安ぜし草堂なりしが、永祿年間開山上人一字の梵字とし、其後赤坂氷川明神の邊に移るを、又寛永に至り、同寺町に地をかへられ、遂に元祿に至り、今の地に移す。往古より安置の勢至菩薩の靈像は、今猶當寺に存せり、金銅にして甚だ古佛なり。

一木原　今赤坂傳馬町の裏通、僅に一木町の名を殘せり。昔は此邊なべて一木原といひ、矢盛莊七郷の中にて、古き名なりと云ふ。中古より上下と二ツにわかつ、上一木は四谷鮫ケ橋の邊をいふ。今四谷くらやみ坂に禪閣藥王寺といふ藥師如來の靈場あり、昔其境内に大木の榎あり是を一木と云ふ。又下一木は此赤坂にして同所清岸寺にも藥師ありて、藥王寺の靈像と同作にして共に一木藥師の稱あり。昔は此寺にも大樹の榎ありしとぞ。そのかみ人次と書きしを彼の大樹によりて後一木と書き改めたると云ひ傳ふ。北條五代記、大永四年正月十三日、北條氏綱、上杉朝興に打勝ち、敵の首ども實撿し、一木原に籏打揚げ、作法の如く勝鬨を執行ひける由見えたり。北條家の所領役帳に、太田大膳亮所領の中に、一木貝塚の地名を加へたり。貝塚は麹町にあり、然れば麹町の邊も一木の内なりとみゆ。或人云ふ、此地町屋になりしは天正十九年の頃なりと。

狩野興意墓　同所三分坂下、靈鳳山種德寺の境内にあり。當寺は大德寺派の禪閣にして、昔は相州小田原にありしを、天正十九年麹町に引れ、後又當所に移さる。開山は東光知灯禪師と號す。醫王水も當寺の靈泉なり。

一本辨天
龍泉寺
松泉寺
專修寺

信康山龍泉寺　同所一ッ木町道より右側にあり。淨土宗にして、花洛知恩院に屬す。開山を隨流和尙と號す。寛永十一年の開創たり。當寺佛元和尙は扶宗の志厚く、曾て子信錄千卷を著し、刊行して、普く學徒に示す。尾州の產なり。當寺に子安觀世音を安置す。聖觀音にして、傳敎大師の作なり。又同じ相殿に、藥師佛をも安ぜり。同作なりと云ふ。世に一木觀音、一木藥師と號く。本尊は立像御丈三尺餘の彌陀如來、行基の作なり。脇士、觀音勢至の兩像は、作者しれず。又境内天滿宮の宮ありて、稻荷を相殿とす。天滿神の神像は、東叡山慈眼大師作らせらるゝ所なりと云傳ふ。

平河山淨土寺　源照院と號す。同所龍泉寺より、半町程南の方、同じ側にあり。淨土宗にして、緣山に屬す。本尊阿彌陀如來は、坐像四尺餘、作者詳ならず。開山は敎譽聖公上人と號す。中興は源蓮社本譽利覺一故と號けたり。當寺昔は御城内平河口の邊にありしを、元龜三年今の地に移されしと云ふ。

一行山專修寺　同所寺町にあり。當寺も緣山に屬する所の淨刹にして、本尊阿彌陀如來は惠

場山王權現と隔年に修行す。江戸名勝志、惣鹿子等の草紙に、當社元一木村にありしを享保十五年己酉今の地に遷座、社を御造營ありと云々。

按ずるに、當社を古呂故宮とし、又享保中一木より今の地にうつし奉るよし諸書に見ゆれども詳ならず、寛文江戸圖に古呂故宮と稱するものは、今の一木に記して、氷川明神は同繪圖に今の地に記しあり、しかるときは各別の社なるべし。

江戸名所記に、天曆年間江州甲賀郡に蓮林と號けて天台四明の法灯をかゝげ、一念三千の觀行を凝す沙門あり、東國遊化の頃、此所に一夜を明し、夢中に靈示を得て土中より十一面觀音の像を感得し、こゝに安じて一木觀音と稱す。蓮林化寂の後治曆二年丙午關東大に旱す、萬民當社に雨を祈りて驗あり、夫より後氷川明神と崇めまつるとあり。

古呂故天神社　同所一木の地、赤坂田町にあり。或は小六に作る。別當は洞家の禪宗にして清德寺と號す。

武藏國風土記殘編曰

荏原郡赤坂庄。小六天神。或古呂故。圭田三十五束三毛田。天武天皇三年甲戌十一月。始行二神禮一。有二神戸巫戸一。所レ祭大巳貴與二少彦名園韓神一也。號二小六一者。以二古呂故岡一之名也。云云。

按ずるに、案の一本に、此大明神もと當國八王子の邊に木呂子と云ふ所あり、其所の氷川明神を此所へうつす、道灌の書に木呂子の柴など云ふ事ありと云々。又同書及び江戸名所話等の書に、慶長の頃、關東の小六とて美貌の聞えある馬追ありて此赤坂に住す、常に氷川明神を尊信し後其家富めり、依て社の破壞を再修す、故に後に小六の宮とあれども證となしがたし、江戸めぐりに、小六明神は日本武尊の垂跡なりとあり、諸說紛々として詳ならず、姑く風土記の說を用ふべき歟、猶可考のみ。

赤坂氷川社

八まん
神明
春日

細井父知治母山本氏

萬治元年戊戌十月乙亥八月壬申

生遠州懸川

右面　享保二十年乙卯十二月己丑二十

三日戊子卒于江戸城西于寢享年

七十八

孝子知文建

其餘先生の父母及び息男九皐等、すべて細井一家の塋域とおぼしく、垣をめぐらしたる中に、ことごとく同姓の人の墓碑あり、孝子知文とは則ち九皐の事をしかいへり。

赤坂御門　麴町の方より青山へ行く道、赤坂への出口なり。此御門は北斗形とて、江戸御城の御構へ多きが中にも、殊更勝たる繩張なりといふ。或人の說に、赤坂は茜山(アカネヤマ)の邊の坂なればかく云ふと。按ずるに赤坂の地名は、永祿二年小田原北條家の所領役帳にも、江戸赤坂六ケ村千葉殿所領すとあり、武藏國風土記に、荏原郡赤坂庄とあり、今は豐島郡に屬す。

氷川明神社　赤坂今井にあり。此所を世に三河臺といふ、天和の頃松平三河守樣御屋敷なりし故に名とす。別當は聖護院派の觸頭にして、大乘院と云ふ。祭神當國一宮に相同じ。赤坂の總鎭守にして、祭禮は隔年六月十五日、永田馬

天文二十三年甲寅夘月大吉日　前左兵衛佐賴康判

滿願寺

就醫王山滿願寺再興可爲永代諸役不入者也。當家主子々孫々不可背此旨仍而爲後日證狀如件

甲寅二月吉日　前左兵衛佐賴康判

滿願寺

此古文書滿願寺および農家等に散在して全からずといへり。

廣澤先生之墓　同境內、堂より後の方、岳の上にあり。廣澤先生は細井氏、通稱を次郎太夫と呼べり、或は思貽菴、蕉林庵等の號あり、江戸に遊んで書法を雪山にまなび、若冠にして柳澤侯に仕ふ。後致仕して城西青山に隱る、紫微字樣、觀鵞百譚、撥鐙眞詮、篆體異同歌、奇文不載酒、字林長歌等の著述あり、碑面左の如し。

正面　廣澤の先生細井君之墓

左面　豪德院不孤有鄰大居士

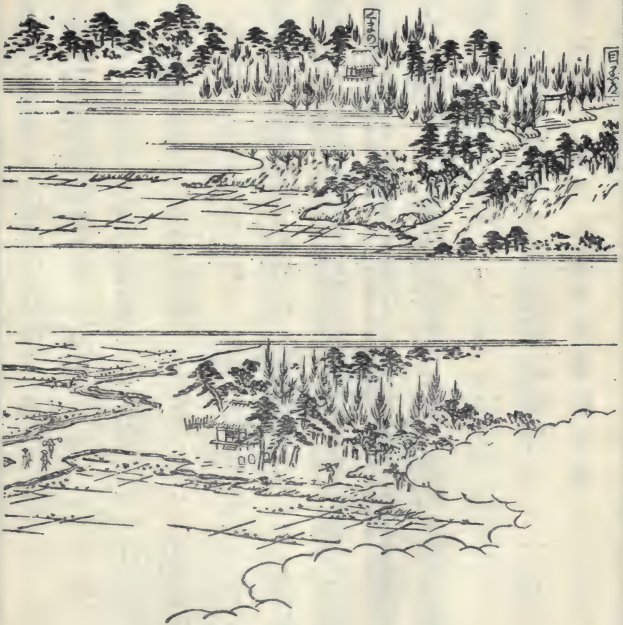
背面　諱知愼字公謹號廣澤姓藤原氏

今井谷

芝村十一貫皆納　　　高田分二十貫皆納
坂戸河原十二貫皆納　熊澤分五貫皆納
弘治二年丙辰十二月十八日

吉良家朱印

世田谷之内滿願寺之事山屋敷同手作分之田相任爲參御達之處
寺家再興有之祈禱以下勸行可被修之者也委細松原佐渡守可申
分候恐々敬白
天文廿一年壬子二月大吉日　左兵衛佐判
誓音寺

世田谷之内深澤村滿願寺分於何年諸役公事一向不可有之爲後
日證狀如件

満願寺
くまの

存す。後門の方は大沼にてありしとなり。今は耕田となれり。

大平山　奥澤新田村にあり。大平出羽守の砦の跡なりといへり。

按ずるに、等々力村滿願寺所藏の天文弘治の古文書に、大平淸九郎といへる名往々に見えたり。大平左馬と云ふも此人の事ならんか。

致航山滿願寺　二子街道等々力村道より右にあり。新義の眞言宗にして、山城醍醐報恩院に屬す。開創の時世詳ならず。中興開基を定榮法印と號す。慶安年間寺領御寄附の朱章を賜ふ。本尊は大日如來なり。當寺は世田ヶ谷の吉良左兵衛佐　源　賴康の祈願所にして、其頃は頗る盛大の寺院なりしとなり。世田ヶ谷私記追加に云ふ、當時往古政忠の男經舜住職す、豪德寺所藏の吉良系圖にも政忠の子經舜滿願寺殿とあり、當寺に天文、弘治、天正等の年號ある、吉良賴康、北條氏康、氏政等の證狀、或は書簡等すべて十八通斗あり、其文中に世田ヶ谷深澤村の滿願寺とあるは其故をしらず、昔等々力は深澤に屬したる小名にてありしか、又は深澤より等々力へ引移したるか、今しるべからず、又同古文書の中一通には醫王山滿願寺ともあれば、後世致航山に更めしならん歟、猶可考のみ。總門の額、致航山の三大字は、小篆にして、廣澤先生の筆、又本堂の向拜に揭て、滿願寺と書せしは、息男九皐の書なり。

大藏村年貢四十貫皆納　石井戶新開貳貫滿願寺へ一貫分

夫々錢七百五十貫づつ　夫々二百五十憶濟者也

淨性。施主山城國宇治里。宮本仁左衛門。鑄物師釜屋八右衛門。

開山大蓮社超譽上人珂碩和尙は松露と號す。俗姓は野村氏、武州の人なり。元和四年戊午正月元日に生る。江戸覺眞寺の圓岩に投じて薙染し、十八歲にて業を珂山和尙に受く。珂山和尙は下總生實大巖寺に住す。和尙後年武陵の靈巖寺に住持する頃、師も亦從つてかしこに移る。初越後國泰叟寺に住し、後此地の鄕民の招に應じ、歲七十七の時、武州に歸り、世田ヶ谷奥澤に幽棲す。當寺是なり。遂に元祿七年甲戌十月七日化寂す。本朝淨土高僧傳に、元祿八年報壽八十許にして入寂すとあるは誤なり。師の姿貌溫雅にして慈恩尤も深く、奇驗孔多し。凡そ在世の感應は勝數すべからず。其事最も煥灼として、人々是を傳ふ。以上淨土傳燈系圖、上人傳、本朝淨土高僧傳の意を採る。

當寺は不斷念佛の道場にして、閑寂玄隱の淨舍なり。每年四月三日より、同十二日に至る迄十日の間、阿彌陀經千部讀誦修行、七月十六日より、同十八日迄蟲拂にて、當寺什寶を出し諸人に拜せしむ。此寺境內は昔小田原北條家の屬將、吉良家の老臣、大平佐馬或は出羽守とも。といひし人の構たりし壘隍の舊跡なりとて、今も北より西南の方へ繞りて、堤の形、空堀の跡を

開山堂　上品堂のうしろ古城の跡、堤の上にあり、開山珂碩上人七十二歳の影像なり。奥澤九品佛縁起には、椅子にかゝり杖を脇に置くとあれども、立像にして合掌の體相なり。猶可糺。

開山珂碩上人廟　開山堂の右のつゞきにあり。奥の院と唱ふ、近頃石の簾を造り設く。　星の井　開山廟の前小坂の上にあり、有信の人偏に稱名すれば、白日といへども、水底に衆星の光り顯はるゝといへり。　鐘樓　本堂の右にあり、九品の阿彌陀如來の像を鑄上たり、寛永五年に造る所の鯨鐘なり。　樓門　同じ所にあり、樓上には二十五菩薩の像を安置す。樓下には金剛密迹の二王の木像を置けり。

額　般舟場　當寺珂慶和尚筆、　芝枯大名號一幅　長十三間巾九尺白布十反を合せ用ゆ。珂慶上人の筆なり。草木國土悉皆成佛の意地に住して書かれし故に、草木に掛れば六字の通り芝枯る故に名とす。

阿彌陀如來畫像　珂慶上人の筆にして、細字の六字名號を以て如來の御姿を書きつめられし像なり。　十念名號　珂碩上人臨終の頃筆せられたりといふ。徒弟の輩師の別れを惜みて請る所と云ふ、故に名殘名號とも號く。其餘高德の筆の名號多し。　亡者の帷子　昔芝西應寺町鳥羽屋三郎左衞門なりける人の妻、難産にて死たりし後、珂碩上人の十念脈符を授り、冥府の苦みを遁れ、成佛したる事を喜び、其證にとて亡靈の殘し置たる帷子なりといへり。　亡者の文　堤氏何某の先妻女の死靈、珂碩上人の德化によりて、成佛したるよろこびのあまり、かの先妻の亡靈後妻の一文不通なりしものゝ手をかり用ひて、書たる文なりと云ふ。　攝待大茶釜　當寺に收む。毎年四月千部の時出し此茶釜にて茶を煎じて衆人に施す、寛文年中山城宇治の茶師宮本仁左衞門といへる人、繼母の恐念によつて、病を受けたりしが、當寺開山珂碩上人の利益により、繼母の死靈佛果を得て、仁左衞門が病頓に平愈す、其頃珂碩上人再興ありし深川大島村常念佛堂の堂守淨正のすゝめにより、報恩の爲宮本仁左衞門寄附なしたりとなり。來由は寺記に詳なり。其銘に曰く。

南無阿彌陀佛　奉寄附鑵子一口。爲二親菩提。于時寛文八年霜月廿五日。當九百日。武州豐島郡、葛西莊大島村。念佛堂常住物沙彌

開山上人の道光を慕ひ是を附屬ありしとなり。

開山珂碩上人像 客殿に安置す、上人生前如來の靈示再三なるに依て是を彫造ありしとなり。此肖像に添へ置れし開山自筆の書あり。其文に曰く、

此像は如來の御告三度に依て彫刻する所なり、末代の輩此像に結縁せば、現生の諸災難を除き未來は必ず淨土に導くべし。

萬治元年戊七月二十四日　　珂碩四十二歳印

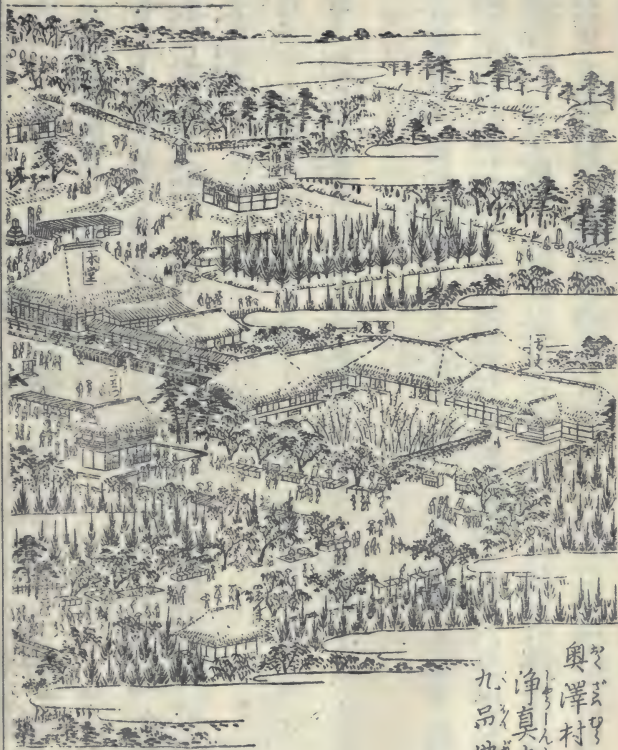
此故に世人除厄の影像と稱せり。

曼陀羅堂 本堂の左にあり。中尊は弘法大師の作の三尊の彌陀像を安置す。往古深川大島村の念佛堂にありしを堂守淨性といへる沙門當寺へ移し奉る。其餘五智如來及び超載永劫佛五劫思惟佛等を安ず。此尊像は面ふくらかにして他の像に異なり。

中品堂 同じ右に並ぶ。中品中生、中品上生、中品下生、以上三品の阿彌陀如來の像を安置す。

上品堂 本堂に向ふ。上品中生、上品上生、上品下生、以上三品の阿彌陀如來を安ず。

下品堂 同左に並ぶ。下品中生、下品上生、下品下生、以上三品の阿彌陀如來を安ず。

以上九品の阿彌陀如來九體を安置す、各坐像にして、一丈六尺あり、佛像一體毎に圓光ありて附する所の小佛一千十一軀づつ九體共にしかり、何れも開山珂碩上人の彫造にして開山常に一日三錢を貯へ、造佛の費に充つ。寛文四年より同七年に至り其間わづかに四年、竟に九品の彌陀像全く成就する事を得たりとなり。此本尊初は靈岸寺の地にありしが、洪波の爲に破らる。後延寶六年戊午ことごとく此地に移さるとなり。或は云ふ珂碩上人諸堂不成して遷化せらる。從弟珂憶上人河州玉手山安福寺より來りて建立すといふ。九品堂の額は何れも珂憶上人の筆なり。

本堂
奥澤村
浄真寺
九品佛

碑文谷八幡宮　同所耕田を隔てゝ、南の方一町斗にあり。相傳ふ、畠山重忠の崇信せし御神なりといふ。神體は祕物なりと云ふ、或は云ふ、束帯の銅像なりといへり。別當は天台宗にして、法華寺末神宮院奉祀たり。昔は此地の農民の内、宮氏なる人社司たりしとなり、此宮氏は重忠の家臣の遠裔なりといふ。或人云ふ、八幡宮の西にあたる地は、往古の鎌倉街道にして、路の傍に石碑ありしとなり、されどもいかなる故にや此地の土民鎭守八幡宮の社地へ埋藏したりと。或は日原上人大卒都婆に碑文を書して埋めし故の名なりともいへり。又江戸鹿子［エドカノコ］といへる草紙には、忠玄といへる沙門、卒都婆一基を建てたるによりてかく唱ふるともありて共に詳なる事を得ず。

九品山淨眞寺　碑文谷より一里あまりを隔てゝ、西南の方奥澤村にあり。淨土宗にして唯在念佛院と號す。京師知恩院に屬せり。延寶六年戊午、珂碩和尚開基する所の淨刹にして、九品九會の靈場たり。

本堂　本尊阿彌陀如來　丈六の木像也。額　龍護殿　當寺珂慶上人筆　内佛本尊阿彌陀如來像　聖德太子四十二歳の御時、一切衆生の災難を除かん爲彫造ありしとなり、珂碩上人御年十八の時、深川靈岸寺の傍に寓室を結び念佛修行なし給ふ頃、ある曉一人の高僧此本尊を背負來て其來由を示して珂碩上人に附屬あり、夫よりして上人の智德盛にして、貴賤の道俗利益を蒙る者少からず、故に九品佛彫造の資財乏しからず、此靈像の助により諸佛天三萬六千體悉く成就したりといふ。地藏尊　本堂の向小堂の中に安置す、開山珂碩上人の本地佛と稱す、惠心僧都の作なり、此本尊昔丹波國箕濃山に立せ給ふ、其麓に住む大江繁時といへる惡逆無道の狩人一時山に至り急雨に逢ひ件の地藏堂に休らひし時、堂宇破壞し佛體雨露の爲に浸され給ふを痛み奉り自冠る所の笠を本尊に覆ひまゐらせたりし因縁により一度死して冥府に至るといへども此靈像繁時の苦に代り給ひ、再び娑婆へ歸らしむとなり。其後故ありて高野山に移り給ひしを了山法印當寺

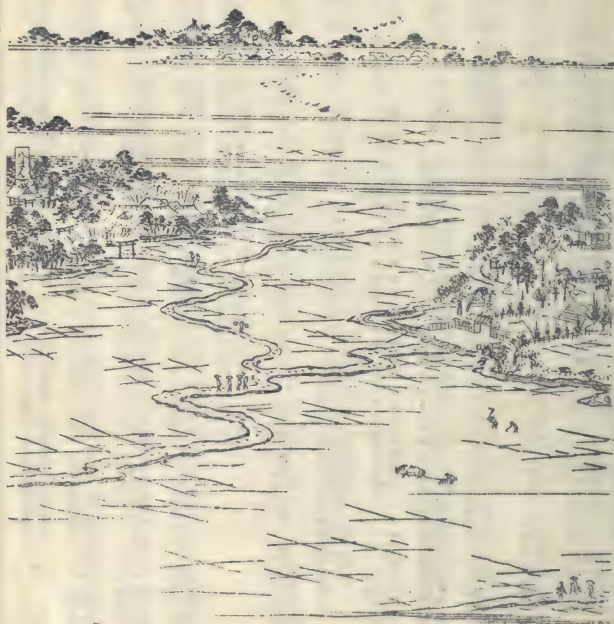
元祿十二年已卯　台命に依て下總生實の大巖寺に住持し、牛島の庵室より直に大巖寺に入院あり、世以て稀有とす。同十三年戊辰飯沼の弘經寺に轉じ、紫袍を賜ふ。又辛未江戸小石川の傳通院に移り、正德元年增上寺に住せらる。大僧正に任ぜらる。緣山第三十六世なり。後目黑の地へ隱栖せられ、竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり。當寺は則ち祐天大僧正終焉の地なり。一世の行狀並に書寫し給ふ所の名號の奇特は、世人普く知る所なり。開山臨終の頃まで名號書寫怠りなし人ありて是をとぶむ、開山云く惠心僧都は一期の間如來を彫造し其中にして往生を遂げられたり、我も又彌陀の名號を書寫して、其中に往生すべしとて、命終の日に至る迄一日も怠る事なかりしとなり。

妙法山法華寺

碑文谷にあり。祐天寺の南半道斗にあり。吉祥院と號す。天台宗にして東叡山に屬す。本堂本尊は釋迦如來、脇士は、文殊普賢なり。里諺に、今存する所の堂宇は飛驒匠某が作る所なりといへり。觀音堂　堂前左の方にあり、本尊は十一面觀音の立像にして、參籠の人此堂に通夜す。榎木　釋迦堂の後左の垣際にあり、至ての古株なり。當寺開創已來のものなりとてその本に垣を繞す。二王門金剛密迹の二像は、佛工安阿彌の作なりといへり。靈威尤も著しきが故に世人尊信す、いかなる故にや寬政紀元の年已酉の頃より後十二年斗の間靈驗著しとて頻に都下の人群參して道もさりあへざりしがいつしか其事止みたり。當寺其先は慈覺大師の開創にして、天台宗の古刹なりしが、後日蓮の宗化に歸し、日源上人中興開基たり。竟に元祿に至り舊慣に復し、元の天台宗を唱ふ。今堀内妙法寺に安置せし日大士の像は當寺よりうつすといへり。

境内櫻楓の二樹多く、春秋共に頗る壯觀たり。

八まん

碑文谷
法華寺

筆開山祐天大僧正廟　經藏と阿彌陀堂の間より、裏門へ行く左の方叢林の中にあり。入口に石地藏堂あり、

開山八十歳影像　麻布一本松の禪室にして、了月和尚親ら寫し畫くと云ふ。

同　臨終眞影　開山八十二歳の時、享保三年戊戌六月中旬より不食して身體日日に衰へ、七月十五日に至りて稱念臨終し給ふ。同十六日遺骸を倚子に移して諸人に拜せしむ。此期に寫せし影にして、了月和尚の畫なり

開山遺骨舍利　開山命終の後荼毘せしに全身悉く舍利となる。多くは廟穴に埋藏す。今わづかに寶塔へ收むるもの則ち諸人に拜せしむ。

同舌根　是も荼毘の中に宛然として殘れりといふ。縁起に云ふ、舌根は元火にして荼毘の中に壞せずと云ふなし、然るにかく止るものは累年稱名の功德と、その化導に妄語なきいはれなりといへり。

開山大僧正書寫六字名號　奇特尤多し、就中劍難七太刀身代名號、狼牙落名號、火中出現不燒名號、疱瘡守名號、等の現益は普く世にしるゝ所也。故にしげきをいとひて寺記にゆづりてこゝにのせず、猶其余の名號奇特尤も多し。

開山大僧正長悅像　開山小石川の傳通院在住の頃、元祿年中大將軍家御前において法問說法ありしを、瑞春院殿御感賞の餘り御親ら刻ませ給ひしを上覽まし〳〵長悅と呼ぶべしと上意ありて、鶴姫君樣へ進ぜられ、御雛祭の首席につらねさせ給ひしを、其後祐海上人へ賜りて當寺に收む。此故に毎年三月當寺にて雛祭の儀式執行事あり。

蜀江錦九條袈裟　增上寺在住の頃開山上人女院御所へ御血脈御法號等を奉りし時、御親ら是を造り給ふとぞ。

累濟度如法衣　二十五條なり。累（カサネ）は下總國岡田郡羽生村與右衛門といひしものゝ妻なり、顏形類少き惡女にて心さへにかたましかりしかば、與右衛門是を惡み、情なくも正保四年丁亥八月十一日絹川といへる川へ突落し殺して後死骸をば同村なりし淨家法藏寺といへるに葬りしが、其後妻五人迄累が怨念によりて狂死し、猶六人目の妻の娌菊といへるを惱せしが、開山大僧正の化益により、寬文十二年壬子三月十日の夜に至り累が二十六年の怨執悉く散じて、生死解脫の本懷を達せし事、普く世に知る所なり。猶委くは解脫物語といへる草紙に見えたり。

開山明蓮社顯譽上人　愚心と號す。

祐天大僧正は、奥州岩城郡新妻邑の產なり。西村善內といふ者の子にして寬永十九年壬午正月元日生る幼名三之助と云ふ。檀通和尚に從ひ縁山に修學す。世に知る所の累が怨靈解脫の譽は尤も著し。此事は師の歲三十六其頃檀通師に從ひ北總飯沼に在住し給へる時の現益なり。怨靈解脫物語といへる草紙に詳なり後故ありて武州牛島に潛居す。道俗化を蒙る者夥し。

正の遺跡の地を奉じて、當寺を草創し、則ち祐天大僧正を開祖とす。常行念佛の道場にして、鉦鼓の聲は山林に谺谺せり。此稱名は開山祐天大僧正臨終の期、開闢ありしより連綿として絶えずとなり。毎年七月十六日より、同廿五日に至る迄の間、阿彌陀經千部讀誦修行、道俗群參す。

本堂　本尊阿彌陀如來御長一尺五寸斗。惠心僧都の作にして、開山生涯持念の尊像なり。開山祐天大僧正眞像　本尊の龕前に安置す、等身佛にして八十二歳の影像三輪利鑑の作なり。

鯨鐘　堂前右の方庫裡の前にあり一位大夫人桂昌院殿御寄附　圓光大師堂　同下並びにあり、法然上人御在世の時、河内國に天野四郎と云ふ強盗ありしが、終に上人の化導に歸入し、出家して敎阿彌陀佛となづく。（御傳二十卷にくわしく）常に上人の御もとに隨從して敎化に預りしが、後上人相模國川村と云ふ處へ下向の頃生涯の餉記念にとて自ら彫造して送り給はりし靈像なりとぞ、故ありて當時にうつしまゐらするといふ。

經藏　堂前左の方にあり額經藏の二字は祐海和尚の筆なり。　阿彌陀堂　同じ左に並ぶ、開山傳授佛如來と稱して、惠心僧都の手本佛となづくるもの是也。則僧都一代彫刻の如來は此尊像を拜して彫り給ふが故に此號ありと云ふ。開山大僧正常に有信の輩に淨業傳法の時の傳授佛なりと縁起にあり。額阿彌陀堂の四字は祐海和尚の筆なり　稻荷祠　同じ並びにあり。當寺僧に問ふべし。寺の鎭法神とす。　地藏堂　同じ並び二王門の外の左にあり。祐天大僧正の本地佛と稱しまゐらす。惠心僧都の作にして、御長二尺五寸斗あり、元信州松本の光明院に安置せしに、寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失せ給ひ、享保三年戊戌七月十五日開山遷化の日に至り、此靈像再び光明院へ歸り顯れ給ふ。松本の城主出羽守水野忠周侯の夢中開山の本地は地藏尊なるよし靈示あり、依て自ら其事を筆して、當寺第二世祐海上人へ申送らせられたり。其書簡今當寺に傳へて祕藏す、然るに寛政九年丁巳の夏松本の城下倉品七郎右衛門といふ人、從來の因縁あるを以て、後の城主丹波守松平光行侯へ乞ひ、同年十二月二十三日當寺へうつし奉りぬ。

二王門表の左右には、那羅延、密迹の二像、裏は持國、廣目の二天を置く。額明顯山　祐海和尚の

本堂
経堂
阿弥陀堂

祐天寺

長泉律院

千代が崎
行人坂の北松平
主殿侯別荘の後中
目黒の方へおり下る所
なり初め鎌が崎といひ
しを後に千代が崎と
改められしといふ主殿侯

より請け得て修飾を加へ、以て當寺の供像とするよし、開山德門和尚傳の中にみえたり。**經藏** 門を入て左にあり。安永七年戊戌落成す。徑律論三藏及び諸師の鈔疏を安置せり。**鐘樓** 安永元年德門師建立し又自ら銘を作る。當寺は寶曆十一年辛巳緣山前大僧正成譽上人大玄和尚といふ。久く律院を創起するの志ありといへども、新に寺を開創する事は、官より禁とす、故にいまだ事ならず、不能律師に至り營建既になるといへども、成譽上人に續て逝す。大玄大僧正示寂あり。依て師の遺志を奉じ、法弟千如等百計千慮してこれを企つ。川越蓮馨寺主敎意上人力を戮せ扶成す。再び官に告て、所請に準する事を得て創建落成す。號けて長泉院と云ふ。山間より淸泉涌出して境内を繞り流るゝゆゑに長泉の號あり。扶費の施主北川氏某なり。こゝに於て寶曆十三年の夏、千如等德門師を請じて、當寺に住持たらしむ。德門律師行狀記に云く、師諱は普寂字は德門自ら道光と號す、勢州桑名縣增田邑に誕す、父は一向派源流寺主秀寬、母は中村氏なり、師襁褓をはなれてより好んで禮佛誦經の態をなす、常兒に異にして名緇の相あり。三歲字を識り六歲書を讀む、凡そ授る所の經書ひとたび受くれば輙ち記す、年をこえて師の學德既に世にみつ、しかれども三衣一鉢纔に唯身を掩ふのみ、一錢一米もとより畜ふる所にあらず竟に天明元年辛丑十月十四日化寂す、閱世七十五臘夏三十六、其德化はあまねく世にしる所なれば是を略す。又師生平撰述の書甚多く、すでに刊するものあり、いまだ刊せざるあり、共に總計四十部百四十有三卷あり云々

當寺は常行念佛の道場にして、漸々たる松風は、とこしなへに梵唄の聲を助け、去此不遠の秋の月は、長泉の流にやどる。實に淸淨無塵の淨刹にして、常に寥寂たり。

明顯山祐天寺　同所西の方五町斗を隔つ。善久院と號す。享保年間二世祐海和尚、祐天大僧

按ずるに、目黑不動尊に日本武尊の說を交へしは、此社を誤りて云ふならん歟。不動尊の條下と合せてみるべし。
附ていふ、此邊をすべて目黑となづけ、上中下とわかれて廣曠の地なり。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、太田源七郎、島津孫四郎等此地を領するよし記せり。東鑑に、建久元年十一月七日の條下に、目黑彌五郎と云へる名を載せたり此地より出たる人なるべし。

金毘羅大權現社 同所二町ばかり西の方、通を隔てゝあり。祭る所讚州象頭山金毘羅神と同じ。當社を以て、御城南鎭護神と稱し奉れり。九條家染筆の額を藏す。別當は禪宗にして、高幢寺といふ。境內に難波の梅、又曾根の松と稱する樹あり。

千代ヶ崎 澁谷宮益町より、目黑長泉律院へ行く道の傍、芝生の岡をいふ。佳景の地にして、永峰に屬せり。絕景觀といふは、松平主殿侯の別莊の號にして、閑寂無爲、自然に其地に應ず。

高峰山長泉律院 同所六町ばかり西の方にあり。淨土宗にして、緣山に屬す。則ち緣山前大僧正成譽大玄和尚を開創の主とし、不能律師第二世たり。第三世を德門和尙とす。師の肖像は在世の時弟子惠傚彫造する所なりといへり。

本堂 山の半腹にありて丈室を去る事數十間の回廊を架して通す、明和五年戊子初めて此佛殿を營建す。本尊は上品上生の阿彌陀如來なり。坐像四尺餘、慈覺大師の作、泉州堺の心蓮寺

金毘羅社

大鳥明神社

して甚賑へり。又十二月十三日は煤拂にて開帳あり。是も前夜より參詣群をなせり。門前五六町が間、左右貨食店軒端をつどへて、詣人をいこはしむ。粟餅、飴、および餅花のたぐひを鬻ぐ家多し。

虚無僧寺　同所門前大路の西にあり。普化宗金洗派にして、東昌寺と號す。控番所と稱して、本寺にはあらず。或は風呂屋ともいふ。（金洗派、活惣派、西向派、安樂派、水戸八箇寺などいふあり。惣本寺の番所と唱ふるは淺草廣小路、小金一月寺、牛込早苗田、青梅鈴法寺、芝金杉、神奈川西光寺等なり）雍州府志に、虚無空寂を宗とす、故に虚無僧と稱す。又薦僧とも書り。意は其徒常に風喰、露宿、險難を厭はず、諸方を經歷し、至る所筵薦に座して足れりとす、仍て薦僧とも云ふ。中世暮露と云ふあり、職人盡歌合にむまひじりともあり。（洛の妙安寺に朗庵といへる異僧あり、紫野の一休和尚に親み常に風穴道人と稱し尺八を吹て樂めり。是風穴演祩の作略を慕ひしなり。始め宇治の吸江庵に住す、世に云ふ所の虚無僧の本寺なり。凡そ東關西州風穴道人の門派所々にあり。一說に普化和尚の流派といへども、風穴の事是を取るに足れりとあり。明恵上人の革袋ならびに兼好法師のつれ〲草等にも出たり）

大鳥大明神社　同所不動尊より北の方、二町ばかりを隔つ。別當は天台宗にして、大聖院と號す。祭神日本武尊一座なり。相傳ふ、大同元年丙戌、泉州大鳥の御神を勸請し奉るとぞ。當社は目黑村の鎭守にして、祭禮は（五月と九月の）九日を例とす。此日角力興行あり。

所明神　荒神宮 何れも二王門入て右の方にあり 辨財天祠 江島辨天のうつしなり。 地藏堂 堂内焔王脱衣婆等の像を安ぜり。 觀音堂 中尊は聖觀音廻りに西國坂東秩父等の札所百番の觀音を安置せり。 勢至堂　稻荷祠　前不動 左右に十二天の像を安置す。何れも樓門の左の方にあり。 樓門 左右に金剛蜜迹二王の像を置く、裏に使者犬の像を置けり。 獨鈷の瀧 也。當山の垢離場往古承和十四年當寺開山慈覺大師、入唐歸朝の後、關東へ下り給ひし頃、此地に至り獨鈷鉾をもて此地を穿ち得給ふとぞ、常に靈泉滔々として瀧り落つ、炎天旱魃と雖も涸る事なく、末は目黑一村の水田に引き用るといへり。昔は三口に別れて涌出せしが、今は二流となれり。そのかみ一年此瀧水の涸たりし事ありたるが、沙門某江島の辨天に祈請し奉り再び元の如しとぞ。故に今も年々當寺より江島の辨天へ衆僧をして參詣せしむる事怠慢なしといへり。和漢三才圖會に、倶梨迦羅の瀧とあり。 鷹居の松 舊名匂ひ松、又腰掛松ともなづく、石階の下にありて蒼々たり。寛永の頃、大樹此地に御遊獵ありし時、其御鷹それて行方をしらず。依て別當實榮に仰の旨ありて祈念せしむ、然るに忽ち御鷹飛歸り此松にとどまれり、依て御感なゝめならず、此樹に鷹居松の名を賜ふといへり。

緣起に云ふ、平城帝の大同三年、慈覺大師本國下野國より叡山に赴き給ふ頃、此地に投宿あり。然るに其夜の夢中、明王靈示ありて、永く此地に跡を垂れ、群生を度せんと曰ふとみて覺たり。翌日夢中拜する所の尊容を模して今の本尊を彫刻し當山に安置したまふ。 或人云ふ此地は日本武尊を鎭る所也慈覺大師此地經歷の頃、不動尊の像を彫刻して神躰に擬せらる。其故に日本武尊駿河に狩し給ふ時、凶徒放火して尊を襲ふ、其時尊の佩き給へる叢雲の劍を拔て狩犬の綱を切て放ち燃來る草を薙拂ひ給ふ、尊其火の中に立せ給ふ形相さも明王の形に似たるを以てこれに比せしとぞ。犬を當山の使者とするも此故なりと雖も此說未だ考へず。 しかありしより千歲の今に及ぶ迄、理智圓明の威力廣大にして、迦摟羅焔の德用深妙なり。 元和元年の春此地の在家より火出て餘焔御堂に覆ひし時、本尊みづから猛火を除れ出給ひ、瀧の下に留り給ふ、人皆奇なりとす。寛永元年大將軍此地に狩し給ひ、同十一年御再興ありしより結構備りたり。 此地は遙に都下を離るゝといへども、詣人常に絕ず。殊更正五九の月二十八日前日より終夜群參

目黒不動堂

きりや
桐屋

目黒飴
此地の名物として
是を商ふ家多し
参詣の輩
求めて家
土産とす
きりや
桐屋

鮹藥師堂

蛸藥師如來　同所町家の巽の隅にあり。天台宗成就院境内に安ず。本尊藥師如來は慈覺大師の作なり。世俗傳へ云ふ、此本尊に祈願ある者は、蛸を斷て是を念ずるに、果して利益ありとて、繪馬にも蛸の形を畫きて捧ぐ。

目黑不動堂　同所の西百歩のあまりにあり。泰叡山瀧泉寺と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。開山は慈覺大師、中興は慈海僧正なり。

本堂不動明王、慈覺大師の作、脇士は八大童子なり。

本殿額 泰叡山 後西院御筆　樓門額 泰叡山 後水尾帝御筆　鳥井額 泰叡山 日光御門主明王院宮御筆

經藏 一代藏經を安置す。本尊に釋迦阿難迦葉の像を置く。　八幡宮早尾權現 祭神猿田彥大神、或は素盞烏尊ともいふ。祭禮は五月十五日なり。此堂社何れも本堂の左に竝ぶ。　惠比須大黑祠

鐘樓　水神宮　愛染明王　大行事權現 此地の地主神なり。祭神高皇產靈尊なり。五月十五日祭禮あり。　石不動 何れも本堂の右にあり。　稻荷祠　地藏尊 掌善掌惡の二童子を置く。　聖觀音開山堂　聖德太子　天照太神宮　本地大日如來 本堂の後峙たる山の腰を切割て安置す、俗に奥の院と稱す。　吉祥天女祠　天滿宮　鬼子母神十羅刹女祠　虛空藏堂　遮軍神祠 何れも本堂の後に竝び建てり。　結神祠　役小角 女坂の中程にあり、銅像にして前鬼後鬼の像あり。　三佛堂 彌陀、藥師、釋迦等の三尊を安ず。　子安明神 鬼子母神なり。　疱瘡神　粟島明神　石地藏尊　秋葉權現　六

寐釋迦堂

弁天

蟠龍寺
窟辨天祠

夕日の岡　明王院の後の方、西に向へる岡をいへり。古は楓樹數株梢を交へ、晩秋の頃は紅葉夕日に映じ、奇觀たりしとなり。されど今は楓樹少く、只名のみを存せり。

大鼓橋　同所坂下の小川に架せり。（目黑川といへり。）柱を用ひず、兩岸より石を疊み出して橋とす。故に横面より是を望めば、大鼓の胴に髣髴たり。故に世俗しか號く。享保の末、木食上人（心誉か。）是を製するとなり。

靈雲山蟠龍寺　安養院と號す。同所橋より一町ばかり西南、道より右にあり。淨土律にして、緣山に屬せり。本尊阿彌陀如來は、慈覺大師の作なり。開山は吟蓮社龍譽一雨靈雲和尚と號す。（上野國新田の大光院より退隱の後、當寺草創ありしとなり。）境内に丈六の阿彌陀如來の銅像あり。又後の方山崖の下に岩窟ありて、中に辨財天を安置す。（弘法大師の作なりといふ。）本宮は門の向にあり。惣門の額に安養院と書せしは、黃檗獨湛和尚の筆なり。

臥龍山安養院　能仁寺と號す。同所にあり。天台宗にして瀧泉寺に屬せり。本尊涅槃釋迦像は、空譽上人の作なり。當寺は法華讀誦稱名念佛の道場なり。

す。祭る所の神は、神功皇后一座なり。（本地佛は弘法作。）別當は眞言宗高福院と號す。八月十五日を祭祀の辰とす。

行人坂　同所同西の方、目黑へ下る坂を云ふ。寛永の頃、湯殿山の行者某、大日如來の堂を建立し大圓寺と號す（此寺今は亡びたり。）

般若塚　同じ坂のなかば道の側にあり。延享三年緣山淸林院の木食心譽一道和尚、往來の大地成就の爲にとて、般若心經三千卷を書寫ありて、此地中に埋藏せられししるしの碑なり。

五百阿羅漢石像　同じ道の左にあり。明和九年壬辰三月二十八日二十九日兩日の大火に燒死せし者の迷魂を弔はんが爲、ある人是を建立すといへり。

松樹山明王院　同所坂の側にあり。天台宗にして、東叡山に屬す。本尊阿彌陀如來、脇士觀音勢至を安置せり。開山を榮運法師といふ。常念佛の道場にして頗る殊勝なり。毎月四日報恩念佛百萬遍修行あり。（此常念佛は西蓮といへる沙門の發願なりとす。）

子安觀世音　弘法大師の作にして、長州檀浦出現の靈像なり。元祿元年六十六部納經の修行者笈佛たりしを、靈夢を感ずるの後、永く當寺に止め奉りしとぞ。女人難産を救ひ給ふとて、當寺より祕符を出せり。また什寶に子安石と云ふあり。當寺主仙順といへる沙門、信州作久郡三塚村より感得せりと云ふ。

辨財天祠　同境内にあり。本尊は弘法大師の作にして、江州竹生島辨天のつげによりて彫刻ありし靈像なりといふ。

太鼓橋

富士見茶亭

西南遥にはるけく芙蓉の白峰を望む風轍雲を掃ふ正に玄冬の色をあらはすとみれば忽然として又姿を失ふ須臾にして定まりなく時として其観を改む実に佳景なり

夕日岡
行人坂

和尚再び瑞聖に住み、師に命じて分座説法、人天悦服す。乙卯三月和尚の旨を奉じ、師を以て紫雲の繼席とす。遠近の道俗來て戒を求る者、指を屈するにたへず。丁巳春大淸の主左都督揚大紳師の道化を慕ひ、三章を贈る。其一に曰、臨濟正宗三十三世、其二曰、開法長興、其三曰鐵牛株印 僧明溪が五百大阿羅漢の像五十餘幅、ならびに師の肖像を畫く。今猶鎭守の寶とす。當寺は本山の光景を摸擬する所にして、其經營頗る他に異なり。江戸黄檗宗最初創建の伽藍なり。

妙見大菩薩　同所三町斗西の方、道より左側、日蓮宗妙圓寺にあり。足利將軍尊氏公の念持佛なりといへり。

鎌作觀世音　同く西の方一町半斗、向側六軒茶屋町の角、眞言宗光雲寺にあり。相傳ふ、神龜年間行基菩薩諸國遊化の頃、信州更級に始て掛錫し給ふに、平山と云ふ所の池中より、此本尊出現あり。又空中より化人あらはれ、鎌と御衣等を持て降臨し給ひ、彼觀音の尊像を彫刻し、行基に授け給ふ。此本尊是なり。

誕生八幡宮　同所同じ側一町斗を隔つて、永峯町にあり。文明の頃、筑前宇美の地より勸請

鎌作觀音

白銀妙見堂

妙円寺

經藏（きやうざう） 佛殿の左に竝ぶ。内に楞嚴の釋迦如來の像を安ず。瑞聖寺の昔の本尊なり。傅大士の像もあり。この經藏は延寶八年下谷池端錦袋圓の元祖了翁僧都の建立なり。唐本の一切經を收む。稻葉美濃守正則取寄せらるるところなりといふ。其餘書籍すべて五千餘卷を集め置く。

勸學寮（くわんがくれう） 經藏（きやうざう）の傍（かたはら）にあり。二間に五間其中五局に備けて一字を建て、披覽學者の爲に是を置くとなり。

選佛場（せんぶつぢやう） 同所に竝ぶ。内に開山隱元禪師の像を置けり。左右の柱に聯を掲ぐ。 **木犀**（もくさい） 佛殿の前左右にあり。

選佛場

軒に掲ぐ
黃檗木庵書とあり。

聯（れん） 當寺三十三世若沖盈書とあり。

大用現前時釼山鉄壁須透過

全機活我安石火電光猶是遲

牌堂額（はいだうがく）

報恩堂

雲宗筆

當寺（たうじ）は寛文（くわんぶん）十一年辛亥青木（あをき）甲斐守と號す端山居士（たんざんこじ）旨を奉（ほう）じて、此地（このち）に就（つい）て一精舍（いつしやうじや）を營（いとな）む。當寺是なり。黃檗本師（わうばくほんし）を請（しやう）じて開山（かいさん）とす。開堂（かいだう）の日鐵牛和尚（ひてつぎうをしやう）をして首座（しゆざ）とし、秉拂提唱（ひんほつていしやう）せしむ。甲寅秋黃檗（あきわうばく）

佛殿（ぶつでん）

二重家根の軒に掲ぐ。釋迦佛を安ず。臨濟正傳三十三世黄檗木庵瑫山僧書とあり。

額（がく）

大雄寶殿

延寶辛酉吉旦開山木庵瑫書とあり。

瑞聖寺

軒に掲げたり。寛文辛亥正月吉日立開山嗣祖沙門木庵書とあり。

聯（れん）

天王殿の左右の柱に掲げたり。木庵瑫書としるしたり。

門開長是江山静

地勝不嫌車馬喧

節竿旗（せつかんき）

佛殿の前左右に建る。

天王殿（てんわうでん）

佛殿の前の方石階の上にあり。内に經山寺の布袋和尚及び帝釋四天王等の像を置けり。

額（がく）

紫雲山

聯（れん）

同堂内の左右の柱に掲る。驚山の書

紫雲堆裏現慈容

瑞聖門中輝妙相

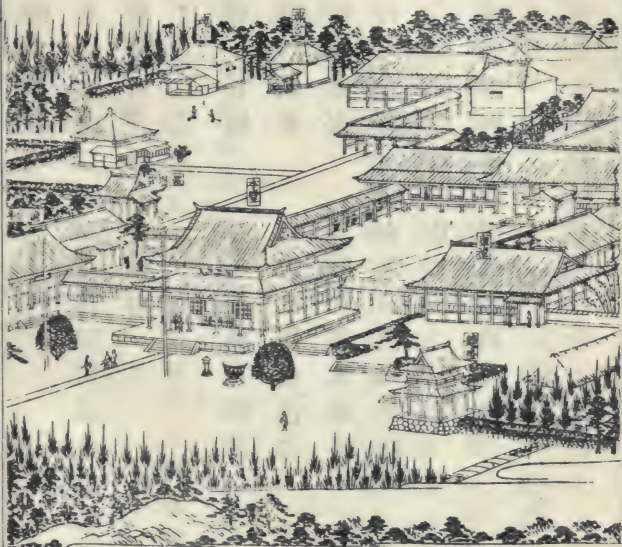
鐘樓（しゆろう）

佛殿の右にあり。堂中文殊觀音等の像を安ず。銘文は木庵和尚撰する所なり。

鐘樓

開山木庵書なり

瑞聖寺
天王殿

再鑄銘竝引

維時延享二歲次乙丑春二月。罹二回祿一堂宇燒燼。洪鐘湧鎔矣。籍一是山僧發二志願一。募二諸方一。而今再鑄焉。

銘曰

一火鑄成一巨鐘　斬新禮樂古禪叢
晨昏扣擊解煩夢　冥苦息除證法空
敎體分明無漸次　音聞淸淨爾圓通
國家悠久民安泰　永鎭山門化令隆

延享二同歲中秋吉旦

十四代住山嗣祖沙門明祖眼謹誌

鑄工　小幡内匠　藤原勝行

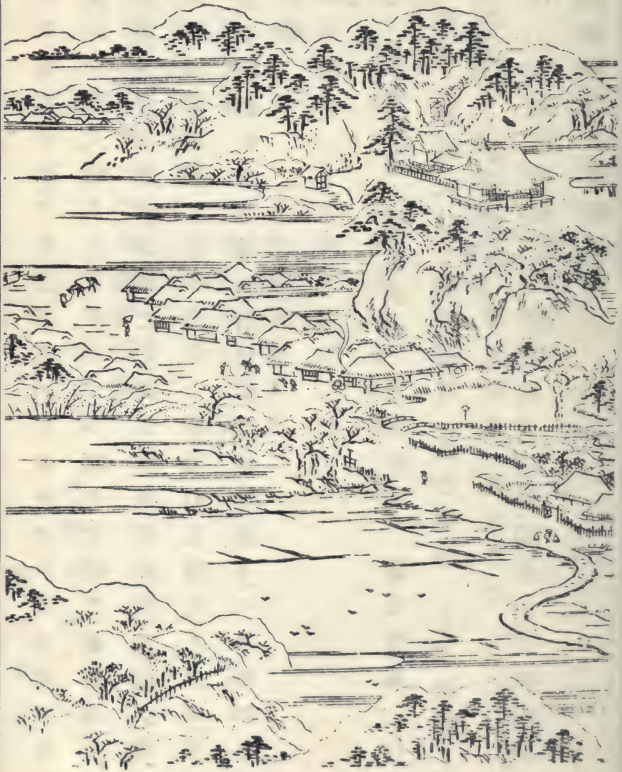
地廣莫。前朝東海。後接目黑。然其所唱始者。靑木甲斐守端山居士之竭力矣。至於山門大殿方丈。及左右大小寮舍。皆端之勸緣而所建立。也。然非夙植大根。安能捨身財之若是哉。茲長松院捐金鑄洪鐘。以鎭山門。託此勝因。追薦巖父空印老居士。慈母心光院夫人。以助冥福。而超妙樂。竝及幽靈村野等魄。特請爲銘。如斯功德不可思議。卽不辭才拙。謹爲其銘。

銘曰

須彌作炭　大地爲鑪　鑄出洪鐘　內外空虛　圓音普徧　扣擊聲舒　聞之發省　妙悟丸袪　幽冥超脫　眞性還初　十方法界　同證無餘　若是功德　至大奚如　存者往者　福寧水於

寬文十一年歲次辛亥孟春穀旦

開山嗣祖沙門木庵瑫謹銘

雉の宮
本堂

鳥の跡

雉子の宮にて

かりにくる人も名なしのきじの宮さと遠き野と宿さだむらん　茂睡

按ずるに、當社は武藏國風土記に、所謂荏原神社ならんか。同書に荏原神社は祭神天手力雄命にして、天智天皇六年始神禮ありと記せり。當社を山神と稱するは、古へより信州戸隱の御神を祭る故にしかいへるならん。

元三大師堂　同所白雉山寶塔寺といへる天台宗の寺院に安置す。當寺は則ち雉子宮の別當たり。本尊は東叡山の元三大師の畫像と、同筆の眞影にして、靈威照々たり。例月三日開帳あり。此邊を大崎と云ふ。古は海濱にて、此地より東の方品川迄の間、袖の形に似たりとて、袖が崎とも呼べり。

紫雲山瑞聖寺　白銀臺町にあり。黄檗派の禪林にして、寛文年間木庵和尙開基す。（鐵牛和尙も當寺に住めり。）佛殿には釋迦如來、脇士は迦葉、阿難等の像を置けり。每歲七月十五日大施餓鬼あり。

前銘並引

武藏州荏原郡三田庄白金村。新開ニ紫雲山瑞聖禪寺。去レ城二里餘。其

友英一蝶に倣ふ。延寶のはじめ、芭蕉翁の門に入て、俳諧を學び、竟に名をなせり。雷柱子、狂雷堂、有竹居、六藏庵、善哉庵、文庵、及び螺舍、涉川等の數號あり。晉子とは其戲號なるべし。幼稚の頃、お玉が池に住み、後堀江町に移る。又芝の神明町、茅場町等にも庵せる事は、五元集其餘の俳書に見えたり。寶永四年丁亥二月晦日卒す、享年四十七。著る所の俳書凡二十餘部、各世に行はる。

高野山宿寺　正覺院と號す。眞言古義の觸頭なり。世俗高野寺とのみ稱せり。同所南の方一町斗にあり。本尊は弘法大師の像なり。（四十二歳にならせ給ふ時、大師自ら作り給ふと云ふ。）門を入りて本堂の右の方に、丹生高野兩神の祠あり。堂前に三鈷松あり。毎歲三月二十一日御影供を修行せり。

雉子宮　同所猿町の坂口にあり。（此邊谷山村の内なり。或官家の書に北品川領大崎云々。）慶長の頃御放鷹の時、此社へ雉子一羽飛入たり。其時神名を問せられしに、土民山神の祠なる由申上げれば、已後雉子宮と唱へ申すべき旨上意ありてより、かく號くるといふ。祭禮は毎年九月十五日に執行す。別當は寶塔寺なり。

正覺院

覚心寺
清林寺
兼敬寺
上行寺
圓眞寺
黄梅院

り給ふ頃、河内國土師里に在す御叔母君の方へ立寄らせ給ひ、御記念にとて奉らせられし肖像なりとぞ。文祿の頃加藤家の臣山田氏某より當寺に安置し奉りけるとなり。

英一蝶翁墓　同所より二町斗南の方、二本榎の通り左側承敎寺にあり。一蝶翁姓は多賀氏、諱は信香、一名を朝湖といふ、曉雲、翠蓑、隣樵等は其別號なり。幼より畫法を狩野安信に受け、尤も新意洒落にして、後一家をなせり。然るに元祿中、事に坐して豆州三宅島に謫せらる。居る事十餘年、其技益進む。寶永己丑赦免ありて江戸に歸る。こゝに於て始て名を英一蝶と改め、北窓翁と號す。夫より後は畫く所の尺絹片紙、人爭ひ求て寶とす。享保甲辰正月十三日享年七十三にして卒す。翁生前に作る所の朝妻舟畫讃、及び朝淸水記等、世に傳へて賞美す。俳師芭蕉其角と同時の人にして朋友たり。

寶晉齋其角翁墓　同く向側、上行寺といへる日蓮宗の寺境にあり。其角姓は竹下、父を東順といふ。江州堅田の人醫を業とす。榎本といふは、其母の姓なり。儒は寛齋先生に學び、詩は大巓和尙を師とす。書は佐々木玄龍の敎を受て、自一家の風あり。醫は草刈氏某に就て術を得、畫は朋

花城天満宮

松秀寺

灰燼の中に、一本の柱燒殘りてあり。寺僧に問ば、此柱は蟲喰の柱と稱して、當寺初建立の時、老翁此木を負來り、西の柱とすべしと云ひ終て後、其行方をしらず、然るに件の柱より、夜々光明を放つ中に、蟲食たる跡自然に文字をなせり。

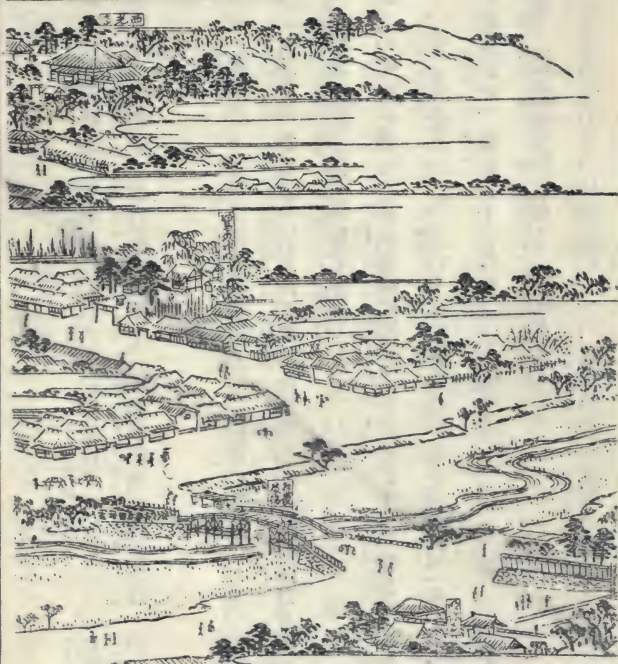
　待ちわびて恨むと告げよ皆人のいつをいつとて急がざるらん

とあり、依て蟲食の柱といふと、此柱三度迄燒亡の其火災を除れて、今に存して今又如斯と語りける。然るに其夜寺内の僧徒皆夢みらく、此柱を以て像材とし、佛工定朝をして、觀音二軀を彫刻せしめ、一軀は善光寺にとゞめ、一軀は笈に移し奉り、結緣の爲、定朝に自ら背負しめ、諸國を經歷せしむ。故やありけん、上杉家に傳はりてありしを、後當寺に遷し奉るといふ。

花城天滿宮　同所南の方にあり。松久寺といへる禪林に安置す。神躰（御長三寸八分）菅公の御作なりといへり。相傳ふ、仁和二年菅公四十二歲にならせ給ふ春、除厄の爲に、自彫刻し給へり。（十五歲の時御念願成就の爲、造らせ給ふ一寸二分の十一面觀音大士の像を以て腹籠とす。今は別に安置し奉る。）又云ふ、此像は延喜元年大宰師に左遷せられ、彼地に至

の開創にして、開山を可觀院日延上人と號す。小湊十八代の貫主にして老後此地に隱栖あり。相傳ふ、昔加藤主計頭淸正朝鮮征伐の時、彼國の王子連枝二人を日本へ連られ、沙門となし、兄をば高麗日遙上人と號し、肥後國本妙寺の開山とす。弟は則ち日延上人是なり。當寺に淸正の畫像一幅を藏す。生前自ら畫かれしとなり。毎歲六月二十四日祭祀す。正五九月も二十四日毎に神前において千卷陀羅尼を讀誦す。武運を祈る靈利益を得る事限なしといへり。又淸正朝鮮征伐の時、兜の内に籠られし釋迦如來の像、竝に朝鮮國より軍事を申し送られし書簡等、何れも開山上人當寺へ收められしとなり。

龍吟山興雲院　同所坂の上にあり。曹洞派の禪林にして、芝二本榎廣岳院に屬す。本尊十一面觀音　世に蟲竜觀音とも稱す。西方二十五番の札所なり。緣起に云ふ、聖武天皇の御宇、稽文會稽主勳和州長谷寺の觀音を刻彫なし奉りし頃、其餘材を以て觀音の像七軀を造立し、所々に安置す。當寺の本尊は其一にして長さ一寸八分あり。然るに上杉謙信此本尊を髻の中に收られしが、度々の合戰に勝利あるにより、尊信大方ならず。又謙信旅僧より立像二尺の千手大悲の像を附屬せられたりしにより、先の小像を其佛胎の中に籠られしとなり。往昔佛工定朝、信州善光寺に參籠せし頃、彼寺燒亡す。其時

梅の茶屋
三鈷坂より左の方
白銀氷川の社の
側にあり一年遊行
五十二世佗阿一海
上人此家の梅を
愛たまひ一首の
和哥を詠せらる
白梅にして床梅と
号くその二月の
芬芳きこゆる
世に越て高し

鷺森神明
西光寺
氷川明神

谷の地に屬せり。

鷺森神明宮　同所相模殿橋より南の方、田島町の右にあり。別當は天台宗にして、報恩寺兼帶す。祭禮は五月廿八日なり。相傳ふ、後冷泉院の御宇、賴義朝臣東征凱歌の時、白旗を收め祀るといふ。

氷川明神社　同所南の方、三鈷坂の下、東の通り右側にあり。白銀の鎭守にして、祭禮は九月十九日なり。傳へ云ふ、日本武尊當國一宮氷川の御神を遙拜し給ひし舊跡なりとぞ。

雷電宮　同社地より北にあり、相傳ふ、白河院の御宇當國疫疾流行す、氷川明神の神託あるによりてこゝに此御神を勸請すと云ふ、千手觀音を本地佛とす。

冬嶺山松秀寺　同所東の方一町許を隔つ。相州藤澤淸淨光寺の末寺にして、時宗の道場なり。昔は武州高井土にありて、常光寺といひ、遊行上人の宿寺なりしを、寶曆二年壬申、此地へ移れり。其時より松秀寺と云ふ。　中興開山は、遊行五十世快存上人と號す。

延命地藏菩薩　當寺に安置す。德一大師の作にして頗る靈驗あり。祈願ある輩日數を定めこれを念ず、故に道俗日限地藏尊と稱せり、常に詣人絕えず。

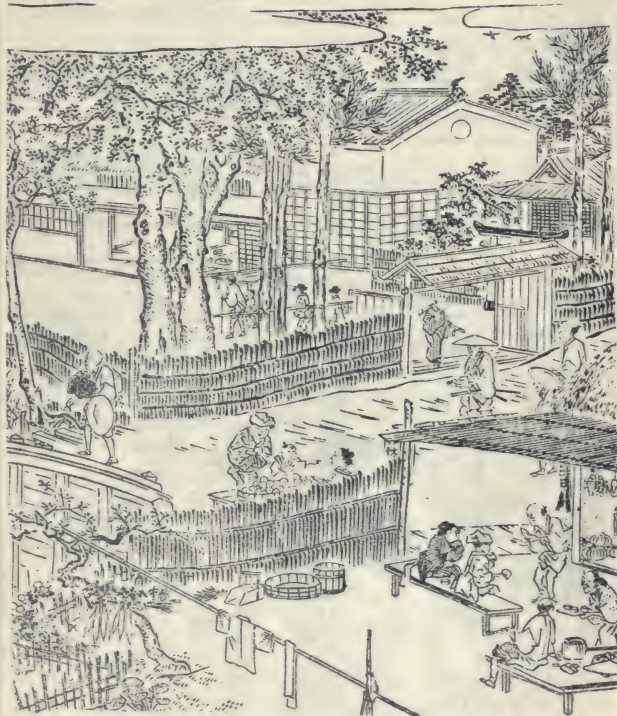
最正山覺林寺　樹木谷道より右にあり。日蓮宗にして、房州小湊の誕生寺に屬す。元祿年中

香華供養之事。信春亦以寅歳奉護之也。嫡子彌市郎信包亦寅歳。而愈恭仰不勘也。信包嘗衛護大坂城之初年。鎭坐其城內也。歷年之後。官命無及此像事。故於江府品川私第。擇地建堂。自茲任攝州刺史。官祿增益。齡過九十旬。其曾孫信峯。任丹波刺史。尙猶傳之。然有故贈仙石壹岐守久信。傳之尙矣。平生通志于祥雲寺怡谿和尙甚厚也。久信母見遷座之靈夢數多也。久信馳使介。告怡谿曰。靈像頻有靈夢。且有俗家不堪恐懼也。怡谿任其志。移之寺內。法子良堂和尙。感其像之重其驗之大。新建天現寺。安此像于一堂。以祈妙驗矣。頃間請僕記其來由。不能默止云爾。

毘沙門天王緣起終

光孝天皇御陵石燈籠 毘沙門堂の前左の方にあり。御影石の燈籠にして、甚古雅なり。いづれの頃にかありけん、金森家より寄附ありしといふ。

土筆ヶ原 澁谷川の南の原をしか名づく。又此邊を豊澤の里と呼べり。上中下にわかれて澁

廣尾水車

廣尾原

四方。北方多聞之名乃明著矣。護四埵之水精埵。將諸閻又衆無量百千。以爲眷屬也。有一尊像于此。相傳。我
東照君　尊母公傳通院殿。析參州鳳來寺峯藥師。時十二神之中寅神。應靈夢之祥。　君以寅歲降誕也。故因　母公之訓命崇尊焉。蓋聖德太子。以楠木手自作之。其長三尺一寸。　源家嫡流贈正一位滿仲公所傳來尊像也。良有以哉。　君之崇尊也。慈眼大師。書
東照大權現守御本尊之九字于板木傍。其筆痕今尙存矣。　君每臨攻城野戰。無不攜行此像也。拔群超類。撥亂反正。掌握天下。安撫海內者。乃此像之威德也。唐天寶年中。西源府之圍臨危。而誦仁王蜜語。見神人五百員。且見金鼠咬敵弩弦皆絕矣。咸通中西川現僧相天王者。皆此靈所成也。倭漢雖異。所其信從誠同矣。　君傳長久之業。而開太平之基者。可謂非人力之所及也。厥後近臣安部大藏信春。奉　命預

僧都の作にして、一條帝御降誕の時の、御祈願の本尊なりしと云傳ふ。

瑞泉山祥雲禪寺 廣尾町にあり。北條家所領役帳に、興津加賀守櫻田の内平尾の地を領するとあり。こゝも櫻田に屬せしと覺えたり。花洛大德寺派の禪刹にして、本尊に釋尊を安置す。開山は龍岳大和尚、開基は松平筑前守長政なり。祥雲は則ち其法號なり。支院八字あり。昔は赤坂の藩邸にありしが、麻布谷町の上の方へうつし、竟に明暦四年今の地に引くとぞ。

毘沙門天 同所四町斗巽の方、澁谷川の北岸、多聞山天現寺といへる禪刹に安置せり。本尊毘沙門天の靈像は、樟の丸木作にして、聖德太子の彫造なりといへり。其丈三尺一寸 相傳ふ、多田滿仲の念持佛にして、源家累代守護の靈像たり、傳通院殿深く尊信ましく、安部攝津守信春に御預あり、其後仙石因幡守久信の家に傳へ、又祥雲寺に收め、竟に當寺を開創し、始てこゝに安置せり。本尊來由の記は林學士信充「ノブミツ」先生の文章にして當寺の什寶たり。

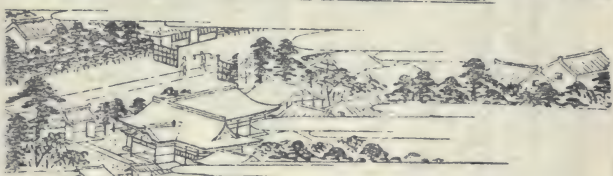
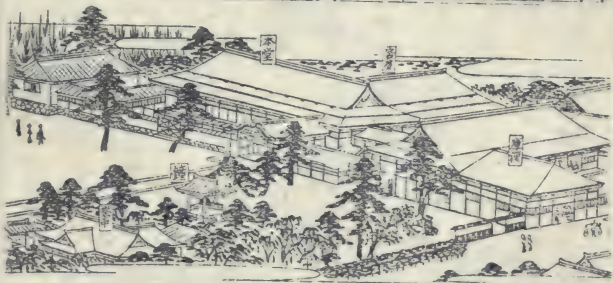
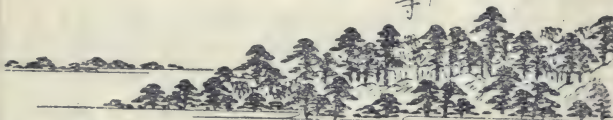
武州豐島郡城南麻布邑。多聞山天現禪寺。毘沙門天王緣起

從五位下守大學頭　林　信充　誌

毘沙門者北方天王而號ニ多聞一也。西土以ニ北方一爲レ上。此王福德之名聞ニ

鐘

廣尾(ひろを)
毘沙門堂(びしやもんだう)
毘沙門堂

廣尾
祥雲寺
本堂

（ひ、御用地になり麻布御薬園に移さる云々。）竟に貞享元年今の地へ移されけるといふ。其旨趣を慈眼大師の眞筆を染られし一軸の縁起あり。當寺昔は仙波喜多院に屬せしが、慈眼大師の時より上野に屬せり。

霞山稻荷明神祠　櫻田町道より右にあり。往古は櫻田霞ヶ關にありしを、御廓定りし頃、今の地へ移さるゝといへり。別當は天台宗にして、霞山櫻田寺觀明院と號く。本尊吒枳尼天像は、足利義國の守神にして、行基大士の作、秩父重康安置せりと云ふ。相傳ふ、當社は澁谷莊司重國勸請し、文明中道灌再興せり、又往古右大將頼朝卿、櫻田村にて美田五百七十石を寄附ありて、供田の印に櫻樹を植ゑ、要害を構て、江戸太郎重長をして往來を改めしむ、其後遙に年月を歴て、此地と共に社を麻布へ移されしとなり。（今麻布櫻田町百姓町、など號くるは、則ち櫻田より引かれし町なり。）

朝日觀世音　同向側專稱寺といへる淨家の精舍に安置す。本尊觀音の像は、長者ヶ丸の叢より出現あり。故に作者何人なる事をしらず。當寺は三光院淸心尼の開創ありし寺院にして、本尊も又此尼の尊信ありし靈佛なりといへり。（淸心尼は織田信長公の侍女にして、筒井の順慶が姪なり、薙髮して後增上寺第十六世深譽上人の弟子となる。）

子安藥師如來　同南に竝ぶ、眞言宗正光院といへるに安置す。本尊瑠璃光如來の像は、惠心

霞山稲荷社
本堂

七佛藥師
氷川明神

按ずるに、氷川明神の別當備乘院より、此松樹の注連をかけかゆる事怠らず。或人いふ、此松は氷川の神木なればなりとぞ。此說是なり。されど昔の松は枯て今若木を植ゑ置けり。

氷川明神社 同通り南の方上野町道より左側にあり。麻布の惣鎭守にして、祭禮は八月十七日なり。相傳ふ、文明年間太田道灌、當國一宮氷川明神を勸請する所にして、舊地は同所宮村の切通坂にありしとなり。別當は眞言宗にして、德乘寺と號す。古老云ふ、昔の二鳥井は同所長坂にあり。又三の鳥井は今所謂鳥井坂の地なりしとぞ。其舊地今は緣山の住持退隱の地となれり。靈白和尚寛文二年の九月はじめて此地に隱栖ありしとなり。其頃今の所へ社をうつせしなるべし。元祿の江戸圖にも麻布明神とあり。

七佛藥師如來 或は神田藥師とも云ふ。 麻布本村町の南、坂の下り口左側、醫王山東福寺といへる天台宗の寺內にあり。緣起に云く、本尊藥師如來は傳敎大師の作にして、七佛の其一員なり、そのかみ六孫王經基の持念佛たりしにより、永承年間賴義朝臣鎌倉へ移され、後代々の官領崇敬あり。然に長祿の頃、太田道眞當國河越の城中に安置し、又文明に至り、其子道灌江戸平川に移せり。然に慶長五年、大神君關原御陣の砌、慈眼大師に命ぜられ、此本尊に御祈念ありて卷數を獻ず。今此例によりて正五九月御札を獻ず。 同九年神田の臺に移さる。其舊地今の駿河臺にあり。 又其後下谷廣小路にて地を賜ひしとぞ。案の一本に、廣小路の藥師戌の年の火事以後、南藥園へ移るとあるは、此藥師の事也。戌の年といふは、天和二年壬戌の事なるべし。下谷にありし頃は崇源院殿の御建立なりしとぞ。公家の記に、天和二戌年十二月二十八日類火に過

前念命終後念卽生の素懐を遂られたり。以上寺記及び二十四輩靈場記の意を採る。佛光寺の實錄に云く、了海上人は元應二年庚申正月廿八日八十二歳にして寂す、武藏國阿佐布善福寺と號す、與應元年誕生、廿四歳の時祖師圓寂云々。傳燈系圖、元應二年十一月六日寂す。又大谷遺跡錄に云ふ、延祖滅後十六年弘安元年四十歳の頃正寺に入第四世の寺務となり、永仁五年顯念誓海に寺務を讓り武州麻布に下る(五十九)元應二年の春品高月化縁の薪盡きて廿八日卽生後念の素懐を遂げたまひけりとありて、化寂の時世違へり。猶可考のみ。

弘法大師刷毛書名號　弘法大師入定したまふ前の年、再び當寺に來り給ひ、承和元年三月十五日空海書と染筆し給ふとなり。今猶傳へて當寺に存す、　八字名號　親鸞上人歸洛し給ひし後、一年都へ登り上人に海師謁す、上人云く、汝は關東にありて門徒を教化すべしとて、南无不可思議光佛と翰墨を灑がれ、是を海師にたまふ。故に當寺什寶となるといへり。

當寺は弘法大師草創ありしより已降、一千餘歳を經たる古藍なり。殊更文永三年の秋八月、龜山帝勅して願寺となさしめられ、薦紳一員、誥璽及び俸田を賜ふ。境内に古墳多く、最も古跡なる事明けし。今一向專修の宗風盛にして、化導遠近に普し。

一本松　同所北の裏通、一本松町道の傍にあり。一株の松に注連を懸け、其下に垣を廻らせり。里諺に云く、六孫王經基此地を過る頃、此松に衣冠を懸け給ひしとて、冠松の名ありとも、其餘さま〴〵の說あれども分明ならず。今此邊を一本松と號して地名となれり。或は云ふ、小野篁が植る所なりとも。

麻布一本松

善福寺開山了海上人誕生圖

本堂

麻布(あさぶ)
善福寺(ぜんぷくじ)

丙寅春過亀子山善福寺櫻花下吟

獨憐不語無知己
偏向春風索咲多
怎奈道人先注目
也應拍手自相歌

心越禪師

寺記に云く、中興開山了海上人は鳥羽院の苗裔、左大臣藤原信實公の息男なり。信實公故ありて當國に放れ、品川の近邑にあり。（今の大井村は其舊地なり。第二卷大井弘福寺の條下に詳なり。）信實公一子なきを憂とし、藏王權現に祈請し給ひければ、其室白布を呑と夢見て懷妊し、建仁元年辛酉林鐘十五日に一男子を誕生す。（了海上人是なり。）其時後園松樹の下に、忽然として清泉涌出せり。（此故に了海上人の幼名を松君と號け、里の名を大井と唱へたり。猶大井弘福寺の條下に詳なり。）依て人皆奇異とす。此兒七歳の春、父に告て出離の志ある事を顯せり。故に實相寺の範賢律師に投じ、鬢髪を剃除して了海と號く。（一書に叡山に登り靜榮僧都に從ひて顯密の學をきはむと云々。）是より後數學窓に身を委ね、諸宗を濟り、竟に古郷に歸り、本願弘興の基趾を求めんとし、則ち藏王權現の叢祠に詣し、是を祈り、靈瑞によりて此地に至るに一精舍あり。（今の善福寺是なり。）神の教なる事を知りて、こゝに止住し年を歷たり。然に貞永元年壬辰、親鸞上人東國經回の時、適當寺に入り給ひしかば、海師其夜試に屈請し、談ずるに三蜜瑜伽六卽止觀を以す。親鸞上人是に答ふる事、響の音に應ずるが如し。竟に念佛往生の理を論ずるに至り、海師直に親鸞上人の弘法に歸降し、師資の約嚴にして、是より宗風を轉じ、化を布く事遠近に普し。（直弟六老僧の隨一と稱す。）後永仁二年甲午十一月六日

土岐牧野兩家の北の脇を曲りて、西窪の方へ下る坂なり。

麻布山善福寺　麻布雜色にあり。昔は龜子山と號しけるとぞ。親鸞上人弘法の地にして、當宗關東七箇の大寺の一員、了海上人開山たり。龜山帝の勅願、本尊阿彌陀如來の像は、惠心僧都の作なり。往古は南紀の野山に象て草創ありし梵字にして、初は眞言密乘の勝區たりしが、貞永元年壬辰、了海師親鸞上人の弘法に歸化し、宗風を轉ず。支院十餘宇あり。小田原北條家の所領役帳に、島津孫四郎所領の中に、飯倉内櫻田善福寺分とある地名を加へたり、當時の事をいへるなるべし。

藏王權現堂　本堂の南岳の上にあり。當寺の開山堂にして、了海堂また麻布權現とも稱す。傳へいふ、開山了海上人在世の頃、藏王權現老翁の形に現じ、上人にまみえて法義を聽聞し給ふ事しば〳〵なり、又ある時告て宣はく、汝今本願一實の大道におもむく、我殆ど是を喜ぶ、故に一面の形を與ふ、汝又自の像を彫造し、其胎中に是を收めよ、となり。依て了海上人自ら斧を下して自の像を造り、其神告に任せて假面を胎中に收めらるゝとなり。此地の鎭守と稱して毎歳七月十五日草角力興行神事あり。また十一月三日は開山御身拭と唱ふる行事あり。則ち開山忌なり。此日新に水船を造り、彼の木像を浴しまゐらせ平座に安ず、其間僧徒等阿彌陀經を讀誦す。

杖銀杏樹　開山堂の前にあり、繞りに石垣をめぐらす。相傳ふ、親鸞上人了海師に附法ありて後こゝを去り給ふの日、その携ふる所の杖を以て地に指て示して云く、念佛の弘法凡夫の往生も亦かくの如きかと云々。然るに此樹忽に根芽逆に生じ、竟に枝葉繁茂し蒼々たり。故に逆銀杏樹とも號くるとなり。

鹿島清水　惣門と中門との間にあり。往古弘法大師、常陸國鹿島明神に乞得たまひし阿伽井なりと。又土人曰く、鹿島の地に七井と稱する靈泉あれども、其中一ツは空水なりといへり、昔は其側に柳樹ありしかば、一名を楊柳水とも唱へ侍ると云々。

白山

溜池

溜池白山祠
白山大権現
奉納白山大権現
白山大権現

もとへ引せ給はざりし其以前は、此池水を上水に用られしとなり。寛永明暦等の江戸の圖に、赤坂溜池に江戸水道の水源と記してあり。俗間此池を狹山の池とするは大なる誤なり、四巻目に詳なり。往古鈞命によりて、江州琵琶湖の鮒、および山城淀の鯉等を、活ながら此池に移し放たしめられたりとて、形すこしく他に異なり。又蓮を多く植られし故に、夏月花の盛には奇觀たり。又池の堤に榎の古木二三株あり。是を印の榎と名づく。昔淺野左京大夫幸長、鈞命を奉じて此所の水を築止めらる。其臣矢島長雲是を司り、堤成就の後、其功を後世に傳んため、印にとて栽けるとなり。此堤より麻布谷町の方へ下る坂を榎坂といへるも、前に述る所の榎ある故とぞ。又同所堤の北の方、辻番所の脇、堰の傍に葵を植たる地あり。土俗葵ヶ岡と呼びならはせり。この所より東へ向ひて下る坂を葵坂と號く。

按ずるに、小田原北條家の古文書太田新次郎所領に、江戸櫻田池分といふ地名を注し加ふ、おそらくは此溜池などの事を云ふならん歟。

靈南坂　溜池の上より麻布へ登る坂をいふ。慶長の頃、高輪の東禪寺此地にあり。寛永九年の江戸圖によれば東禪寺溜池の上にあり。彼寺の開山を靈南和尚と稱す。道光を慕ひて坂の號に呼べりとなり。潮見坂は同所松平大和侯の表門前に傍うて、溜池の上より東へ下る坂をいふ。江戸見坂は靈南坂の上より、

同

心あてにそれかとぞみる櫻花かすみの關の春のゆふぐれ　光隨

同

そらにたつ春の霞の關もりや朧月夜の名をとどむらん　爲氏

名寄

くれぬとも春のなごりを忍べとや關に霞の名をとどむらん　顯氏

回國雜記

名にきゝし霞の關を越えて、これかれ歌よみ連歌などいひすてけるに、

あづま路の霞の關に年こえて我も都に立ちやかへらん　道興准后

都にといそぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待つらん　同

溜池　赤坂御門の外より、山王宮の麓を東南へ繞る。昔神田玉川の兩上水、いまだ江城の御

同
わかれ行く春の霞の關守もすぐる月日をとどめやはする　宣子

新拾遺
いたづらに名をのみとめてあづま路の霞の關も春ぞくれぬる　讀人不知

新明題
關の戸にきゝしやそらね鳥が鳴くあづまの山は霞こぶかき　仙洞

夫木
立ちとまる霞の關の朝ぼらけ花も幾重かにほひそふらむ　龜山院

同
あづまには霞を關の名に立てて春來ることを人に告ぐらむ　慈鎭

同
わけそむる關路の名のみ霞にて末は霧なるむさし野の秋　爲守

霞ヶ關古圖

霞ヶ關

櫻ヶ井　井伊侯藩邸表門の前、石垣のもとにあり。亘り九尺ばかり、石にて疊し大井なり。釣瓶の車三つかけならべたり。或は云ふ、事跡合考に、井伊家中屋敷四谷喰違の屋敷ともあり。若葉井は同所御堀端番屋の裏にあり。柳の木をうゑし故に柳の水ともいへり。いづれも淸冷たる甘泉なり。

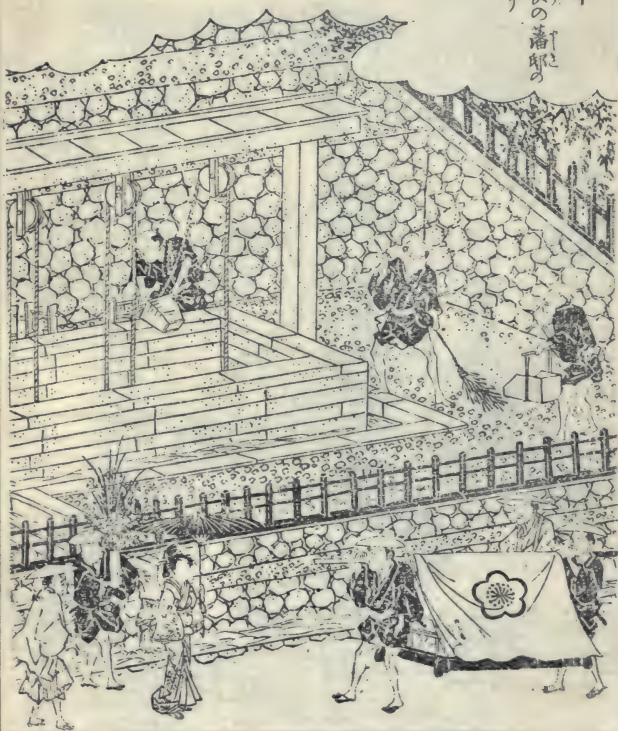
霞ヶ關舊蹟　櫻田御門の南、黒田家と淺野家との間の坂を云ふ。往古の奥州街道にして、關門のありし地なり。宗祇法師の名所方角抄に、霞ヶ關は西に高き岳(チカヤマ)あり、東向の所なれば富士はみえず、西より河流れたりとあり。武藏風土記に、荏原郡東は霞ヶ關に限るとあり。此地今は豊島郡に屬せり。北村季吟翁云ふ、浮橋をすぎて霞村といふ所、霞ヶ關の舊地なりといへど、霞村と云ふ地名なし。

武藏野地名考云

或古記曰。荏原郡霞關。日本武尊蝦夷之儲關也。爾來連綿大被ㇾ置之。擧國之勝景。而然其遠眺隔ニ雲霞一。故有ニ霞關之號一云云。

續千載

おなじくば空に霞の關もがな雲井の鴈をしばしとどめん　爲世

櫻ヶ井
井伊侯の藩邸の
前にあり

柳の井

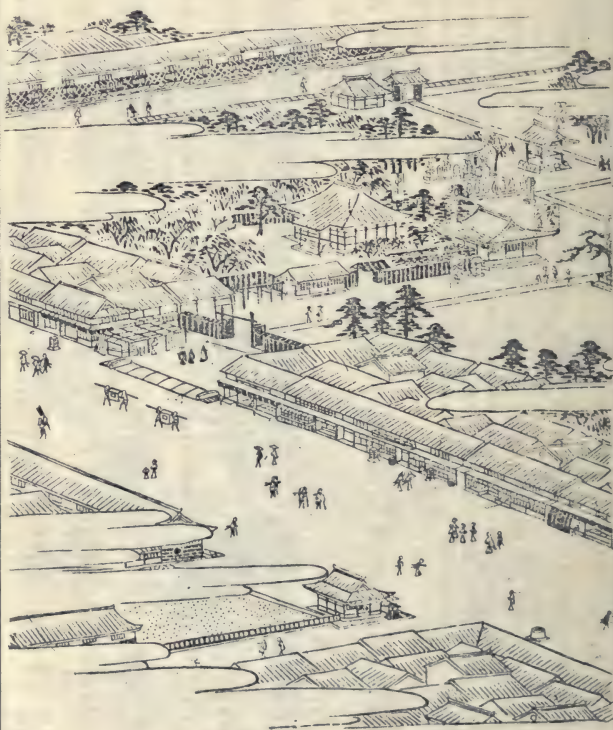
清水坂　尾州公御館と井伊家の間の坂を云ふ。清水谷と唱ふるも此邊の事なり。（麹町八丁目へ出る坂下までも清水谷の内なり。）此所の井を柳の井と號くるは、清水流るゝ柳陰といへる古歌の意をとりて、しかいふとなり。富士見坂は松平出羽侯の前をいひ、玉川の瀧は同じ庭中にあり。駒井小路は富士見坂の上の方なり。駒井氏こゝに住せらるゝ故に、號とするといへり。

櫻田　古の郷名なり。和名類聚抄にも、荏原郡櫻田（佐久良太）とありて其稱尤も久し。（今は豊島郡に屬せり。小田原北條家の所領役帳に、太田源七郎及び牛込宮内少輔勝行、與津加賀守、會田中務丞等其餘の所領にも往々櫻田の地名を注し加ふ。櫻田久保町、同兼房町、備前町の類ひ又今の麻布六本木の南に櫻田町と唱へてあるもの同所百姓町等いづれも御入國の後かしこに地を替へ給ひしなりとぞ。）

武藏國風土記曰

荏原郡櫻田郷。公穀四百六十三束三字田。號二櫻田一者。以二其郷之岡及野櫻樹多一也。云云

太平記に云、元弘三年五月武藏野合戰の條下に、九日軍の評定ありて、翌日上總下總の勢を討て後、敵の後攻として金澤武藏守守將五萬餘騎を差副て下河邊へ下る。一方へは櫻田治部大輔貞國を大將にて、長崎二郎高重、同孫四郎左衛門、加治二郎左衛門入道に武藏上野兩國の勢六萬餘騎を相添て、上路より入間河へ向らるゝとあり。新著聞集に、櫻田は虎の御門より愛宕の邊迄田地にて、畔には櫻の樹幾千本も植ありし。田の中の流れを櫻川といひし、今は源助橋其印とて殘りたるとかや云々。又求涼亭云く、櫻田の櫻は御入國の後今の吹上の御庭中へうつされしとぞ云々。

按ずるに、いにしへ櫻田と稱せし地は、今櫻田御門など唱へ、内櫻田外櫻田といふあたりすべて山下御門の西、虎の御門の外迄の名にしてすべて其舊跡ならん歟。

常仙寺
寅薬師堂
心法寺

如來は、惠心僧都の作、開山は妙譽眞入上人と號す。開基は安藤對馬守重信なり。昔は長福寺と號して三州にありしとぞ。當寺に賴朝の念持佛と稱する、聖觀音の靈像を安置す。龕前に安置する所の觀音の像は楠正成尊信の靈像なりといふ。七月十日は千日參と唱て、參詣頗る多し。

寅藥師如來 同北の横小路、坂より上、道の左側、常仙寺といへる禪刹に安置せり。此藥師佛の像は、行基大士の作なり。相傳ふ、此靈像永祿の頃迄は、三州鳳來寺の山の麓に立せ給ひしが、往古當寺開山祥岩存吉禪師、參州新城にありて、いまだ凡俗たりし頃、俗姓は安田氏といふ。此靈像虎に化現し給ひ、狼の難を遁れしむ、依て其後法恩の爲に出家し、江戸に來りて、四谷鹽町の明雲山龍昌寺といへる禪林に住す、其頃當寺を闢いて、此本尊を安置せしとなり。每月八日十二日參詣多し。此本尊ある故に此小路を藥師横町とよべり。

千手觀世音 同九丁目の右側、常榮山心法寺といへる淨刹に安置す。此靈像は秦川勝の念持佛なりといへり。閻浮檀金立像一寸八分ありと云ふ。當寺は京師知恩院に屬して、本尊は阿彌陀如來、惠心僧都の作、開山は然翁上人と號す。當寺洪鐘の銘に、市谷庄とあり。觀音堂に閻王十王の像ある故に、正月と七月の十六日參詣多し。

百株。頗超於錦城之梅花海也。前年丙午之春。共公遊廡下。詩之評。歌之講。爛漫花前。無愧洛社之耆英也。同秋之孟二十六公逝矣。余造文祭之。今茲丁未正月下浣。率數輩之緇侶。徘徊菅廡。追憶前年之遊事。豈非夢一覺邪。感槩無措。余欲鼓皈棹皈岐陽。未能果。漫賦四十言云。

移少一節瘦　餘寒鶯度稀　去年丞相廡　今日故人非
老眼看花落　擧頭疑雪飛　岐陽千里外　山可笑遲皈

貝塚　都て麴町の邊の總名なり。此地は昔よりの甲州街道にして、其路の傍にありし一里塚を、土人甲斐塚と呼ならはせしとなり。或説に貝塚法印といへるが墓なりともいひて、さだかならず。

此地馬場の南は芝の青松寺の舊地なり。南向亭云く、青松寺は青松甲斐といふ人の草創にして、當時玉蟲氏の邸にあるを貝塚といふ、上に古碑あり、年月もみえず平氏女とばかりあり、今は八幡に祀ると云々。また麴町四丁目の南の方玉蟲氏の前なるを貝坂とよべり。一説には此坂の下に甲斐庄氏なる宅ありし故ともいへり。

按ずるに、貝塚の地名、小田原北條家の古文書に、太田大膳亮といへる人、一木（ヒトツギ）の内にて貝塚の地を領するとあれば、其頃も此地名ありしとしるべし。然るときは貝塚は一木の内の小名なりしとおぼし。

村高山栖岸院　麴町八丁目の右側にあり。淨土宗にして、洛の知恩院に屬せり。本尊阿彌陀

平川天満宮
ひらかはてんまんぐう

夢中傳法定爲有　松亦應云梅亦云

同書云

遊江戸城菅丞相祠堂

開闢評花甚不公　獨居南面牡丹紅
若令丞相細分州　梅亦應編王者中
宋末江湖梅亦孤　吟香白髮老浮屠
横斜月瘦一枝影　分作文公大極圖

同書云

花下晩歩詩序

身居關左。而名博海內者。太田二千石灌公靜勝是也。公曾宴坐一室。夢中見接菅丞相。其翌早有人。卒然來獻丞相所親筆之畫像。可謂靈夢也。遂建廟於江戸城之北畔。寄數十頃之美田。歲時鼓焉。栽培梅數

其後天正十八年御入國の頃、彼宮を平川口の外へ移さる。友山翁云ふ、江戸御入府の節平川より貝塚へ遷さるゝ故に、貝塚の天神とも云ふといへり。故に平河の天神と唱へ奉る。此故に今の麹町の地に至りても舊名を改めず、猶社邊の町をも平河町と云ふ。又、其後慶長に至り、御本丸御造營の頃、竟に今の麹町に地を改めさせ給ふ。大道寺友山翁云く、平河御門の外に平河町と唱ふるありて、夫より今の麹町の方へ續き昔の甲州街道なり。其平河町の内に藥師堂有て、其別當天神の社を預り、藥師堂のかたはらに遷しまゐらせしに、町屋も公用の地となり麹町の邊へ引かれしきざみ、天神の社も共に移すと。又縁起に、麹町に藥師ならびに八幡宮の小社ありける所を、天滿宮の社地と定めてうつさせられ、今に至て舊地の名を改めず、天滿宮の社内に彼八幡宮も勸請して文武兩道を守らせらると云々。寬政七年修營ありて、神殿清新なり。毎年二月二十五日、菅神自畫の神影をかけて、諸人に拜さしむ。

梅花無盡藏云

余比寓武之江戸城。城有丞相祠堂。栽柳插松。不知幾數百株。文明丙午仲春二十有五。適値丑之晨。寔也之所少也。謹賦小詩。題丞相之壁上。夫徑山之傳衣迺渉茫之說。而國史亦不取之也。故未及茲云。

北野春遮西府雲　一籬此地亦栖君

又承應三年甲午、回祿の後、溜池の築山勝地たるにより、竟に台命あつて、いまの地へ遷座なし奉り、宮社御造營ありしより、江府第一の宮居となれり。（名勝志に云く、明曆丁酉の歳回祿によつて承應三年當社を貝塚より今の地へ遷し奉るとあれども、承應は明曆より先の年號なれば、此說證とするにたらず。或人云ふ、萬治元年今の地にうつると云々。）金殿玉樓は天に輝き、畫棟朱簾は地に映ぜり。（名勝志に此地は元松平主殿殿第宅の地なりしとあり。）しかありしより已降、和光同塵の利益淺からず、内には圓宗の敎法を守り、外には鎭國利民の德を施し給ふ。殊更、御當家の御產土神として、御崇敬最も厚く、天下泰平、國家安鎭の御祈禱、永世に怠る事なし。

成田下總守長泰舊地　永田馬場山王の隣、丹羽家の地なりといふ。古へ武州忍の城主なり。

第六天祠　同所兼松家の地にあり。太田左金吾道灌の勸請なりといひつたふ。

平川天滿宮　御城の西、麴町三丁目の南、平川町にあり。別當は天台宗にして、長松山龍眼寺と號け、東叡山に屬す。

傳云ふ、當社は文明十年戊戌六月廿五日太田持資當國入間郡川越三芳野の天神を江戸城に勸請し、數株の梅を栽ると云々。（今の御城内、平川の梅林坂と唱ふるは、其梅林の舊跡なり。新安手簡に文明中太田道灌築かれたりし江戸城平河口の中、菅神の社上棟の文に、文明十年戊戌六月廿五日と有之云々。）

武州豐島郡江戸館天正十四年丙戌十月廿五日　大田大和大工長瀨椎名

按ずるに、昔は山王宮江城の中にありし頃奉納せし鰐口なりしを、後稻荷の祠にかけしなるべし。古きを存せんが爲に、こゝにこれを擧ぐるのみ。

當社は淳和天皇の天長七年庚戌、慈覺大師勅によりて、武藏國入間郡仙波にある所の、星野山無量寺を再興ありて、圓頓の教法を弘め給ひし頃、佛法王法護持の爲、且は和光の利益を普く萬民に蒙らしめんと欲して、我立杣の日吉山王二十一社上中下の内より、一社宛を選て、三所の靈神を彼地に勸請し給ひ、かくて星霜を經たり。然るに文明年中、太田道灌此山王三所の御神を、星野山より江戸に遷し奉る。其頃の社地は今の梅林坂のあたりにして、菅祠と竝びてありしよし大道寺友山翁の說なり。或人云、太田家譜に、文明十年六月十五日於江戸城内建山王權現堂荒神祠菅丞相祠云々。菅祠は今の平川天神の事なり。御國初の頃迄は兩社共に御城内にありしを、菅祠は平川口御門の外へ遷され、山王は御城の鎭守として紅葉山に遷座まし〳〵けるなり。天正よりこのかた、江戸を以て永く御當家御居城の地に定させられし頃、紅葉山において新に社を御造營ありて、御產神にあがめ給ふ。その後御城西貝塚の地へ遷され、其年歷詳ならず、江戸名所記に、後土御門院延德年中仰の旨ありて道灌結緣の爲に三所の御社を城西にうつし給ひ再興修造ありと云々。此說未だ考へず。寛永明曆等の江戸圖によりて考ふれば、其社の舊地は井伊掃部侯の北、今の三宅備後侯の第宅の地なり。菊岡沾涼云ふ、山王宮の舊地は三宅備後守殿宅の裏の坂に祠あり、此所元山王の舊地なりとあるは實にしかり。又事跡合考に云く、井伊掃部頭殿の居館の南、うしろ凡未申の方の小坂の際、巾二間ばかり、長さ十間あまり松杉の少しき繁りたる坂の内に、稻荷の小祠ある除地、是山王一度半藏御門外にうつされし古跡の由緒と云々。

日吉山王神社

江戸名所圖會

天璣之部

巻之三

日吉山王神社　永田馬場にあり。江戸第一の大社にして、別當は天台宗僧正にして、觀理院と號す。神主は樹下氏なり。其餘社僧および社家巫女等數多あり。御祭禮は隔年六月十五日なり。その行粧は、初巻茅場町御旅所の條下に詳なり。

本社祭神大宮　比叡の二宮小比叡大明神を勸請す、垂跡は國常立尊にして天地開闢第一の御神なり。藥師如來を本地佛とす。二宮　氣比宮を勸請す、垂跡は仲哀天皇にして應神天皇の御父なり。聖觀世音菩薩を本地佛とす。三の宮　客人宮を勸請す、垂跡は伊弉册尊にして白山妙理權現なり。十一面觀世音菩薩を本地佛とす、江戸名所記に、第三には下の七社の中王子宮、本地は文殊大士なりとあり。

古鰐口　昔は本社に掛けたりとなり、今は右の方稻荷祠に掛けてあり、徑一尺あまりあり、其銘左の如し。

敬白奉納山王權現御寶前鰐口大檀那直景　願主南仙房

深大寺城址　國分寺 藥師堂 二王門 古瓦 國分寺碑 二王門舊跡 同伽藍舊跡 層塔舊跡　富士見塚
國分寺村炭竈　阿彌陀坂 阿彌陀堂　戀ヶ窪 牛頭天王　傾城ヶ松
武藏野　武藏野翁　紫草　迯水
八はた八幡宮 櫂の正　瀧の社　石塚社　府中驛舍
六所明神社 本地堂 神輿庫 阿彌陀鐵像 護摩堂 御宮 注連樹 隨身門 宮之姫社 馬場 競馬 神樂 大神事同圖 御田植神事同圖 天下泰平神事 小祭天下泰平神事　馬市 制札 田面神事
六所宮御旅所　御田　妙光院 什寶　安養寺
武藏國造兄武日命殿館舊跡　是政村　善明寺
津保宮　分倍河原 首塚 胴塚　三千人塚　代小川
陣街道　小野宮村　小野神社舊址 欅古樹　神道
小野牧　稱名寺　高安禪寺 秀郷靈祠 辨慶硯の井 觀音堂　彌勒寺 津戸規繼墓
谷保天神社 常盤の淸水 本地堂 道武朝臣靈社　淸水立場　菅原道武朝臣舊館地
假家坂　安樂寺　日野津　普濟禪寺 六面塔

土器塚
北澤淡島明神社
若宮八幡宮　田中辨才天祠
豪德禪寺　臥龍梅　鐘樓　照心堂　古石燈籠　開基碑　碧雲關　清涼橋　境內十勝
實相院　學務齋古碑　當山開闢石塔
氷川明神社
吉祥院
北見村除蝮蛇神符
泉龍寺　靈泉經塚
升形山
藥師堂
杉山明神社

足毛塚
池尻村祖師堂
圓禪寺
弦卷鄉
帶刀先生義賢之墓　太神宮　同神木老松
觀音寺
禱善寺　宿藥師
廣福寺
飯室山　七面富士　淺間祠　長者穴
大師穴
稻毛藥師堂　影向石

氷川明神社
子明神社
常光寺
吉良氏古城址　富士見松
世田谷八幡宮
慶元寺
氷川明神社
稻毛重成墓
長森稻荷社
五所權現社
十三塚

天滿宮
馬牽澤舊跡
常盤橋
宮坂八幡宮　愛緣藥師　吉良氏古塋　廣戶正之碑
龍華山永安寺　龍華樹　石井氏移塋碑
石井神社
天神の森
江戶遠江守舊館地
韋駄天宮
雪ヶ坂
妙樂寺七面山
舟田

江戸名所圖會　巻之三

天璣之部目録　〔原本七より十まで四册〕

——（天權之部未完）——

江戸名所圖會 二 目錄

江戸名所圖會

二